公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（24）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保（かわくぼ）遺跡Ｃ地点

（鹿屋市串良町）

2019年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(24)
川久保遺跡Ｃ地点

二〇一九年三月
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

鹿児島県

川久保遺跡遠景

竪穴住居跡１号出土遺物

序　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴って，平成27年度から平成29年度にかけて実施した川久保遺跡Ｃ地点の発掘調査の記録です。

川久保遺跡は鹿屋市串良町に所在し，川久保遺跡Ｃ地点では，旧石器時代，縄文時代早期・前期・後期・晩期，古墳時代から近世までの遺構や遺物が発見されました。なかでも旧石器時代の三稜尖頭器，縄文時代の竪穴住居跡や石器集積遺構，古墳時代の竪穴住居跡，古墳時代から近世にかけての溝状遺構や道跡の発見は，当地で暮らした先人達の土地利用，いわゆる選地活動を考えるうえで貴重な発見となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめ，多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に，発掘調査から報告書刊行まで御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会等の関係各機関並びに発掘調査や報告書作成において御指導いただきました方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成31年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　前迫　亮一

報　告　書　抄　録

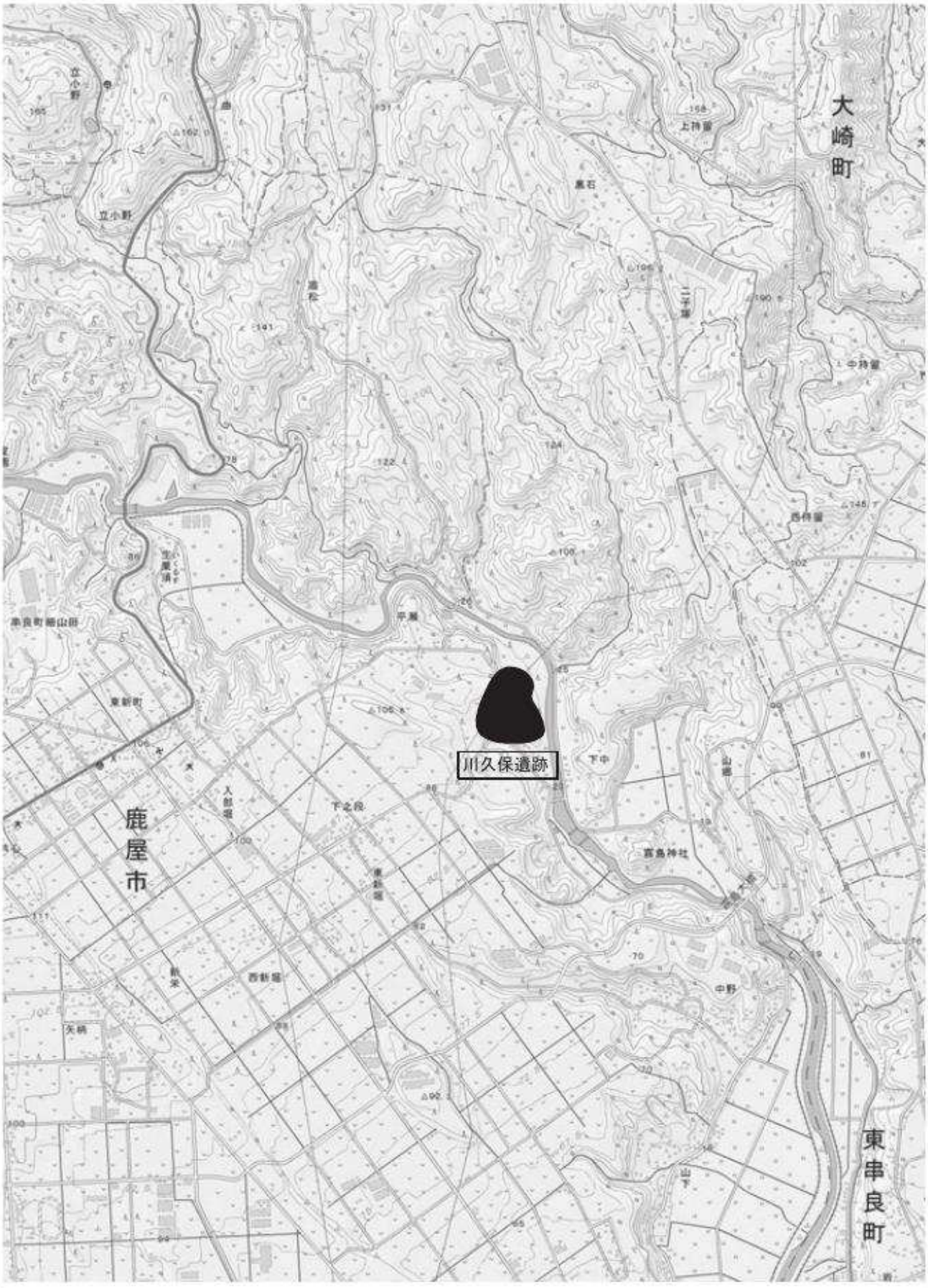
ふりがな	かわくぼいせきＣちてん
書名	川久保遺跡Ｃ地点
副書名	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第24集
編集者名	山形敏行　中村有希
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
発行年月	西暦2019年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
川久保（かわくぼ）遺跡（いせき）	鹿児島県（かごしまけん） 鹿屋市（かのやし） 串良町（くしらちょう）	46203	203-349	31° 26′ 40″	130° 56′ 23″	試掘調査 2015. 11. 4～ 2016. 1. 28 本調査 ①2015. 5. 11～ 2016. 2. 10 ②2016. 5. 9～ 2017. 1. 27 ③2017. 5. 9～ 2018. 1. 26	4,884㎡ （表面積） 9,127㎡ （延面積）	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
川久保遺跡Ｃ地点	散布地	旧石器時代	—	三稜尖頭器，石錐，掻器，削器，石核，剥片，砕片	本編掲載分のみ記載
		縄文時代早期	竪穴住居跡　1軒 土坑　1基 集石遺構　10基	志風頭式土器，石坂式土器，桑ノ丸式土器，下剥峯式土器，剥片，磨石，敲石，石皿	
		縄文時代前期		曽畑式土器	
		縄文時代後期～晩期	土坑　1基 石器集積遺構　1基	後期土器，組織痕土器，磨製石斧，打製石斧，スクレイパー	
		弥生時代	—	高橋式土器	
		古墳時代	竪穴住居跡　2軒 土坑　3基 溝状遺構　1条 道跡　2条	成川式土器	
		古代～中世	土坑　12基 溝状遺構　16条 道跡　36条	土師皿，刀子	
		近世	土坑　1基 溝状遺構　7条 道跡　2条	薩摩焼	
		その他	ピット　358基		

遺跡の概要

川久保遺跡Ｃ地点は，旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。
旧石器時代は，三稜尖頭器，石錐，掻器，削器，石核などが出土し，三稜尖頭器の接合資料が得られた。
縄文時代早期は，竪穴住居跡，土坑，集石遺構とともに，早期前葉から中葉にかけての土器と磨石，敲石，石皿などの石器が出土した。縄文後期から晩期については，打製石斧，スクレイパーを含む石器集積遺構を検出し，土器が少量出土した。
古墳時代は，竪穴住居跡，土坑，溝状遺構，道跡を検出し，成川式土器などが出土した。
古代から近世にかけては，土坑と多数の溝状遺構，道跡を検出し刀子などが出土した。



川久保遺跡位置図（S＝1/25000）

例　言

1　本編は，東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う川久保遺跡発掘調査報告書「川久保遺跡Ｃ地点」である。

2　本遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）へ調査委託し，埋文調査センターが実施した。本遺跡は，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地点に区分し調査を行った。

4　川久保遺跡Ｃ地点の発掘調査は，平成27年度から平成29年度まで実施し，すべてを完了した。なお，平成27年度，平成28年度は，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，平成29年度は，株式会社島田組に発掘調査業務を委託した。詳細については，第Ⅰ章に記した。

5　整理・報告書作成事業は，平成29年度は埋文調査センターの第一整理作業所，平成30年度は第２整理作業所において実施した。

6　掲載遺構番号は，時代及び遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。掲載遺物番号は，通し番号であり，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡記号は，「ＫＫＢ」である。

8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

9　本編で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

10　本編で使用した方位は，すべて磁北である。

11　遺構の埋土，土器の色調は，『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を参考にしている。

12　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者及び受託業者が行った。また，空中写真の撮影は，株式会社ふじたに委託した。

13　本編に係る遺構実測図・出土遺物の実測，トレース図の作成は，山形・中村が整理作業員とともに行った。

　また，遺物実測（石器）の一部を大福コンサルタント株式会社に委託し，山形・中村が監修した。

14　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の写場で，埋文調査センターの吉岡康弘・西薗勝彦が行った。

15　本編の執筆は次のように分担した。

　第Ⅰ章　発掘調査の経過　山形
　第Ⅱ章　遺跡の位置と環境　山形
　第Ⅲ章　調査の方法と層序　山形
　第Ⅳ章　発掘調査の成果
　　第１節　旧石器時代の調査成果　山形
　　第２節　縄文時代の調査成果　山形
　　第３節　弥生時代の調査成果　中村
　　第４節　古墳時代の調査成果　中村
　　第５節　古代～中世の調査成果　山形
　　第６節　近世の調査成果　中村
　　第７節　ピット群　中村
　第Ⅴ章　総括　山形・中村

16　本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，埋文センターで保管し，展示・活用を図ることにしている。

凡　例

1　本編に掲載してある遺構図・遺物出土状況等の１グリッド（１マス）は10m四方であり，各図には縮尺を示した。

2　遺構

⑴ 遺構図の基本的な縮尺は以下のとおりである。
　竪穴住居跡：1/30，土坑・集石遺構:1/20，
　石器集積:1/10
　溝状遺構・道跡：平面1/100・断面1/25

⑵ 遺構の断面図については，基本的には平面図と同縮尺としたが，溝状遺構・道跡についてはこの限りではない。新旧関係，切り合い関係などを表現するため，平面・断面図を同一図面上に示した。

⑶ 遺構内の焼土範囲については，スクリーントーンで表現した。

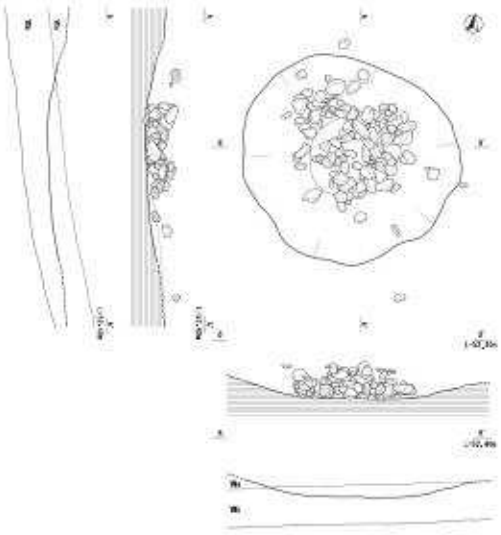
⑷ 遺構番号に関しては，調査時に付したものから，報告書掲載順に振り直した。

⑸ 遺構配置図は，縮尺をそれぞれ別途に掲載した。

3　遺物

⑴ 遺物図の基本的な縮尺は，以下のとおりである。
　土器：１/３，三稜尖頭器，石錐など小型の石器１/１，打製石斧，磨・敲石：１/３，石皿など大型の石器は各図に提示した。

⑵ 遺構・遺物の実測で用いた表現方法については，実測表現の凡例のとおりである。

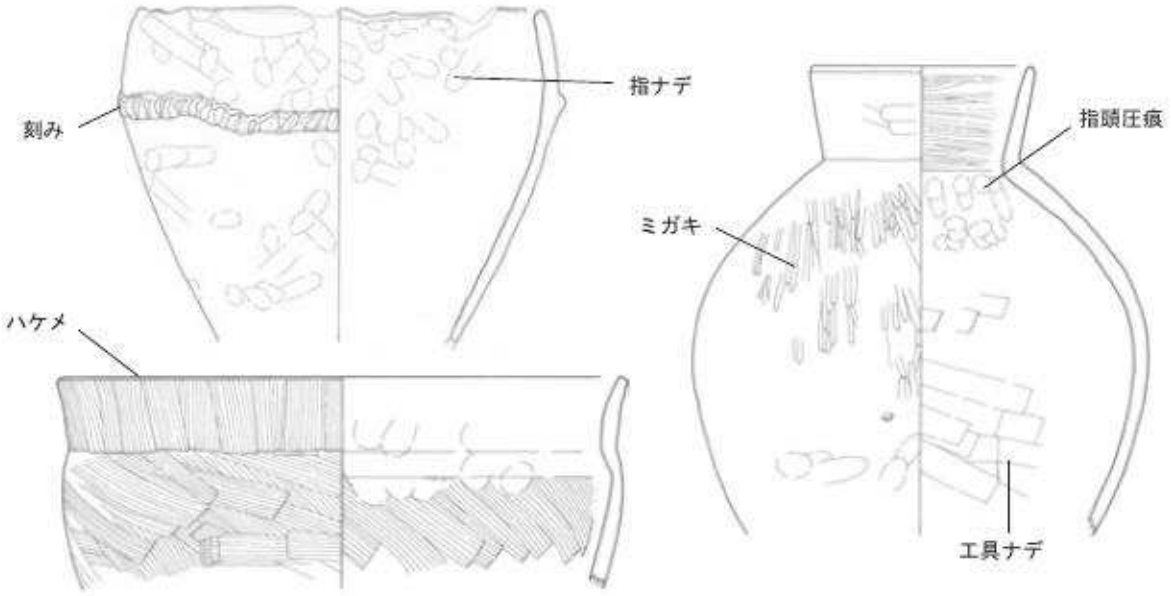


〈集石遺構断面図〉

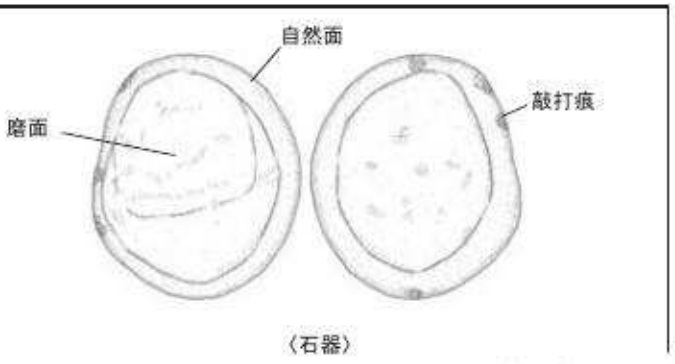
図中の層位は，検出面と基本層序との対応を示したものである。

〈石材分類表〉

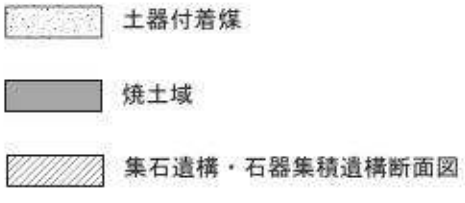
石　材	分類	特　　徴
黒曜石	a	灰色から青灰色を呈し，透明度が低く少量の不純物を含む
	b	青みがかった灰色の色調を呈し，透明感があり不純物を多く含む
頁　岩	a	灰色の珪質頁岩で縦横に不規則な白色の縞が入る
	b	灰色から黒褐色を呈し，やや珪質が低い
	c	灰褐色を呈し，やや粒子が粗く乳白色の縞が層状に入る
	d	黒色の珪質頁岩



〈土器〉



〈石器〉



実測表現の凡例

本文目次

巻頭図版１　川久保遺跡遠景
巻頭図版２　竪穴住居跡１号出土遺物
序文
報告書抄録
川久保遺跡位置図
例言・凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　発掘調査の経過…… 2
　第３節　本調査…… 2
　第４節　整理・報告書作成作業…… 5
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 7
　第１節　地理的環境…… 7
　第２節　歴史的環境…… 7
第Ⅲ章　調査の方法と層序…… 16
　第１節　調査の方法…… 16
　第２節　層序…… 16
第Ⅳ章　発掘調査の成果…… 23
　第１節　旧石器時代の調査成果…… 23
　第２節　縄文時代の調査成果…… 27
　第３節　弥生時代の調査成果…… 47
　第４節　古墳時代の調査成果…… 48
　第５節　古代～中世の調査成果…… 63
　第６節　近世の調査成果…… 85
　第７節　ピット群…… 87
第Ⅴ章　総括…… 95

挿図目次

第１図　周辺遺跡位置図…… 10
第２図　東九州自動車道関連遺跡位置図…… 15
第３図　川久保遺跡全体図及び
　　Ｃ地点年度別調査範囲…… 18
第４図　土層断面図１（Ｂ－６・７区）…… 19
第５図　土層断面図２
　　（Ｂ－7，Ｂ・Ｃ－８区，Ｄ－３・４区）…… 20
第６図　土層断面図３（Ｉ－６～10区）…… 21
第７図　土層断面図４（Ｄ・Ｅ－５区，Ｆ～Ｉ－６区）…… 22
第８図　旧石器時代遺物出土状況図…… 23
第９図　旧石器時代出土遺物１…… 24
第10図　旧石器時代出土遺物２…… 25
第11図　旧石器時代出土遺物３…… 26
第12図　縄文時代早期遺物出土状況図…… 27
第13図　縄文時代遺構配置図
　　（地形図：Ⅷ層上面）…… 29～30
第14図　竪穴住居跡１号…… 31
第15図　土坑１・２号…… 31
第16図　集石遺構１号…… 32
第17図　集石遺構２号…… 33
第18図　集石遺構３・４号…… 34
第19図　集石遺構５号…… 35
第20図　集石遺構６号…… 36
第21図　集石遺構６号出土遺物…… 36
第22図　集石遺構７・８号…… 37
第23図　集石遺構９号…… 38
第24図　集石遺構９号出土遺物…… 38
第25図　集石遺構10号…… 39
第26図　縄文時代早期出土遺物（土器）…… 40
第27図　縄文時代早期土遺物（石器）…… 41
第28図　石器集積遺構１号…… 42
第29図　石器集積遺構１号出土遺物…… 43
第30図　縄文時代後期・晩期遺物出土状況図…… 44
第31図　縄文時代前期・後期・晩期出土遺物（土器）…… 45
第32図　縄文時代後期・晩期出土遺物（石器１）…… 45
第33図　縄文時代後期・晩期出土遺物（石器２）…… 46
第34図　弥生時代遺物出土状況図…… 47
第35図　弥生時代出土遺物（土器）…… 47
第36図　古墳時代遺構配置図１（地形図：Ⅴ層上面）…… 49
第37図　竪穴住居跡１号１・２…… 50
第38図　竪穴住居跡１号３…… 51
第39図　竪穴住居跡1号出土遺物１…… 51
第40図　竪穴住居跡１号出土遺物２…… 52
第41図　竪穴住居跡１号出土遺物３…… 53
第42図　竪穴住居跡２号１・２…… 54
第43図　竪穴住居跡２号出土遺物…… 55
第44図　土坑１号…… 56
第45図　土坑１号出土遺物…… 56
第46図　古墳時代遺構配置図２（地形図：Ⅴ層上面）…… 57
第47図　土坑２号…… 58
第48図　土坑２号出土遺物…… 58
第49図　土坑３号…… 58
第50図　土坑３号出土遺物…… 58
第51図　溝状遺構１号・道跡１号…… 59
第52図　古墳時代以降遺物出土状況図…… 60
第53図　古墳時代出土遺物（土器１）…… 61
第54図　古墳時代出土遺物（土器２）…… 62
第55図　古代～中世遺構配置図１（地形図：Ⅴ層上面）…… 63
第56図　古代～中世遺構配置図２（地形図：Ⅴ層上面）…… 64
第57図　古代～中世遺構配置図３（地形図：Ⅴ層上面）…… 65
第58図　古代～中世遺構配置図４（地形図：Ⅴ層上面）…… 66
第59図　土坑１号…… 67
第60図　土坑２・３号…… 68
第61図　土坑４・５・６号…… 69
第62図　土坑７・８・９号…… 70
第63図　土坑10・11・12号…… 71
第64図　溝状遺構１・２・３号…… 72
第65図　溝状遺構４・５・６・７号…… 73
第66図　溝状遺構８・９・10・11号…… 74
第67図　溝状遺構12・13・14号…… 75－76
第68図　溝状遺構15・16号…… 78
第69図　道跡１号…… 79
第70図　道跡２号…… 81
第71図　道跡３・４・７号…… 82
第72図　道跡５・６号…… 83
第73図　道跡29・30・32・35・36号…… 84
第74図　中世出土遺物…… 84
第75図　土坑１号…… 85
第76図　溝状遺構１・２・３・４号…… 85
第77図　近世遺構配置図（地形図：Ⅴ層上面）…… 86
第78図　溝状遺構７号…… 87
第79図　近世出土遺物…… 87
第80図　ピット群（地形図：Ⅴ層上面）…… 88

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 9
第２表　東九州自動車道関連
　　（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）道跡一覧表…… 11
第３表　川久保遺跡Ｃ地点基本層序…… 17
第４表　旧石器時代石器観察表…… 89
第５表　集石遺構観察表…… 89
第６表　縄文時代早期土器観察表１…… 89
第７表　縄文時代早期土器観察表２…… 90
第８表　縄文時代早期石器観察表…… 90
第９表　石器集積遺構石器観察表…… 90
第10表　石器集積遺構土器観察表…… 90
第11表　縄文時代前期・後期・晩期土器観察表…… 91
第12表　縄文時代後期・晩期石器観察表…… 91
第13表　弥生時代土器観察表…… 91
第14表　古墳時代土器観察表１…… 92
第15表　古墳時代土器観察表２…… 93
第16表　古墳時代土器観察表３…… 94
第17表　古墳時代石器観察表…… 94
第18表　中世土器観察表…… 94
第19表　中世鉄製品観察表…… 94
第20表　近世陶器観察表…… 94

図版目次

図版１　Ｃ地点全景・土層断面…… 97
図版２　遺物出土状況・遺物包含層完掘状況・遺構検出状況
　　（縄文時代～旧石器時代）…… 98
図版３　竪穴住居跡１号・土坑１号（縄文時代）…… 99
図版４　集石遺構検出状況（縄文時代），
　　竪穴住居跡１号（古墳時代）…… 100
図版５　竪穴住居跡２号・土坑２号（古墳時代）…… 101
図版６　土坑１号（古墳時代），道跡２・３号（古代－中世）…… 102
図版７　土坑３号，溝状遺構３～７・10・16号，
　　道跡９号（古代～中世），土坑１号（近世）…… 103
図版８　旧石器時代・縄文時代早期の遺物…… 104
図版９　縄文時代早期～晩期の遺物…… 105
図版10　縄文時代早期の石器・石器集積出土遺物…… 106
図版11　古墳時代竪穴住居跡１号出土遺物１…… 107
図版12　古墳時代竪穴住居跡１号出土遺物２…… 108
図版13　弥生・古墳時代出土遺物１…… 109
図版14　古墳時代出土遺物２・中世出土遺物…… 110

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～末吉ＩＣ）建設を計画し，当該事業区間における埋蔵文化財の有無について県教委に照会を行った。これを受けて，鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）は，平成12年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡が存在することを明らかにした。この分布調査結果をもとに，事業区内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）という。）の４者で対応を検討した。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業計画の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化や，道路建設工事計画に伴い，遺跡についてもより綿密な把握が求められることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間については，平成14年４月に再度分布調査を実施した。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は，日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は，日本道路公団が鹿児島県へ再委託することになり，これまでの確認書や協定書は，そのまま生きることになった。また，日本道路公団からの再委託による発掘調査は，曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は，国土交通省からの受託事業となった。なお，平成21年度までの当該区間の確認調査は，事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが，平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を導入し，県内遺跡事前調査事業として鹿児島県教育委員会が実施することになった。これをふまえ，平成23年度は荒園遺跡・永吉天神段遺跡・堂園平遺跡，平成24年度は町田堀遺跡・牧山遺跡・京の塚遺跡・宮脇遺跡，平成25年度は小牧遺跡・安良遺跡・木森遺跡，平成26年度は川久保遺跡・春日堀遺跡・小牧古墳群の確認調査を実施した。

近年，東九州自動車道建設事業等の増加に伴い，埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ，その対応が困難な状況となりつつあった。そこで，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年度に設立し，国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。

川久保遺跡については，平成26年度に埋文センターによる確認調査で旧石器時代，縄文時代早期・晩期，古墳時代，古代の遺物包含層が確認された。なお，本調査は，民間調査組織と支援業務委託を契約して実施することとした。また，遺跡が広範囲におよぶため，地形等を勘案し調査区をＡ～Ｄ地点に区分することとした。

川久保遺跡全体の調査経過は，以下のとおりである。

発掘調査

発掘調査の履歴については，川久保遺跡Ａ～Ｄ地点のすべてについて記した。

⑴　分布調査
　平成12年４月
⑵　詳細分布調査
　平成14年４月
⑶　試掘調査
　第１回　平成25年10月31日
　第２回　平成26年１月21日
⑷　確認調査（県内遺跡事前調査事業）
　平成26年11月４日～平成27年１月28日
⑸　本調査
　第１回　平成26年４月11日～平成27年３月12日
　　（民間支援業務委託）
　第２回　平成27年５月９日～平成28年１月27日
　　（民間支援業務委託）
　第３回　平成28年４月11日～平成29年３月10日
　　（民間支援業務委託）
　第４回　平成29年５月９日～平成30年１月26日
　　（民間支援業務委託）
　　平成29年４月11日～平成30年３月９日
　　（埋文調査センター）

なお，平成30年度が川久保遺跡の本調査最終年度である。

平成26年度

平成26年度は，大福コンサルタント株式会社に委託し，遺跡の東側を中心に5,830㎡の本調査を実施した。

その結果，縄文時代前期と晩期の遺物，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡及び鍛冶関連建物跡，

古代・中世の掘立柱建物跡，溝状遺構や道跡などを発見した。

平成27年度

平成27年度は，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，川久保遺跡全体で18,534㎡を対象に調査を実施した。

その結果，縄文時代前期・晩期の遺構・遺物，弥生時代及び古墳時代の竪穴住居跡，古代の土坑，中世の掘立柱建物跡及び溝状遺構を発見した。また，トレンチ調査により，旧石器時代，縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。

平成28年度

平成28年度は，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，遺跡全体で34,230㎡を対象に調査を実施した。その結果，旧石器時代細石刃文化期の遺物，縄文時代早期の集石遺構と遺物，縄文時代前期・晩期，弥生時代の遺物，古墳時代の竪穴住居跡・製鉄関連の遺構と遺物，中世の土坑・道跡と遺物を発見した。

平成29年度

平成29年度は，埋文調査センター（直営）と調査を委託した株式会社島田組（民活）の２班体制で本調査を実施した。調査対象面積は37,809㎡である。

その結果，旧石器時代ナイフ形石器文化期から細石刃文化期の遺構と遺物，縄文時代草創期の礫群・連穴土坑等の遺構と遺物を発見した。さらに縄文時代早期の連穴土坑・土坑・集石遺構などの遺構と遺物，縄文時代後期の石器集積遺構と遺物を確認した。さらに縄文時代晩期の集石遺構と遺物，弥生時代終末期から古墳時代にかけての竪穴住居跡・土坑などの遺構と遺物を発見した。また，本調査と並行して遺物洗浄・注記の基礎整理作業を実施した。

第２節　発掘調査の経過

１　分布調査

平成12年２月

２　詳細分布調査

平成14年４月

３　調確認査

平成26年度

事業主体	鹿児島県教育委員会
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	県立埋蔵文化財センター
調査企画	〃　所長　井ノ上秀文
	〃　次長兼総務課長　中島治
	〃　調査課長兼南の縄文調査室長　前迫亮一
	〃　調査課第二係長　今村敏照
調査担当	〃　文化財主事　光永誠
	〃　文化財主事　本髙謙治
事務担当	〃　総務課主事　池之上勝太

第３節　本調査

平成26年度

事業主体	国土交通省　九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
調査企画	〃　センター長　堂込秀人
	〃　総務課長兼係長　山方直幸
	〃　調査課長　八木澤一郎
	〃　調査第二係長　寺原徹
調査担当	〃　統括調査員　岩永勇亮
事務担当	〃　主査　岡村信吾
現地指導	東アジア古代鉄文化 研究センター（愛媛大学） センター長（教授）　村上恭通 鹿児島大学法文学部人文学科 教授　本田道輝 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 准教授　中村直子 佐賀大学文化教育学部 教授　重藤輝行 広島大学文学研究科 准教授　野島永
調査の委託	
委託先	大福コンサルタント株式会社 主任技術者　原口道朗 主任調査支援員　重留康宏 調査支援員　岩下直樹 調査支援員　花田寛典
委託内容	発掘支援業務 測量業務 土工業務
検査	中間検査　平成26年10月28日 完成検査　平成27年２月20日 （実地検査） 平成27年３月４日 （成果物検査）

平成27年度

事業主体	国土交通省　九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
	〃　センター長　堂込秀人

調査企画	〃 総務課長兼係長 有村 貢
	〃 調査課長 八木澤一郎
	〃 調査第二係長 寺原 徹
調査担当	〃 統括調査員 岩永勇亮
事務担当	〃 主査 荒瀬勝己
現地指導	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
	センター長 中村直子
調査の委託	
委託先	株式会社埋蔵文化財サポートシステム
	主任技術者 權現領 美代子
	主任調査支援員 島内浩輔
	調査支援員 松崎卓郎
	調査支援員 立神勇志
	調査支援員 磯村康行
	調査支援員 沖野沙和美
	調査支援員 坂井靖奈
	研修生 冨永朋美
検査	中間検査 平成27年10月27日
	完成検査 平成28年3月1日
	(実地検査)
	平成28年3月11日
	(成果物検査)

平成28年度

事業主体	国土交通省 九州地方整備局
	大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	(公財) 鹿児島県文化振興財団
	埋蔵文化財調査センター
調査企画	〃 センター長 堂込秀人
	〃 総務課長兼係長 有村 貢
	〃 調査課長 八木澤一郎
	〃 調査第二係長 宗岡克英
調査担当	〃 統括調査員 岩永勇亮
	〃 副統括調査員 湯場崎辰美
	〃 副統括調査員 山形敏行
事務担当	〃 主査 荒瀬勝己
現地指導	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
	センター長 中村直子
調査の委託	
委託先	株式会社埋蔵文化財サポートシステム
	主任技術者 牧 美代子
	主任調査支援員 島内浩輔
	調査支援員 松崎卓郎
	調査支援員 中田裕樹
	調査支援員 内田賢一
	調査支援員 立神勇志
	調査支援員 中村耕治
	調査支援員 磯村康行
	調査支援員 沖野沙和美
	調査支援員 冨永朋美
委託内容	発掘支援業務
	測量業務
	土工業務
検査	中間検査 平成28年10月7日
	完成検査 平成29年2月22日
	(実地検査)
	平成29年2月24日
	(成果物検査)

平成29年度（直営）

事業主体	国土交通省 九州地方整備局
	大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	(公財) 鹿児島県文化振興財団
	埋蔵文化財調査センター
	〃 センター長 前迫亮一
調査企画	〃 総務課長兼係長 中村伸一郎
	〃 調査課長 中原一成
	〃 調査第一係長 今村敏照
調査担当	文化財専門員 山形敏行
	文化財専門員 石畑浩一
	文化財専門員 三垣恵一
	文化財専門員 徳永愛雄
	文化財専門員 楸田岳志
	(H29.5～11)
	文化財専門員 本髙謙治
	文化財専門員 相良典隆
	文化財調査員 木場浅葱
	文化財調査員 新屋敷久美子
	文化財調査員 福地祥平
	(H29. 5～8, 12～H30.3)
事務担当	主査 荒瀬勝己
	事業推進員 川崎麻衣
現地指導	鹿児島県考古学会
	会長 本田道輝
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
	センター長 中村直子
調査の委託	
委託先	株式会社島田組
	主任調査支援員 宮下貴浩
	調査支援員 大橋裕子
委託内容	測量業務
	中間検査 平成29年11月22日
	完成検査 平成30年3月6日
	(成果物検査)

上記のとおり平成30年1月26日をもって民間組織による業務委託は終了した。

その後，本調査区の調査を当初計画とおり，２月まで継続するにあたって，調査を円滑かつ効率的に実施するため，発掘業務の一部を民間調査組織に別途委託して実施した。

委　託　先　　株式会社島田組
委託期間　　平成30年２月１日～平成30年２月23日
委託内容　　測量業務
　　土工業務
　　完成検査　平成30年３月13日
　　（成果品検査）

このほか，Ⅵ層～Ⅷ層及びⅨ層（縄文早期～旧石器時代）の調査において，測量業務の迅速化をはかるため，「遺構実測図作成業務委託」を実施した。

委　託　先　　株式会社ジパングサーベイ
委託期間　　平成29年10月12日～平成30年２月23日
委託内容　　測量業務
　　完成検査　平成30年３月13日
　　（成果品検査）

平成29年度（民活）

事業主体　　国土交通省　九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　　鹿児島県教育委員会
調査統括　　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃センター長　前迫亮一
調査企画　　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
　　〃調査課長　中原一成
　　〃調査第一係長　今村敏照
調査担当　　〃統括調査員　馬籠亮道
事務担当　　〃主　　査　荒瀬勝己
　　〃事業推進員　川崎麻衣

調査の委託

委　託　先　　株式会社島田組
　　主任技術者　山本隆広
　　主任調査支援員　宮下貴浩
　　調査支援員　大橋裕子
　　調査支援員　清岡廣子
　　（～８月）
　　調査支援員　丹生泰雪
　　（９月～）
委託内容　　発掘支援業務
　　測量業務
　　土工業務
検　　査　　中間検査　平成29年11月22日
　　完成検査　平成30年２月23日
　　（実地検査）
　　完成検査　平成30年３月６日
　　（成果物検査）

調査の経過（日誌抄より）

本調査について，日誌抄を月ごとに集約して記した。なお，ここではＣ地点にについてのみ記している。

平成27年度

９月　Ｂ・Ｃ－５～８区，Ｃ－Ｅ３～８区重機による表土剥ぎ。
10月　空中写真撮影
11月　Ｄ・Ｅ－３区，Ｃ－６～８区　Ⅴ層上面検出遺構の調査。
12月　Ｃ－６～８区，Ｄ・Ｅ－３・４区　Ⅴ層上面遺構の調査。
１月　Ｃ－６～８区　先行トレンチ調査。
２月　Ｃ－６～８区，Ｄ・Ｅ－５～８区　Ⅴ層上面検検出遺構調査。

平成28年度

10月　Ｆ・Ｇ－１～９区，Ｈ－３～９区，Ｉ－５～11区，Ｊ－９～11区，Ｋ－11～13区，Ｌ－13区　重機による表土剥ぎ，Ⅵ・Ⅶ層上面検出遺構の調査。
11月　Ｈ・Ｉ－10～12区，Ｊ－９～13区，Ｋ－11～13区，Ｌ－13・14区　重機による表土剥ぎ，Ⅵ・Ⅶ層上面検出遺構の調査。
12月　Ｆ～Ｉ－７・８区　重機による表土剥ぎ。
１月　空中写真撮影

平成29年度

５月　Ｆ～Ｈ－４～６区　重機による表土剥ぎ。
９月　Ｇ・Ｈ－４・５区　ピット半裁作業，Ｇ～Ｋ－４～12区Ⅴ層上面遺構検出，Ｆ－６区　Ⅴ層上面遺構検出（道跡），Ｆ－４・５区　Ⅵ層掘り下げ，Ｉ・Ｊ－10区　トレンチ及びⅤ層～Ⅷ層上面まで掘り下げ。
10月　Ｈ～Ｋ－10・11区　トレンチ掘り下げ・Ⅶ～Ⅸ層まで掘り下げ，遺構調査（竪穴住居跡，土坑，溝状遺構，道跡）。Ｉ－６・７区　トレンチ掘り下げ，Ⅴ層～Ⅶ層掘り下げ，Ｆ～Ｈ－４・５区　重機によるⅤ層掘削・Ⅵ～Ⅷ層検出，Ｉ～Ｊ－８・９区　重機によるⅤ・Ⅵ層掘り下げ。
11月　Ｈ－６・７区　Ⅶ層重機による掘り下げ，Ｈ～Ｋ－10区　Ⅸ層検出・掘り下げ，遺構検出（竪穴住居跡，土坑，道跡）。Ｇ～Ｉ－５～７区　Ⅵ層掘り下げ，Ⅶ・Ⅷ層検出，Ｆ・Ｇ－４・５区　Ⅷ層検出，Ｇ－７・８区　遺構調査（竪穴住居跡，土坑），Ｆ－５区　トレンチ・Ⅸ層掘り下げ，Ｈ～Ｊ－８区　重機によるⅥ層掘削，Ⅶ層掘り下げ，Ｇ～Ｊ－６～９区　Ⅶ層掘り下げ，遺構調査。Ｉ－７～９区　トレンチⅨ層完掘，Ⅹ層検出。
12月　Ｆ・Ｇ－７区　Ⅶ層検出掘り下げ・Ⅷ層検出，Ｇ・Ｈ－８区　トレンチ掘り下げ。Ⅷ層～Ⅹ層掘り下げ，旧石器先行トレンチ・Ｆ－６～８区　ト

レンチ掘り下げ，F～H－5区　表土掘り下げ・Ⅴ～Ⅶ層掘り下げ。

1月　G－7区，H－9区　トレンチⅨ・X層掘り下げ，F－6区　Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ・Ⅷ層検出。F－6・7区　ⅦB層検出・掘り下げ，Ⅷ層検出，H－5区　重機による表土剥ぎ。Ⅳ層掘り下げ。Ⅴ層検出。

第4節　整理・報告書作成作業

平成27年度の基礎整理作業は，文化財課から委託を受けた埋文調査センターが実施することとなり，大福コンサルタント株式会社へ他遺跡分と合わせて，基礎整理作業の遺物洗浄・注記の部分業務を委託した。

報告書作成は，平成30年度に埋文調査センター第2整理作業所で行った。調査体制及び整理・報告書作成の経過については下のとおりである。

平成27年度

事業主体	国土交通省　九州地方整備局
	大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団
	埋蔵文化財調査センター
	〃センター長　堂込秀人
調査企画	〃総務課長兼係長　有村貢
	〃調査課長　八木澤一郎
	〃調査第二係長　寺原徹
作成担当	〃文化財専門員　岩永勇亮
事務担当	〃主査　荒瀬勝己
委託先	大福コンサルタント株式会社
	調査支援員　岩下直樹
	調査支援員　長濵武史
	調査支援員　川俣幸次
	調査支援員　倉本るみ子
委託期間	平成27年5月11日～平成27年1月22日
委託内容	基礎整理作業（遺物洗浄・注記）

作業の経過（日誌抄より）

基礎整理作業については，日誌抄を月ごとに集約して記した。

5月　オリエンテーション，遺物洗浄，遺物注記機（ジェットマーカー）による注記作業，土器・石器・礫の一次分類，実測石器の選別。

6月　剥片石器の超音波洗浄機による洗浄，遺物洗浄，ジェットマーカーによる注記作業，遺物分類。

7月　遺物洗浄・ジェットマーカーによる注記作業，石器の分類。

8月　遺物洗浄・ジェットマーカーによる注記作業，石器の分類，礫の計測，遺物洗浄完了。

9月　ジェットマーカーによる注記作業。土器・石器・鉄滓の分類，重要遺物選別，礫の計測・仕分作業，図面修正。

10月　注記修正，土器・石器・鉄滓の分類，分類石器の整理・収納，礫の計測，青銅製品・鉄製品処理，図面修正。

11月　注記修正，土器・石器・鉄滓分類，包含層遺物分類，竪穴住居跡内出土遺物分類，石器分類・整理・収納，遺物台帳・礫台帳作成，図面修正，コンテナのチェックリスト作成。

12月　遺物分類，鉄滓・炭化物・顔料梱包材作成及び梱包，礫梱包，遺物台帳作成，写真撮影，収納作業。

1月　遺物台帳作成，台帳パソコン入力，データ確認作業，遺物洗浄，注記，分類作業終了。

平成29年度

事業主体	国土交通省　九州地方整備局
	大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団
	埋蔵文化財調査センター
	〃センター長　前迫亮一
調査企画	〃総務課長兼係長　中村伸一郎
	〃調査課長　中原一成
	〃調査第三係長　福永修一
作成担当	〃文化財専門員　岩永勇亮
	〃文化財調査員　中村有希
	〃文化財調査員　北園和代（H29.12～H30.11）
事務担当	〃主査　荒瀬勝己
	〃事業推進員　川崎麻衣

作業の経過（日誌抄より）

整理・報告書作成作業については，日誌抄を月ごとに集約して記した。

4月　遺物洗浄，遺物分類，図面整理

5月　遺物洗浄，遺物分類，図面整理，集石遺構観察表作成

6月　遺物洗浄，遺物分類，記準備，図面整理，集石遺構観察表作成
7月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石遺構観察表作成
8月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石遺構観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）
9月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石遺構観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）
10月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石遺構観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）
11月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石遺構観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）
12月　遺物分類，注記，図面整理，石器実測，自然科学分析委託準備（年代測定）
1月　遺物分類，注記，図面整理，石器実測，自然科学分析委託準備(年代測定)
2月　遺物分類，注記，土器接合，鍛造剥片抽出，自然科学分析委託準備(年代測定)
3月　遺物整理・図面整理

平成30年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
　　〃センター長　前迫亮一
調査企画　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
　　〃調査課長　中原一成
　　〃調査第三係長　三垣恵一
作成担当者　〃文化財専門員　山形敏行
　　〃文化財調査員　中村有希
調査事務　〃主査　小牧智子
　　〃事業推進員　塩屋奈緒美
遺物指導　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中村直子

作業の経過（日誌抄より）

整理・報告書作成作業については，日誌抄を月ごとに集約して記した。

4月　図面整理，遺物分類，土器接合，原稿執筆
5月　遺物分類，土器接合，写真整理，原稿執筆
6月　遺物実測，トレース，拓本，土器接合
7月　遺物実測，トレース，拓本，土器接合
8月　遺構，遺物トレース確認，レイアウト，原稿執筆
9月　遺物トレース確認，レイアウト，遺物観察表作成，原稿執筆，掲載遺物写真撮影
10月　遺物トレース確認，レイアウト，原稿執筆
11月　レイアウト，原稿執筆
12月　レイアウト，原稿執筆
1月　校正，遺物，図面等の整理
2月　校正，遺物，図面等の整理収納作業
3月　写真・図面等の整理，収納作業

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節 地理的環境

川久保遺跡は鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。遺跡の所在する鹿屋市串良町は，大隅半島南部のほぼ中央に位置し，東側は東串良町，南側に肝属川を挟んで肝付町，西側は，鹿屋市東原町・旭原町・笠之原町，北東は，立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地と，その間の丘陵，台地及び低地等の地形から形成されている。東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（最高部 1,119 m）で，中生層の地層からなっている。西側の山地は，北部の霧島火山の文脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み，南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は北部の白尾岳・荒磯岳など 500 ～ 600 m級の山々と，南部の大篦柄岳（1236.8 m）を主峰に横岳・御岳など 1,000 m級の山から成る山地で，山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は高隈山周辺に分布する新生代古第３紀の日南層群が基盤をなしている。山地間を埋めるように，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は堆積した後，現在に至るまで大小多くの河川で開折されている。大隅半島中央部の地形は，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されずに残った広大な台地で形成されている。一方，低地は高隈山地や鰐塚山地などに水源をもつ大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また何段かの河岸段丘も認められる。

川久保遺跡は，大隅半島中部を流れ太平洋に注ぐ肝属川の支流である串良川の右岸に隣接する笠野原台地の東側縁辺部に位置する。串良川の開析によって形成された標高 30 ～ 60 mの河岸段丘（新堀面）上に立地し，串良川との比高差は，約 10 ～ 30 mである。

第２節　歴史的環境

周辺の主な遺跡について，時代別に紹介する。なお，東九州自動車関連の遺跡については，第３節に記載した。

旧石器時代

天神段遺跡から，ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器の良好な接合資料が出土している。西丸尾遺跡・榎崎Ａ遺跡，榎崎Ｂ遺跡において，ナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

縄文時代

本遺跡より南東に 1.2 km離れた益畑遺跡では，早期の竪穴住居跡２軒，連穴土坑 16 基，集石遺構 85 基，土坑 160 基が検出されている。住居跡の埋土に桜島起源の軽石（薩摩火山灰）がレンズ状に堆積していたことから，霧島市上野原遺跡とほぼ同様の状況が窺える。下堀遺跡では集石遺構 13 基が検出され，前平式土器・手向山式土器・塞ノ神式土器などが出土している。古園遺跡では早期の石坂式土器が出土している。石縄遺跡では早期の集石遺構・土坑が検出され，隣接する十三塚遺跡では，早期の石坂式土器などが出土している。ホンドンガマ遺跡では後期の市来式土器・石匙，打製石斧等の遺物が確認されており，十三塚遺跡では，凹線文土器・市来式土器・三万田式土器や晩期の黒川式土器が出土している。柿木段遺跡では，晩期の落とし穴・土坑のほか，石斧埋納遺構が検出されている。

弥生時代

中期の遺跡は，沢目遺跡等があげられる。中期以降の遺跡は，西ノ丸遺跡・下堀遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・益畑遺跡等があげられる。吉ヶ崎遺跡では中期の竪穴住居跡が３軒確認されている。王子遺跡では竪穴住居跡 27 軒が検出され，山ノ口式土器や瀬戸内地方の影響を受けたと考えられる土器が出土している。十三塚遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡が８軒検出されており，方形・花弁形等に分類されている。また，掘立柱建物が３棟・土坑７基が検出された。遺物は，前期末～中期の土器・石器の他，土製勾玉や鉄鏃等も出土している。

古墳時代

大隅半島，特に唐仁古墳群・塚崎古墳群・横瀬古墳等が存在する志布志湾沿岸部は，古くから多くの古墳が存在することで知られている。また，南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域である。

本遺跡の周辺には，町田堀遺跡，立小野堀遺跡・小牧遺跡・上小原遺跡・下堀遺跡・岡崎古墳群が存在する。

町田堀遺跡・立小野堀遺跡では，多数の地下式横穴墓が検出されている。特に立小野堀遺跡では，190 基調査され県内最多の検出数となっている。上小原古墳群では，前方後円墳１基・円墳 20 基・地下式横穴墓が確認されている。地下式横穴墓には，赤彩された軽石製石棺をもつものや，大型で玄室床面に粘土床をもつものが確認されている。４号墳・16 号墳・17 号墳・18 号墳では，高塚墳の周溝内に地下式横穴墓が複数確認されている。岡崎 18 号墳の２号地下式横穴墓で発見された須恵器は，愛媛県伊予市の市場南組窯産と考えられるものである。

さらに，鉄鏃・U字型鍬鋤先・鑷子状鉄製品等の朝鮮半島系遺物や琉球列島産イモガイ製貝釧等が出土していることから，広域交流を積極的に行っていたと考えられている。下堀遺跡では竪穴住居跡や溝状遺構等の他，地下式横穴墓５基が確認された。地下式横穴墓２号からは大隅半島では初見となる異形鉄器が出土している。また地下式横穴墓周辺で高坏や坩が意図的に配置されたような状態で発見され，祭祀遺構の可能性が指摘されている。

古代・中世以降

稲村城跡では，16基の近世墓のほか，土師器・青白磁・染付・備前焼・東播系須恵器が確認されている。下堀遺跡では，土坑墓・畝跡・溝状遺構の他，多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高い炉も検出されている。

柿木段遺跡では古代のカマド跡・溝状遺構・道跡，中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出された。十三塚遺跡では道跡が８条検出されており，陶磁器片の出土から近世以降の可能性が考えられている。

第３節　東九州自動車道関連の遺跡

東九州自動車道については，平成26年度に鹿屋串良ＪＣＴから加治木ＪＣＴ間が開通している。現在，志布志ＩＣから鹿屋串良ＪＣＴ間で，工事や埋蔵文化財の発掘調査が行われている。第２表及び第２図に示すように平成20年度から発掘調査が開始され，平成30年度までに計20遺跡の本調査が行われている。旧石器時代の遺跡としては，荒園遺跡・永吉天神段遺跡・牧山遺跡・小牧遺跡・川久保遺跡の５遺跡がある。荒園遺跡・川久保遺跡では，細石器文化期の畦原型細石核・細石刃が出土している。永吉天神段遺跡では，ナイフ形石器や尖頭器が出土している。

多くの遺跡で発見されているのが縄文時代に関する情報である。縄文時代早期では竪穴住居跡・連穴土坑・礫の集積遺構・落とし穴・石器製作跡等の遺構から，集落跡として認知されている田原迫ノ上遺跡をはじめ18遺跡が確認されている。縄文時代早期の遺物は，石坂式・塞ノ神式土器等早期中葉から後葉の時期のものが多く，前平式土器等早期前半の遺物が出土する遺跡は数少ない。大 隅半島ではアカホヤ火山灰の堆積が厚く，その下位にある縄文時代早期の遺物は保存状態がよいものが多く，土器では復元可能な個体も多く出土している。縄文時代前期・中期・後期の遺跡は少ないが，牧山遺跡からは轟式土器の埋設遺構が検出されている。京の塚遺跡では，中期前半の深浦式土器が多量に出土し，近畿系・瀬戸内系の土器も見られる。また，土坑も数多く検出されている。田原迫ノ上遺跡では，池田軽石層直上から曽畑式土器が出土している。縄文時代後期では町田堀遺跡で後期後半の中岳Ⅱ式土器が出土し，平成25年度調査では竪穴住居跡３軒も検出されている。１軒の竪穴住居跡からは石刀が出土し話題となった。牧山遺跡からは西平式土器・市来式土器・丸尾式土器が出土し，田原迫ノ上遺跡からは指宿式土器・市来式土器，京の塚遺跡からは辛川式土器・丸尾式土器・西平式土器・中岳Ⅱ式土器がそれぞれ出土している。縄文時代晩期では，黒川式土器が十三塚遺跡・立小野堀遺跡・田原迫ノ上遺跡・川久保遺跡・京の塚遺跡等から出土している。

弥生時代では多くの遺跡で中期の山ノ口式土器が出土し，石縊遺跡・田原迫ノ上遺跡・永吉天神段遺跡で竪穴住居跡が多く検出され，集落を形成している状況が確認されている。永吉天神段遺跡では円形周溝墓を中心とした土坑墓群も発見されている。土坑墓には鉄鏃を副葬する墓もある。また，数は少ないが町田堀遺跡・川久保遺跡・荒園遺跡・牧山遺跡でも竪穴住居跡が検出されている。牧山遺跡の住居埋土から銅鑿が出土している。

古墳時代では立小野堀遺跡・町田堀遺跡で多くの地下式横穴墓が発見され，副葬品も鉄器をはじめ豊富な状況である。竪穴住居跡は川久保遺跡・荒園遺跡・春日堀遺跡で検出されている。川久保遺跡では鍛冶工房跡が発見され，製品も出土している。荒園遺跡では焼失家屋も検出された。

古代・中世は遺跡の数は少ないが，永吉天神段遺跡で中世の土坑墓が検出され銅鏡や滑石製石鍋も出土している。川久保遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出されている。

〈参考・引用文献〉

鹿児島県教育委員会　1985「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

鹿児島県教育委員会　1992「榎崎Ａ遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(63)

鹿児島県教育委員会　1992「西丸尾遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1993「榎崎Ｂ遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(４)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2011「石縊・十三塚遺跡」鹿児島埋蔵文化財センター発掘調査報告書(164)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016「田原迫ノ上遺跡」発掘調査財報告書(５)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2016「永吉天神段遺跡」　発掘調査報告書(６)

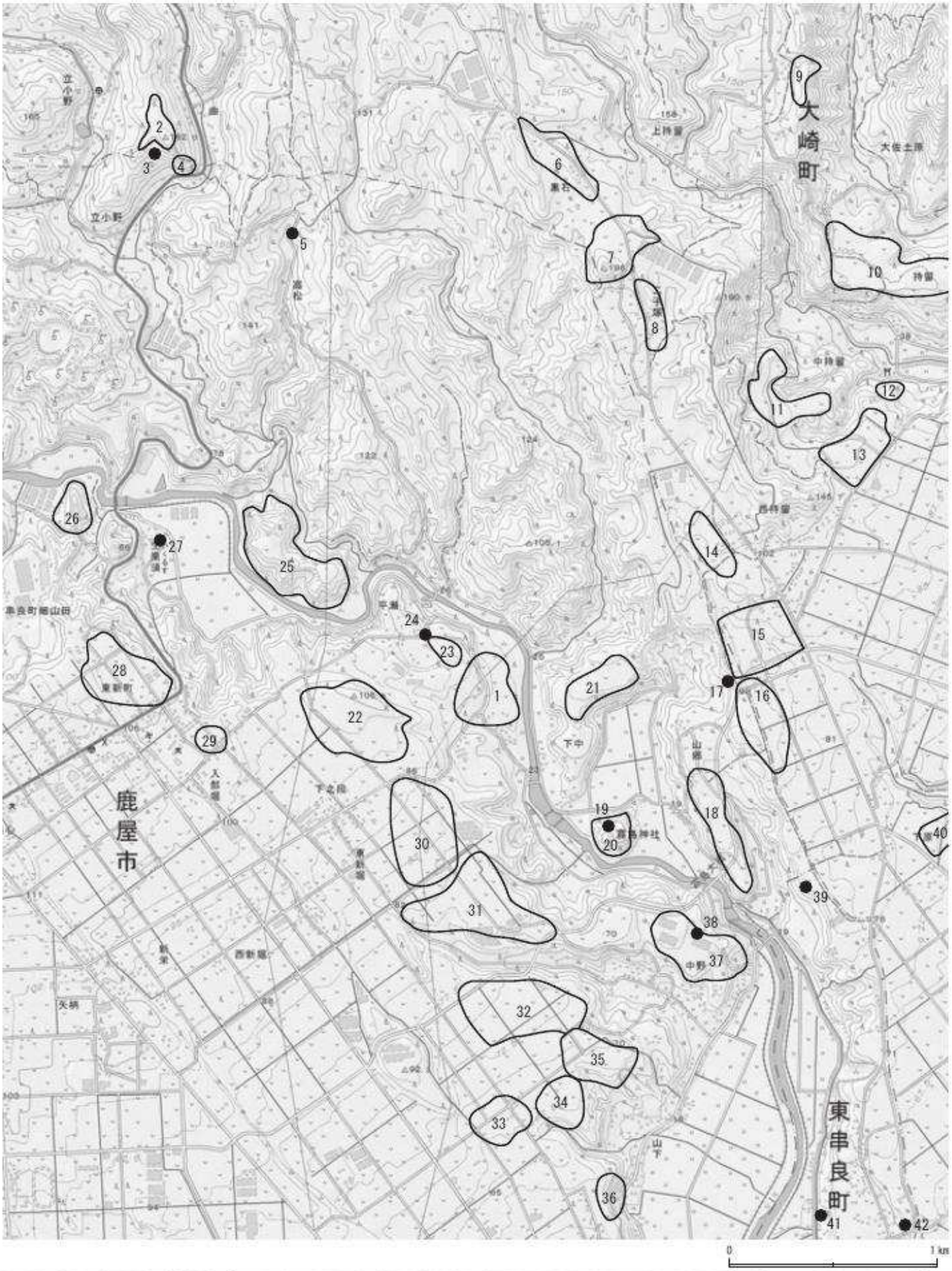
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2016「町田堀遺跡」　発掘調査報告書(７)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2018「永吉天神段遺跡」　発掘調査報告書(８)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2018「町田堀遺跡２」　発掘調査報告書(20)

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺構台帳番号		遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	**203**	**349**	**川久保遺跡**	**鹿屋市串良町細山田川久保**	**河岸段丘**	**旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世，近世**	**本報告書**
2	468	43	遠見ヶ丘遺跡	曽於郡大崎町野方立小野	台地	中世	
3	203	293 294	立小野Ａ・Ｂ遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	203	299	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文（後），弥生	
5	203	296	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
6	468	6	二子塚Ａ遺跡	曽於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器，縄文（早・晩） 弥生，古墳	平成 11 年度本調査
7	468	4	二子塚Ｂ遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	縄文，弥生	
8	468	229	二子塚Ｃ遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	山復緩斜面	弥生（中・後）	
9	468	18	大佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方大佐土原	台地	弥生（中）	
10	468	116	佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方 4715－2	台地	縄文，古墳	
11	468	26	杉山城跡	曽於郡大崎町持留	台地	弥生，古墳，中世	別称「山ノ城」，推定
12	468	2	川上神社遺跡	曽於郡大崎町持留中持留	扇状地	縄文（後）	
13	468	67	持留牧遺跡	曽於郡大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文，古墳	平成９年度農政分布調査
14	468	117	茶ノ木遺跡	曽於郡大崎町持留 1406－2	台地	古墳	
15			京の塚遺跡	曽於郡大崎町西持留鹿屋市串良町	台地	縄文（早～晩）	平成 25 ～ 27 年度本調査
16	468 203	52 304	細山田段遺跡	曽於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文（後・晩） 弥生（前），古墳	平成８年度農政分布， 平成 11 年度農政分布で拡大
17	203	325	京の塚古墳	曽於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	古墳	平成 14 ～ 15 年年度本調査
18	203	351	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文，弥生	
19	203	292	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	洞窟	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
20	203	334	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
21	203	350	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世	平成 26 ～ 29 年度本調査
22	203	300	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生，古墳	平成 25 ～ 29 年度本調査
23	203	352	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
24	203	344	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世（鎌倉末）	
25	203	329	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）	
26	203	335	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	203	298	生栗巣遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生	
28	203	295	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生，古墳	平成 25 ～ 29 年度本調査
29	203	346	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生，古墳	
30	203	347	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
31	203	348	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文，弥生	
32	203	354	瓜々良蒔遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生	平成 12 年度本調査
33	203	357	燕ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里燕ヶ鼻	台地	縄文，弥生	
34	203	356	杉場遺跡	鹿屋市串良町有里杉場	台地	弥生	
35	203	355	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生，古墳	
36	203	323	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳	
37	203	353	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生	
38	203	324	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚 2169	台地	古墳	
39	482	10	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
40	468	103	下原遺跡	曽於郡大崎町持留	台地	縄文（後），弥生，古墳	
41	482	29	岩弘上古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
42	482	9	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	



第１図　周辺遺跡位置図（Ｓ＝１/25000）

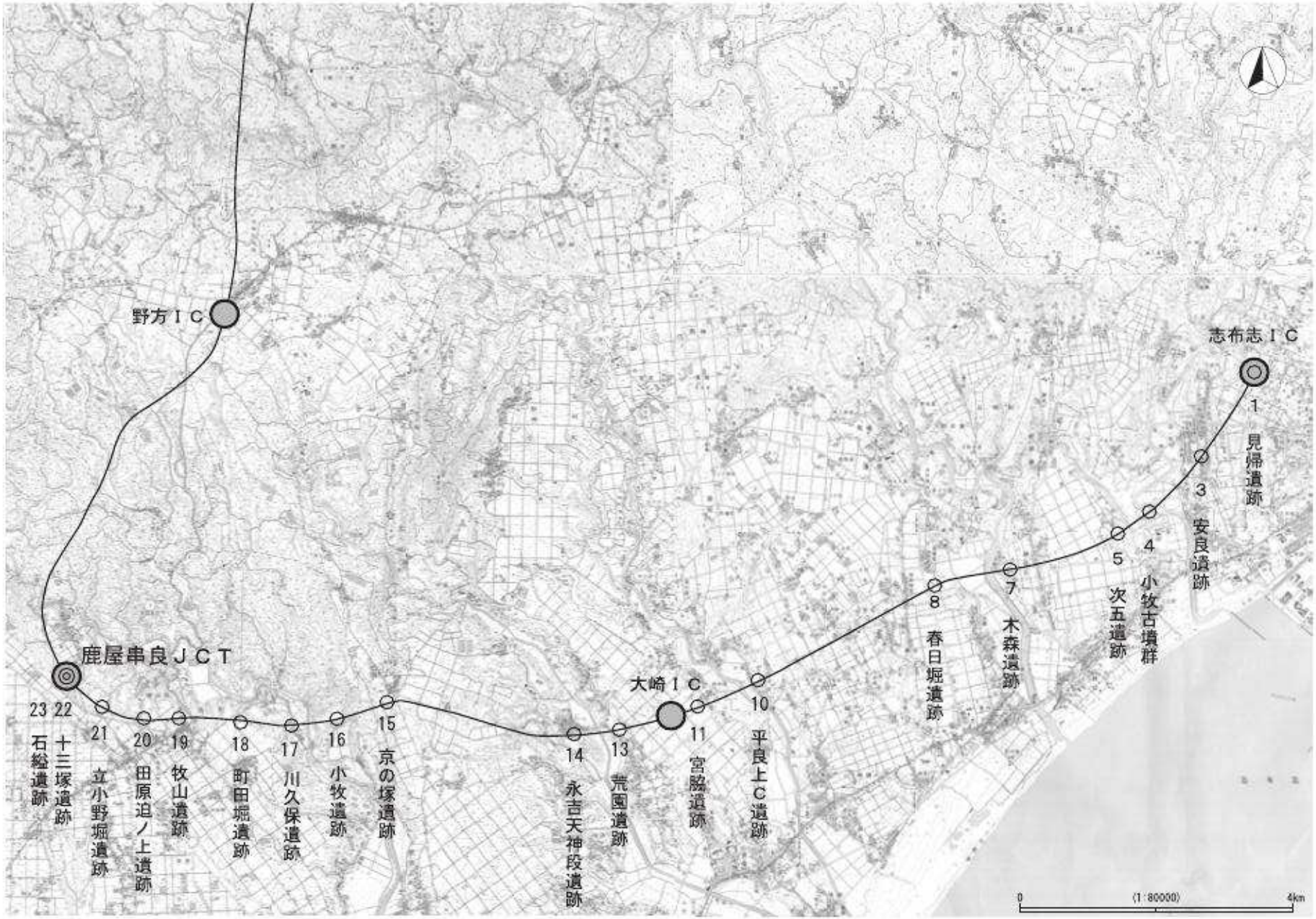
第２表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約 70 m	H 28 年度 終了 H 25・30 年度に埋文センター調査（隣接地）	H 30 年度 終了	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石， ハンマーストーン
					縄文早期	土坑（H 25 年度埋文センター調査のみ）	石坂式，押型文，下剥峯式，石鏃，磨石，石皿
					縄文前・中期	落とし穴，土坑	—
					縄文後・晩期		磨消縄文，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，磨石，敲石
		縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は，土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が２基検出されている。溝状遺構１号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。					
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約 45 m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約 30 m	H 28 年度 H 29 年度 終了	H 30 年度 作業中	縄文早・後期		小牧３Ａ，納曽式，西平式
					弥生中期		山ノ口式，須玖式
					古墳時代	溝状遺構	成川式土器，須恵器
					古　代		土師器，須恵器
					中　世	掘立柱建物跡，土坑， ピット他	青白磁，滑石製石鍋，土師器，炭化米塊
		古墳時代後半期と中世を中心としたの遺跡である。調査区内における両時期の集落構造把握等に向け整理作業を進めている。					
4	小牧古墳群	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約 50 m	H 27 年度 H 28 年度 終了	H 30 年度 作業中	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃核，細石刃
					縄文草創期	集石遺構	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石遺構	吉田式，妙見・天道ヶ尾式，塞ノ神Ａ式，塞ノ神Ｂ式，苦浜式，耳栓，石鏃，磨石，異形石器
					弥　生	—	弥生土器，石包丁
		起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また，塞ノ神式土器の壺形土器や，耳栓，異形石器，円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが，調査区内では墳跡を含め古墳および古墳時代の遺構の遺物は確認されていない。					
5	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部標高約 50 m	H 26 年度 H 27 年度 終了	H 29 年度 終了	旧石器	—	鮮原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石遺構，磨石集積遺構	前平式，加栗山式，吉田式，札ノ元Ⅷ類，石坂式，中原Ⅴ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神Ｂ式，打製・磨製石鏃，石錐，局部磨製石斧
		旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱礫砕礫が多量に出土した点である。					
6	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約 40 m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
7	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約 30 m	H 26 年度 H 30 年度 終了	H 31 年度以降	縄文早期	集石遺構	前平式，加栗山式，吉田式，下剥峯式，押型文，石鏃，石匙，磨石，敲石
					中　世	掘立柱建物跡	須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓
		縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の集石遺構，中世の掘立柱建物跡等が発見され，遺物では縄文時代早期の土器，石器，石匙，磨石・敲石の他，須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。					
8	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約 30 m	H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 H 30 年度 終了	H 30 年度 作業中	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑， 集石遺構，土坑，土器集中， 炭化物集中，落とし穴	前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神式，打製石鏃，打製・環状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，敲石，穿孔円礫
					弥　生	竪穴住居跡	山ノ口式
					古　墳	竪穴住居跡，溝状遺構 土坑，棟状礫集積遺構	甕（東原式，笹貫式），壺，坩，高坏，須恵器高坏，棟状礫，磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡，掘立柱建物跡， 土坑墓，杭列跡，焼土跡	土師器
					近　世	土坑，溝状遺構，道跡， 遺物集中	陶器，磁器
		縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑，集石遺構，落とし穴，弥生時代の竪穴住居跡，古代～中世の掘立柱建物跡が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，打製石斧，環状石斧，トロトロ石器等をはじめ，弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
9	稲荷堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約 50m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
10	平良上C	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 26 年度 H 27 年度 終了	H 28 年度 終了	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑， 集石遺構，埋設土器， チップ集中	吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，平栫式，石鏃，石匙，打製・磨製石斧，扁平打製石斧，磨石，石皿，礫石器，石核，フレーク，チップ
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡，連穴土坑，集石遺構，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
11	官脇	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 27 年度 H 28 年度 終了	H 30 年度 作業中	旧石器	礫群２基	ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石器，石核，スクレイパー，掻器，使用痕剥片，フレーク，チップ，磨石，敲石
					縄文早期	集石遺構，土坑，土器集中	加栗山式，小牧３A，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，打製石鏃，磨石，チップ
					近　世	—	薩摩焼，寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石遺構，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。					
12	堂園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約 45 m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約 50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 30 年度 終了 ※H 24 年度は埋文センター調査	H 28 年度 （第１地点） 終了 （第２地点） 作業中	旧石器	—	鮮原型細石核，細石刃，水晶剥片
					縄文早期	集石遺構，土坑，剥片・チップ集中	前平式，吉田式，加栗山式，下剥峯式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，並形土器，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製・磨製石斧，磨石，石皿，フレーク，チップ
					弥生中期	竪穴住居跡，土坑	古ヶ崎式，山ノ口式，磨製石鏃未製品，砥石
					古　墳	竪穴住居跡	成川式土器，須恵器，砥石
					古代以前	片薬研掘溝状遺構	—
					中　世	掘立柱建物跡，土坑， 溝状遺構，帯状硬化面	土師器，東播系須恵器，陶器，青磁，華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は，縄文時代早期の集石遺構，弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡，古代以前の片薬研堀，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び河岸段丘 標高 30 ～ 50m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了 ※H 24 年度は埋文センター調査	H 27 年度 （第１地点） 終了 H 28 年度 （第２地点 1） 終了 H 29 年度 （第２地点 2） 終了 H 30 年度 （第３地点） 終了 H 30 年度 （第２地点 3） 作業中	旧石器	礫群，ブロック	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石遺構，土器埋設遺構	前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿，フレーク，チップ
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴住居跡，落とし穴，土坑	入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧
					弥　生	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，円形周溝墓，土坑墓群，土坑	入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古　墳	竪穴住居跡，土坑	成川式，須恵器
					古　代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中　世	掘立柱建物跡，土坑墓， 地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼，湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭
					近　世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					
15	京の塚	曽於郡 大崎町 西持留 台地上 標高約 95 m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 26 年度 H 28 年度 H 30 年度 作業中	縄文早期	集石遺構	石坂式，下剥峯式，中原式，押型文，塞ノ神式，打製石鏃，石核
					縄文前期～中期初頭	土坑，土器集中	曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核，フレーク
					近世以降	溝状遺構・道跡	—
		縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では 170 基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
16	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約 60 m	H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 終了	H 30 年度 作業中	旧石器	—	細石刃，フレーク，チップ
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石遺構	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，平栫式，条痕文，石匙，磨石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式，深浦式，磨石
					縄文後期	竪穴住居跡，石皿立石遺構，伏甕，石斧集積遺構，集石遺構，土坑	阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式，山ノ口式，紙石
					古　墳	竪穴住居跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式，辻堂原式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品
					古　代	土坑	土師器，須恵器短頸壺
					中世以降	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，焼土域	土師器，白磁，青磁，石鍋，輪羽口
		旧石器時代から中世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。					
17	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高 30 ～ 50m	H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 H 30 年度 調査中	H 27 年度 H 29 年度 H 30 年度 （A区・B区） 作業中 （C区） 本報告書 終了	旧石器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，岐原型細石核
					縄文早期	竪穴住居跡，集石遺構，土坑	前平式，加栗山式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式土器，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石遺構	轟式，曽畑式，磨製石斧
					縄文晩期	集石遺構	黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡	高橋式，下域式，山ノ口式
					古　墳	竪穴住居跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，溝状遺構，道跡	成川式土器，輪羽口，高坏脚転用輪羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古　代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中　世	掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴住居跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の輪の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					
18	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約 90 m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 終了	H 27 年度 (1) 終了 H 29 年度 (2) 終了	縄文早期	集石遺構	下剥峯式，平栫式
					縄文後期	竪穴住居跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	黒川式土器，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡	入佐式，山ノ口式土器，土製勾玉
					古　墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が 92 基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に不可欠な遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴住居跡から，横断文を施す完全な石刀が出土している。					
19	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約 110m	H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 H 28 年度 H 29 年度 終了	H 28 年度 （A地点 1） 終了 H 30 年度 （A地点 2，B，C，D 地点） 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石遺構，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石，剥片，チップ
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式，条痕文
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，西平式，太郎迫式，三万田式，中岳Ⅱ式，打製・磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，打製・磨製石斧，磨製・打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鏃
					中・近世	道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が 1 点出土している。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
20	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H26年度 (1) 終了 H27年度 H28年度 (2) 終了 H30年度 (3) 作業中 ※H23～24は埋文センター作業	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，集石遺構，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園B式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，柔ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，石鏃，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡，大型建物跡，掘立柱建物跡，円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石
					古墳時代以降	溝状遺構，線状遺構	土師器甕，薩摩焼
		縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。					
21	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 終了 H30年度 (2) 作業中 ※H24は埋文センター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
		縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が190基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。					
22	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 終了 ※埋文センター作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	回線文，市来式，三万田式
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃
					古墳時代	—	成川式
					中世～近世	道路状遺構	洪武通寶（加治木銭）
		弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石遺構が竪穴住居跡内から発見されている。7号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。					
23	石蔵	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 終了 ※埋文センター作業	縄文早期	集石遺構，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文，鎌石橋式，轟A式，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	—	山ノ口式，須玖式土器
		縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。早期末に位置付けられる条痕文土器の在り方が注目される。					



第２図　東九州自動車道関連遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理・報告書作成作業について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

川久保遺跡の発掘調査は，平成 26 年度から平成 29 年度の４か年にわたり実施した（平成 30 年度が調査最終年度である）。調査対象表面積は 27,327 ㎡，調査対象延面積 96,403 ㎡である。（Ｃ地点は，平成 27 年度から平成 29 年度，調査対象表面積 4,884 ㎡，調査対象延面積 9,127 ㎡である）。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，大隅河川国道事務所の設置した道路建設用センターライン「ＳＴＡ 154」と「ＳＴＡ 155」を結ぶ延長線を基軸として，西側から東側に向かって１・２・３…，北側から南側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ …とする 10 ｍ間隔で設定した。

このグリッドを基にして遺構・遺物の測量作業を行うことにした。光波測距儀（トータルステーション）で測量作業を行う場合，測量座標は，Ａ－１区の左上を原点とし，（０，０）とし，縦軸をＸ，横軸をＹとした。

調査は，調査区内の雑木や雑草の伐採を行った後，文化財課による試掘調査と，埋文センターが実施した確認調査の結果に基づき，表土から遺物包含層上面まで重機で除去した後，遺物包含層は人力で掘り下げを行った。

出土した遺物については，必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後，トータルステーションで記録し，取り上げを実施した。まとまりのある遺物や遺構に伴う遺物については，縮尺 10 分の１で実測を行った。遺構については，検出状況の写真を撮影後，人力による掘り下げを行い，必要に応じて，段階的に断面や完掘状況の記録写真を撮影し，遺構の規模に応じて縮尺 10 分の１，20 分の１の実測を行った。遺物包含層間にある無遺物層は，その都度重機で除去し，下層の遺物包含層を人力によって掘り下げる作業を繰り返した。

なお，調査中に生じた掘削土については，調査区に仮置きしたほか，大隅河川国道事務所から指定された調査区外へ搬出し，調査が終了した調査区については重機による整地を行った。

２　遺構の認定と検出方法

本遺跡で検出した遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

⑴　遺構の認定・分類・時期判断

検出面，埋土状況や色調，規模等を総合的に判断し，担当者で検討したうえで遺構の認定を行った。本編に掲載した主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居跡は，人為的に掘り込まれた大型の竪穴遺構で，埋土や形状，床面の有無，焼土域や柱穴の有無，遺物の出土などを総合的に検討し判断した。

土坑及びピットは，人為的に掘り込まれた大型あるいは小型の竪穴遺構で，ほぼ円形で概ね径 50 ㎝以下のものをピット，それ以上のものを土坑とした。方形，円形，楕円形など形状が異なるが，検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し区別した。土坑には，後世の削平の影響もあり，該当時期の地層より下位から検出したものもあるが，埋土の堆積状況や色調，遺構内遺物などを検討し，時期判断を行った。

集石遺構は，ある程度の数量の礫が集中して検出されたもので，礫の密集度，検出状況，掘り込みの有無などを総合的に判断して認定した。やや散礫状に広がるものも含まれる。時期については，検出面や集石遺構内外の出土遺物などを検討したうえで判断した。

⑵　遺構の検出方法

遺構の検出は，各年度とも共通の調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めた。古墳時代の遺構については，遺物包含層の主体となるⅢ層と遺構埋土が同じ黒褐色系の色調であったことから，判別のしやすい地層上面での検出が多くなった。

３　整理作業・報告書作成作業の方法

川久保遺跡Ｃ地点の整理・報告書作成作業は，平成 29 年度と平成 30 年度の２か年にわたり実施した。平成 29 年度は，発掘調査と並行した時期にあたるが，川久保遺跡のＡ～Ｃ地点における発掘調査成果品と併せて基礎整理作業を実施した。

平成 29 年度

平成 26 年度から平成 28 年度に実施した発掘作業成果品の整理を行った。図面整理は，遺構実測図，遺物出土分布図，土層断面図，地形図等に仕分けし，台帳や遺物との照合を行った。遺物の整理は，遺物洗浄，注記，調査区や遺構別の分類と，一部について実測委託を実施した。

平成 30 年度

前年度までの整理作業をもとに，土器・石器の実測，トレース，遺物のレイアウト，遺構図作成，写真撮影など，報告書刊行に向けての整理作業を行った。

第２節　層序

基本層序は，以下のとおりである。調査区南側のＦ～Ｊ－３～ 11 区や調査区北側のＣ～Ｅ－７・８区において畑地造成などによる削平が認められた。調査区内における地層の堆積（残存）状況に差があるため，Ⅰａ層～Ⅳａ層までは残存状況が良好なＢ－７・８区，Ⅳｂ～Ⅺ

層まではⅠ－６・７区の地層をそれぞれ指標とした。

遺物包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの１つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

第３表　川久保遺跡Ｃ地点基本層序

層		色調　・　土質	層厚
Ⅰ層	Ⅰａ	暗褐色土	90～140cm
	Ⅰｂ	暗褐色土	12～20cm
	Ⅰｃ	黒褐色土	10～25cm
Ⅱ層	Ⅱａ	黒褐色土（10YR2/3）	6～14cm
	Ⅱｂ	暗褐色土（7.5YR3/3）	4～15cm
	Ⅱｃ	黒褐色土（7.5YR2/2）	16～25cm
	Ⅱｄ－ｘ	暗褐色土（7.5YR3/3）	5～12cm
	Ⅱｄ－ｙ	暗褐色土（7.5YR3/4）	6～8cm
	Ⅱｄ－ｚ	暗褐色土（7.5YR3/4）	6～8cm
	Ⅱｅ	黒褐色土（7.5YR2/2）	12～22cm
	Ⅱｆ	黒色土　（7.5YR2/1）	5～10cm
	Ⅱｇ－ｘ	暗褐色土（7.5YR3/4）	5～8cm
	Ⅱｇ－ｙ	暗褐色土（7.5YR3/3）	6～12cm
	Ⅱｇ－ｚ	暗褐色土（7.5YR3/3）	6～22cm
Ⅲ層		黒色土	12～20cm
Ⅳ層	Ⅳａ	褐色土　（10YR4/4）	56～63cm
	Ⅳｂ	褐色土　（10YR4/6）	20～22cm
Ⅴ層	Ⅴａ	明黄褐色土	10～30cm
	Ⅴｂ	明褐色土	25～30cm
	Ⅴｃ	黄橙色軽石層	5～10cm
Ⅵ層		暗褐色土	20～35cm
Ⅶ層	Ⅶａ	黒褐色土	20～30cm
	Ⅶｂ	黒色土	20～30cm
Ⅷ層		淡黄褐色土	15～20cm
Ⅸ層	Ⅸａ	暗褐色粘質土	10～15cm
	Ⅸｂ	黒褐色粘質土	6～15cm
	Ⅸｃ	暗茶褐色粘質土	6～15cm
Ⅹ層		にぶい黄褐色粘質土	8～15cm
Ⅺ層		明黄褐色砂質土	15cm～

Ⅰａ層：表土，遺跡を覆っていた堆積土で造成土を含む。

Ⅰｂ層：旧耕作土

Ⅰｃ層：しまりが弱く，Ⅰａ層より明るい。

Ⅱ層：黒色系の色調をもつ層である。色調や硬さの違いにより11層に分層した（第３表参照）。

Ⅱａ層：硬くしまる。

Ⅱｂ層：Ⅰｂ層とⅣａ層の混土である。

Ⅱｃ層：しまりがあり，１～３㎜程度の褐色土含む。

Ⅱｄ－ｘ層：Ⅱｃ層より明るくしまりが強い。

Ⅱｄ－ｙ層：しまりがあり，暗褐色土と褐色土の混土である。

Ⅱｄ－ｚ層：暗褐色土と褐色土の混土である。灰白色砂質土Ｐ１またはＰ２（いずれも桜島起源の噴出物）を含む。

Ⅱｅ層：しまりが強い。

Ⅱｆ層：しまりが強く，Ⅱｅ層より暗い。

Ⅱｇ－ｘ層：やや砂質でしまりが強い。

Ⅱｇ－ｙ層：しまりあり。

Ⅱｇ－ｚ層：暗褐色土と褐色土の混土である。

Ⅲ層：古墳時代～古代にかけての遺物包含層である。

Ⅳ層：色調の違いから２層に分層した。

Ⅳａ層：縄文時代晩期～古墳時代の遺物包含層である。

Ⅳｂ層：軽石（池田降下軽石。約6,400年前，阿多カルデラ起源の噴出物）を含む。

Ⅴ層：アカホヤ火山灰（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）関連の層であるが，色調や性質などの違いから３層に分層した。

Ⅴａ層：アカホヤ火山灰を基本とする二次堆積層の腐植土である。

Ⅴｂ層：アカホヤ火山灰二次堆積層である。アカホヤ火山灰一次の軽石が点在する。

Ⅴｃ層：アカホヤ火山灰一次の軽石（幸屋降下軽石）層である。Ⅴｂ層とⅥ層間にブロック状に堆積している。無遺物層である。

Ⅵ層：縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層である。

Ⅶ層：黒色系の色調で硬質である。色調など特徴の違いから２層に分層した。

Ⅶａ層：縄文時代早期前葉～中葉の遺物包含層である。Ｐ12またはＰ13（いずれも桜島起源の噴出物）を含む。

Ⅶｂ層：硬質である。基本的に無遺物層である。

Ⅷ層：Ｐ14（薩摩火山灰）（約12,800年前，桜島起源の噴出物）関連の層である。硬質でややブロック状に堆積する。無遺物層である。

Ⅸ層：旧石器時代サイフ形石器文化期の遺物が出土した層である。いずれも粘質がある。色調と粘質の違いから３層に分層した。

Ⅸａ層：粘質は弱い。

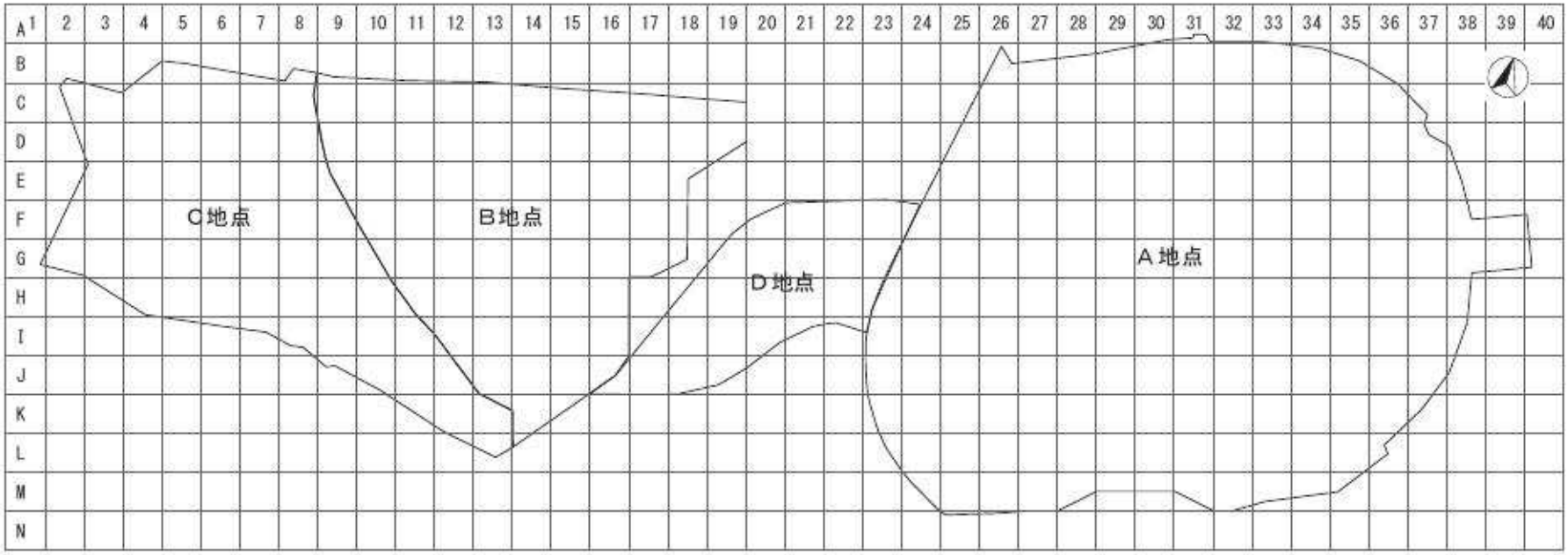
Ⅸｂ層：粘質が強い。

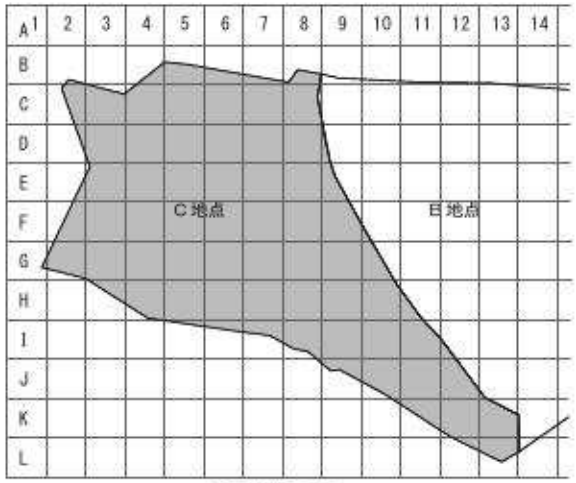
Ⅸｃ層：Ⅸｂ層に比べて粘質は弱い。

Ⅹ層：粘質があり，小礫を含む。

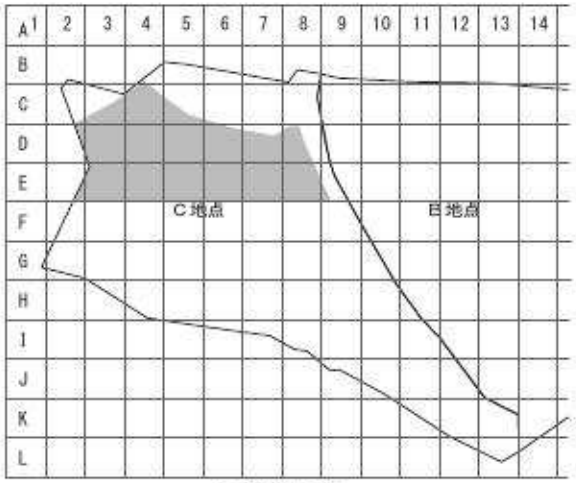
Ⅺ層：ＡＴ（姶良・丹沢火山灰），通称シラスとよばれる，約26,000～29,000年前の姶良カルデラを起源とする噴出物の二次堆積層である。無遺物層である。

※火山灰の年代は，2003　町田洋　新井房夫著　東京大学出版会　『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺』（P106～110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。

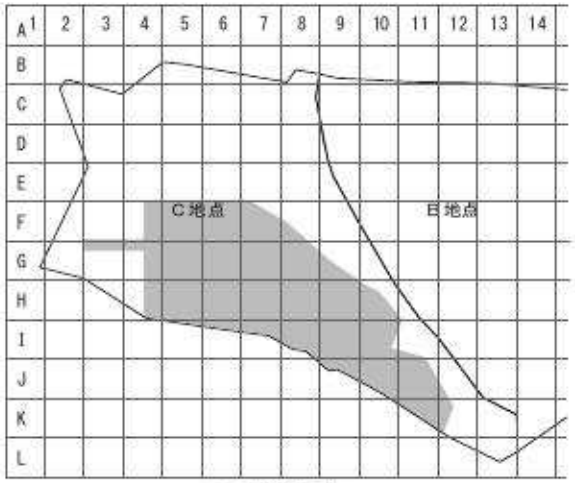




平成 27 年度



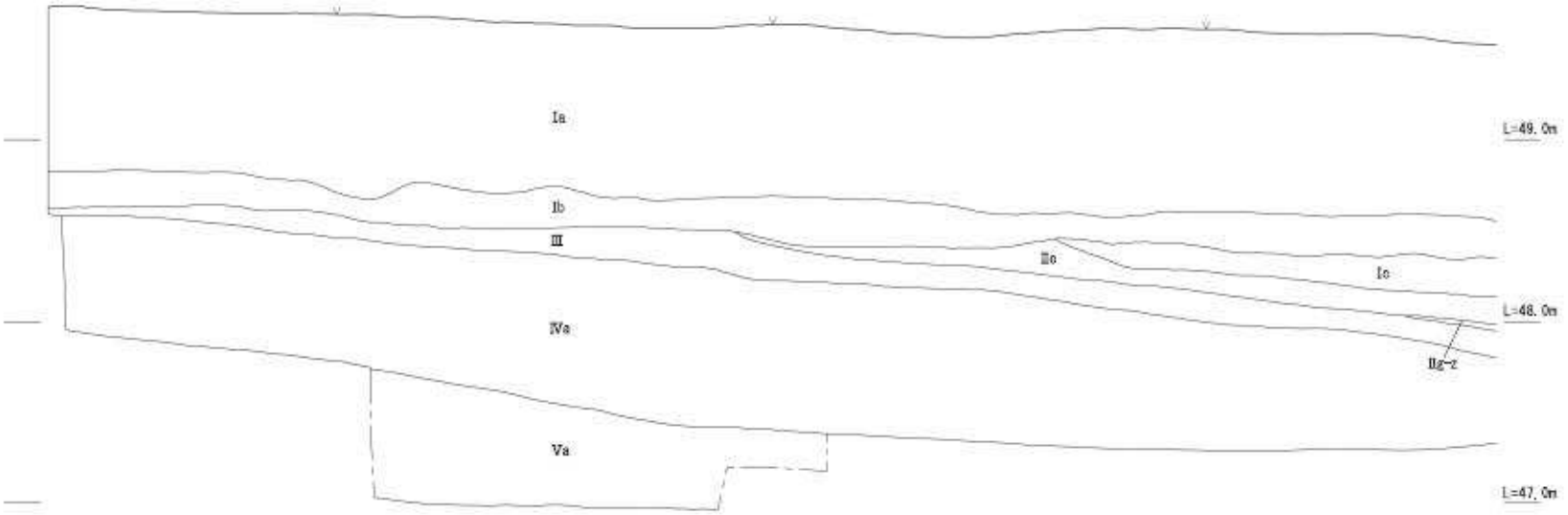
平成 28 年度



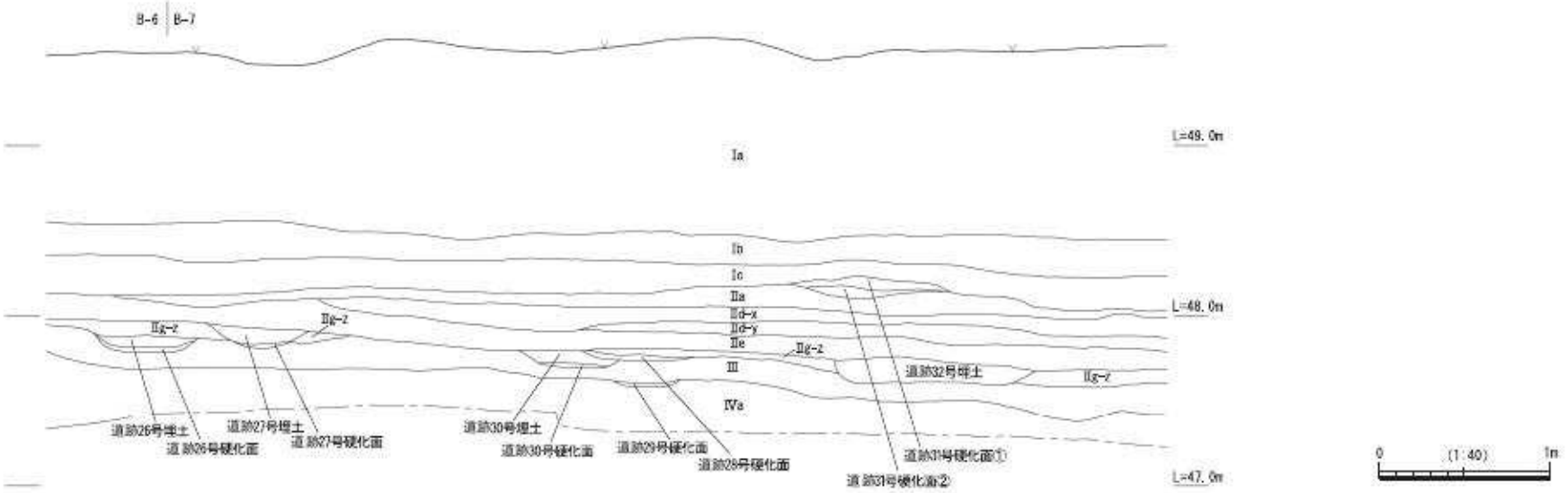
平成 29 年度

第３図　川久保遺跡全体図及びＣ地点年度別調査範囲
（各グリッドは 10 m × 10 m）

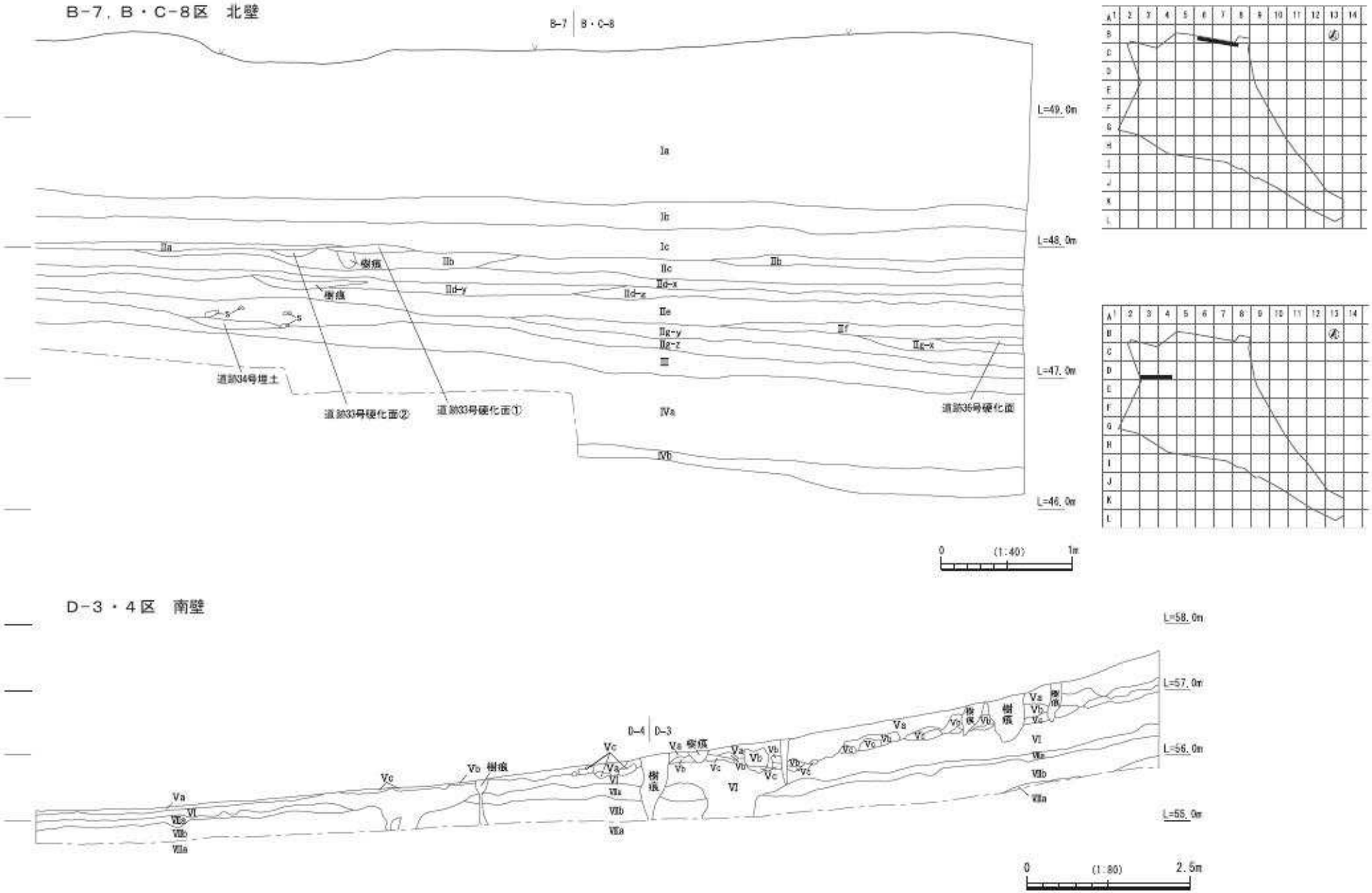
B－6区　北壁



B－6・7区　北壁

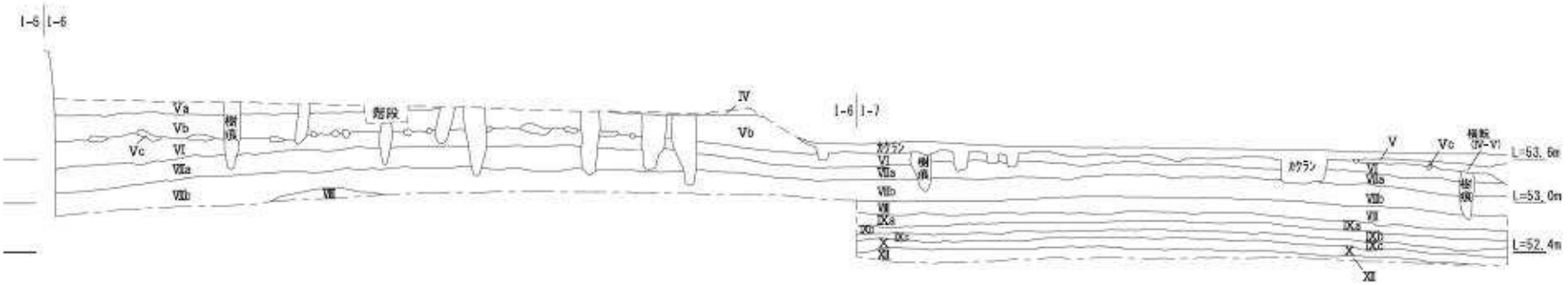


第４図　土層断面図１（Ｂ－６・７区）

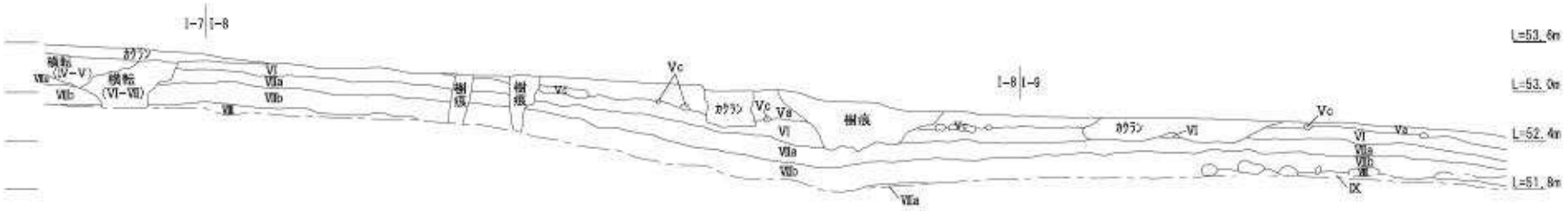


第５図　土層断面図２（Ｂ－７，Ｂ・Ｃ－８区，Ｄ－３・４区）

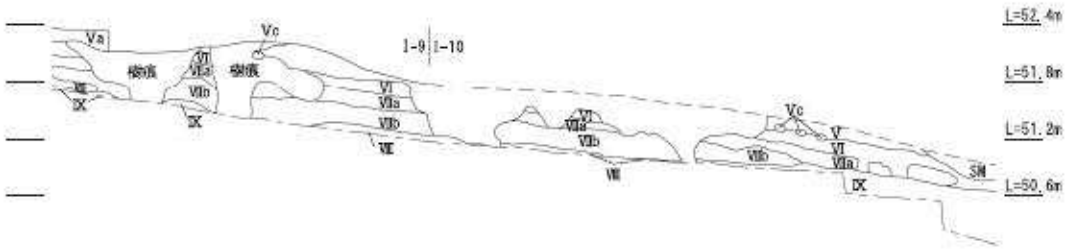
I－6・7区　北壁

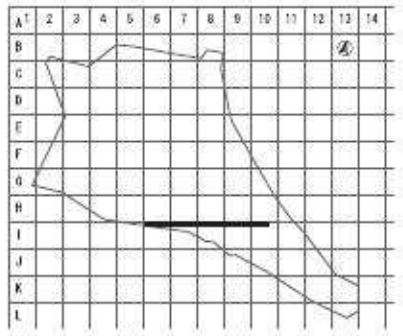


I－7～9区　北壁



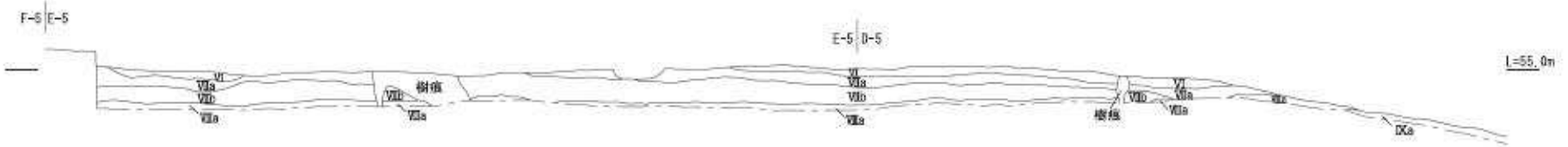
I－9・10区　北壁



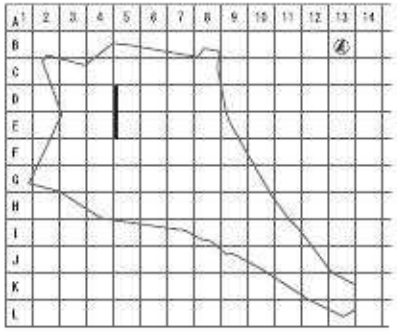


第６図　土層断面図３（Ｉ－６～10区）

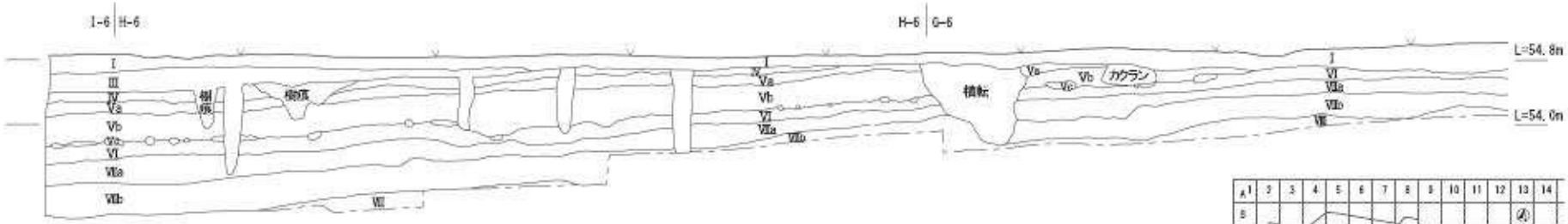
D・E－5区　西壁

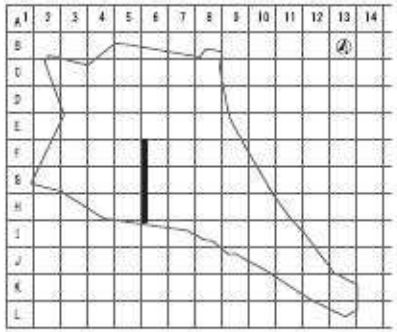


D－5区　西壁

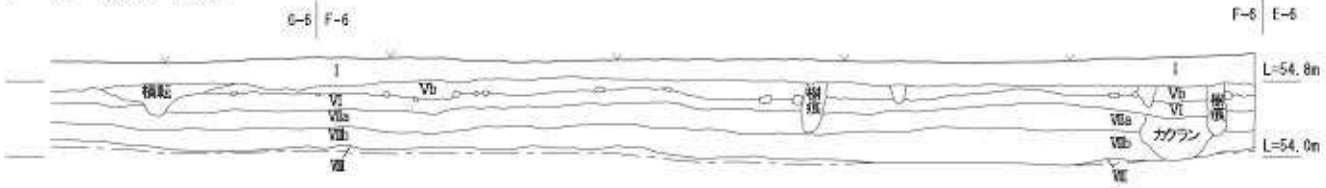


G～I－6区　西壁





F・G－6区　西壁



0　(1:80)　2.5m

第７図　土層断面図４（D・E－５区，F～I－６区）

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　旧石器時代の調査成果

１　調査の概要

旧石器時代の遺物は，G・H－８・９区の 80 ㎡程度の範囲から出土している（第８図）。出土範囲は，西から東に下る斜面のやや平坦な部分で，遺物の分布域に接し，礫の出土がみられたが，礫群は検出されていない。

出土層位は，薩摩火山灰層（Ⅷ層）下位のⅨａ（暗褐色粘質土）・Ⅸｂ（黒褐色粘質土）からⅨｃ層（暗茶褐色粘質土）にわたるが，各層の層厚は薄く漸移的で，各層間に接合関係がみられることから，遺物の移動が生じた可能性が高い。また，遺物の集密度は低いが，平面的分布状況から，本来，ひとつの遺物集中部を形成していた可能性がある。

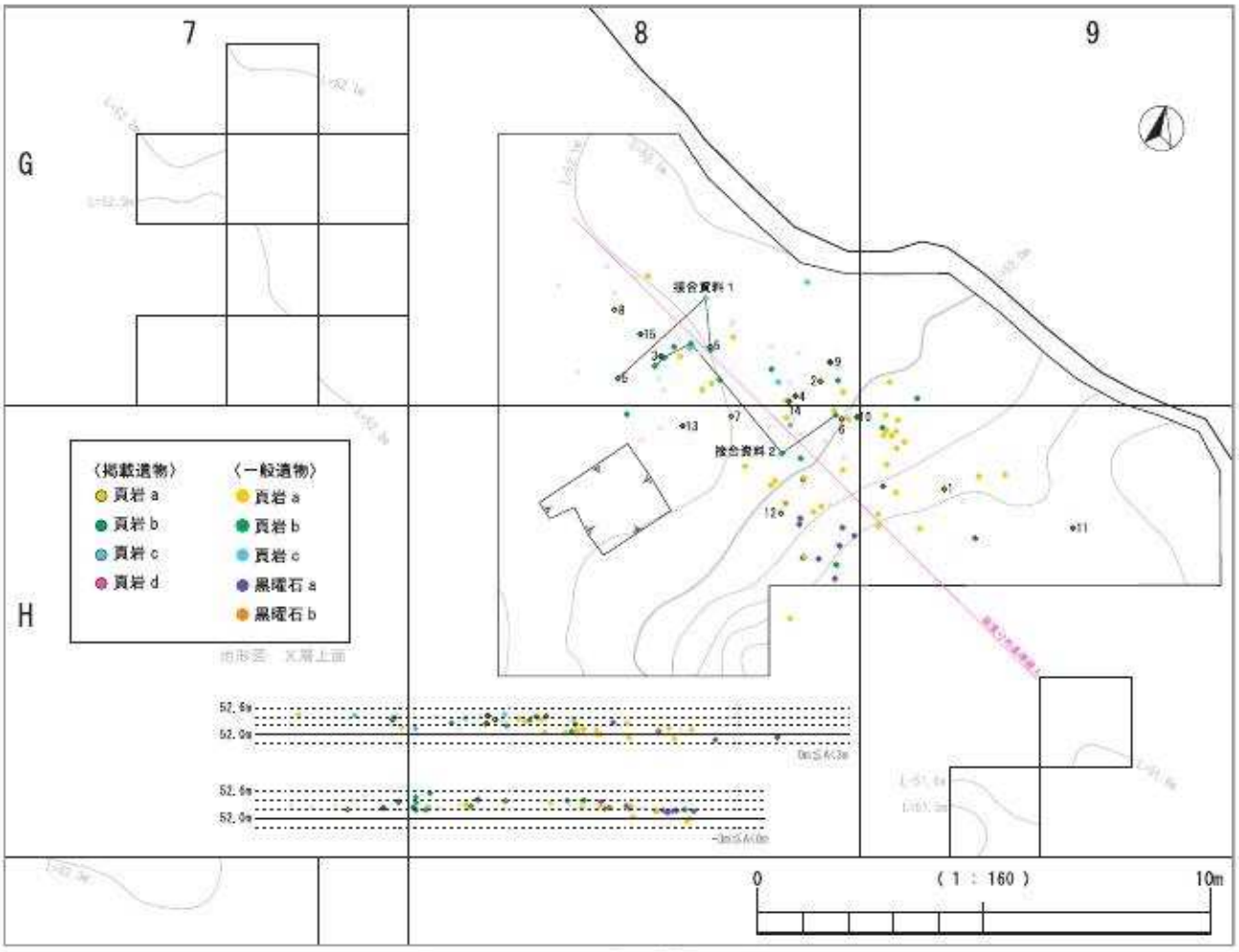
２　遺物

出土石器は，三稜尖頭器６点，石錐１点，掻器２点，削器２点，加工痕・使用痕のある剥片３点，剥片 29 点，石核２点，ブランティングチップを含む小剥片及び砕片 38 点の総点数 83 点である。遺物間の接合により６点の接合資料が得られたが，このうち２点を図示した。

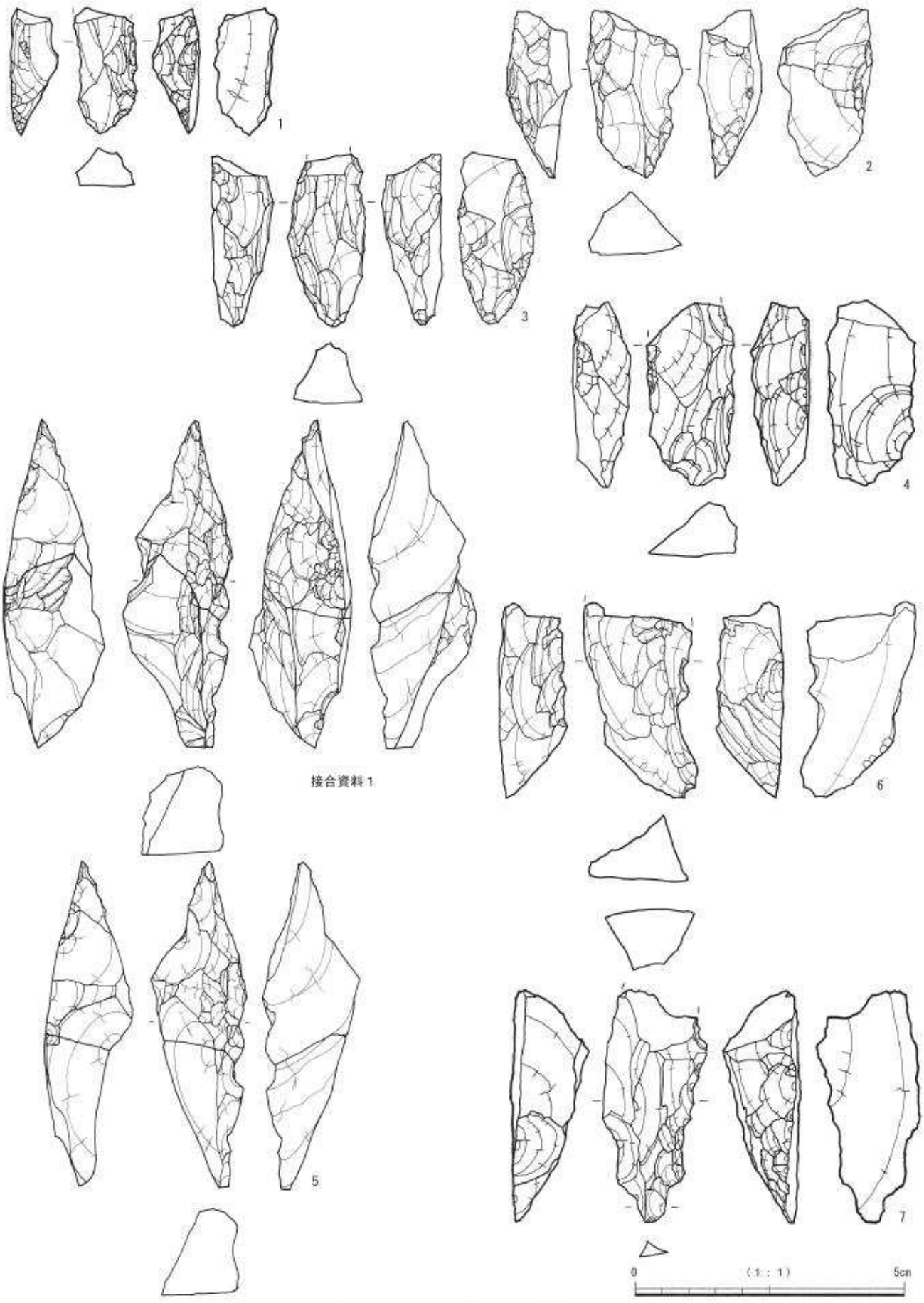
出土石器の石材の主体を占めるのは頁岩である。接合作業に際して石材の特徴から頁岩ａ～ｄの４種に区分した。頁岩ａは灰色の珪質頁岩で縦横に不規則な白色の縞が入る。頁岩ｂは灰色から黒褐色を呈するやや珪質の低い頁岩である。部分的にやや赤みを帯びたり，灰白色の縞が入るなど個体内でも変異がある。頁岩ｃは乳白色の縞が層状に入る灰褐色のやや粒子の荒い頁岩である。頁岩ｄは黒色の珪質頁岩である。図示しなかった剥片・砕片類には 12 点の黒曜石製の石器がある。黒曜石ａは灰色～青灰色を呈する透明度が低く少量の不純物含む黒曜石である。黒曜石ｂは青みがかった灰色の色調を呈し，透明感があり不純物を多く含む。

三稜尖頭器（第９図　１～６・接合資料１）

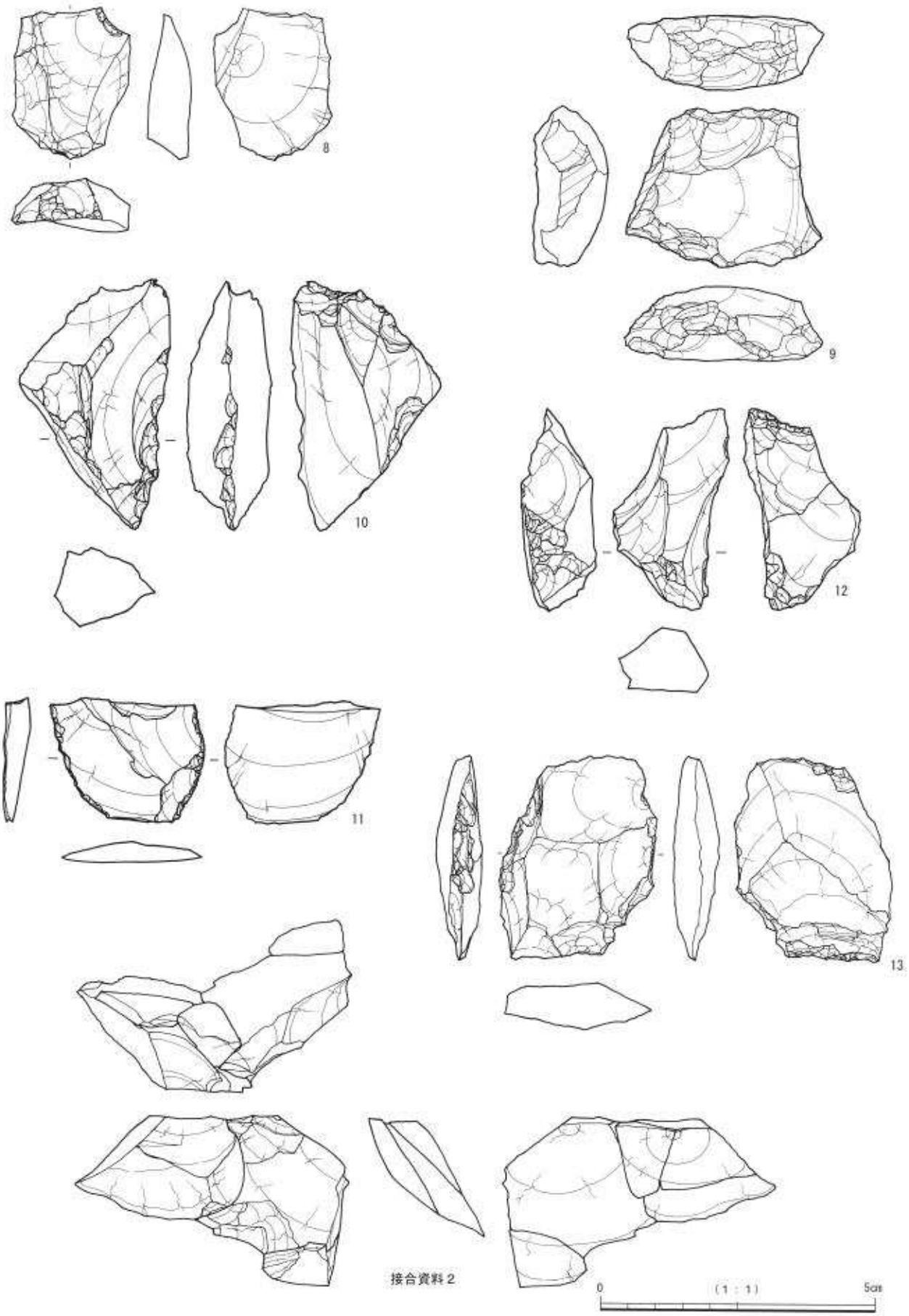
１は，先端部を欠損する残存長２㎝程度の小型の三稜尖頭器である。左側面は稜上からの整形剥離が残存し，



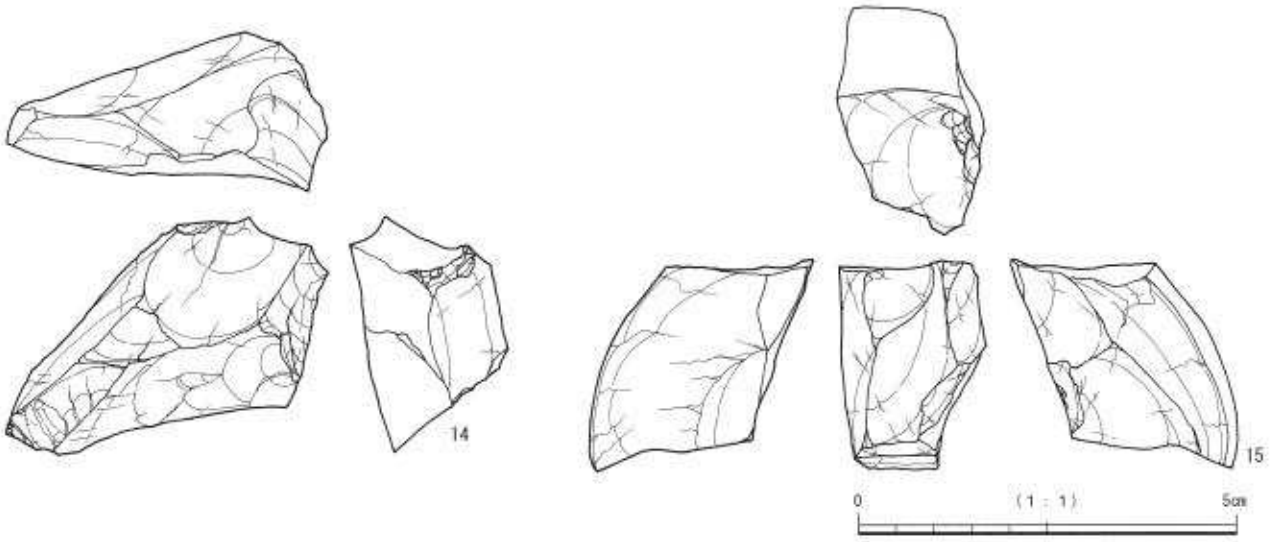
第８図　旧石器時代遺物出土状況図



第９図　旧石器時代出土遺物１



第 10 図　旧石器時代出土遺物 2



第11図　旧石器時代出土遺物３

下半部に主要剥離面側からの細かい調整剥離が施される。右側面は一部稜上からの整形剥離が加えられた後，主要剥離面側から調整が加えられている。

２も先端部を欠損する資料であるが，主として腹面側から整形・調整剥離が加えられ，部分的に左側面から腹面側に平坦剥離が加えられている。３は灰褐色を呈する頁岩ｂを素材とする三稜尖頭器で先端部を欠損する。両側面とも腹面側からの急傾斜剥離で整形された後，両側辺から腹面側に平坦剥離が加えられている。４は頁岩ｂの横長剥片を素材とする三稜尖頭器で，先端部を欠損する。左側辺は比較的平坦な剥離で，右側辺は急傾斜剥離で調整され，腹面にも剥離が加えられている。５及び３点による接合資料１は三稜尖頭器である。厚みのある頁岩ｃを素材として，主要剥離面側から両側辺に剥離が加えられる。その後，稜上にも調整が加えられ，右側辺稜上から左側辺側に向けて加えられた加撃により，腹面を取り込む剥片が剥離する。この加撃で折れが生じたものとみられる。６は実測後，右側面上部に剥片が接合した。その結果，右側面に連続して腹面側からの急傾斜剥離が加えられた後，稜上から左側面側に複数回の剥離が加えられたことが分かる。全体に不整形な形状で，未製品の可能性が高い。

石錐（第９図　７）

７は頁岩ａの厚みのある横長剥片を素材とする石錐である。腹面側から側面に調整剥離が加えられ，断面が三角形で三稜尖頭器に類似するが，下端部左右からの調整で短い機能部が作り出されていること，機能部先端に摩耗が生じていることから石錐とした。

掻器・削器（第10図　８～11）

８は頁岩ａの剥片側縁部に腹面側から調整を加え刃部とする掻器である。刃部縁辺には使用によるとみられる微細な剥離が生じている。９は頁岩ｂで背面に打瘤部分の丸みが残る。上下辺に表裏からの剥離で鋸歯状の鈍角の刃部が作り出され，下辺刃部縁辺に微細な剥離が生じていることから掻器としたが，楔形石器の可能性もある。10は頁岩ｂの厚みのある剥片で，右側辺下半に調整が加えられていることから削器とした。実測後，裏面図右端の剥離面に取り上げ番号94735の剥片が接合したことから，上辺部の剥離も二次的な加工によることが判明した。上辺左部分を機能部とする彫器的な機能も考えられる。11は頁岩ｄの薄手の剥片で，上辺は折れ面，下辺はステップした末端辺である。左右側縁に連続する小剥離が見られ縁辺に摩耗が生じていることから削器とした。

加工痕・使用痕のある剥片等（第10図　12・13・接合資料２）

12は頁岩ａの厚みのある不定形剥片で基端部及び左側変下半に二次的な調整が加えれている。上辺には使用によるとみられる剥離と摩耗が生じている。13は頁岩ｂの横長剥片で，末端辺である左側辺に二次的な調整が加えられている。素材剥片の鋭利な側辺である上辺に使用によるとみられる複数の小剥離が生じている。

接合資料２は５点の剥片が接合したものである。厚みのある剥片の主要剥離面（上面）を打面とし，左右に打点を移動しながら連続して，剥片を剥出している。三稜尖頭器の整形工程との関わりも考えられる。

石核（第11図　14・15）

14は灰色を呈する頁岩ｂの石核である。頻繁に打面転移を繰り返しながら不定型な剥片が剥離されている。15は黒褐色を呈する頁岩ｂの石核で，原礫内部がやや赤みを帯びる。背面は円礫の自然面で，分割礫を先行する剥離面を打面として，剥片剥離が行われている。

第２節　縄文時代の調査成果

１　調査の概要

縄文時代の調査は，平成 27 年度にＢ～Ｅ－３～８区のＶｂ層（アカホヤ二次堆積層）上面までの遺物包含層と検出した遺構の調査を実施した。平成 28 年度はＦ～Ｌ－１～ 13 区のＶ層上面遺構調査を行った。平成 29 年度にＦ～Ｌ－４～ 10 区のＶ～Ⅶ層までを対象として調査を行った。平成 28 年度までの調査区域は，撹乱や削平がすすみ，遺構・遺物検出等は，困難な状況であったため，縄文の調査は，平成 29 年度調査区を中心に行った。

２　遺構

早期の竪穴住居跡１軒，土坑１基，集石遺構 10 基と，後期の石器集積遺構１基，晩期の土坑１基を検出した。

縄文時代早期

竪穴住居跡１号（第14図）

検出状況　Ｉ－８区，西から東へ緩やかに下る斜面のⅧ層上面で検出した。

規　　模　形状は約320㎝×184㎝の隅丸長方形を呈し，床面積は3.3㎡である。検出面からの深さは最深部で約31㎝あり，床面にピットや焼土は認められていない。埋土は３層に分かれる。埋土①は１㎜程度の白色パミスを多量に含み，３㎜程度の黄色パミスを少量含む。埋土②は，埋土③を主体とし，埋土①をブロック状に含む。埋土③はⅨ層該当層である。中央が盛り上がるように堆積している状況から，レンズ状に堆積したものでないと考えられる。埋土①・②は人工的に埋め戻された可能性も残る。床面積は4.76㎡である。

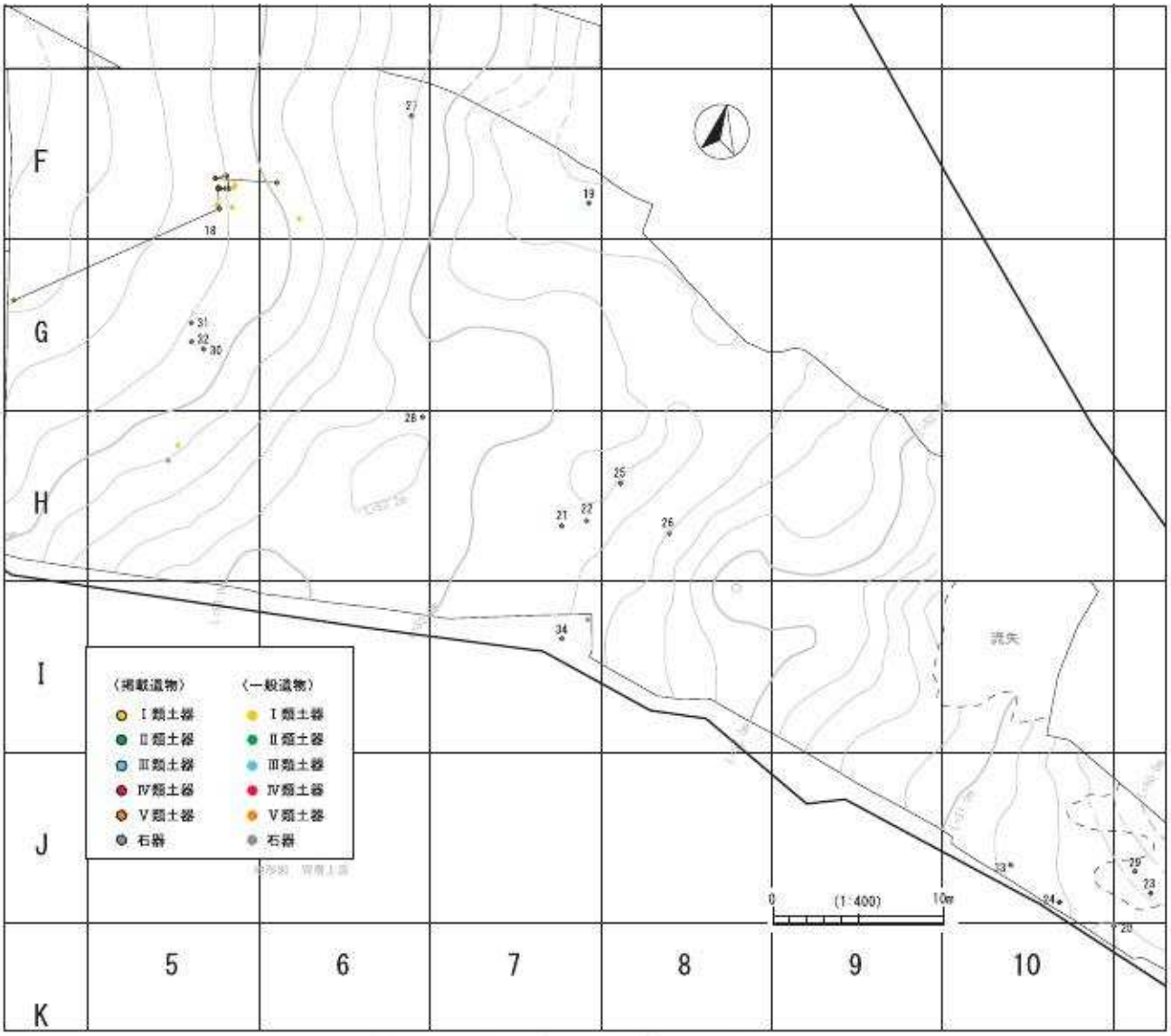
出土遺物　床面直上から礫が１点出土した。

土坑１号（第15図）

検出状況　Ｈ－６区，西から東へ緩やかに下る斜面が平坦になるⅧ層上面で検出した。

規　　模　形状は，長軸約210㎝×短軸約108㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは最深部で約38㎝である。

西側に集石遺構１・２・５号がある。連穴土坑の可能



第 12 図　縄文時代早期遺物出土状況図

性を考慮して調査を行ったが，主穴と従穴をつなぐブリッジ部やその痕跡，明瞭な被熱痕などが確認できなかったため土坑と判断した。

埋土は３つに分かれる。埋土①は１㎜程度の白色パミスを大量に，３㎜程度の黄色パミスを少量含む。埋土②は，１㎜程度の白色のパミスと３㎜程度の黄色パミス，５㎜程度の霧摩火山灰を少量含んでいる。埋土③は，霧摩火山灰を主体とするが腐植がかなり進んでおり，色調は暗褐色を呈しわずかに埋土①を含む。

土坑２号（第15図）

検出状況　Ｄ－３区，西から東へ緩やかに下る斜面のⅧ層上面で検出した。

規　　模　形状は長軸約122㎝×短軸約107㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは最深部で約30㎝である。

埋土は２層に分かれる。埋土は暗褐色を基調とするが，埋土②は埋土①にブロック状のアカホヤ火山灰を含む。土坑が埋没する過程で流入したものと考えられる。

集石遺構

集石遺構は，次のように分類した。

タイプⅠ：構成礫の明確な集中部と，掘り込み部のないもの（集石遺構１～４号）。

タイプⅡ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部のないもの（集石遺構５～７号）。

タイプⅢ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部を伴うもの（集石遺構８～10号）。

集石遺構１号（第16図）

検出状況　調査区南西部のＧ－５区，東から西へ下る斜面のⅦａ層下位で検出した。南東側に集石遺構２号，南西側に集石遺構５号が隣接する。

規　　模　282㎝×155㎝の範囲に礫がややまとまって出土した。総礫数は51個で，ほとんどが丸みを帯びた自然礫である。約半数が破砕しており，南側の７点ほどにススの付着が見られることから使用時の被熱によるものと考えられる。礫の大きさは3.5㎝から13㎝，重さも25ｇから1,160ｇと幅があり，そのうち400ｇ以下が６割強を占める。石材は凝灰岩が８割弱，変成岩が１割強，その他少量の砂岩と頁岩，泥岩，粘板岩で構成されている。

集石遺構２号（第17図）

検出状況　調査区南西部のＨ－５・６区，西から東へ下る斜面のⅦｂ層上面で検出した。東側に土坑１号，西側に集石遺構１・５号がある。

規　　模　214㎝×213㎝の範囲に礫がややまとまって出土した。総礫数は46個で丸みを帯びた自然礫である。半数以上が破砕しており，小礫が南東部に向かって散在している。散在する礫のうち６点にススの付着が見られた。使用時の被熱によるものと考えられる。礫の大きさは散礫状のもので４㎝以下，重さも100ｇ以下のものが約７割である。北側のまとまった礫は大きさが約６㎝から８㎝，重量は100ｇから300ｇのものでやや大ぶりである。石材は凝灰岩が約６割を占め，その他変成岩や頁岩・泥岩・粘板岩とわずかながら砂岩を含む。

集石遺構３号（第18図）

検出状況　調査区中央部のＧ－７区，西から東へ緩やかに下る斜面のⅦｂ層上面で検出した。東側に集石遺構４号がある。

規　　模　145㎝×91㎝の範囲に礫がややまとまって出土した。総礫数は16個で，丸みを帯びた自然礫である。半数以上が破砕しているが，ススの付着や被熱したと考えられる礫は出土していない。礫の大きさはほとんどが８㎝前後で，重量は150g～200ｇが約６割を占める。石材は凝灰岩が約６割，砂岩が約２割，変成岩が約１割となっている。

集石遺構４号（第18図）

検出状況　調査区中央部のＨ－７・８区，東から西へ下る斜面の傾斜が緩やかになった区域のⅦａ層下面で検出した。西側に集石遺構３号がある。

規　　模　132㎝×短軸127㎝の範囲に礫がややまとまって出土した。総礫数は21個で，ほとんどが丸みを帯びた自然礫である。４分の３の礫は破砕している。中央部でススの付着した礫が１点出土した。礫の大きさは10㎝前後で，重量は400ｇ以下のもので９割を超える。石材は凝灰岩が約６割を占め，その他，変成岩，砂岩，頁岩，泥岩，粘板岩で構成されている。

集石遺構５号（第19図）

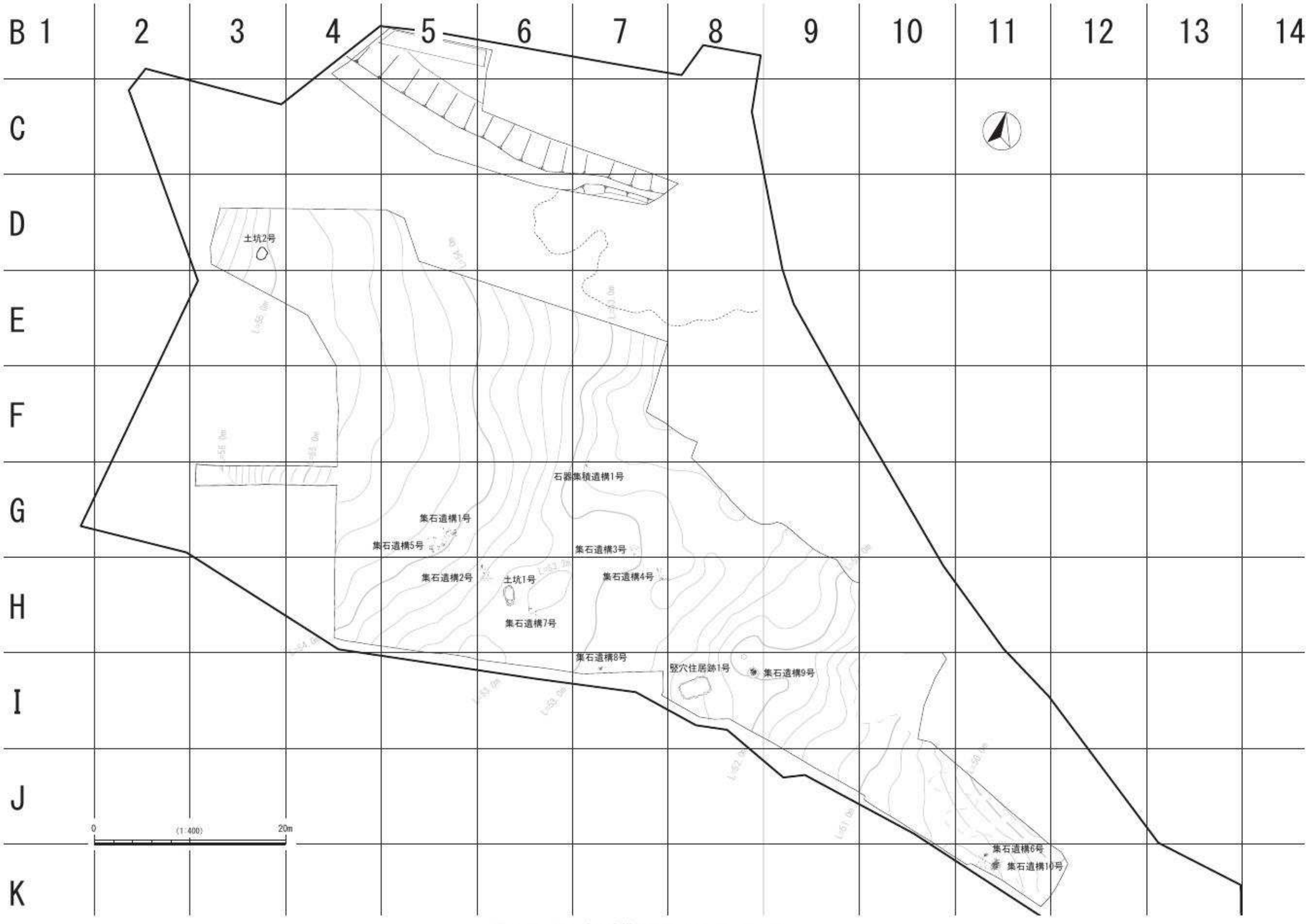
検出状況　調査区南西部のＧ－５区，東から西へ下る斜面のⅦａ層上面で検出した。北側に集石遺構１号，東側に集石遺構２号がある。

規　　模　171㎝×84㎝の範囲に礫の集中部とそれに伴うと考えられる散在礫が出土した。総礫数は26個で，丸みを帯びた自然礫である。半数程度が破砕しており，南側では被熱しススが付着した礫が１点出土している。礫の大きさは約10～12㎝程度と約４㎝程度のものに大別される。重量も50ｇ以下から1,000ｇを超えるものまで幅がある。石材は凝灰岩６割以上と多く，その他変成岩と砂岩で構成されている。

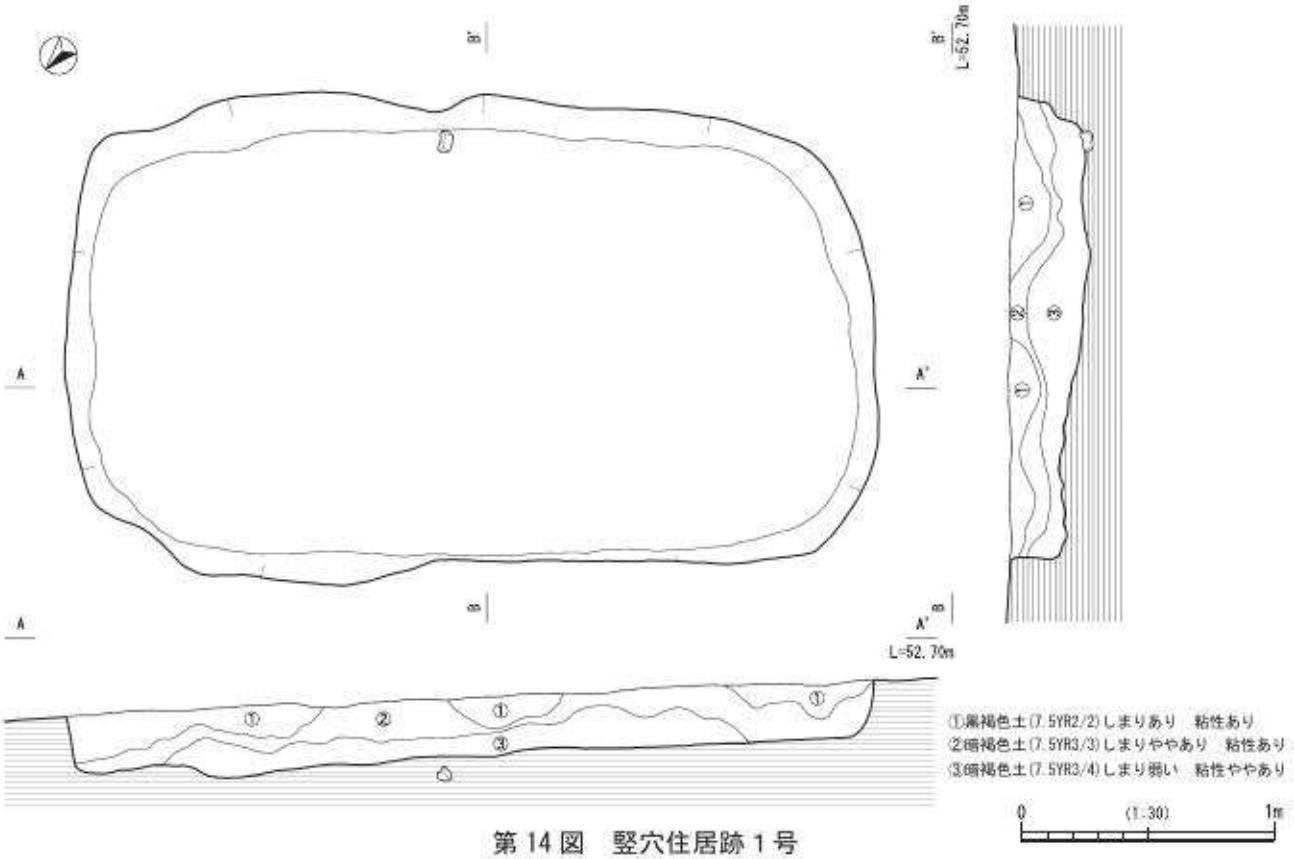
集石遺構６号（第20図）

検出状況　調査区南東部端のＫ－11区，南から北へ下る斜面のⅦａ層上面で検出した。南側に集石遺構10号がある。

規　　模　170㎝×134㎝の範囲に礫の集中部とそれに伴うと考えられる散在礫が出土した。総礫数は41個でほとんどが丸みのある自然礫である。半数以上が破砕しており，中央部の礫５点にはススの付着が見られた。使用時に被熱したものと考えられる。礫の大きさは約６～８㎝程度のものがほとんどで，重量は200ｇ以下のものが９割以上を占める。石材は凝灰岩が約５割を占め，変成岩と砂岩が約２割前後のほか，少数の泥岩，頁岩，粘板岩

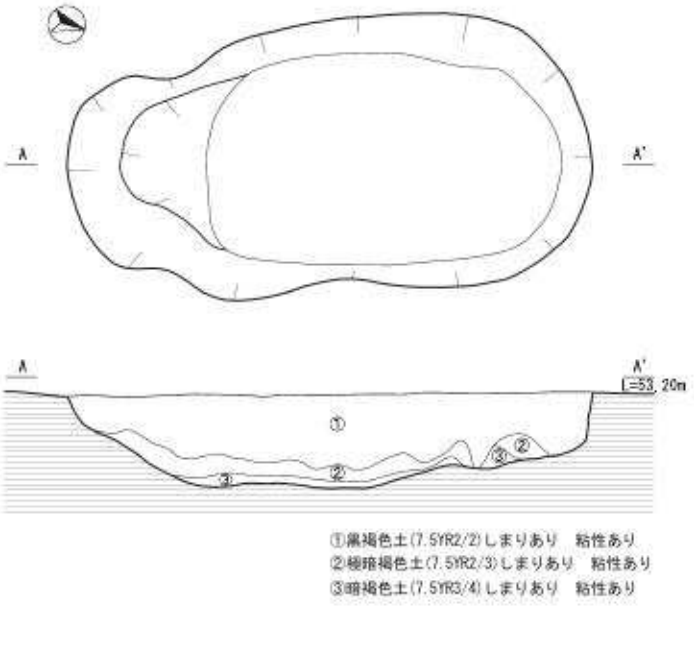


第 13 図　縄文時代遺構配置図（地形図Ⅷ層上面）

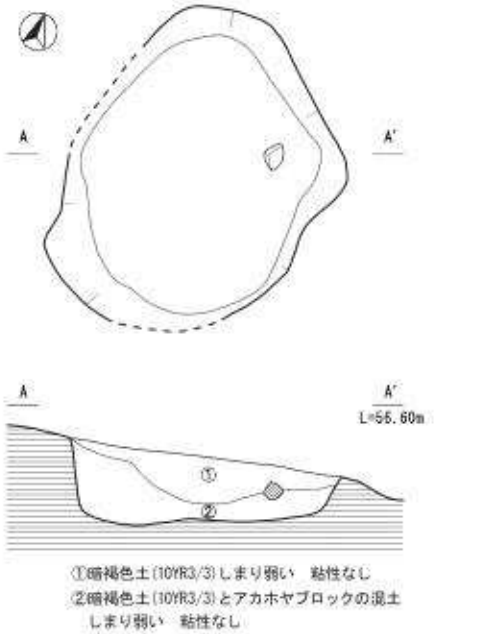


第 14 図　竪穴住居跡１号

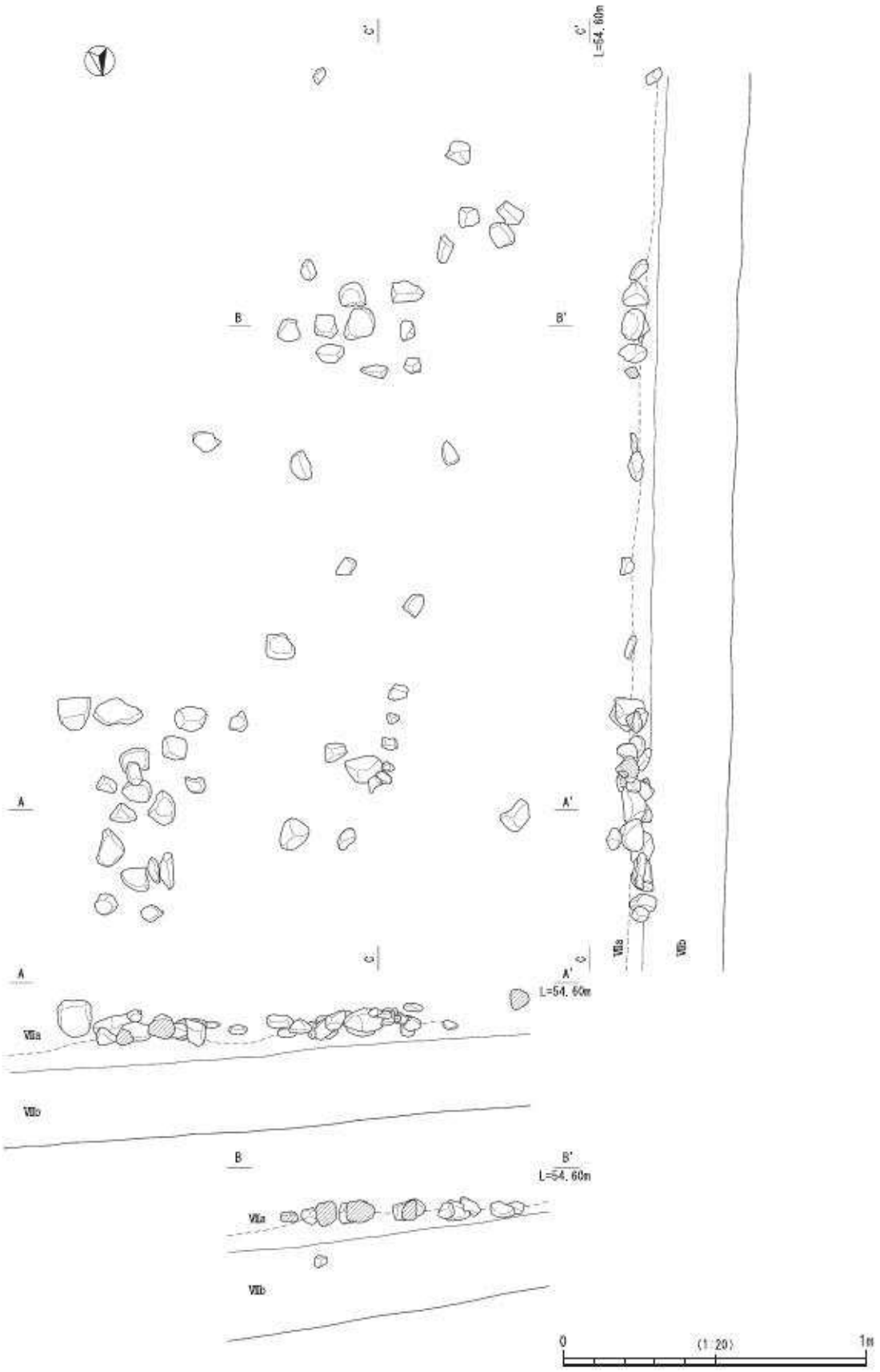
土坑１号



土坑２号



第 15 図　土坑１・２号



第16図　集石遺構1号

で構成されている。

集石遺構６号出土遺物（第21図　16）

16は，磨・敲石である。表・裏面に敲打痕と擦痕，側面に敲打痕が見られる。集石遺構の構成礫として転用されたものと考えられる。

集石遺構７号（第22図）

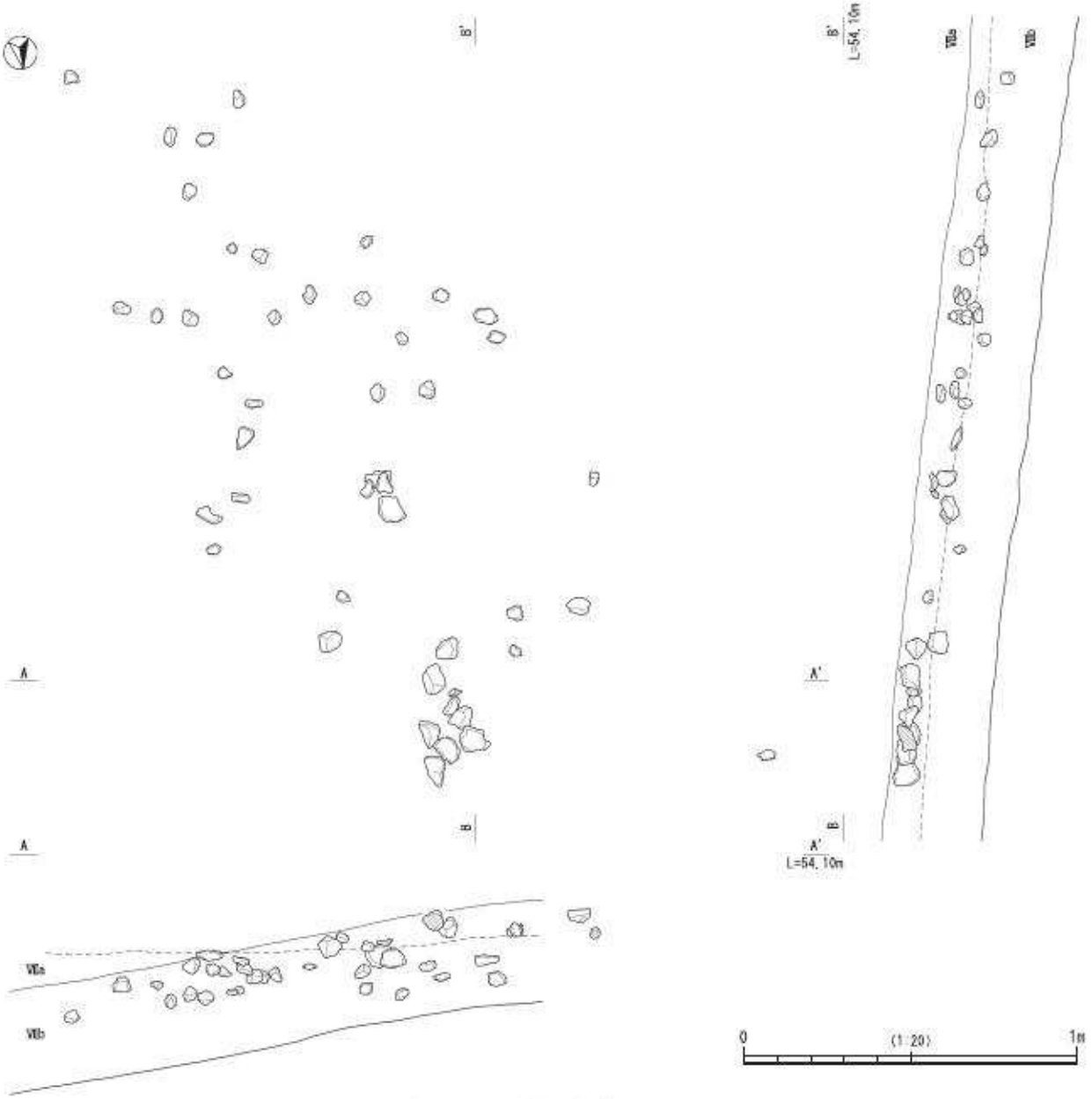
検出状況　調査区中央南側のＨ－６区，東から西へ下る緩やかな斜面が平坦になるⅦｂ層上面で検出した。西側には土坑１号がある。

規　　模　112cm×67cmの範囲に礫がまとまりをもって出土した。礫総数は11個で，形状はほとんどが丸みのある自然礫である。まとまりをもつ中央部の礫にはススの付着があり，中央部と東側に明瞭に被熱した礫が１点ずつ出土している。礫の大きさは大きいもので約11cm前後，小さいものは約４cm前後である。重量は100ｇ以下が４割弱を占めるが，それ以外は200g以上800g未満と幅がある。石材は凝灰岩が７割強を占め，泥岩，頁岩，粘板岩が２割弱，砂岩が１割弱となっている。

集石遺構８号（第22図）

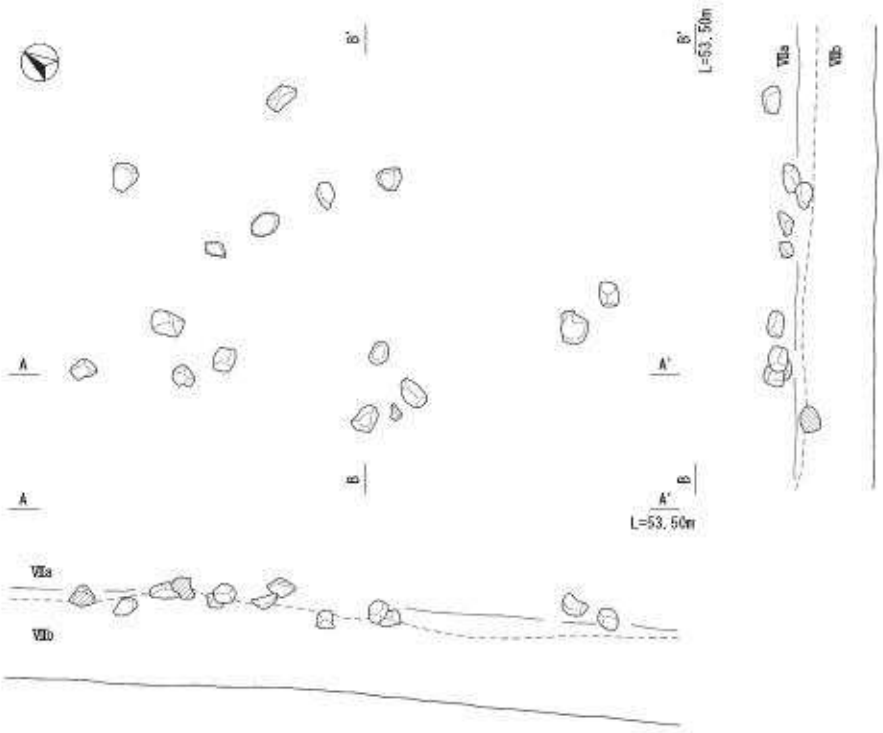
検出状況　調査区東端の１－７区，西から東へ下る緩やかな斜面のⅦ層上面で検出した。

規　　模　87cm×82cmの範囲に礫がまとまって出土した。総礫数は15個で，ほとんどが丸みを帯びた自然礫である。中央部の礫にはススの付着が見られた。使用時の被熱によるものと考えられる。礫の大きさは約10cm以下のものがほとんどであるが，重量は石材によって100g未満から400ｇ台と幅がある。石材は凝灰岩が９割弱を占める。下位には平面径45×36cm，検出面からの深さ４cmの楕円

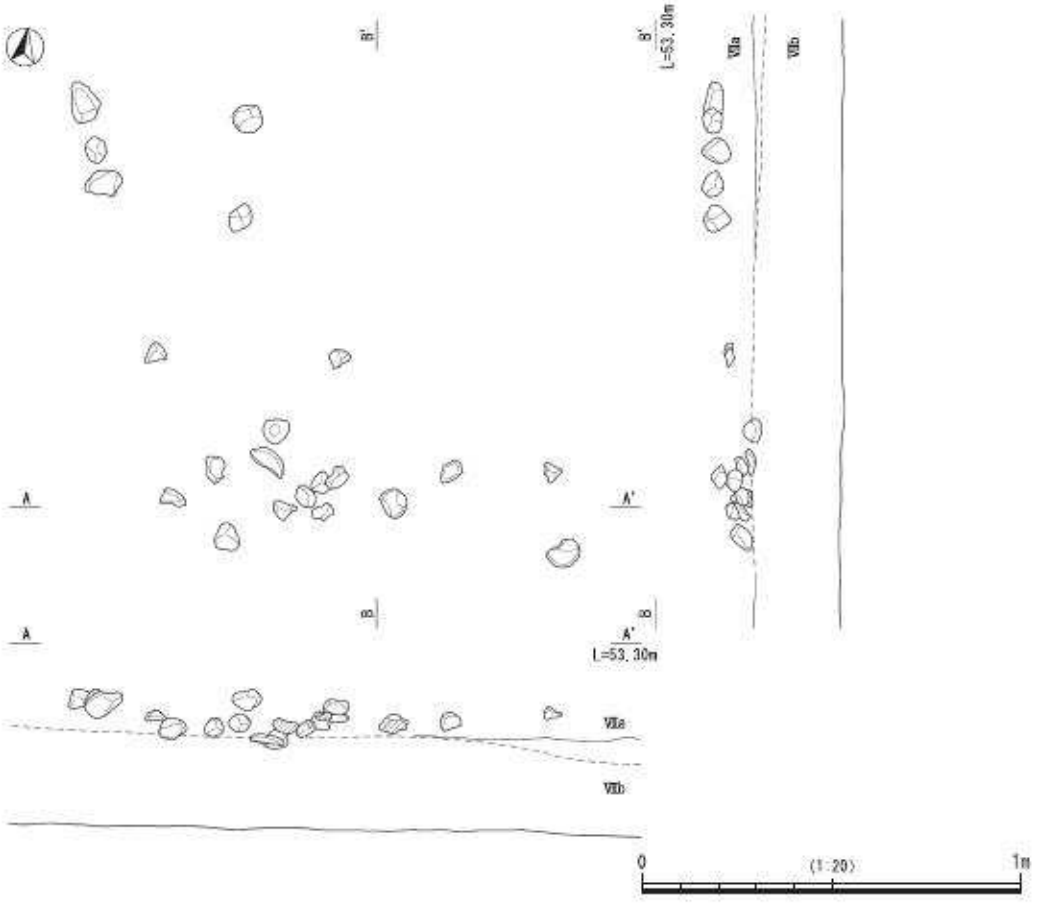


第17図　集石遺構２号

集石遺構３号



集石遺構４号



第 18 図　集石遺構３・４号

形を呈する浅い掘り込みを検出した。

集石遺構９号（第23図）

検出状況　Ｉ－８区，西から調査区中央南側の東へ下る斜面間にある平坦部のⅦａ層上面で検出した。西側に竪穴住居跡１号がある。

規　　模　137cm×98cmの範囲に礫が折り重なるように密集して出土した。総礫数は120個である。明瞭に被熱したと考えられる礫が掘り込みの北側に３点，南側に１点確認された。礫の大きさは，４～14cm程度のもので，重量は200g未満が７割弱を占める。石材は凝灰岩が６割強，砂岩が２割弱，頁岩系と変成岩がそれぞれ１割弱となっている。下位には平面径115×112cm，検出面からの深さ10cmの円形を呈する掘り込みを検出した。

集石遺構９号出土遺物（第24図　17）

17は，早期土器の胴部から底部片である。内外面ともナデ調整を行い，底部との境には縦位のキザミが施される。

集石遺構10号（第25図）

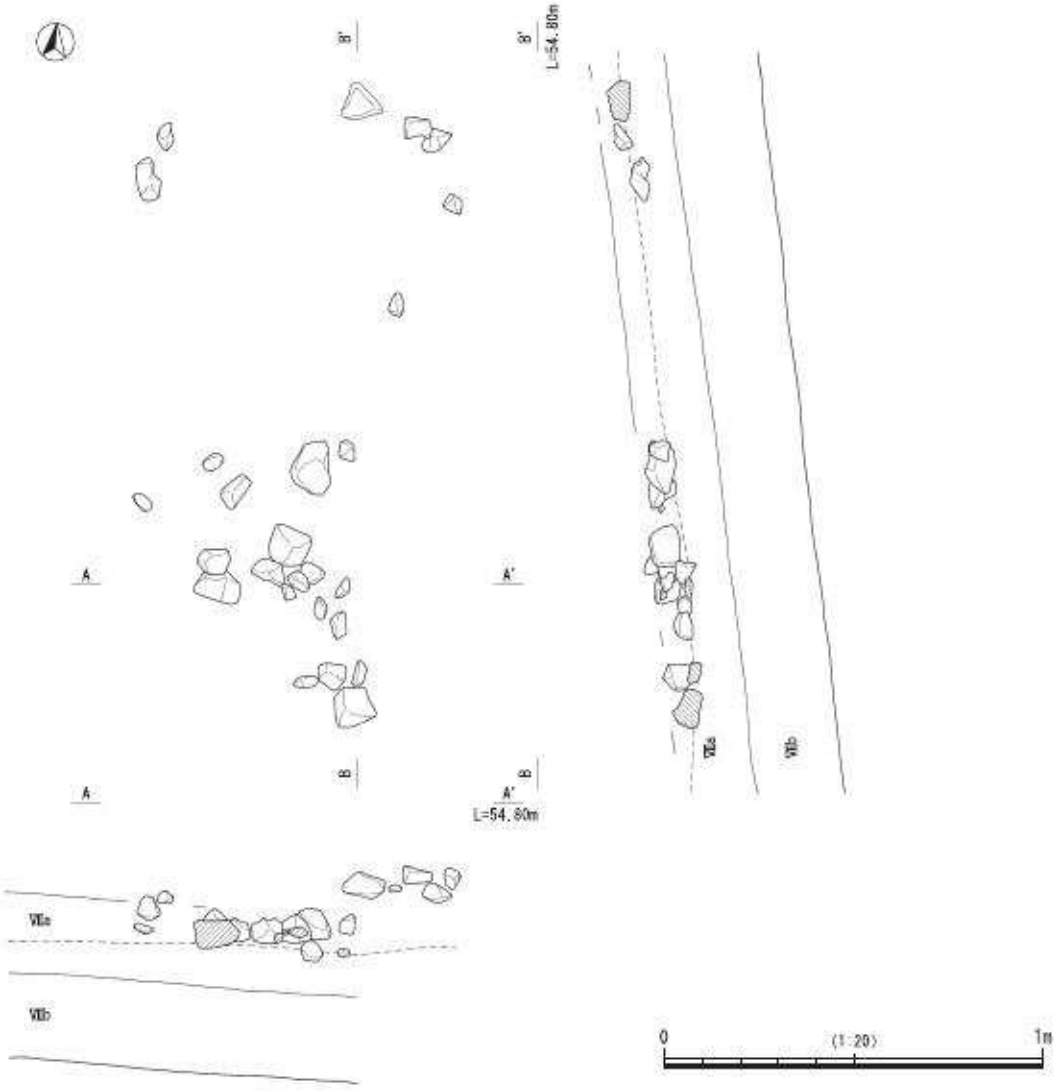
検出状況　調査区南東端のＫ－11区，南から北へ下る斜面のⅦａ層上面で検出した。

規　　模　155cm×97cmの範囲に礫が折り重なるように密集して出土した。総礫数は170個で，ほとんどが丸みを帯びた自然礫である。破砕しているものは少ないが，南北端でススが付着した礫が出土した。礫の大きさは，大きいものが10～14cm，小さいもので約４～６cm程度である。重量は50ｇから1,000ｇを超えるものまであるが，200ｇ以下のものが８割を占める。石材は凝灰岩が６割強，変成岩と砂岩がほぼ同じ割合である。少数の泥岩，頁岩，粘板岩で構成されている。下位には平面径96×93cm，検出面からの深さ10cmの円形を呈する掘り込みを検出した。

３　遺物

(1) 土器

縄文時代早期の土器は主にⅥ層及びⅦ層から出土している。出土した14点のうち10点を図示した。器形・文



第 19 図　集石遺構５号

様・器面調整などそれぞれの土器の特徴からⅠからⅦ類に分類した。以下各類の特徴を略述する。

Ⅰ類土器（第26図　18）

18は，口縁部の一辺が約20cm，器高約33cmに復元した角筒土器である。器壁は４～５㎜程度で，口唇部には刻目が施される。外面に横位の貝殻条痕文を施した後，口縁部上位には貝殻肋部による縦位の刺突文を２段，横位の貝殻刺突文を２段施し区画を行なっている。胴部は地文の上から貝殻腹縁によって垂下する刺突文を施した後，棒状工具によって２本１単位とした斜位の「X」字状の沈線が描かれる。この沈線と刺突文が交わることはなく，刺突文は沈線を割り付ける際の基準になっていると考えられる。

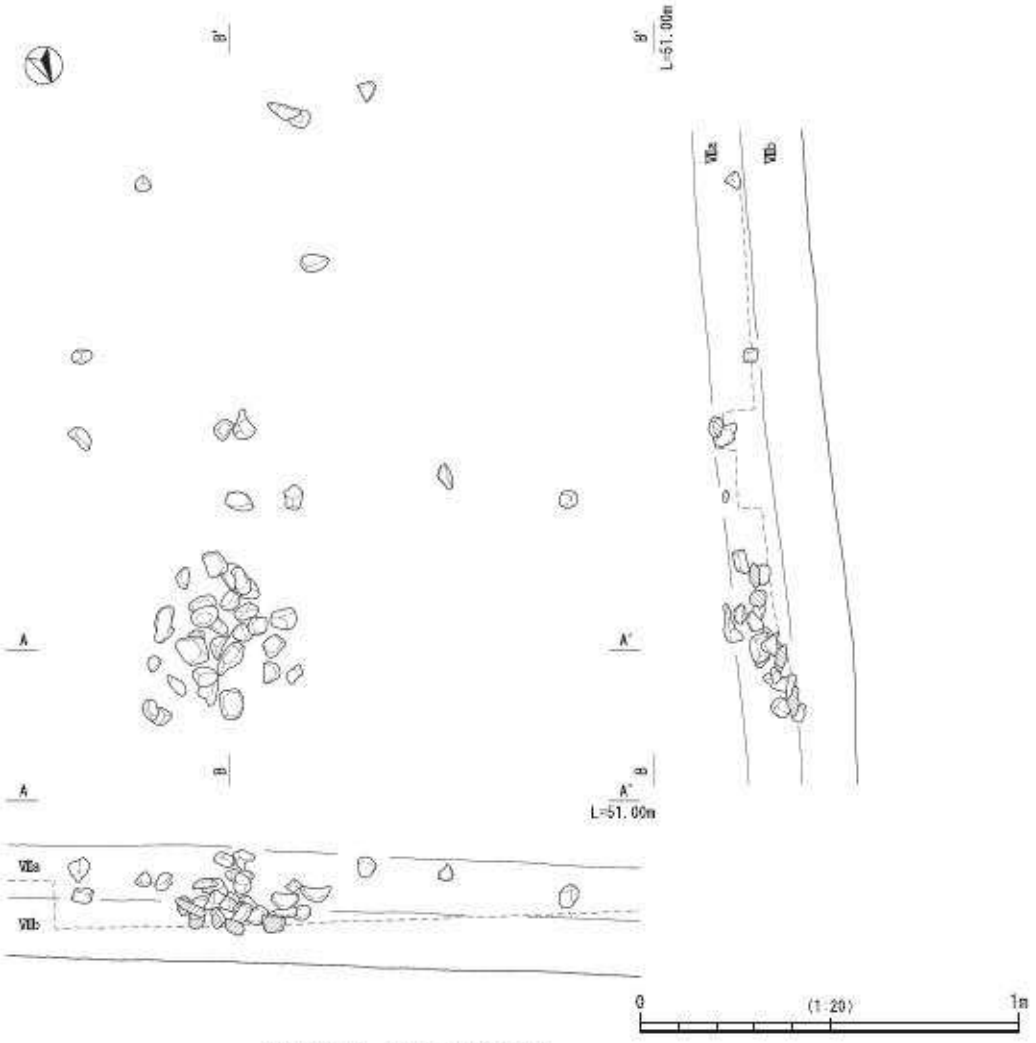
Ⅱ類土器（第26図　19）

19は，胴部片で外面に綾杉状の貝殻条痕文と内面には丁寧なナデが施されている。

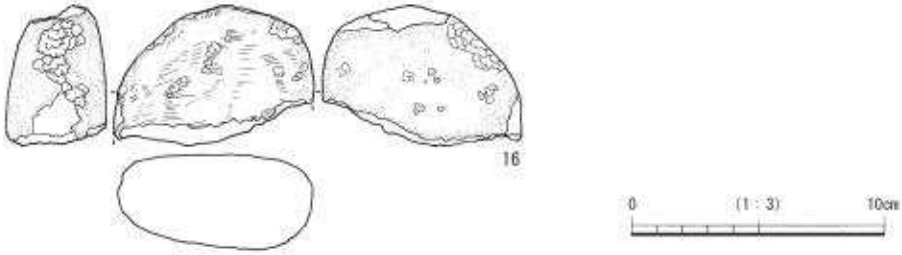
Ⅲ類土器（第26図　20～22）

20は口縁部，21・22は胴部片である。20は口縁部が直線的に開くもので，貝殻刺突文が縦位に施される。21・22はいずれも横位の貝殻刺突文を羽状に施す。内面は丁寧なナデが施される。

Ⅳ類土器（第26図　23・24）



第 20 図　集石遺構６号



第 21 図　集石遺構６号出土遺物

23は胴部片で，貝殻条痕文を施す。24は口縁部で，口唇部端は丸みを帯びる。貝殻条痕文を施す。内面はいずれもナデが施される。

Ｖ類土器（第26図　25～27）

いずれも底部である。25・26は，外面に明瞭な縦位のキザミがあり，内面はナデが施される。器壁はともに１cm程度で，胎土，色調ともに同様な特徴をもつ。27は，内面にナデが施されるが指頭圧痕が残る。器壁は５㎜と薄く，色調，胎土ともに異なる。

(2) 石器

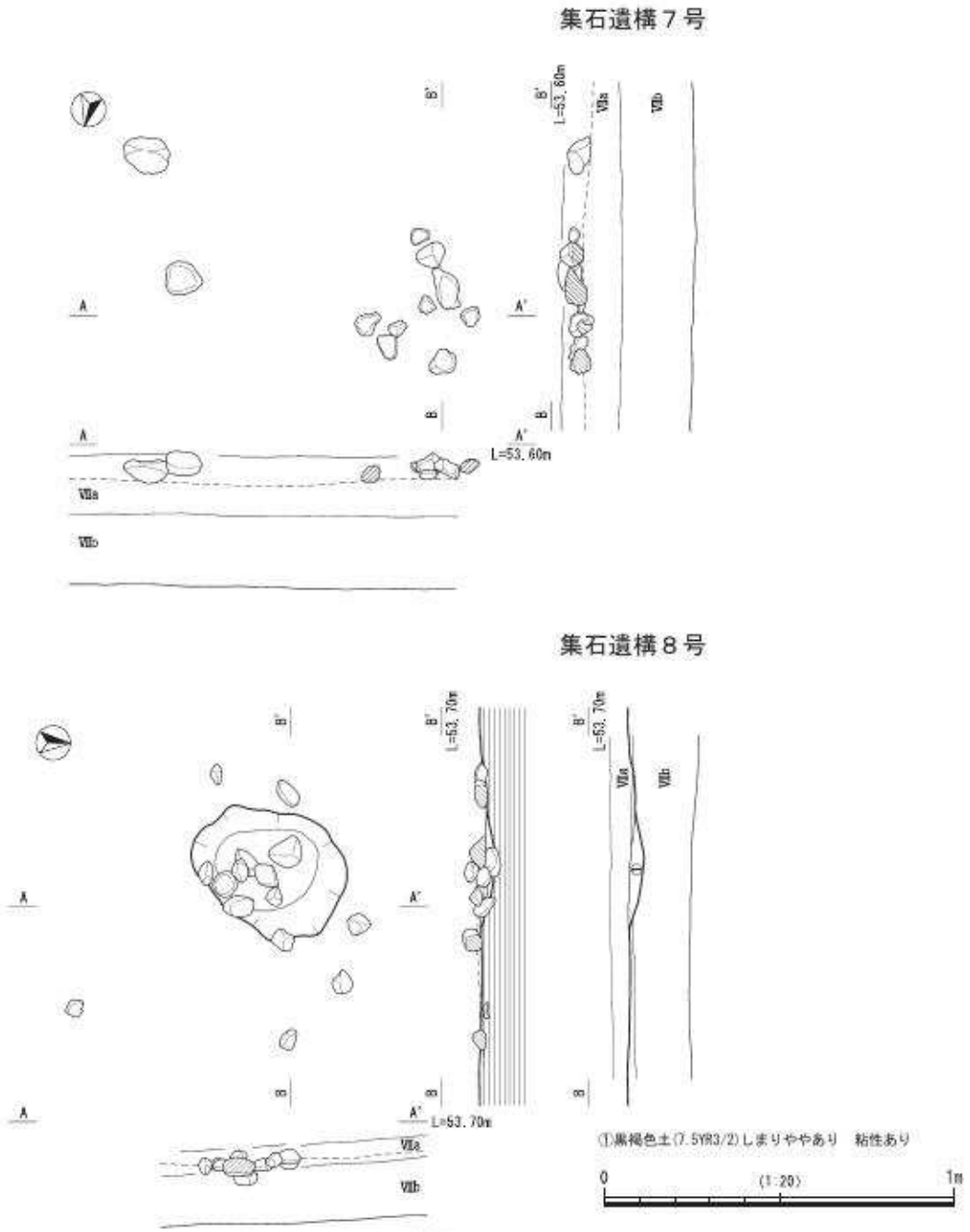
アカホヤ火山灰層下位のⅥ層及びⅦ層から出土している。出土石器は，遺構内遺物も合わせて，打製石斧１点，磨・敲石類６点，石皿１点の計８点である。

打製石斧（第27図　28）

28は，ホルンフェルス製の横長剥片を素材とする打製石斧である。両側辺からの粗い剥離で細身の短冊形に整形され，両側辺は細かい剥離で仕上げられている。背面刃部寄りの稜部には摩耗の痕跡がみられる。刃部先端の剥離は使用によって生じた可能性がある。

磨・敲石類（第27図　29～33）

29は，多孔質の安山岩製の磨石で，断面楕円形の扁平な円礫を素材とする。表裏に磨面をもつが，裏面により顕著である。30は，輝石を多く含む多孔質の安山岩の扁平円礫を素材とする磨・敲石である。背面にわずかに磨



第 22 図　集石遺構７・８号

面の痕跡が残り，敲打による浅い凹みが生じている。側縁部分は残存する３分の１の側縁部分に敲打痕が認められ，側縁が破砕する３分の２ほどの破砕面稜上にも敲打によるつぶれが生じている。31は，安山岩の扁平亜円礫で裏面側わずかに磨面の痕跡を認める。裏面及び側縁端部に弱い敲打痕が残る。32は，多孔質の安山岩の円礫で３分の２程度を破砕により欠損する。側縁部に敲打痕が認められるほか表裏面に部分的に敲打痕が残る。33は，卵形を呈する多孔質の安山岩亜円礫で，上下両端部に弱い敲打の痕跡がみられる。

石皿（第27図　34）

金雲母を含む花崗岩の盤状を呈する扁平礫で，表面全体に磨面を認めるが，図右上側を中心とする摩滅面が生じている。大型の石皿の破片とみられる。

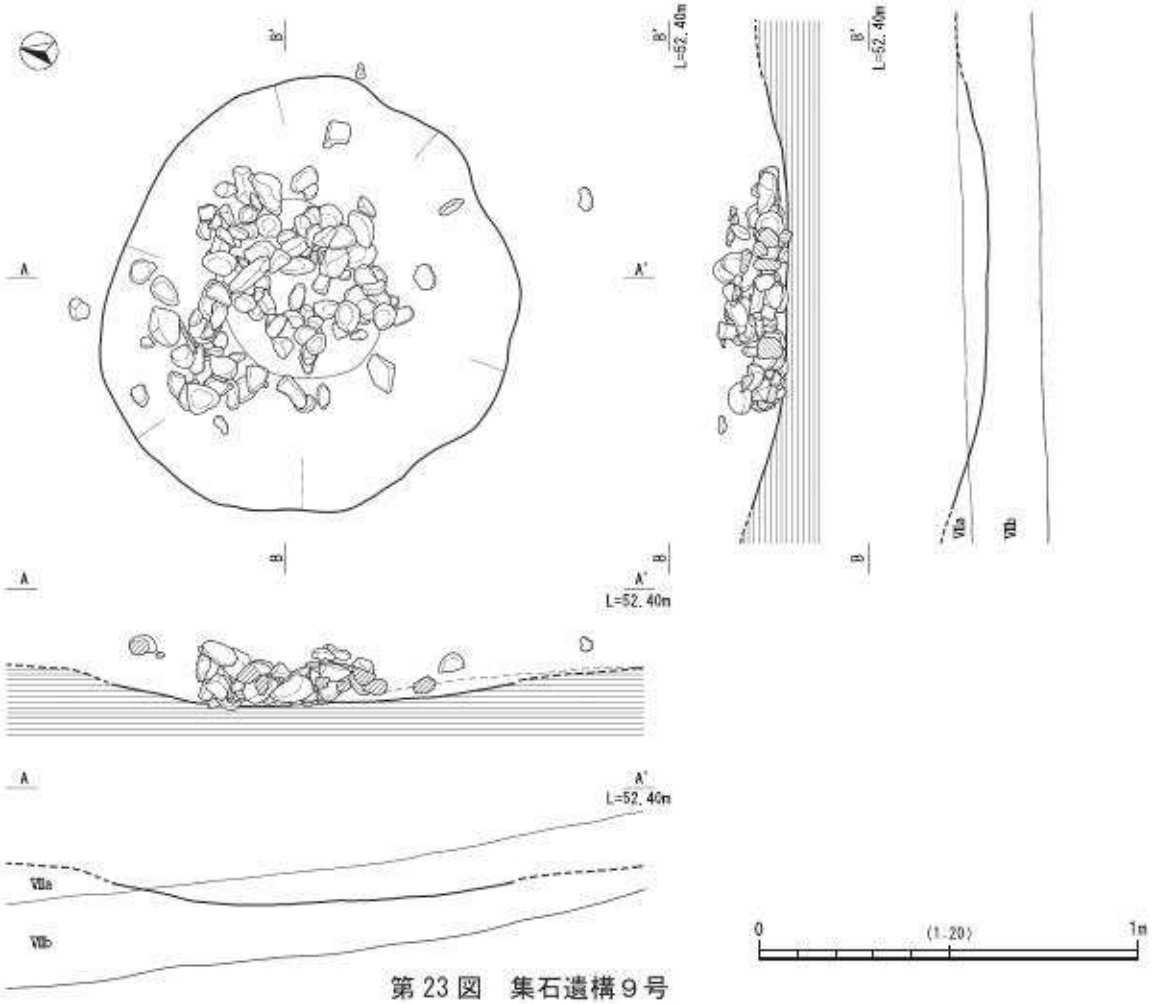
縄文時代前期・後期・晩期

石器集積遺構１号（第28図）

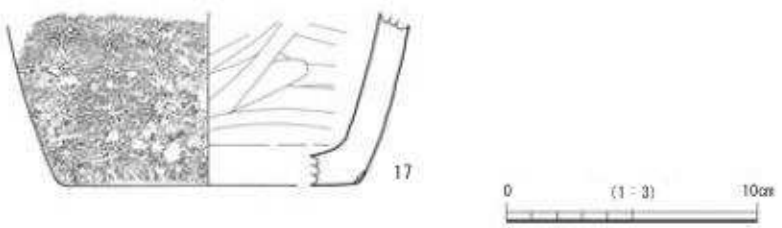
検出状況　調査区中央よりやや西寄りのＦ・Ｇ－７区，西から東へ下る斜面のⅣ層で検出した。

規　　模　南北約70㎝×東西約35㎝の範囲にわたって，スクレイパー４点，打製石斧１点，土器片１点，被熱した砂岩礫１点の計７点が出土した。接合作業の結果，スクレイパーの接合資料が得られたことから，ここでは砂岩礫を除く５点を図示した。

石器集積遺構１号出土遺物（第29図　35～39）



第 23 図　集石遺構９号



第 24 図　集石遺構９号出土遺物

35はホルンフェルスの横長のやや厚みのある大型剥片を素材とするスクレイパーである。上・下側辺部分からの剥離で整形され，打製石斧に類似するが，下辺がやや内弯し，鋭い縁辺を残すのに対し，背部にあたる上辺は刃潰し状に調整が加えられ，手で握りやすい状態となっている。横歯形の刃器として使われた可能性があり，刃部には使用によるとみられる摩耗が観察される。36もホルンフェルス製の横長剥片を素材とするスクレイパーである。上辺背部は剥離調整後，敲打が加えられ，明瞭な刃潰し加工が確認できる。下辺は35と同様，わずかに内弯気味で，表裏から剥離調整された刃部をもつ横歯形の刃器である。左側刃部に接する部分に酸化鉄あるいはマンガンの影響による付着物がみられる。

37は大型薄手のホルンフェルス製剥片を用いた三角形状のスクレイパーである。上辺は折れ面となっており，右下辺を中心に調整剥離が施され，内弯する刃部が作り出されている。

38はホルンフェルスの横長剥片を素材とする打製石斧である。両側辺から緩やか内弯する抉りが作り出され，基部はやや丸みを帯びる。裏面の下半には使用に伴うとみられる摩耗が生じ，刃部付近の剥離がこの摩耗を切ることから，使用に伴い生じた剥離であることがわかる。

39は石器より約４cm下位から出土した土器である。胴部片で棒状工具による横位の凹線が施される。

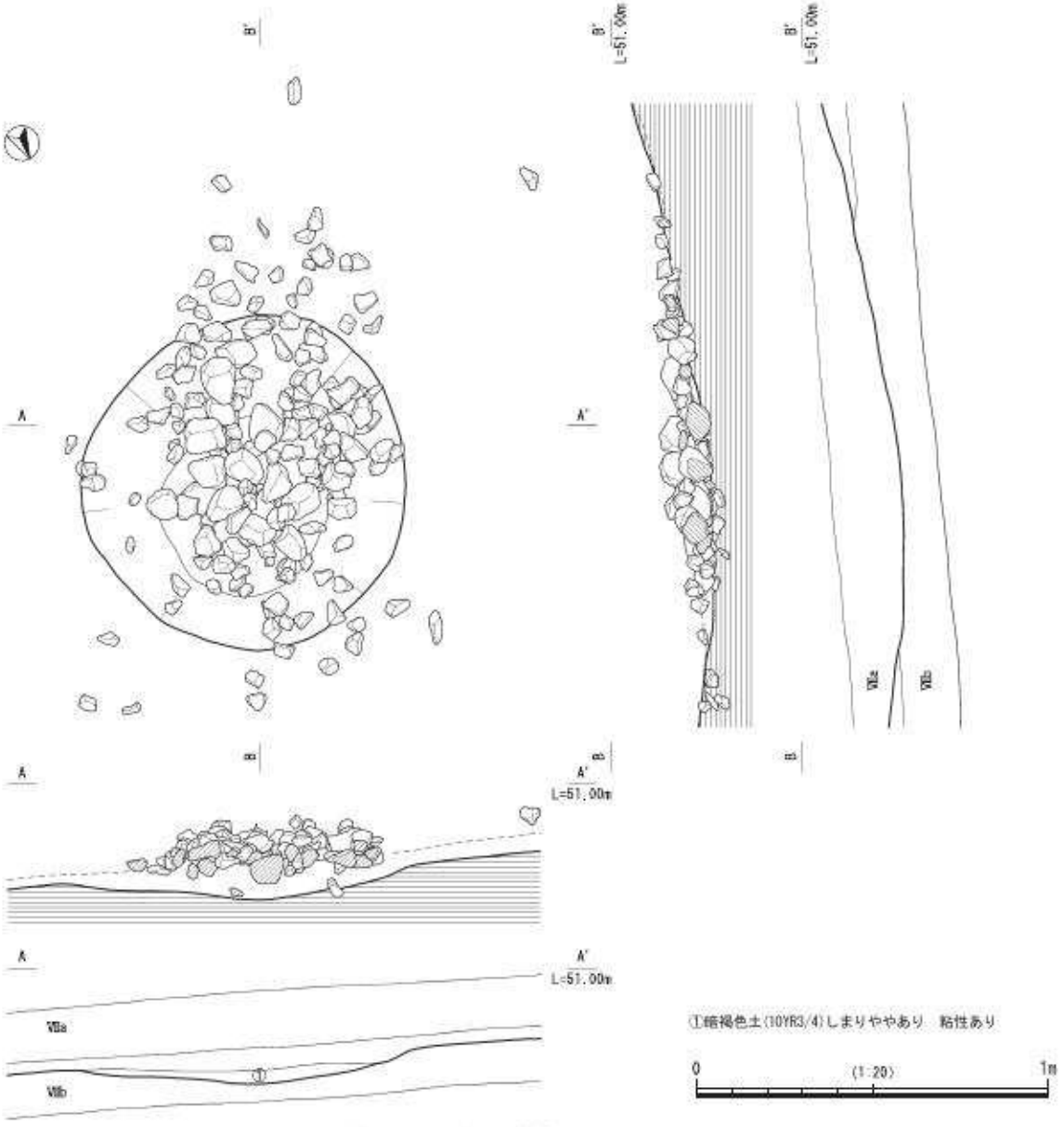
(1) 土器

Ⅵ類土器（第31図　40）

40は外面に折帯状の凹線文が施され内面に沈線が施される。内外面ともナデによる調整が行なわれる。

Ⅷ類土器（第31図　41～44）

ナデやミガキによって調整されており，胴部が「く」



第 25 図　集石遺構 10 号

の字状に張り出すものである。41は外面に工具を用いたナデが施されている。１条の刻目突帯があり，赤色の顔料を用いている。42は外面に約２㎜幅のミガキを丁寧に施している。内面は，指によるナデを施している。43は内外面には横・斜め方向にミガキが施される。44の外面には縦方向に工具を用いたナデが施され，内面は，屈曲部上部は，斜位・横方向にミガキが施され，屈曲部下部には，縦方向に工具を用いたナデが施されている。

Ⅷ類土器（第31図　45）

45は底部の破片で，外面に組織痕が残り，内面にススの付着が見られる。一部摩滅しているが網目の間隔は約５㎜である。

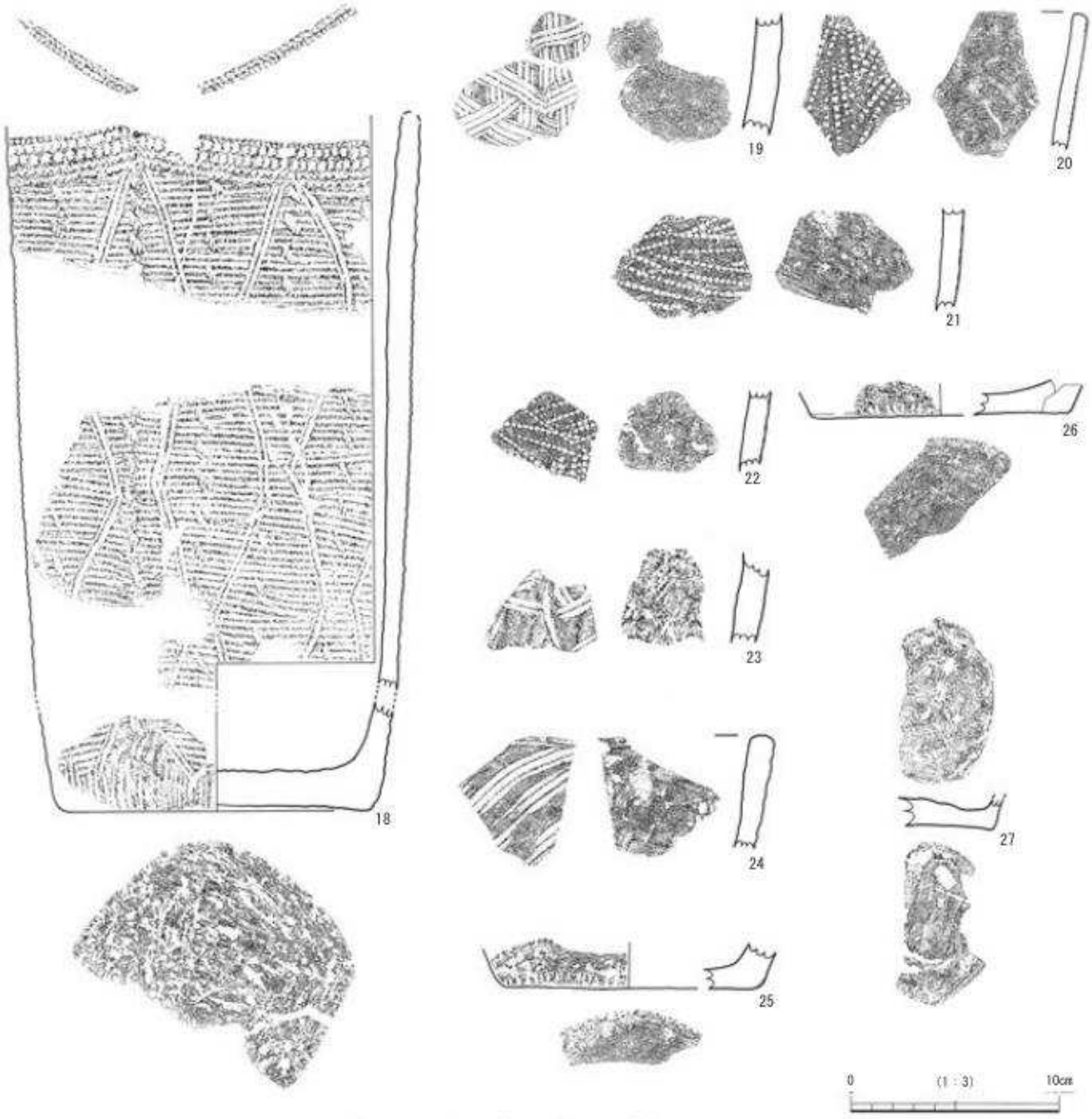
(2) 石器

アカホヤ火山灰層上位のⅣ層を主体として出土した石器で，縄文時代後期・晩期以降の石器として報告する。

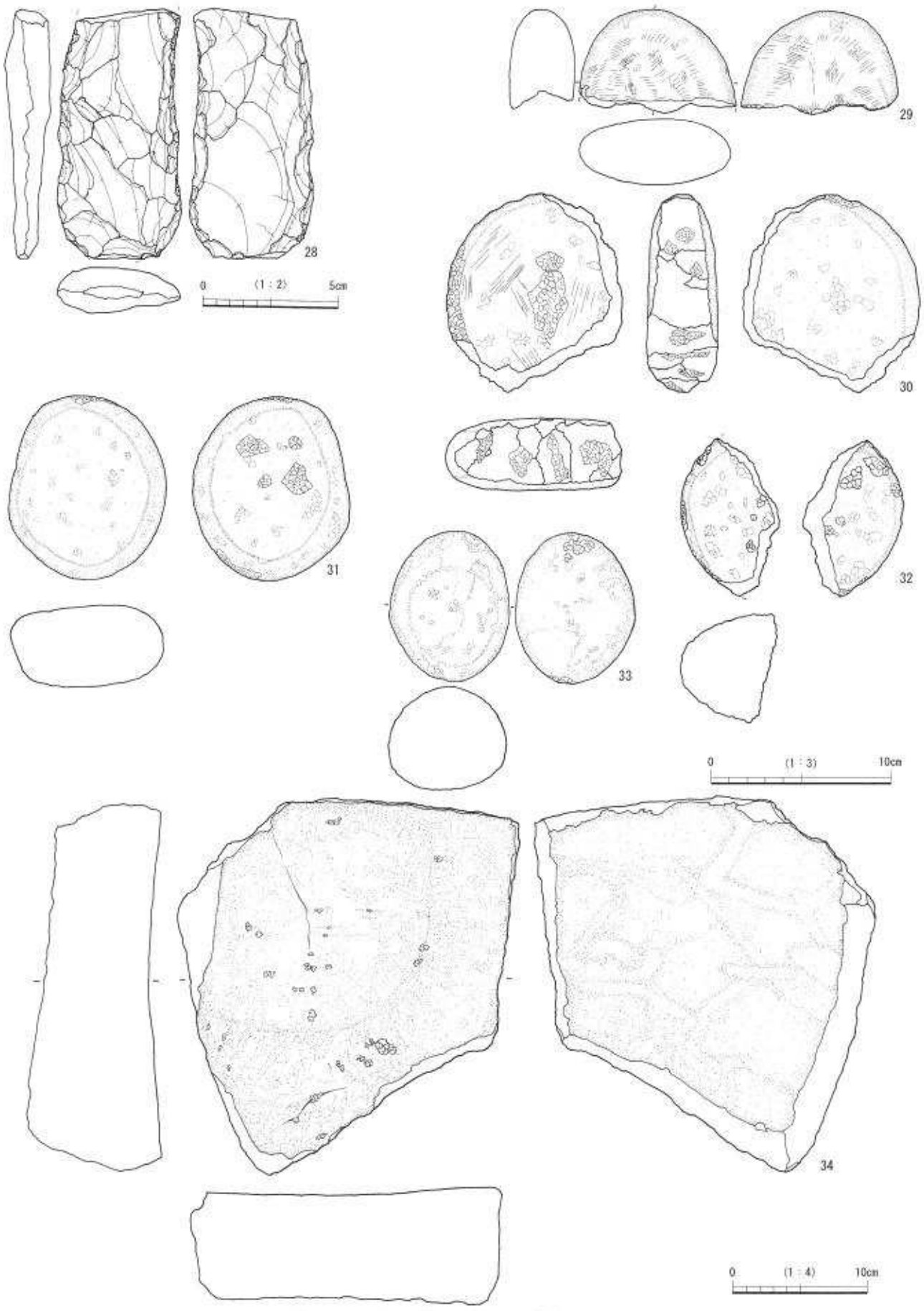
磨製石斧２点と破片を含む打製石斧９点である。

磨製石斧　（第32図　46・47）

46はホルンフェルス製の磨製石斧で剥離整形の後，敲打調整が加えられ，研磨で仕上げられている。刃部を欠損するが，乳房状の基部をもつ石斧である。47もホルンフェルス製の磨製石斧の基部である。側縁方向からの剥離で整形された後，比較的丁寧に研磨が加えられ，敲打調整の痕跡は残らない。断面形状が扁平となる比較的小型の磨製石斧である。



第 26 図　縄文時代早期出土遺物（土器）



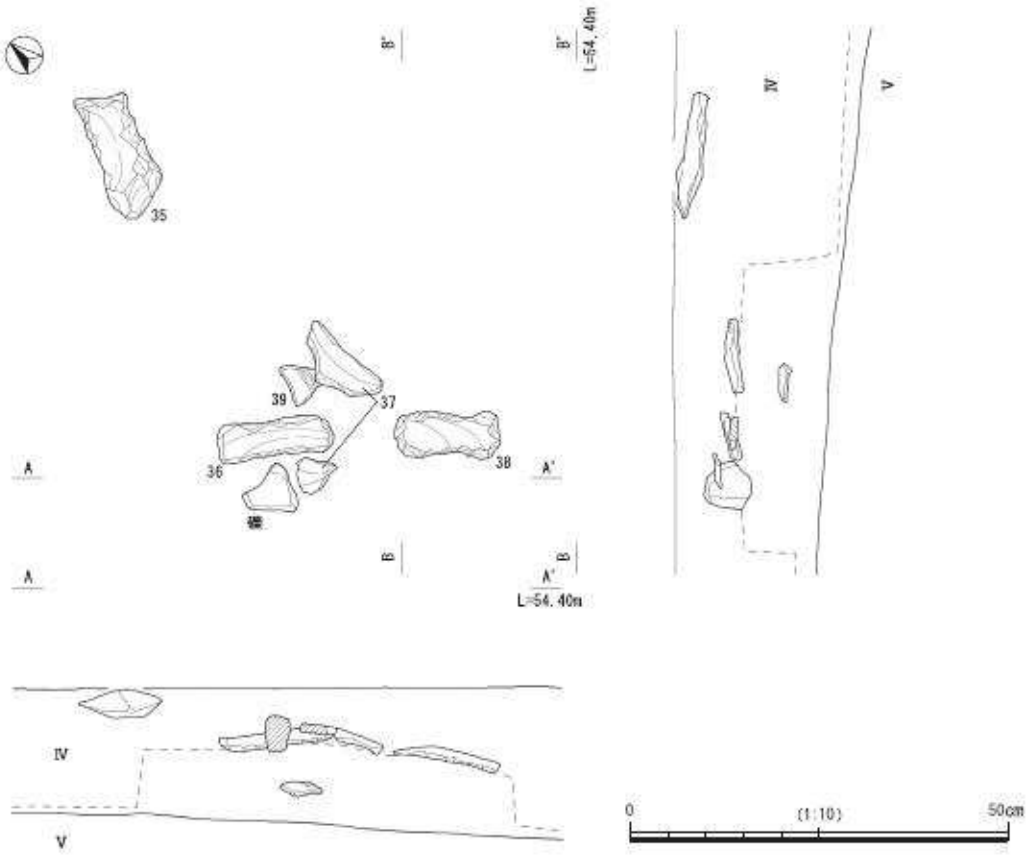
第 27 図　縄文時代早期出土遺物（石器）

打製石斧　（第32図　48　第33図　49～56）

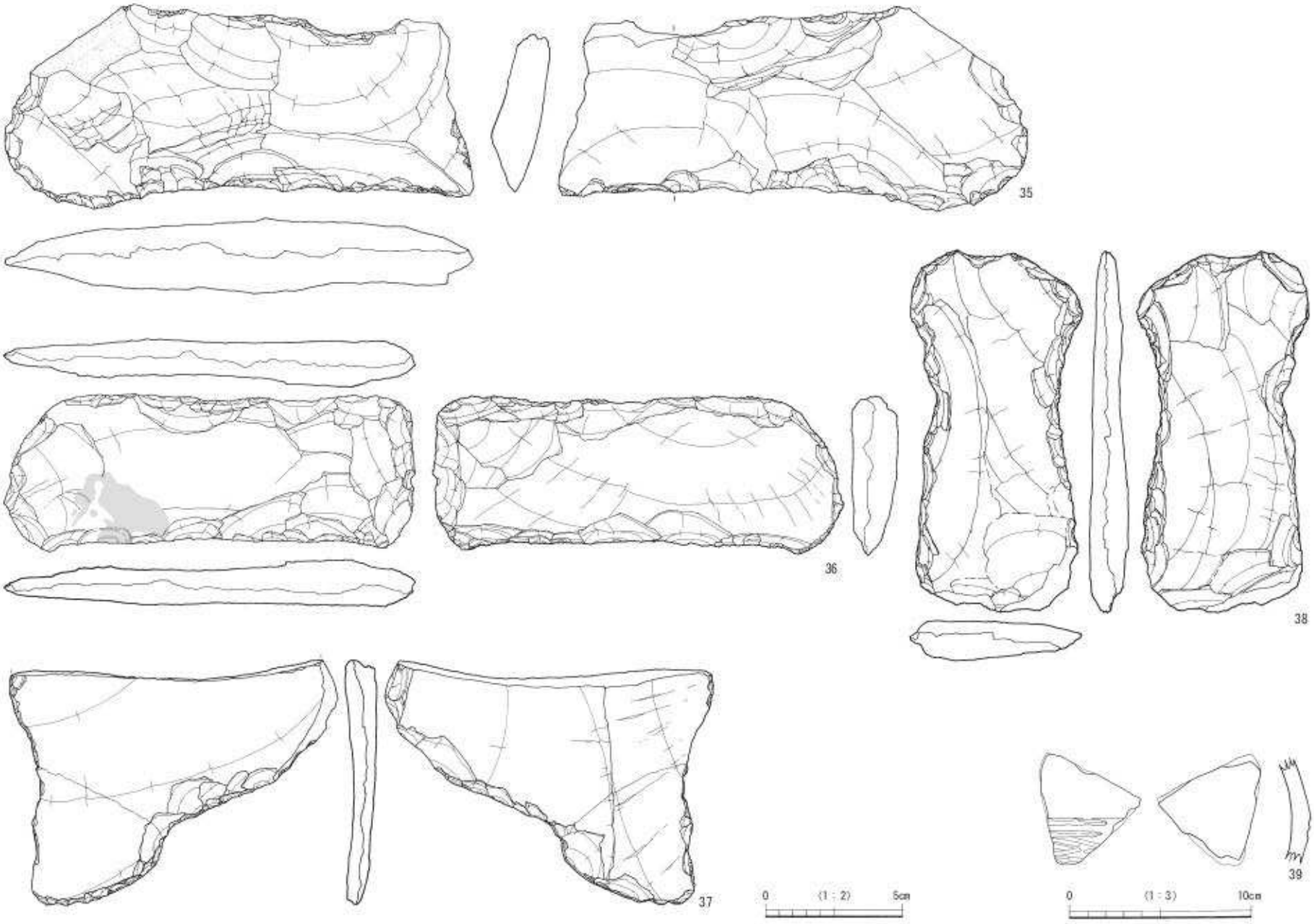
当該時期の打製石斧は破片資料も合わせ，総計で10点が出土しているが，ここでは，石器集積遺構内からの出土資料を除く９点を図示している。出土資料はいずれも高隈山山系で産出するホルンフェルスの剥片を素材とするもので，周縁から粗い剥離調整で整形された後，細かい剥離調整で仕上げられる。刃部付近には使用に伴い二次的に生じたとみられる剥離がみられる。図示した資料はいずれも欠損部があり，全形を確認できないため，形態分類は行わなかったが，残存部分から想定可能な範囲で記載した。

48は基部及び身部の一部が残存する資料である。やや幅広の刃部・身部と細身の基部をもつことからラケット形と称されるもので，基端部はやや丸みをもった丁寧な仕上げとなっている。49は身部以下を大きく欠損するが，大型のラケット形の基部に相当する資料とみられる。49もラケット形打製石斧の基部の可能性がある。

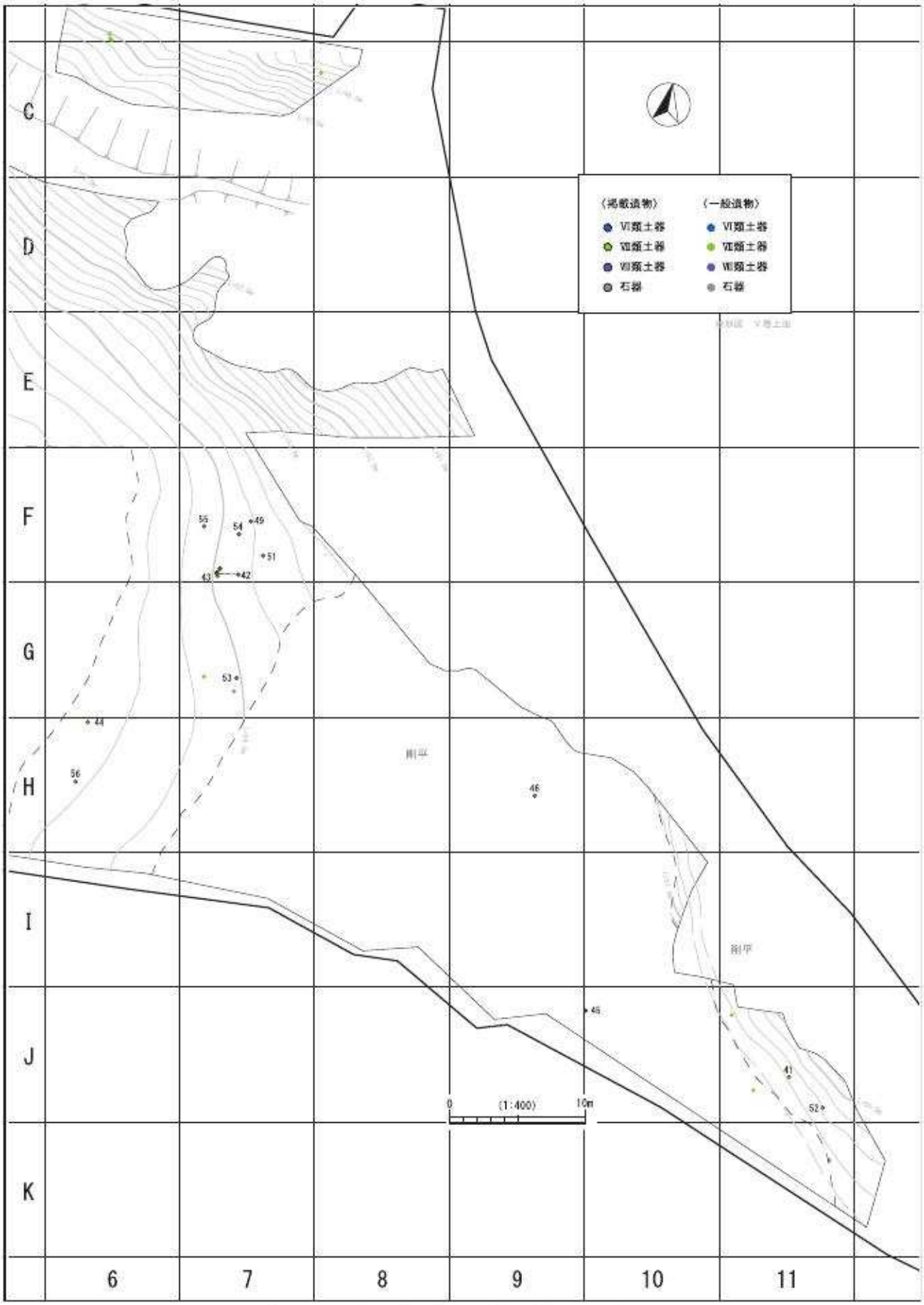
50は基部から身部・刃部に向かって幅が広がる撥形の打製石斧とみられるが，刃部を欠損する。51～54は打製石斧の刃部片である。51は身部上部にわずかに基部へ向かって括れる痕跡がみられることから，身部がやや細身のラケット形の打製石斧の刃部とみられる。図正面側に使用によるとみられる摩耗が認められる。また，表面右半に酸化鉄或いはマンガンの影響によるとみられる付着物がある。52は裏面側，53は正面側に使用によるとみられる摩耗が生じている。いずれもラケット形もしくは撥形で刃部が弧状を呈す打製石斧の刃部片とみられる。54は基部・身部及び刃部右側の一部を欠損する。刃部周辺がやや平滑化しているが，研磨によるものではなく，使用に伴う摩耗とみられる。55は上下を大きく欠損するため形態及び部位ともに不明である。



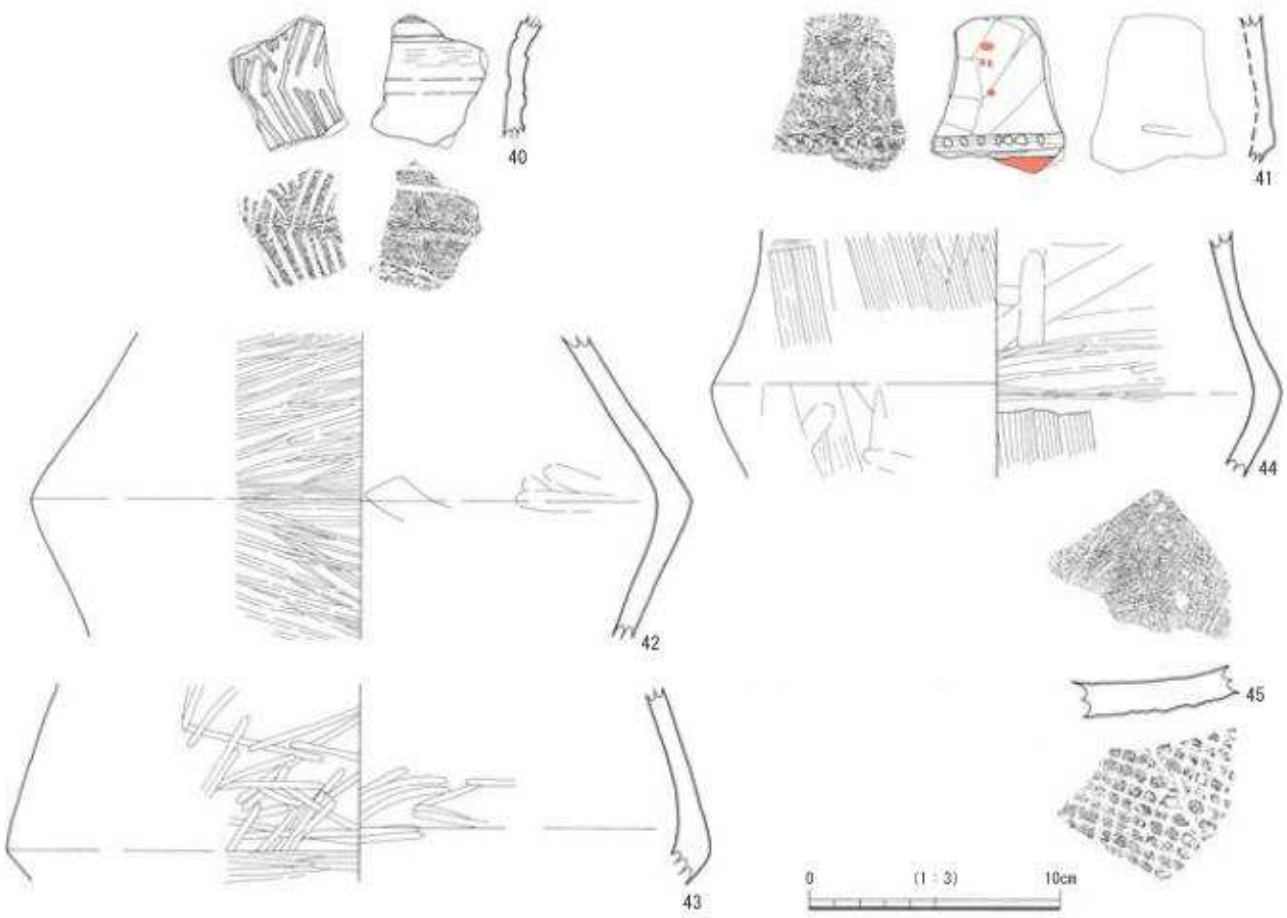
第 28 図　石器集積遺構１号



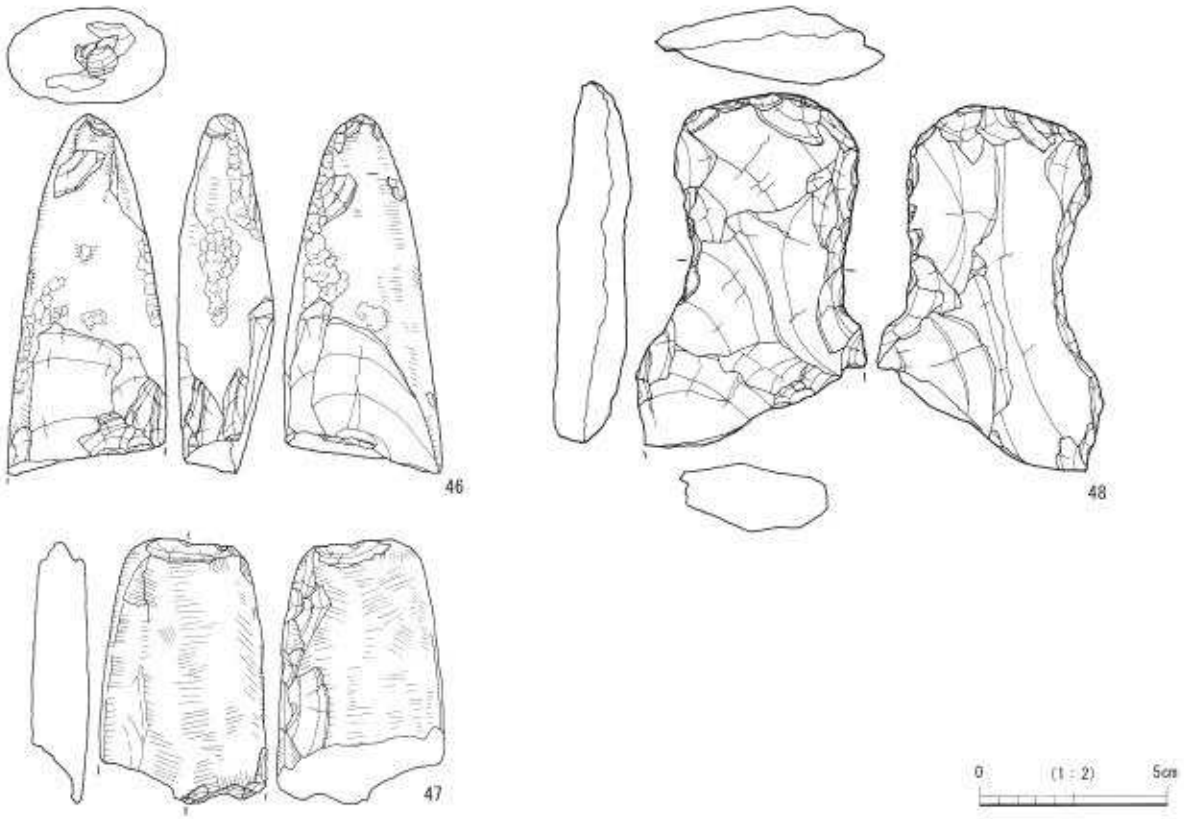
第 29 図　石器集積遺構 1 号出土遺物



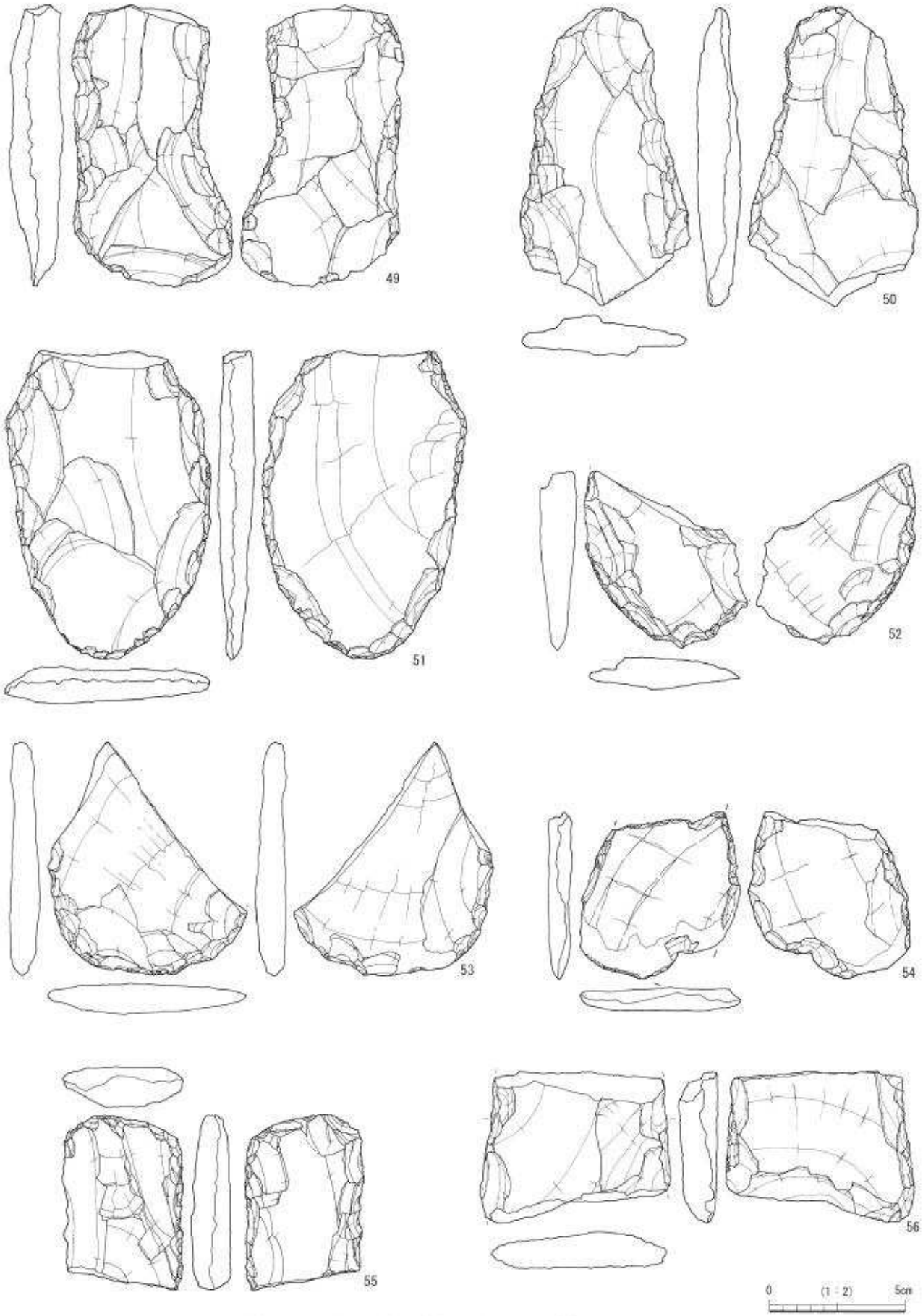
第 30 図　縄文時代後期・晩期遺物出土状況図



第 31 図　縄文時代前期・後期・晩期出土遺物（土器）



第 32 図　縄文時代後期・晩期出土遺物（石器 1）



第 33 図　縄文時代後期・晩期出土遺物（石器２）

第３節　弥生時代の調査

１　調査の概要

弥生時代の遺構は検出されなかったが，Ｆ－７区のⅣ層とＥ－５区の表土から土器片が２点出土し，すべてを図化した。

２　遺物（第35図　57･58）

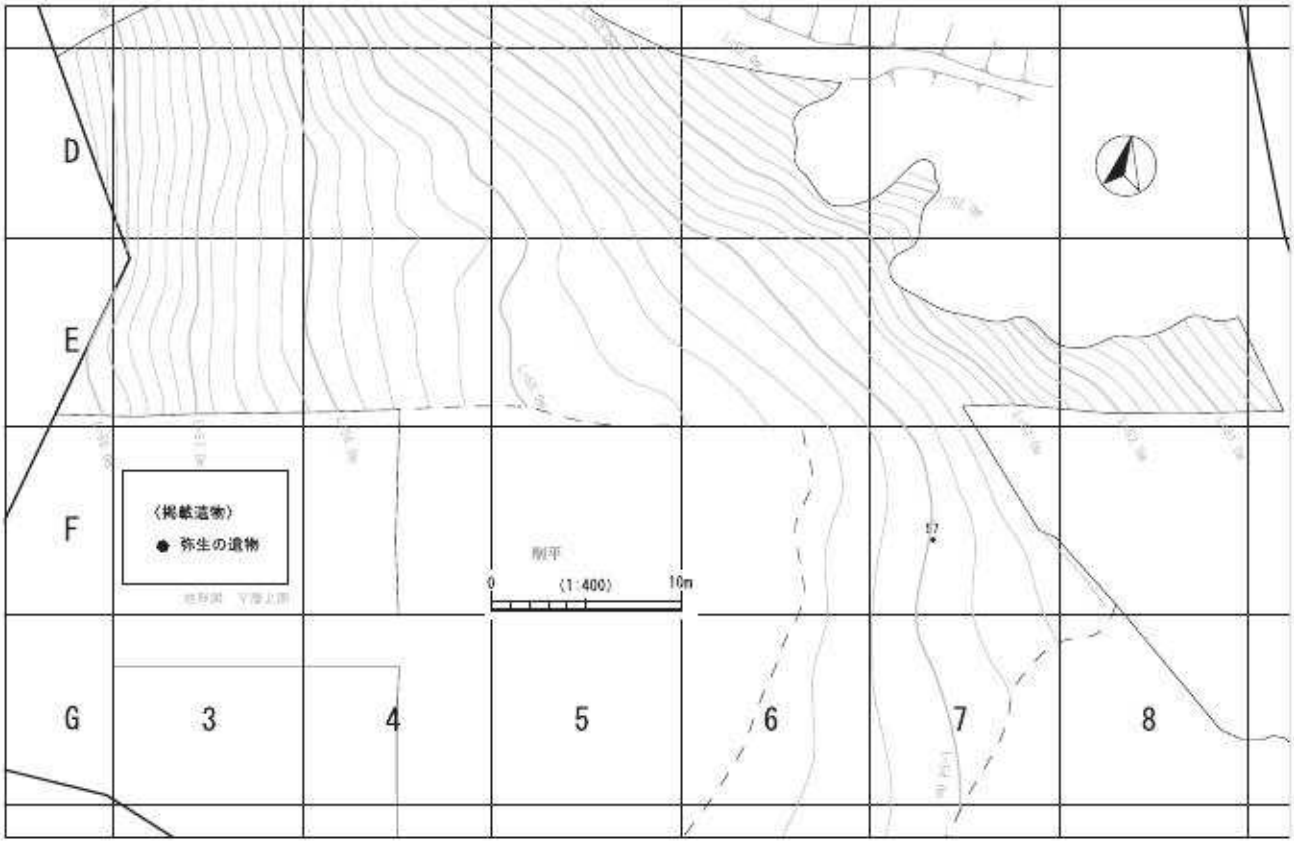
57・58は壺形土器の頸部と胴部の境目部分である。

57はⅣ層出土で低い三角突帯を１条巡らせた後，工具で刻みを入れる。また，外面は横方向に丁寧にミガキを施す。内面には工具によるナデの痕跡が確認できる。胎土には，１㎜以下の石英と長石を多く含み，黒色粒を少量含む。また，３㎜大の風化礫が１つ観察された。

58は頸部と胴部の境目に突帯を２条貼付した後，沈線も２条巡らせ，刻みを２段施す。外面は横方向に丁寧なミガキを施し，内面には一部斜め方向にミガキを施す。内面には，指で押さえた痕跡がある。

胎土は石英，長石，１㎜～２㎜の風化礫を多く含む。

57，58ともに，時期は弥生時代前期頃と考えられる。



第 34 図　弥生時代遺物出土状況図

第 35 図　弥生時代出土遺物（土器）

第４節　古墳時代の調査成果

１　調査の概要

古墳時代の遺構は，Ｖａ層で竪穴住居跡２軒，土坑３基，溝状遺構１条，道跡２条を検出した。遺物は，遺構内および包含層から成川式土器が出土した。

２　遺構

竪穴住居跡１号（第37・38図）

検出状況　調査区中央のＧ－７・８区，西から東へ下る斜面のＶａ層で検出した。南西側に土坑１号がある。

規　　模　平面形は354cm×352cmの隅丸方形状を呈し，深さは約22cmを測る。住居跡に伴うピットを５基検出した。深さは12cm～16cmである。埋土はすべて共通するが，Ｐ１は建て替え時に構築された可能性があり，本来は４本柱の竪穴住居跡と考えられる。

竪穴の南壁と西壁の中央には，壁帯溝がみられる。また，中央部には土坑が２基切り合った状態で検出された。床面と同じ面で，土坑上方に焼土範囲が確認された。貼床は土坑周辺を中心に南側に確認した。南西側の隅にはベッド状の張り出しが形成されており，一段高くなっている。また，掘方は南側の２か所の隅が一段低く掘り下げられた状態であった。ベッド状遺構は掘り下げられた部分に20cm～30cmほど，キメの細かい埋土を充填させており，この埋土が貼床の上にも一部被覆していたことから，貼床を形成後に構築されたものと考えられる。壁帯溝部分をのぞく床面積は，10.7㎡である。

竪穴住居跡１号出土遺物（第39～41図　59～77）

埋土内からから成川式土器の甕形土器，壺形土器，高坏形土器，小型器種，石器等が計42点出土し，そのうちある程度の大きさのものを抽出し19点を図示した。

甕形土器

59～62は甕形土器である。59は口縁部から胴部にかけての部位で刻目突帯を貼付する。60は口縁部が欠損しており，刻目突帯の有無は不明だが，59と同様，口縁部が内弯する器形と考えられる。59・60はどちらも内外面ともに工具や指でナデが施され，胴部にススが付着する。61は直立ぎみに立ち上がる口縁部である。器壁は59・60に比べやや薄手である。62は脚台であり，やや足の低いものである。内外面ともにナデを施す。

壺形土器

63～68は壺形土器である。63は直口縁の壺形土器で，口縁部はやや外傾して開く。外面はナデ後，ミガキを密に施す。内面の肩部付近には，接合帯をつなぎ合わせる際の指頭圧痕が多く確認でき，胴部には工具によるナデが丁寧に施される。胎土には１㎜～２㎜大の小礫を多く含む。64・65は口縁部を欠き，煮沸用に転用された壺形土器であり，肩部から胴部にかけてススが付着する。64は内外面に工具ナデや指ナデ，また指頭で押さえた跡が確認できる。65の外面にも同じ調整痕が確認できるが，最後に縦方向のミガキを施している。内面は工具や指によるナデを施す。66は胴部である。内面は工具によるナデが施される。67・68は底部である。67は外面に指によるナデ，内面は工具によるナデを施す。68は平坦面をもつ底部である。外面は指ナデや工具によるナデを施した後，部分的にミガキを施す。67・68とも胴部にススが付着していることから，64・65と同様，煮沸に使用されたことがわかる。

高坏形土器

69～73は高坏形土器である。69は屈曲部から口縁部にかけて外反し，脚部はスカート状に開く。外面はミガキ，内面は坏部内面のみミガキを施し，脚部内面は工具によるナデ調整を施す。胎土には２㎜大の白色粒や風化礫を多く含む。70は69と同様，屈曲部から外反するが，屈曲部の位置が69よりも下部にある。屈曲部の稜線は薄く，外面には工具ナデや指なでを施す。１㎜大の黒色粒，１㎜～３㎜大の風化礫を少量含む。71は外面の屈曲部が69や70よりも坏部の下部に位置しており，稜線は薄く入る。内外面には丁寧な横方向のミガキを施す。72は坏部の下部分で，脚柱部のつくあたりである。内外面ともにミガキを施す。73は高坏か台付鉢の脚部である。外面には上下方向のミガキを密に施す。胎土には１㎜～３㎜大の白色粒と１㎜大の石英を多量に，１㎜大の白色粒を少量含む。69と同様でスカート状に開く脚部である。

坩形土器

74～76は坩形土器である。74は外反する口縁部である。75は口縁部で上方に立ち上がる。76は胴部である。内面に接合痕が顕著に認められる。75・76は色調や胎土から同一個体の可能性がある。

石器

77は棒状敲石である。全体が研磨されており，端部には敲打痕が確認できる。石材は砂岩である。北側の床面直上から出土した。

竪穴住居跡２号（第42図）

検出状況　調査区南端のＩ－８区，Ｖａ層で検出した。

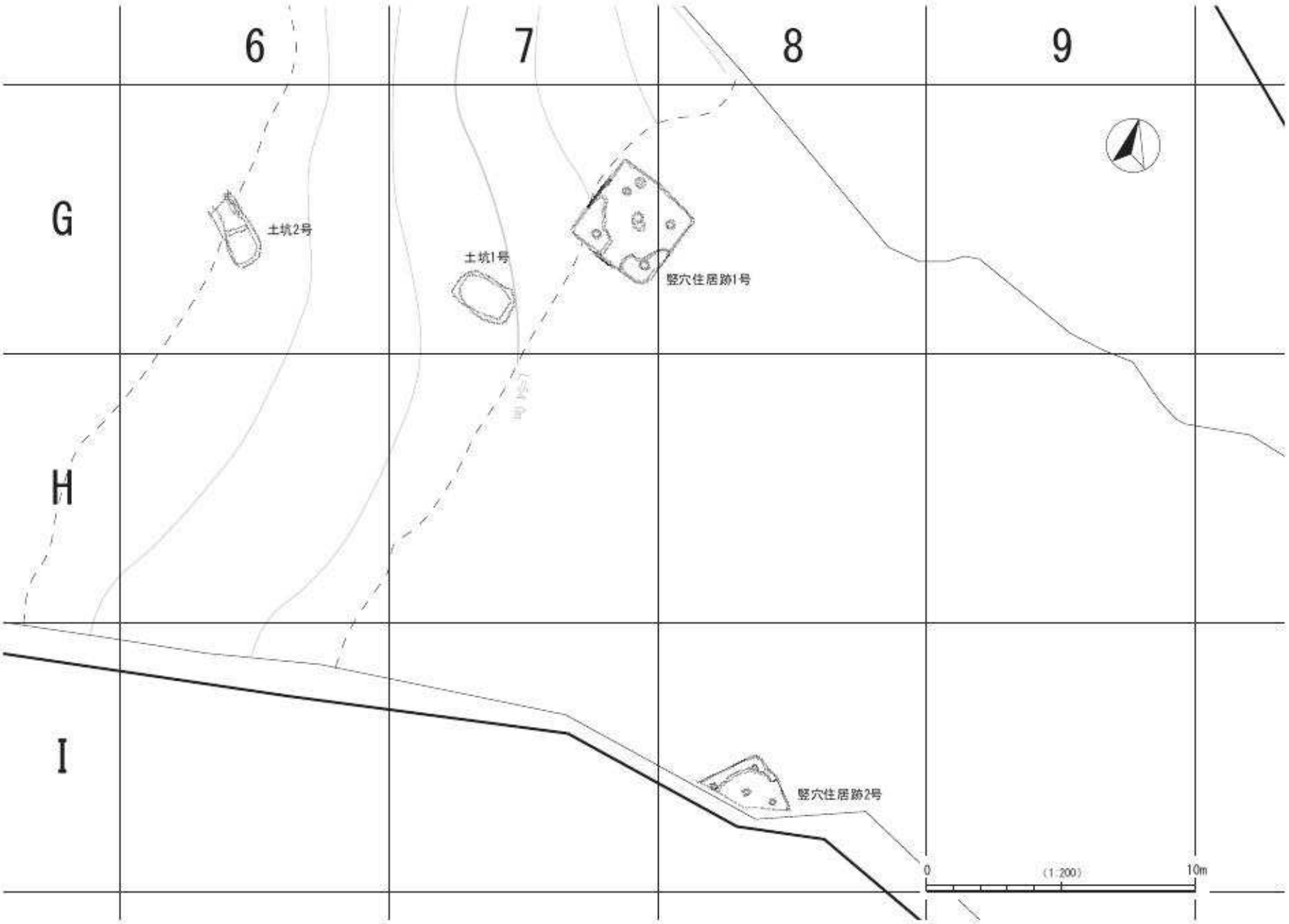
規　　模　検出した形状から推定すると，平面プランは約300cm×310cm程度の隅丸方形状を呈する可能性がある。深さは約22cmを測る。住居跡に伴うピットを３基確認した。いずれも深度は約６～８cmと浅い。中央部分の土坑は，埋土の赤みが強く，炭化物等は含まないものの炉跡の可能性がある。

竪穴住居跡２号出土遺物（第43図　78～84）

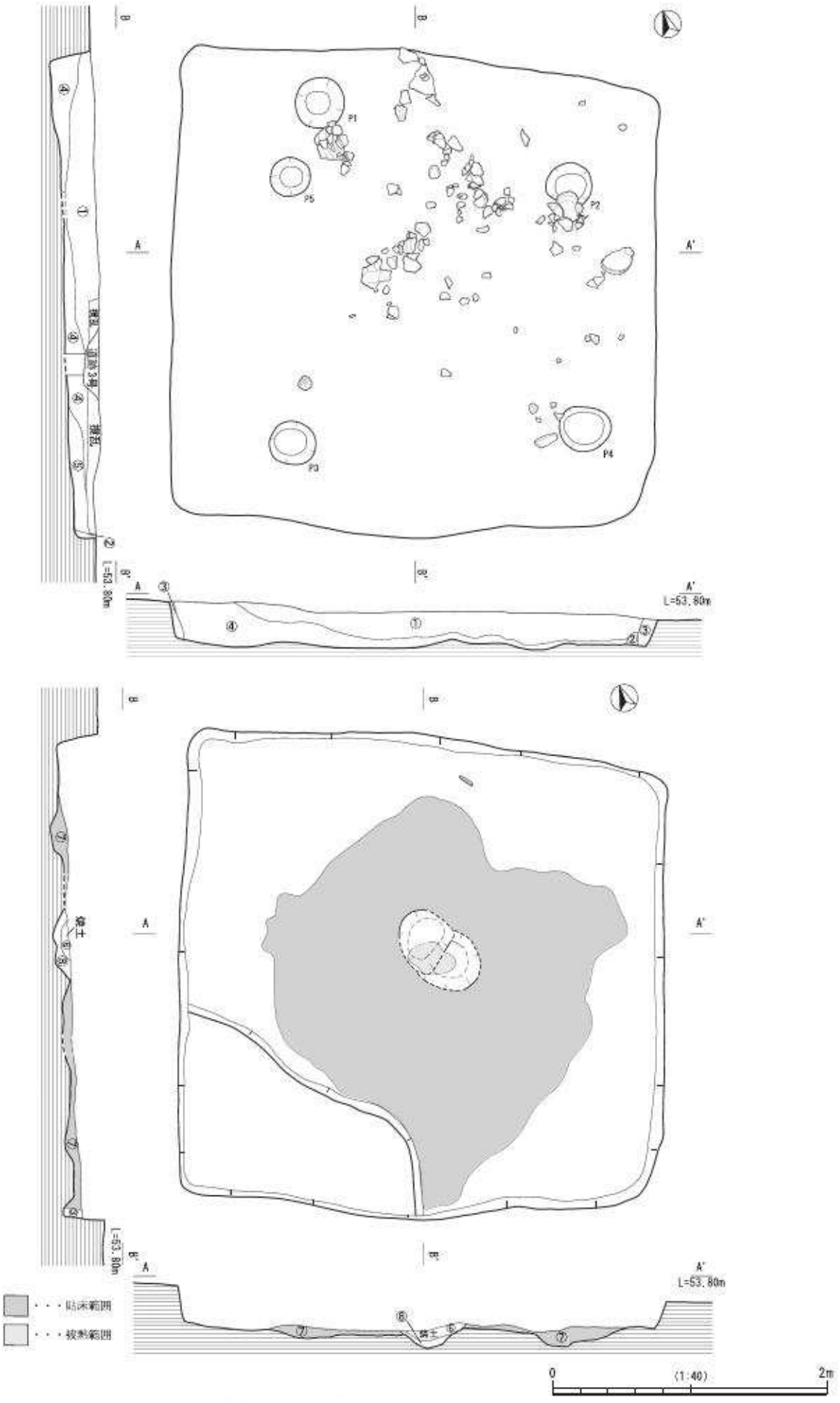
埋土内から出土したもので，すべて成川式土器である。出土した10点のうち，ある程度の大きさで形状がわかるものを抽出し７点を図示した。

甕形土器

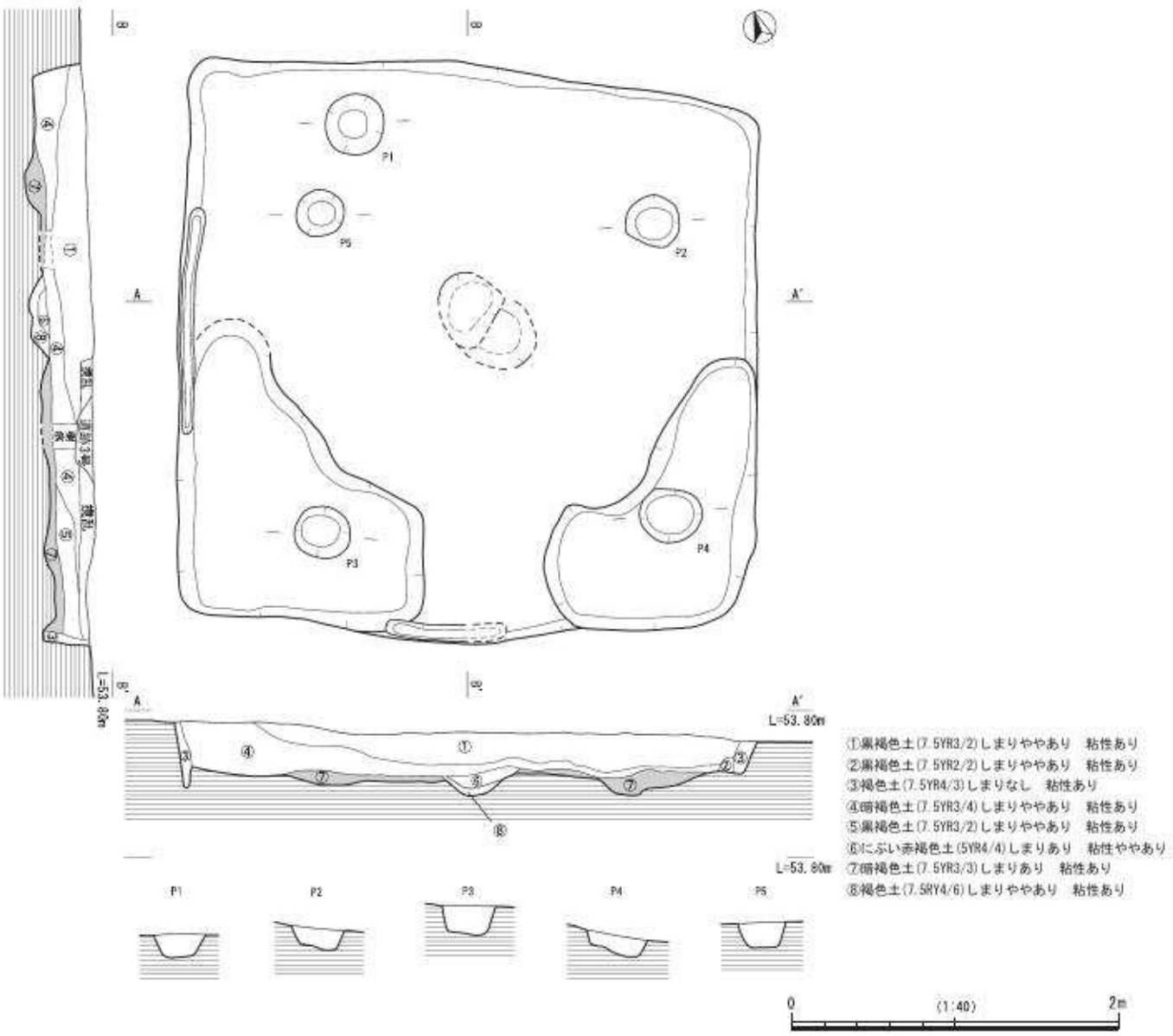
78～84は内弯する口縁部である。78は内外面ナデが施され，横ナデも併用される。器壁は薄く，坩形土器の



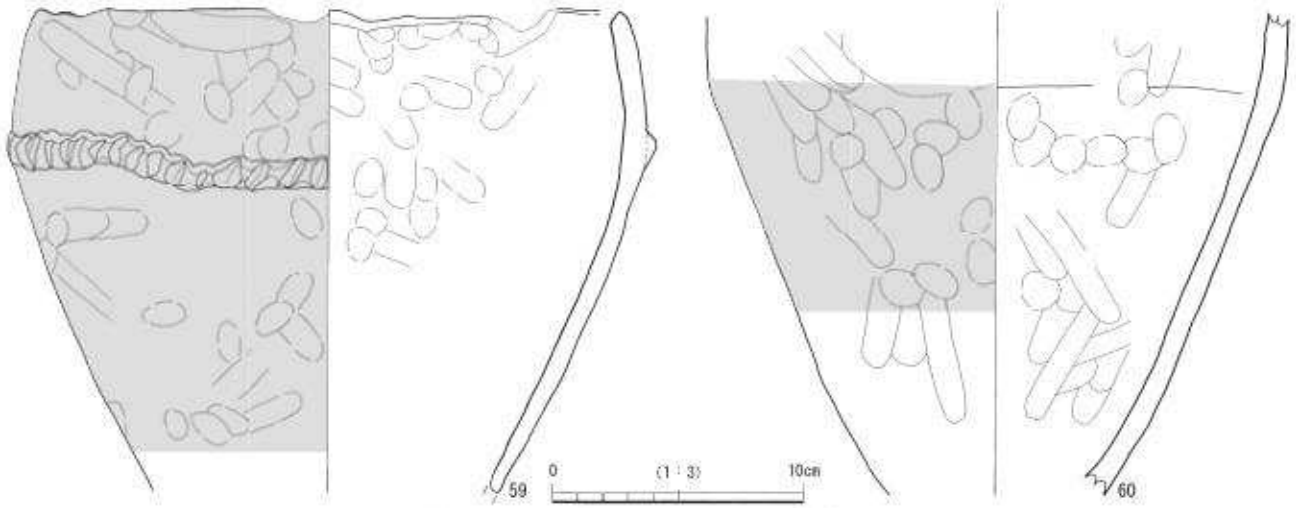
第 36 図　古墳時代遺構配置図 1（地形図：Ⅴ層上面）



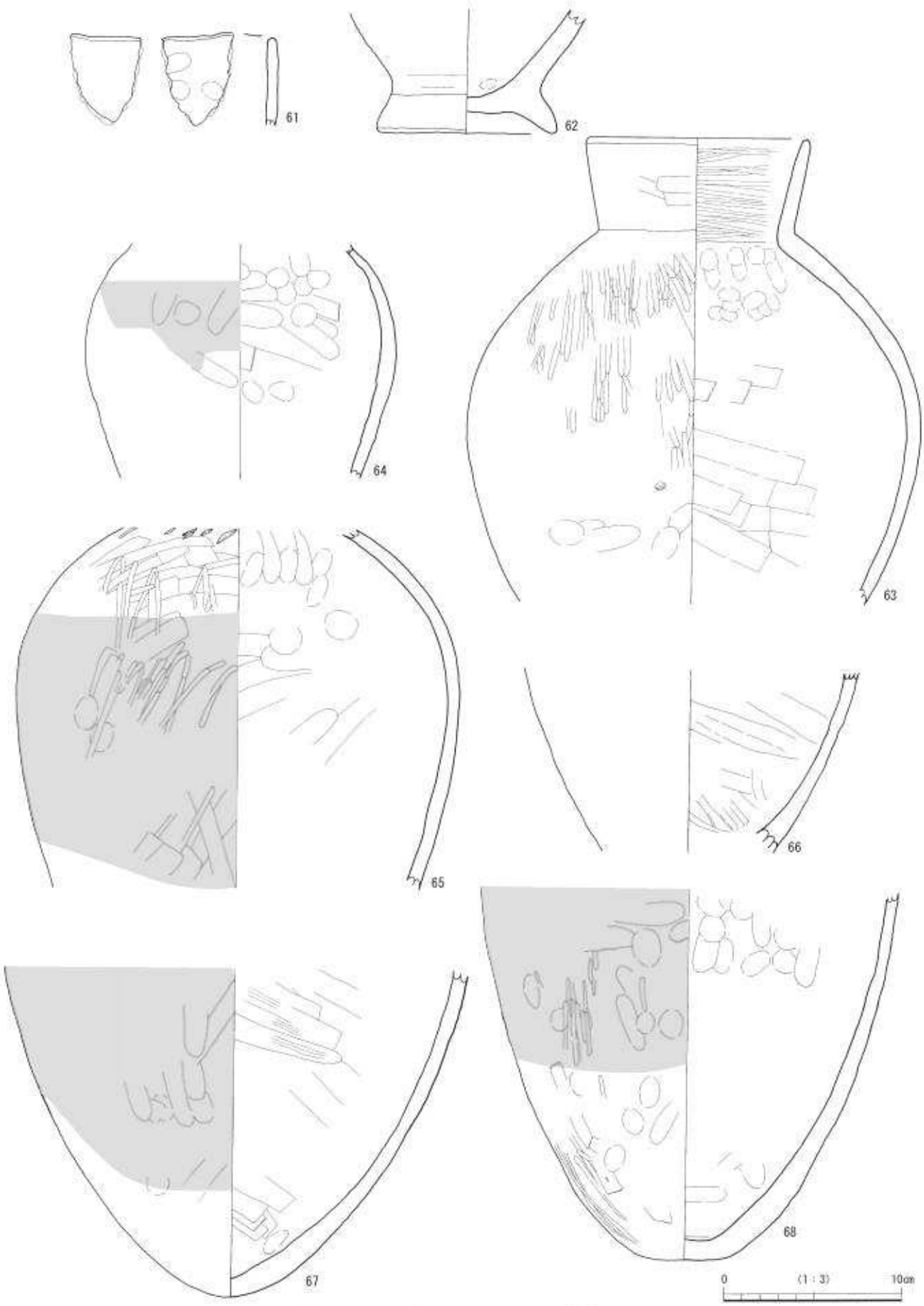
第 37 図　竪穴住居跡 1 号 1 ・ 2



第 38 図　竪穴住居跡 1 号 3



第 39 図　竪穴住居跡 1 号出土遺物 1



第 40 図　竪穴住居跡 1 号出土遺物 2

可能性もあるが，外面の広範囲に厚くススが付着していることから，甕形土器として分類した。79は，突帯を1条貼付した後，工具で下から上に向かって刻みを施したことがわかる。内外面は工具でナデているものの，口唇部は横ナデが弱いかもしくはなされておらず，凹凸が目立つ。胎土には角閃石や1㎜～2㎜大の赤色粒を含む。80は外面に79と同じように，下から上に向かって刻みを施した突帯の一部が残存する。内外面ナデを施す。外面にはススが付着している。81は胴部である。刻目突帯を貼付したもので，内外面には工具ナデと指頭圧痕が残る。突帯下部にはススが付着する。82は甕の底部である。裏面には突起があり，指で押さえて調整した痕跡が明瞭に確認できる。

壺形土器

83は直口縁の壺形土器の口縁部から肩部である。外面は斜方向のミガキ，内面は工具によるナデや指頭圧痕が確認できる。また，内面はナデ調整が不十分だったためか，粘土帯の接合痕が明瞭に確認できる。胎土には2㎜～4㎜大の白色粒を多く含み，2㎜～3㎜大の赤色粒を少量含む。

高坏形土器

84は高坏形土器の脚筒部である。残存部分から，ややエンタシス状を呈し，裾部に屈曲をもつ形状であると考えられる。外面には斜位方向のミガキを密に施す。内面は工具によるナデが施される。内外面とも黒色を呈する。これは意図的にススを付着させ，その後ミガキを施した結果である。

土坑1号（第44図）

検出状況　調査区中央南側のG－7区，Va層で検出した。北東側に竪穴住居跡1号がある。

形状と規模　233cm×152cmを計る。樹痕により削平を受けた部分が多く，はっきりした形状は不明だが，長方形を呈するものとみられる。最深部で約35cmを測る。中央部分には焼土域が確認できたが炭化物の出土や鉄褐色に変色した部分，焼土に伴う掘り込みは確認できなかった。

埋土は2つに分層でき，上層は暗褐色土の再堆積層で，5㎜～1㎝程度の池田降下軽石を少量含む。下層は褐色土で，アカホヤ火山灰の3㎝～4㎝ブロックを少量含む。

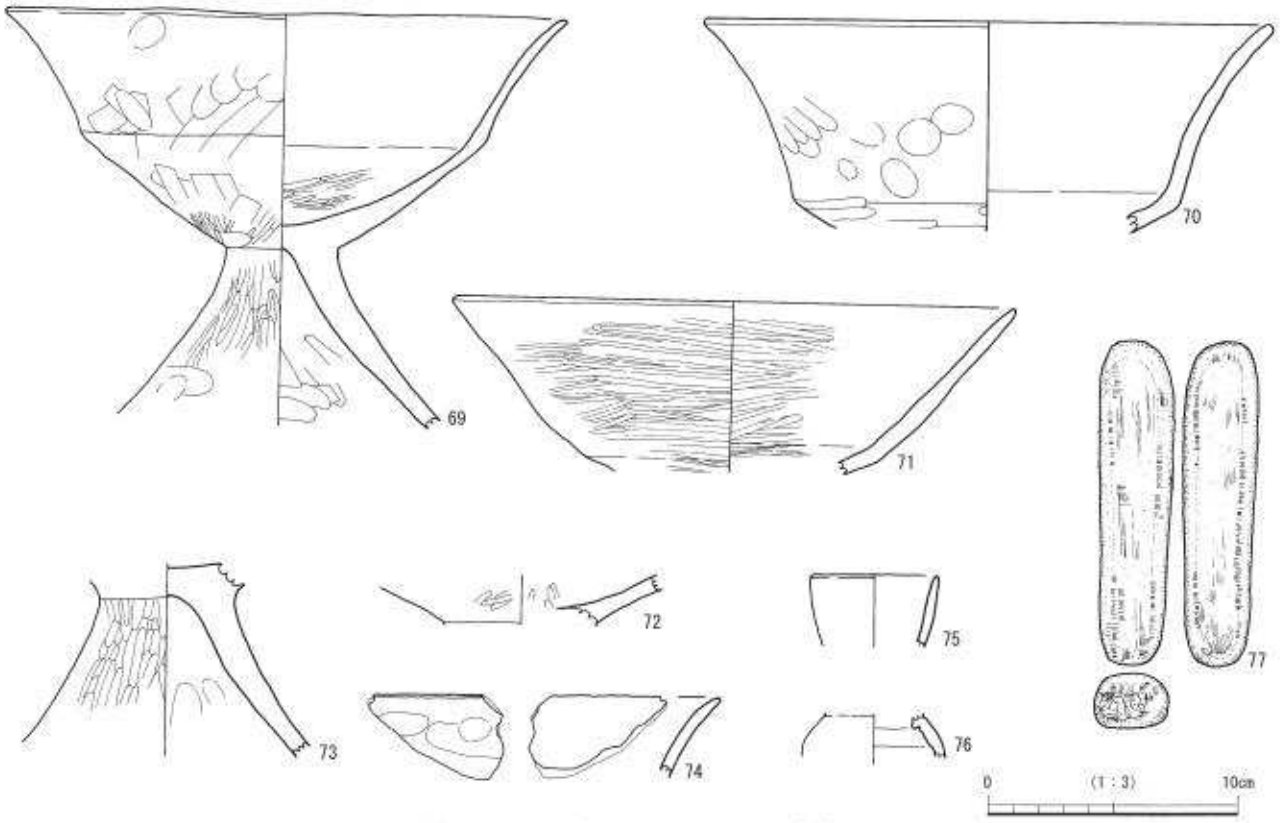
土坑1号出土遺物（第45図　85～87）

埋土内から古墳時代の甕形土器と鉢形土器が出土した。85は甕形土器の口縁部から胴部である。やや外反するがまっすぐ伸びる口縁部で，口唇部にはやや平坦面がある。外面口縁部はハケ目で縦方向の丁寧な調整がなされ，内面にはナデが施される。内外面ともにススが付着している。古墳時代前期頃のものと考えられる。

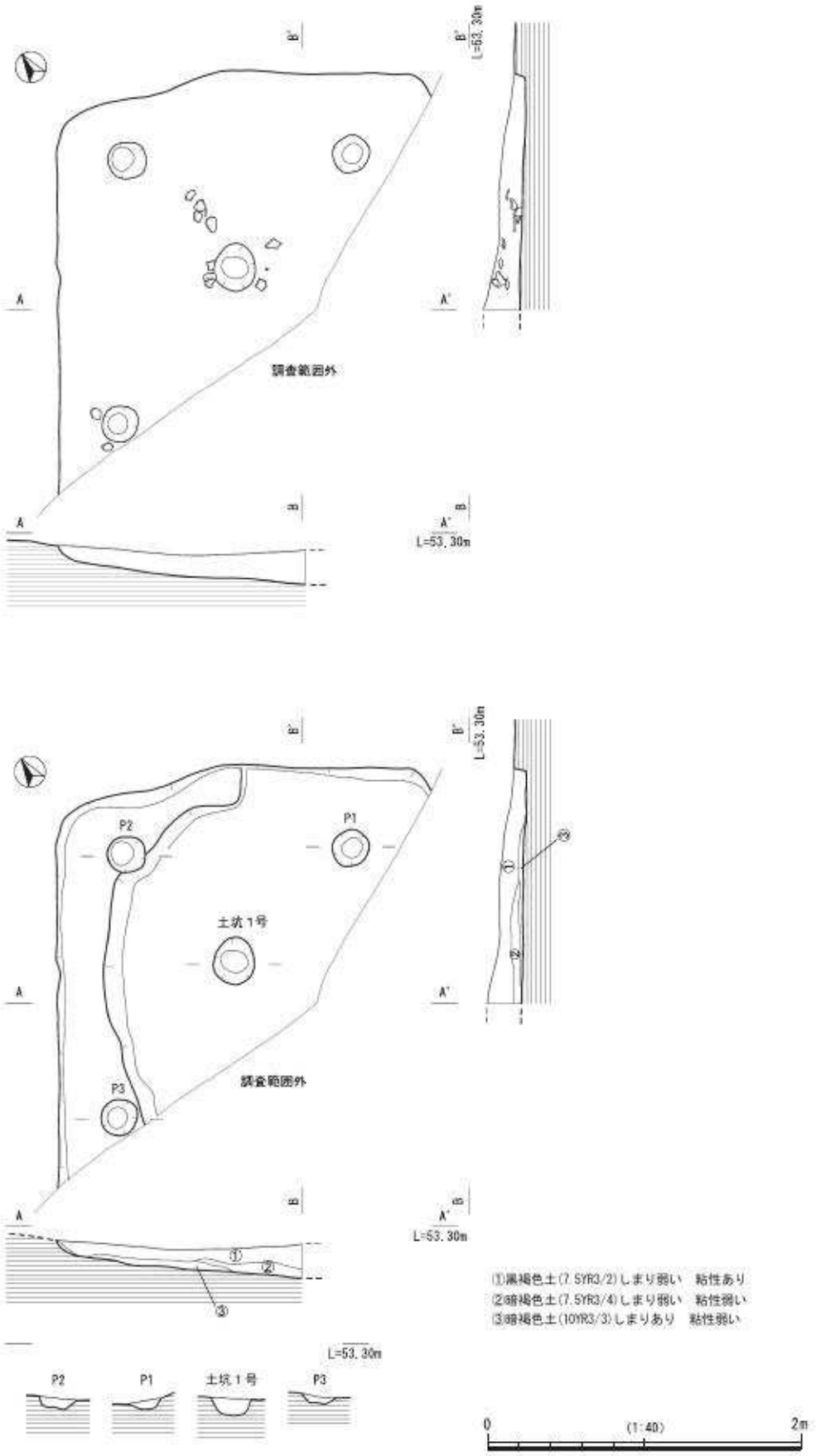
86は甕形土器の底部である。外面には木製工具によるハケメを縦方向に施し，内面は指でナデている。87は小型で丸底の鉢形土器である。土坑内の北側から出土した。外面は強めのナデを施す。古墳時代の範疇におさまるもので，後期のものと考えられる。

土坑2号（第47図）

検出状況　G－6区Va層で検出した。



第41図　竪穴住居跡1号出土遺物3



第 42 図　竪穴住居跡２号１・２

形状と規模
平面形は，長軸が少なくとも270cm以上，短軸は約126cmの長方形もしくは長楕円形を呈すると考えられる。最深部で約38cmを測る。先行トレンチで削平されたことと，樹痕の影響で本来の形状の判断が難しいが，北側半分は深く，南側がテラス状に構築されている。埋土は４つに分層できる。Ⅴ層がブロック状に堆積する層の上に，しまりのある褐色土層，その上に黒色土層が２面堆積する。黒褐色土層は，下層の方が上層よりも若干暗い。

土坑２号出土遺物（第48図　88）
88は鉢形土器の口縁部である。底部形態は不明だが，脚台が付くタイプと考えられる。口縁部には，土器焼成前補修したと考えられる粘土の貼付箇所があるものの，完全には補修されていない。外面は工具によるナデ，内面は指ナデが施される。胎土には，１㎜大の石英・角閃石，また，１㎜～２㎜大の白色粒が多く含まれる。

土坑３号（第49図）
検出状況　調査区中央部北側のＥ－６区，Ｖａ層で検出した。
形状と規模　平面形は79cm×62cmと不整形で，最深部の深さは29cmを測る。埋土は２つに分層できる。上層は黒褐色土，下層はにぶい褐色土でどちらもやや粘性がありしまりはない。

土坑３号出土遺物（第50図　89）
古墳時代の甕形土器の底部が出土した。

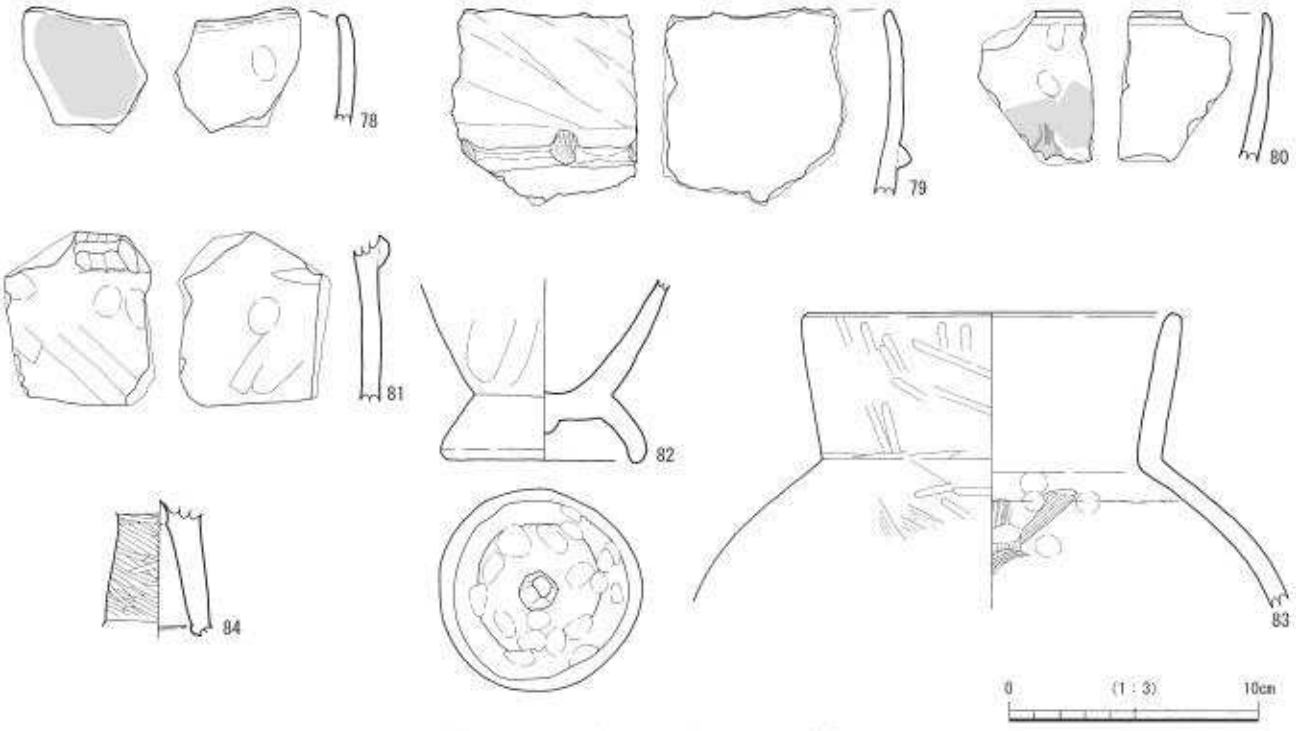
溝状遺構１号（第51図）
検出状況　調査区北西端のＣ・Ｄ－２・３区，東から西に下る斜面のＶａ層上面で検出した。
形状と規模　約11ｍの長さで東西方向に伸びる。幅は断面A-A'間で約140cm，断面B-B'間は約90cmを測る。検出面の断面はA-A'付近では北側に傾斜するが，B-B'付近は南側に傾く。西側の調査区へ延びるものと考えられる。

道跡１号（第51図）
検出状況　調査区西端のＥ－２・３区のＶａ層上面で検出した。
形状と規模　約４ｍの長さで東西方向に延びており，幅は，断面A-A'間で約13cmを測る。検出面の断面は平坦で，樹痕による攪乱を受け，部分的に硬化面が残存する。

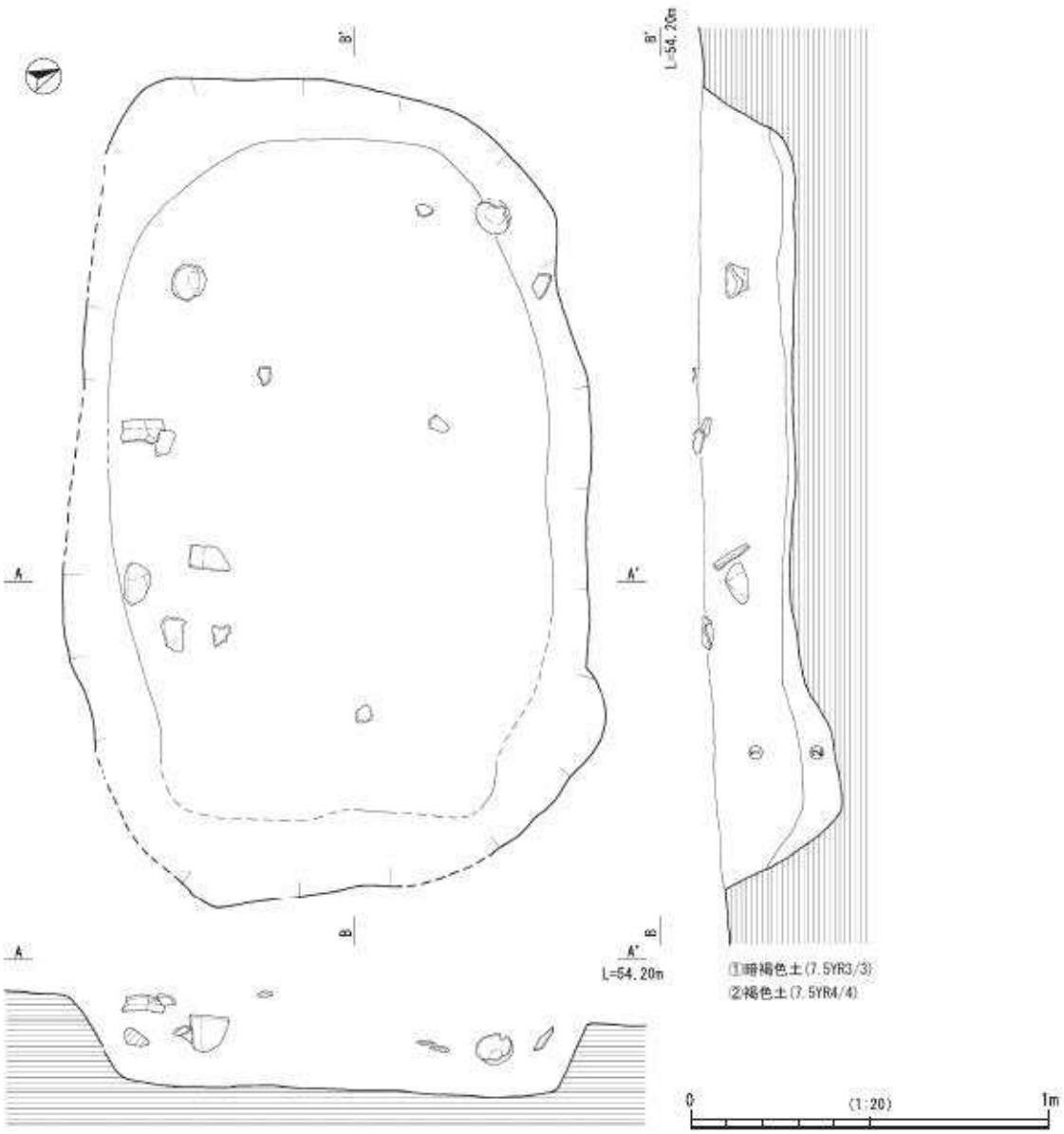
道跡２号（第51図）
検出状況　調査区北西端のＣ・Ｄ－２・３区で，溝状遺構１号の埋土中位に検出された。
形状と規模　約７ｍの長さで東西方向へ延びる。幅は，断面A-A'間で26cmを測る。硬化面の厚みは約３cm～４cmである。

古墳時代の土器（第53図　90～104，第54図　105～121）
古墳時代の土器のうち，Ⅳ層及びＶａ層から出土したものを中心に計32点を図示した。

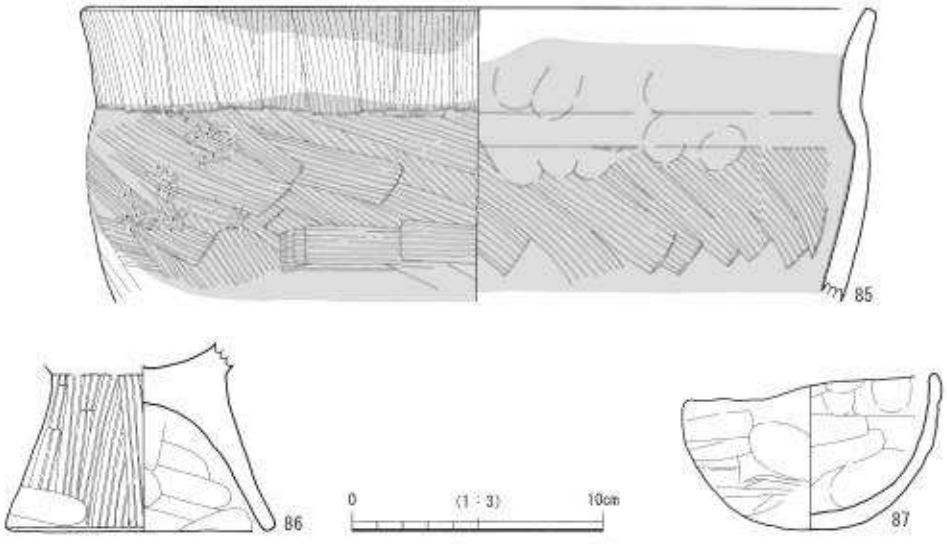
甕形土器
90～93は甕形土器の口縁部である。
90～92は外反する口縁部で，91・92の外面には工具による強めのナデ調整がされる。また，93は口縁部先端を欠損するが，91と同様，強めの縦方向のハケメ調整が内外面に施される。90と91は内面にハケメ痕が残る。94～100は内弯もしくは直立ぎみに立ち上がる口縁部をもち，口唇部に向かって断面先端が細くなる。94は，刻目突帯を１条貼付し，刻目には布目痕が残る。95も94と同様に



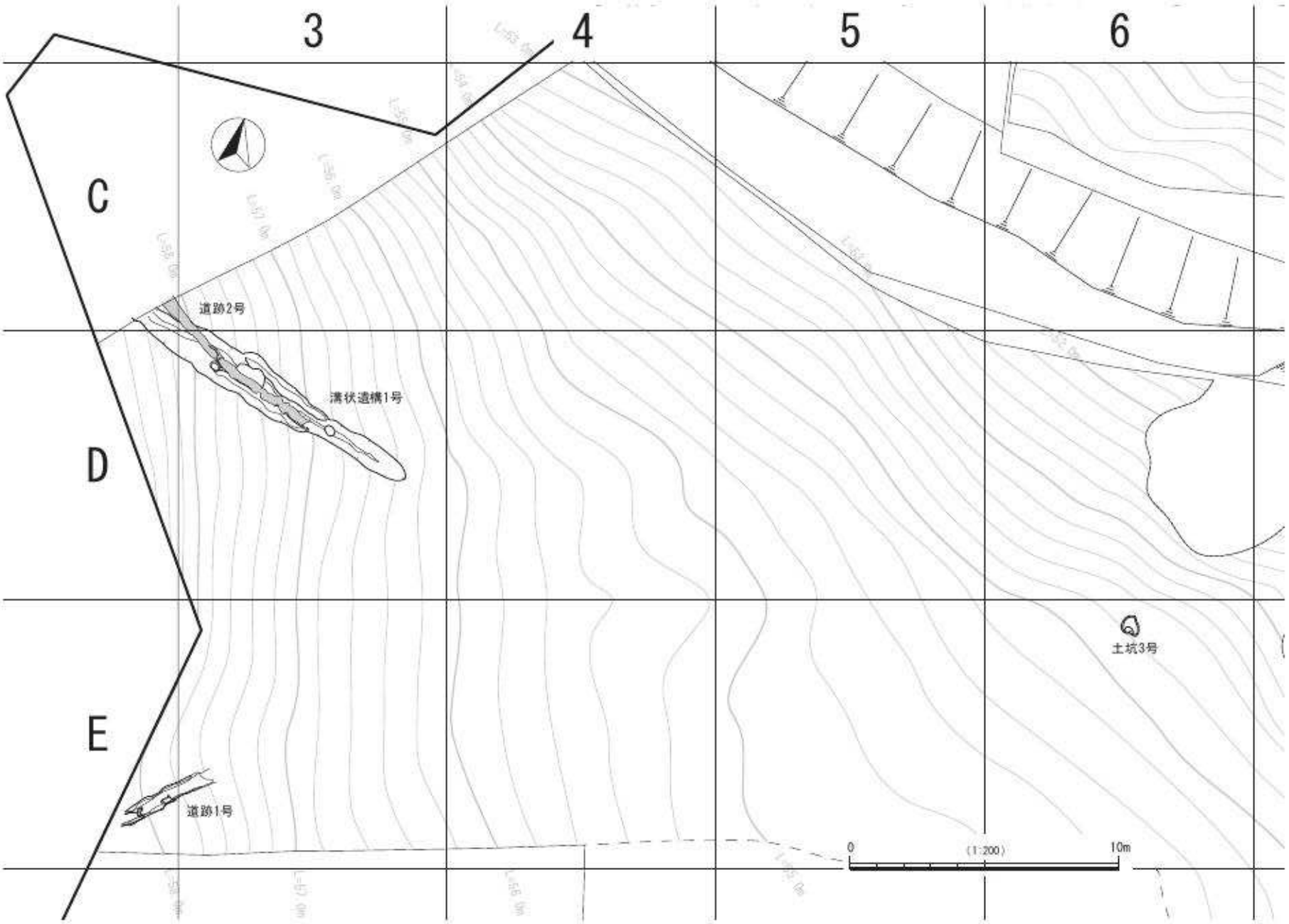
第 43 図　竪穴住居跡２号出土遺物



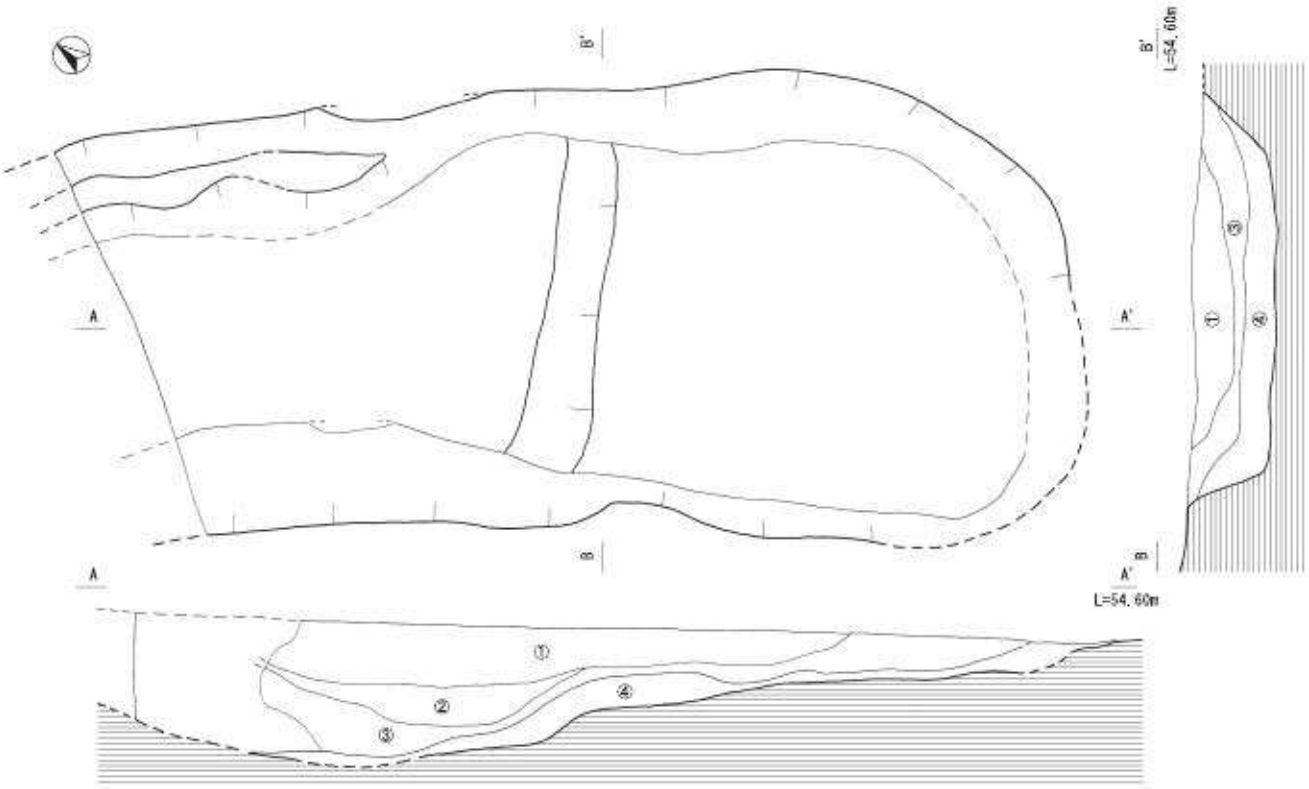
第44図　土坑1号



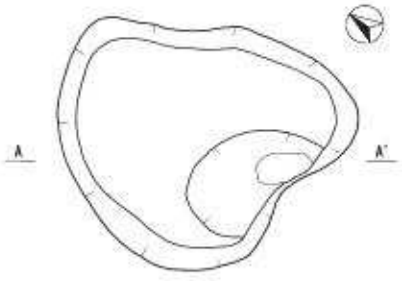
第45図　土坑1号出土遺物

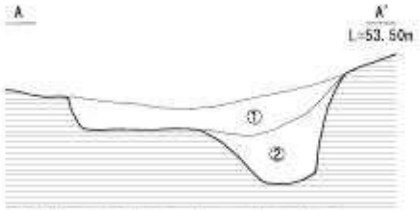


第 46 図　古墳時代遺構配置図２（地形図：Ｖ層上面）

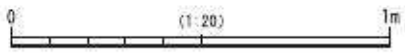


第47図　土坑２号

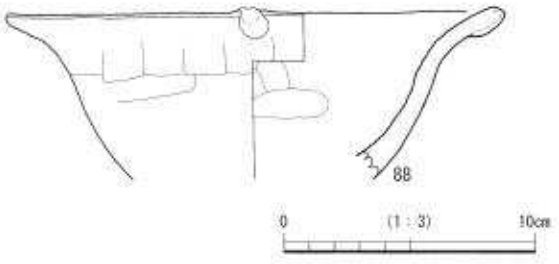




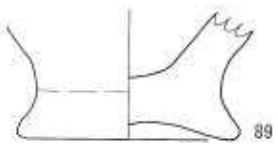
①黒褐色土(10YR3/1)しまりなし　粘性ややあり
②にぶい褐色土(7.5YR5/3)しまりなし　粘性ややあり

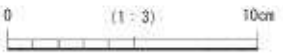


第49図　土坑３号



第48図　土坑２号出土遺物





第50図　土坑３号出土遺物

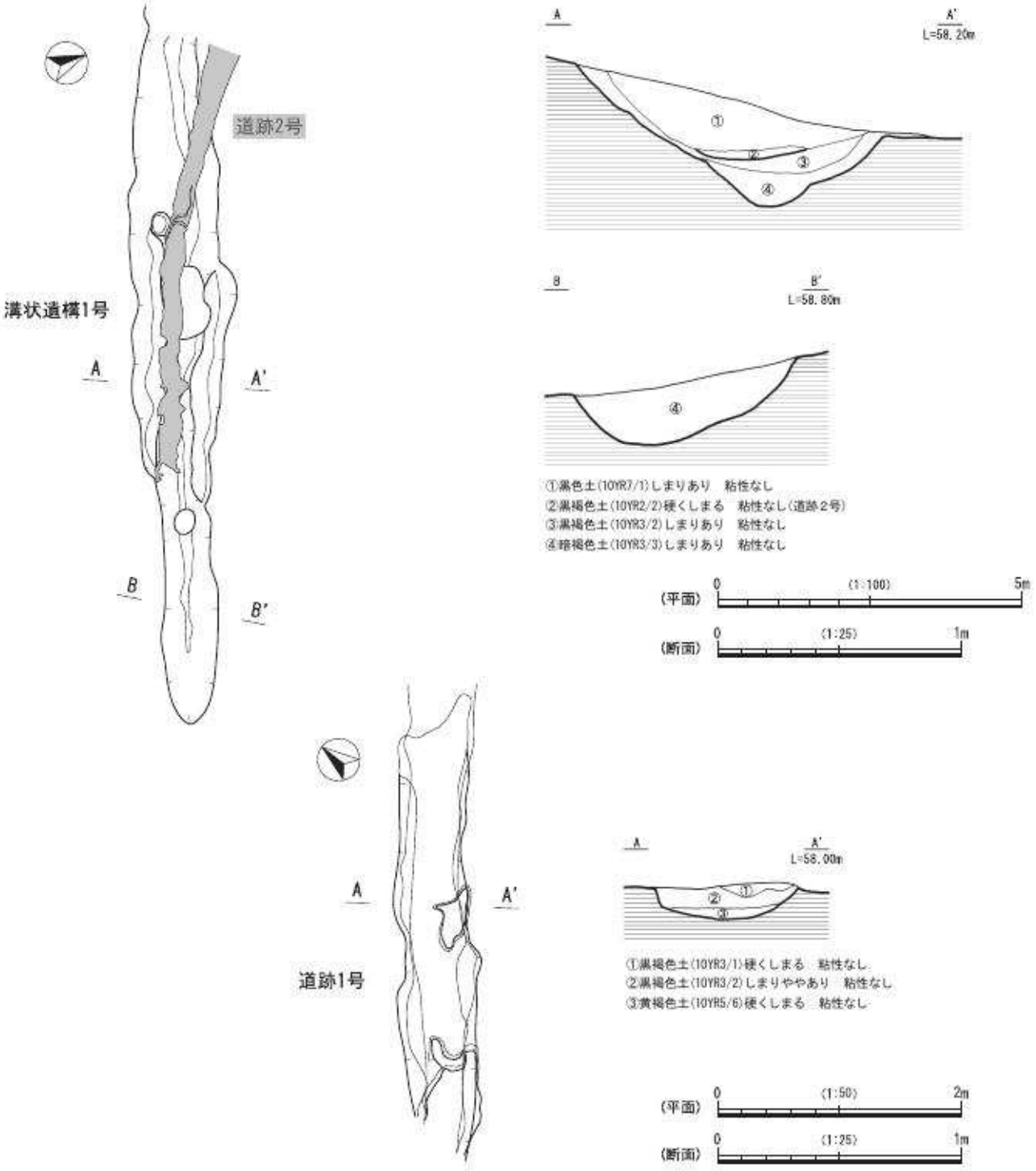
刻目突帯を１条貼付する。内外面はナデ調整である。口縁部付近にススが付着している。96は内外面とも工具や指で丁寧なナデを施す。97も同様である。96・97はどちらも突帯の刻目部分に布目痕が残り，突帯下部分にススが付着する。98は直立ぎみに立ち上がる口縁部で，内外面とも工具によるナデを施した後，外面には一部ミガキを施す。外面には全体的にススが付着する。99・100も小片ではあるが，直立ぎみに立ち上がる口縁部で，99は外面にススが付着する。

101～104は胴部片で刻目を付す突帯と付さない突帯を貼付するものが出土している。

105・106は甕形土器の底部である。105は外面にハケメ調整を行い，内面は工具や指によるナデを施す。106は内外面ともに工具によるナデを施す。

壺形土器

107～110は壺形土器である。107は口縁部が直立気味に開く口縁部である。内外面ともにハケメを施す。外面にはススが広範囲に付着する。内面には指頭圧痕が



第51図　溝状遺構１号・道跡１号

明瞭に残る。108・109は二重口縁である。108は内外面ともに横方向のミガキを施す。109は工具等でナデ調整を施す。110は幅広突帯で斜格子状の刻みを施す。

高坏形土器

111～115は高坏形土器である。111は坏部が屈曲する部分から口縁部にかけて外反し，口縁部を欠損する。内外面ともにミガキを丁寧に施す。112・113も111と同様に坏部である。112は口縁部がやや丸みを帯びながら外反する。外面は斜位にミガキを施すが，風化によりかすれている。113は先細りで，内外面工具によるナデを施す。114は脚筒部で外面には縦方向にミガキが施される。115は高坏形土器または台付鉢の脚部と思われる。焼成前に少なくとも2か所に穿孔が施されている。

台付鉢の場合は，肝属郡錦江町山ノ口遺跡の類例から弥生時代中期後半に該当し，高坏形土器であれば南さつま市芝原遺跡や指宿市横瀬遺跡の類例から弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。

鉢形土器

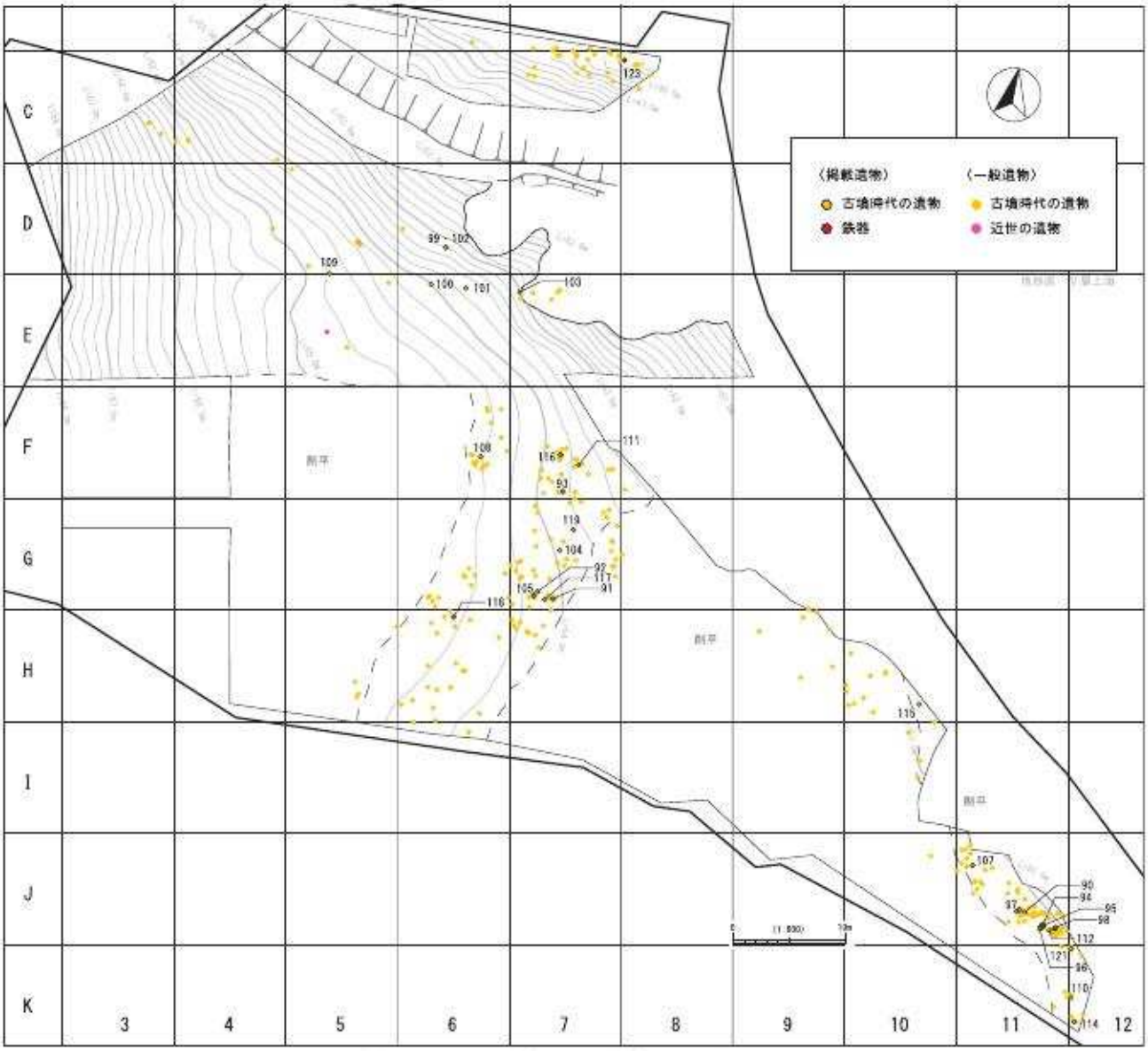
116は鉢形土器である。器壁が厚く，口唇端部は平坦面を有する。底部が平底を呈する器形と想定される。外面は縦方向のハケメが明瞭に残る。内面は工具によるナデ調整である。117は小型の鉢に分類される。平底を呈し，工具や指頭によるナデで成形する。完形である。

坩形土器

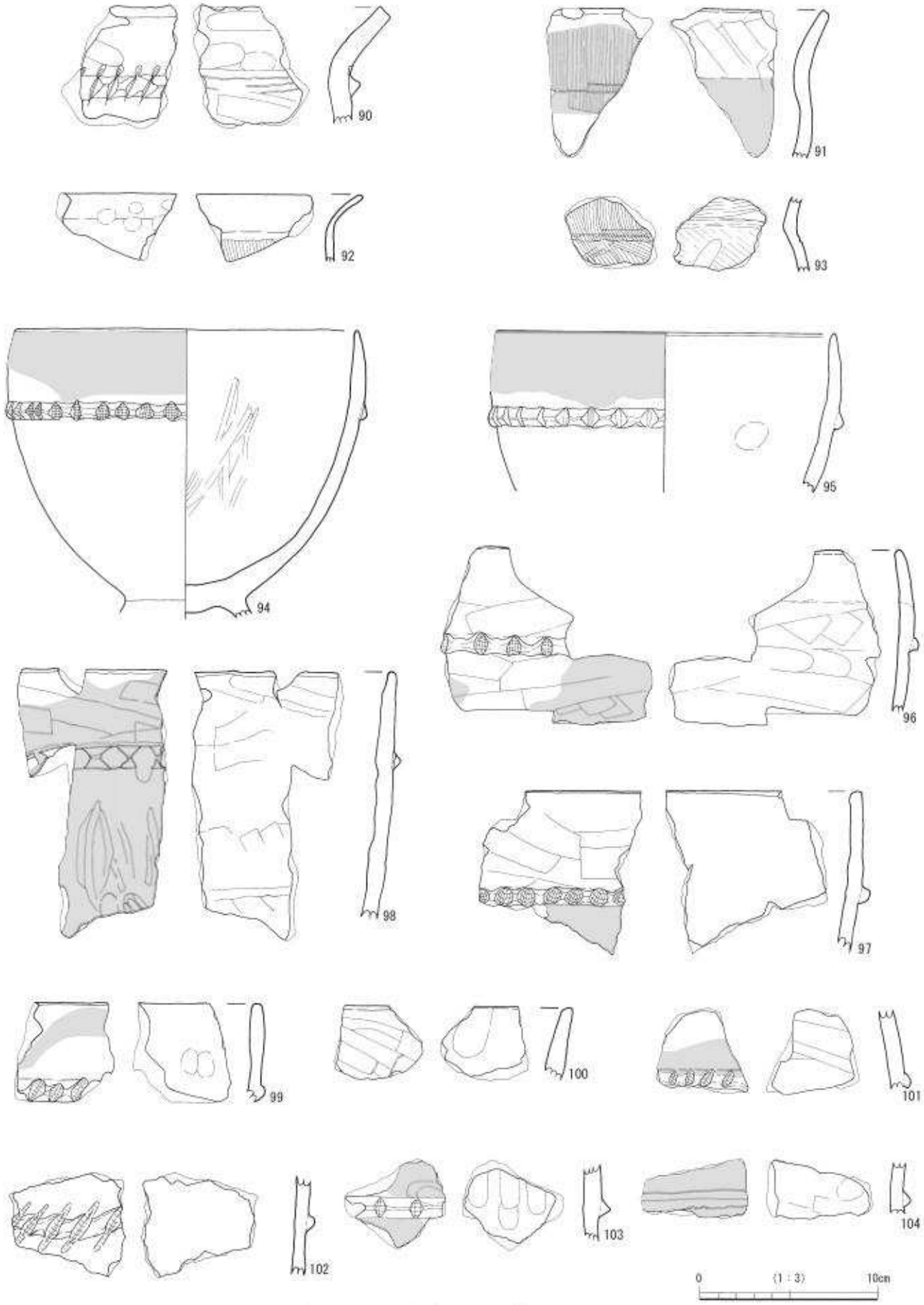
118～120は坩形土器である。118の口縁部はやや内弯しながら立ち上がる。胴部の境目に2条の沈線を巡らせる。器壁は薄く，胎土には1㎜～2㎜程度の風化礫を多く含む。119・120も同様に口縁部である。

ミニチュア土器

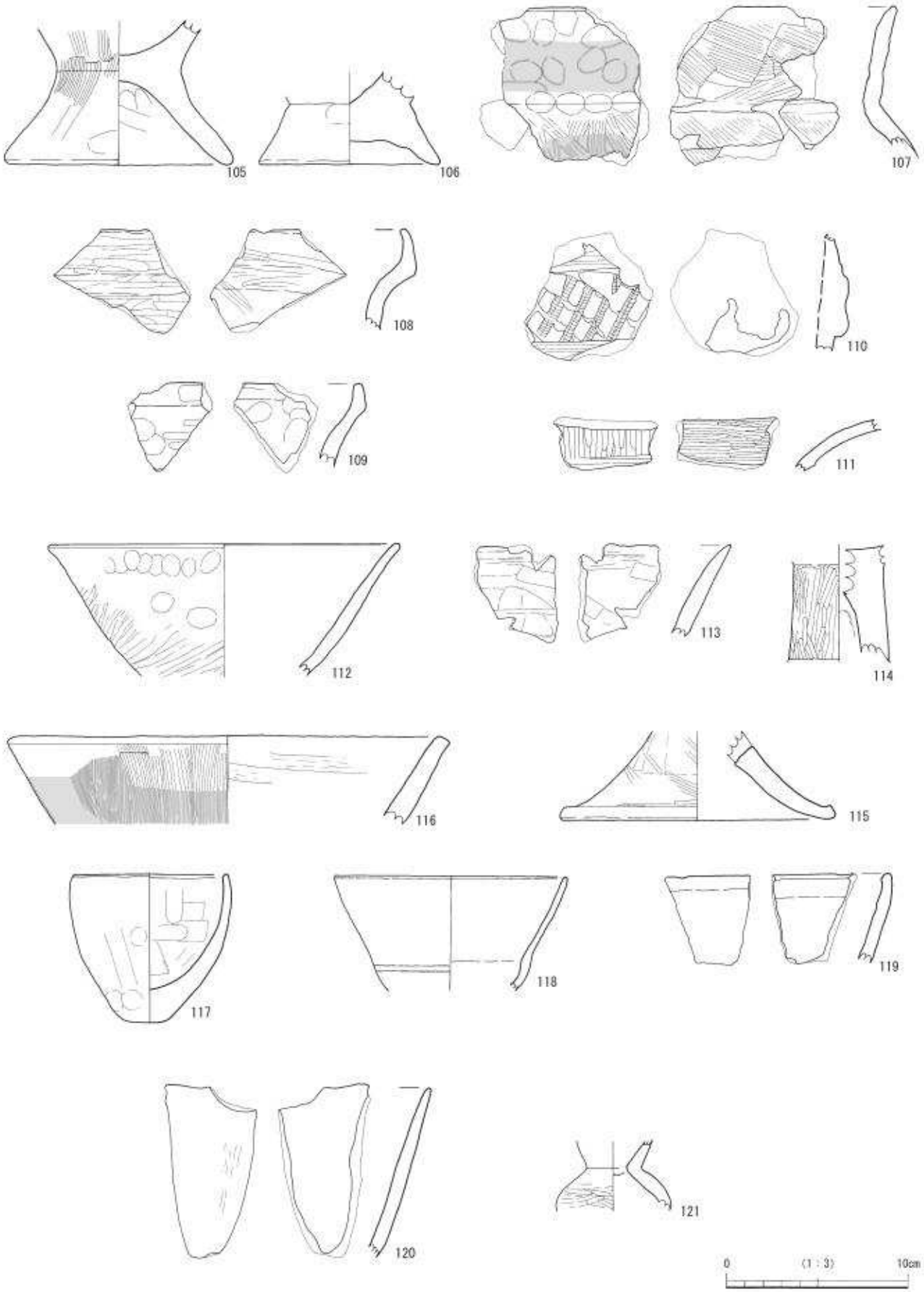
121は壺形のミニチュア土器で，外面に丁寧なミガキを施す。



第52図　古墳時代以降遺物出土状況図



第 53 図　古墳時代出土遺物（土器 1）



第 54 図　古墳時代出土遺物（土器２）

第５節　古代～中世の調査成果

１　調査の概要

古代～中世の遺構はⅢ～Ｖａ層上面で検出した。土坑12基，溝状遺構16条，道跡36条を検出した。溝状遺構や道跡の新旧関係は，埋土状況や切り合い等で判断した。遺物は少し出土しており，土師皿１点，刀子１点を図示した。

２　遺構

土坑１号（第59図）

検出状況　Ｄ・Ｅ－５・６区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約352cm短軸約139cmの楕円形を呈する。当初，溝状遺構として検出したが形状等から土坑と判断した。最深部で26cmを測る。埋土は２つに分層でき，暗褐色土と道跡23号がある。

土坑２号（第60図）

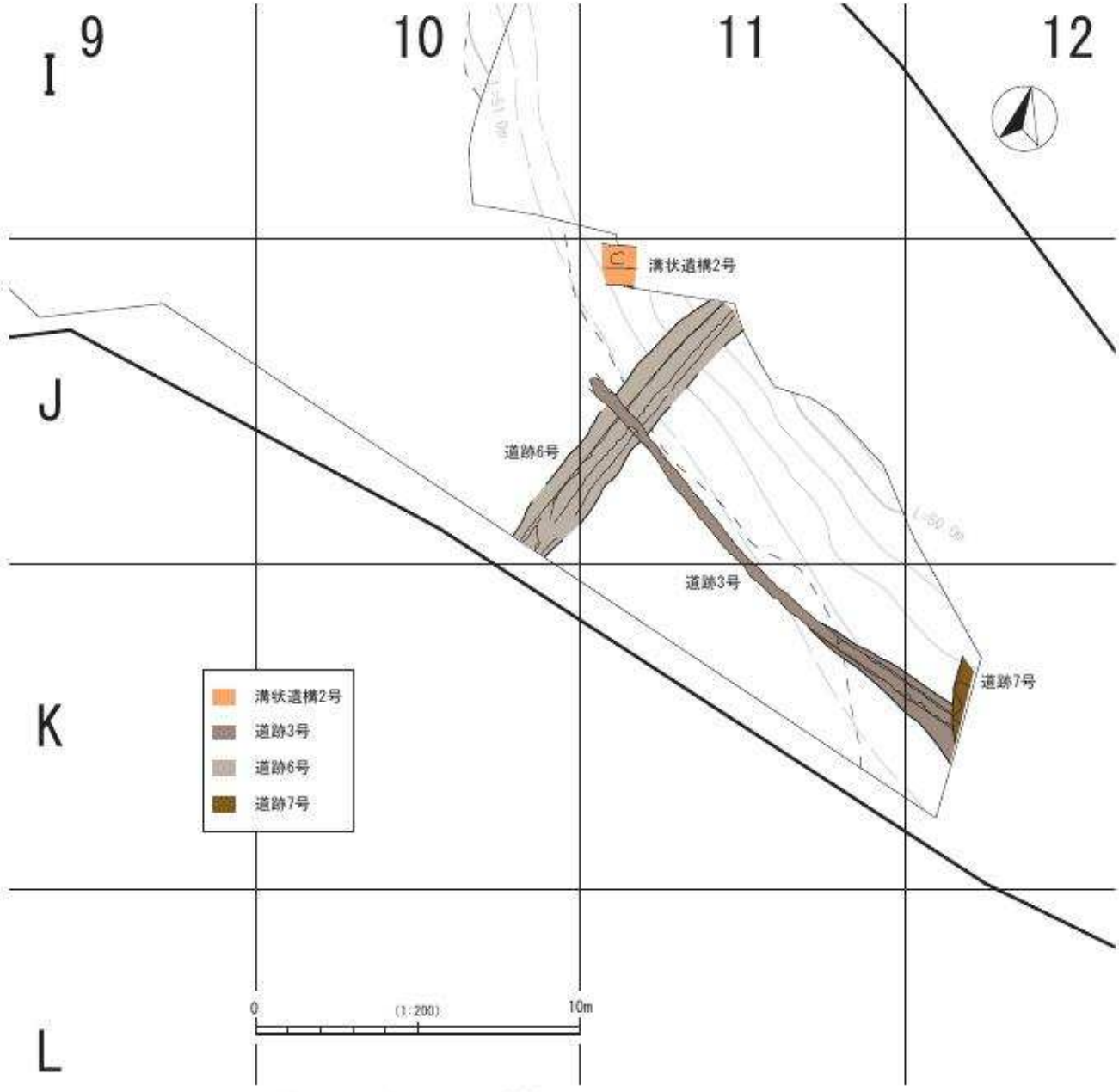
検出状況　Ｂ・Ｃ－６区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランはトレンチで削平をうけているために，正確な形状は不明である。検出規模は長軸約56cm短軸約30cmであり，楕円形を呈するものと思われる。最深部で12cmを測る。埋土は黒褐色土である。

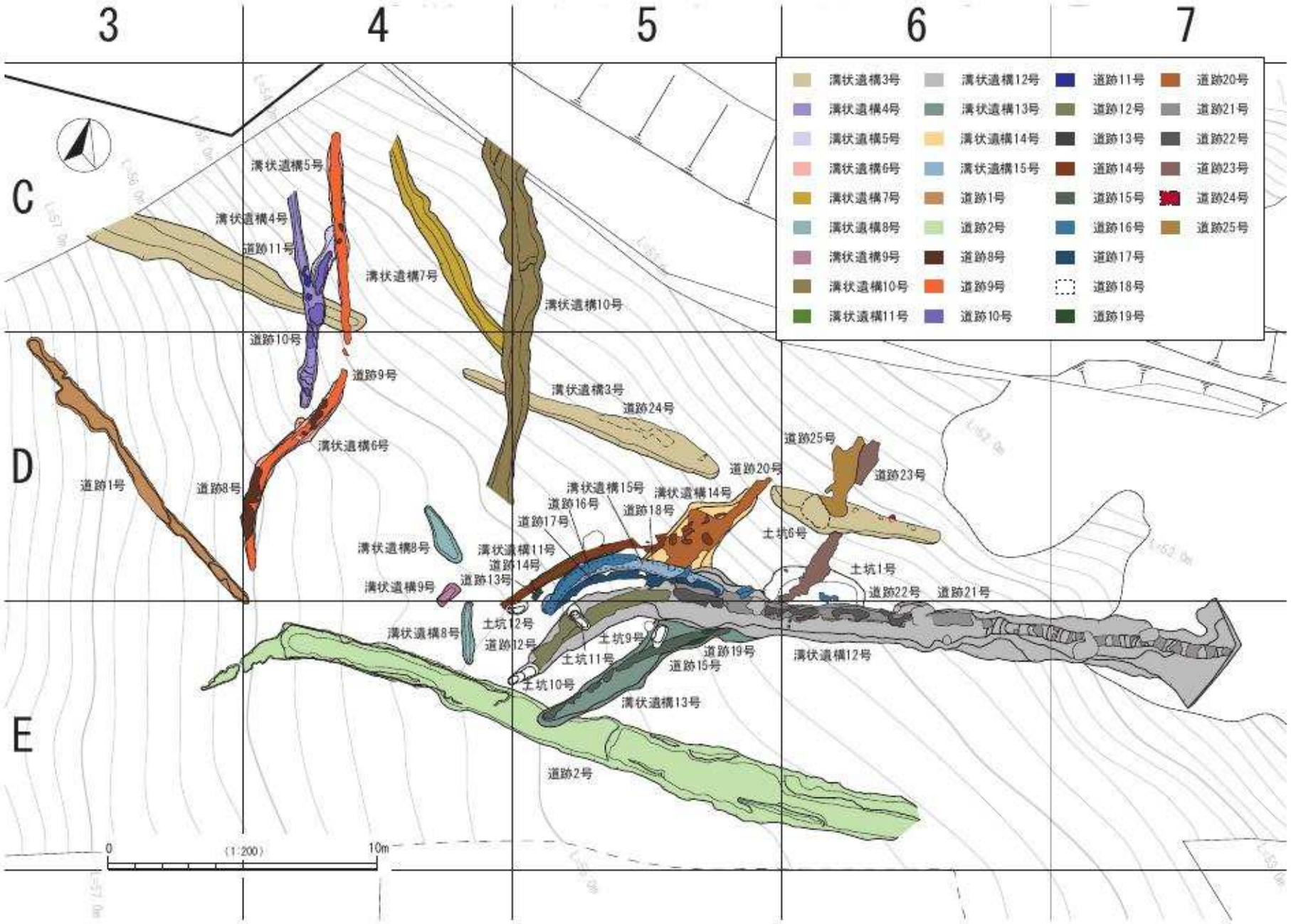
土坑３号（第60図）

検出状況　Ｃ－７区のⅣ層上面で検出した。

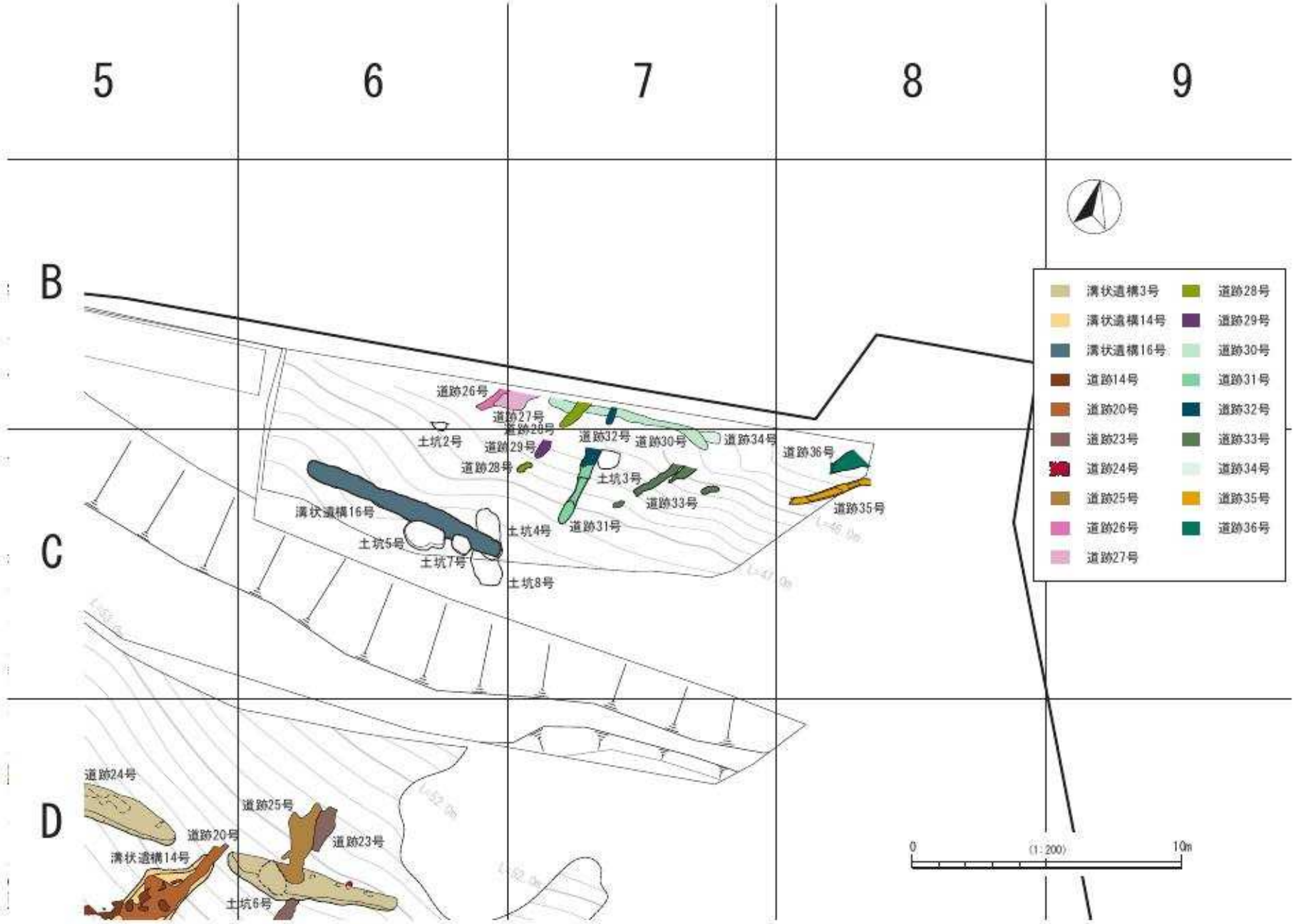
形状と規模　平面プランはトレンチの削平をうけているために，正確な形状は不明であるが，長軸約87cm短軸約74cmで，円形を呈するものと思われる。最深部で19cmを測る。西側に道跡31・32号がある。埋土は黒褐色土であ



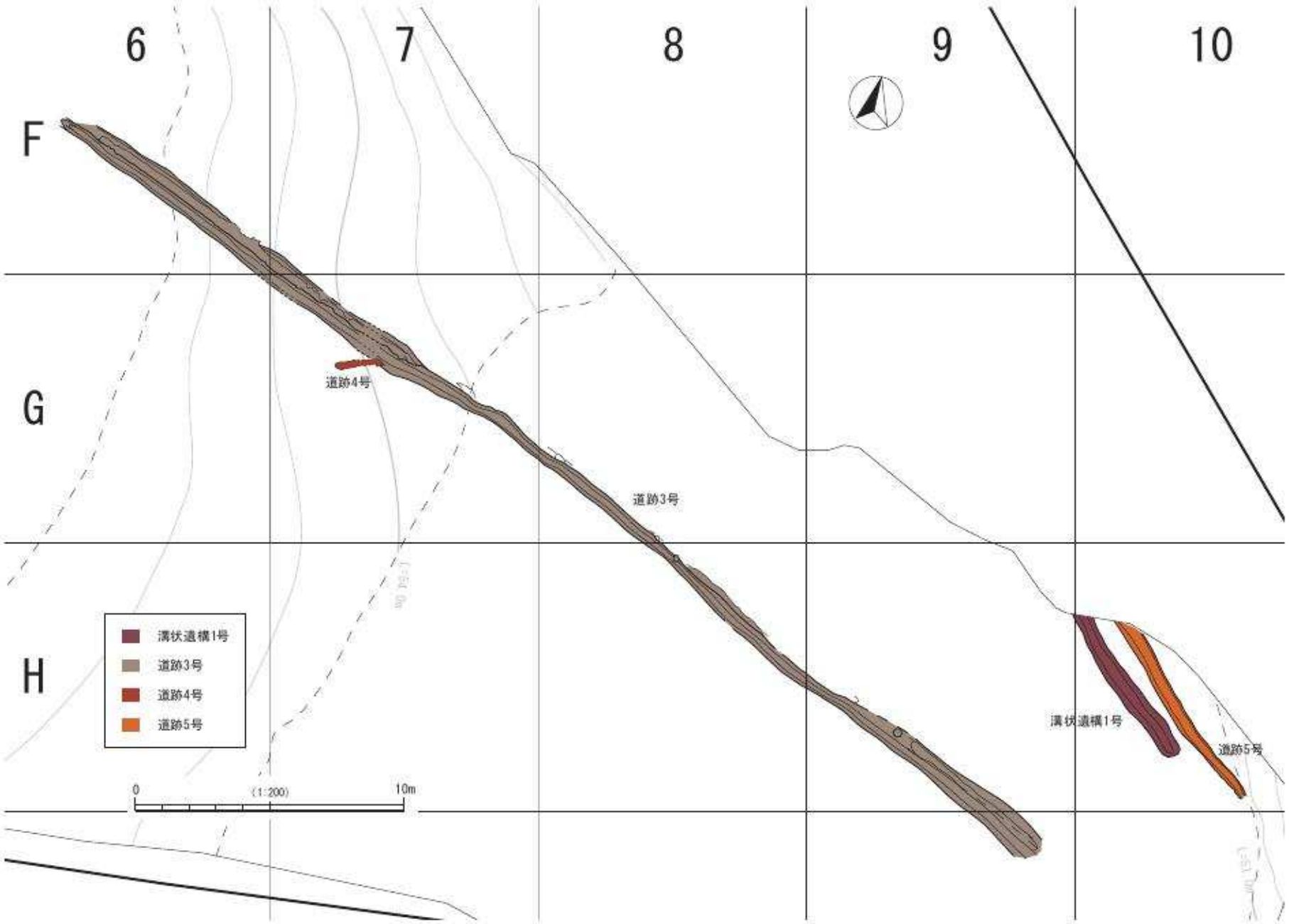
第 55 図　古代～中世遺構配置図１（地形図：Ｖ層上面）



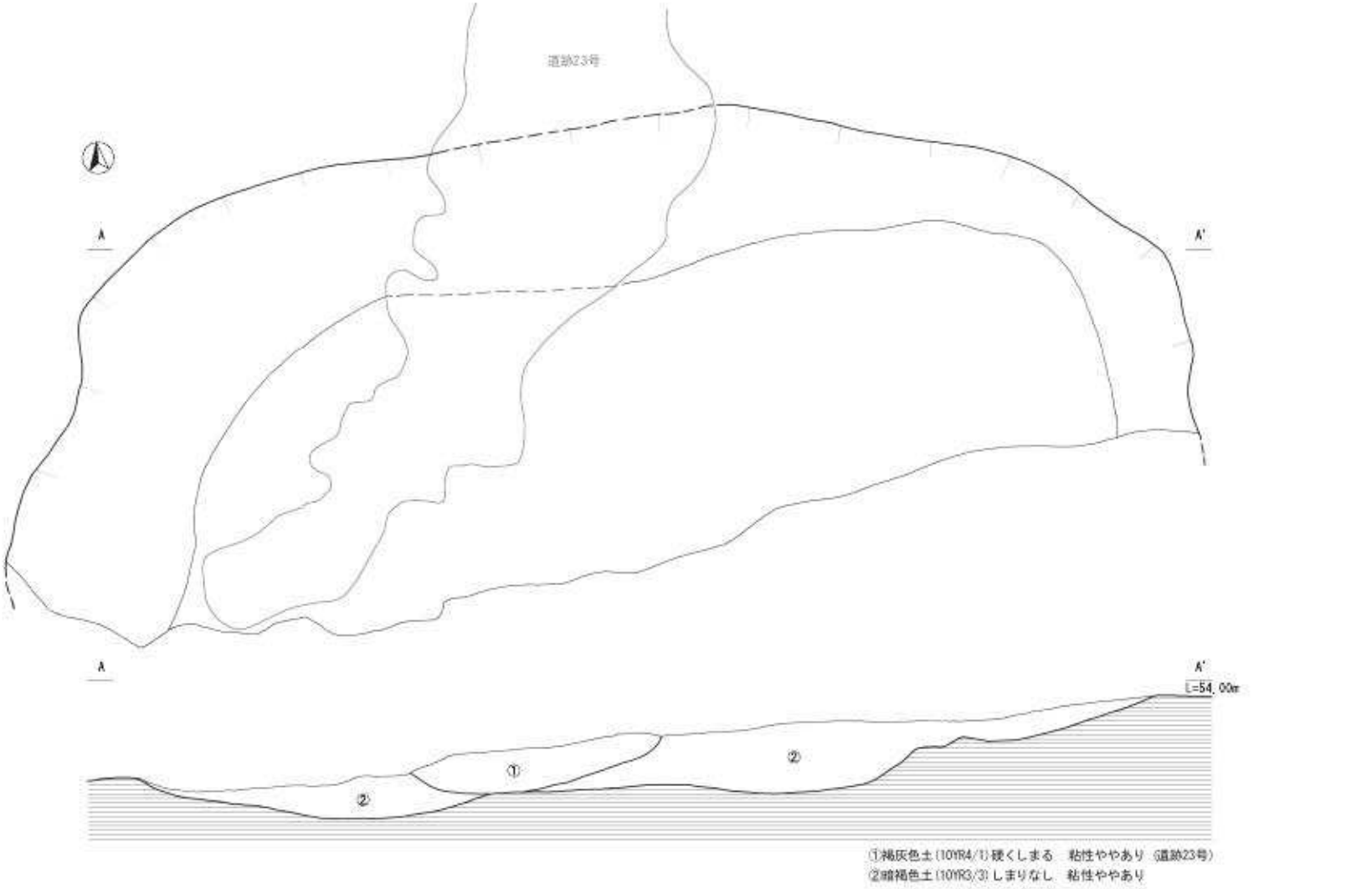
第 56 図　古代～中世遺構配置図２（地形図：Ⅴ層上面）



第57図　古代～中世遺構配置図３（地形図：Ⅴ層上面）



第 58 図　古代～中世遺構配置図４（地形図：Ⅴ層上面）


道跡23号
A
A'
A
A'
L=54.00m
①
②
②
①褐灰色土(10YR4/1)硬くしまる　粘性ややあり　(道跡23号)
②暗褐色土(10YR3/3)しまりなし　粘性ややあり
0
(1:20)
1m

第59図　土坑1号

る。埋土内から礫が密集して出土したが，床着ではないことから，流れ込みかもしくは廃棄礫と考えられる。

土坑４号（第63図）

検出状況　Ｃ－６区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは土坑８号と切り合っている。長軸約195cm短軸約84cmで，長方形に近い楕円形を呈する。最深部で約27cmを測る。埋土は２つに分層でき，褐色土と暗褐色土の混じり土と黒褐色土と黄褐色土の混じり土である。

土坑５号（第61図）

検出状況　Ｃ－６区のＶ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約163cm短軸約105cmの楕円形を呈する。最深部で16cmを測る。溝状遺構16号を切っている。南東側に土坑７号がある。埋土は暗褐色土を基調とし１cm程度の褐色土を含む。

土坑６号（第61図）

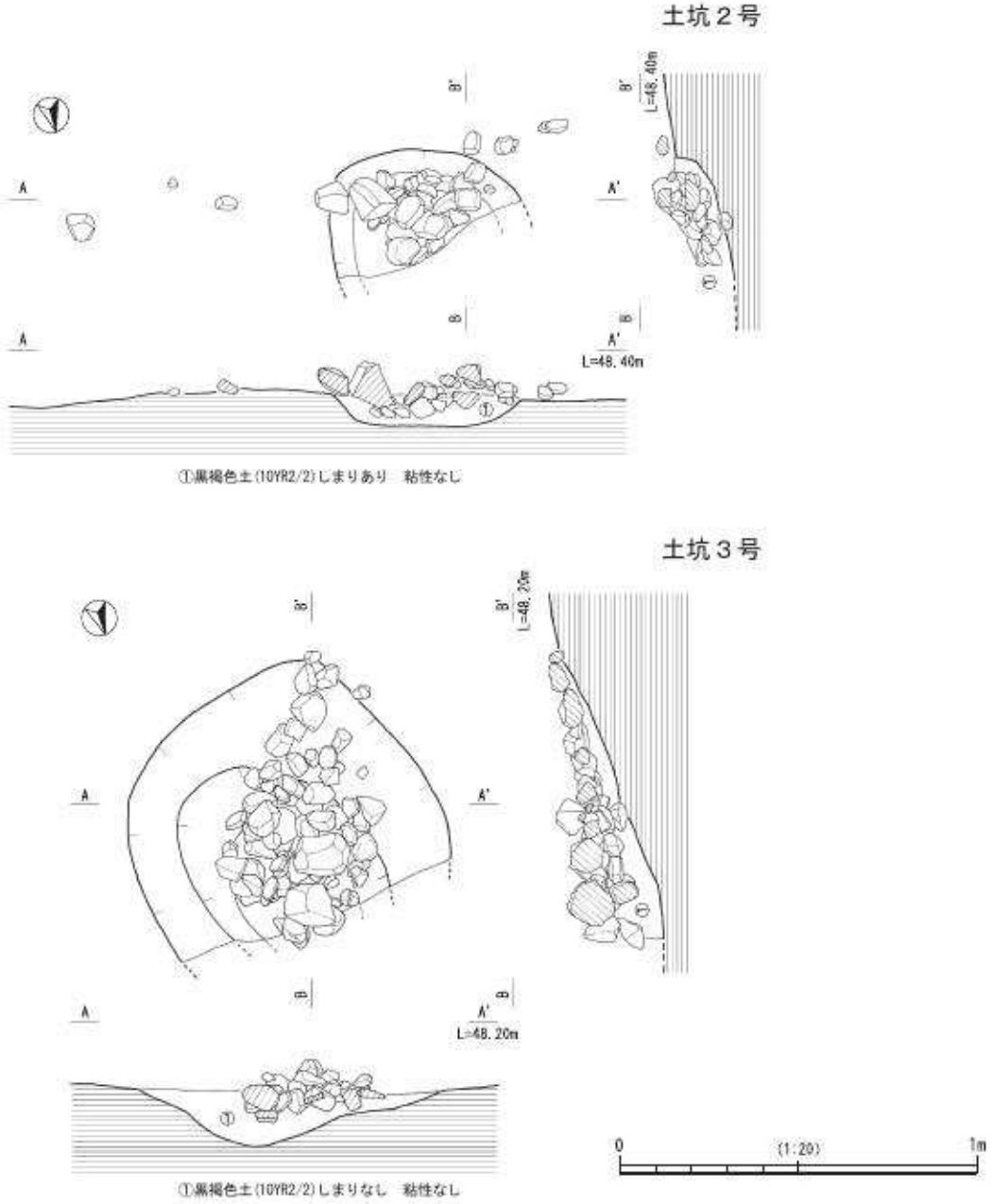
検出状況　Ｄ－６区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約128cm短軸約83cmの長方形に近い楕円形を呈する。最深部で約31cmを測る。溝状遺構３号上にある。埋土は黒褐色土に明黄褐色土のアカホヤ小ブロックを含んでいるものである。

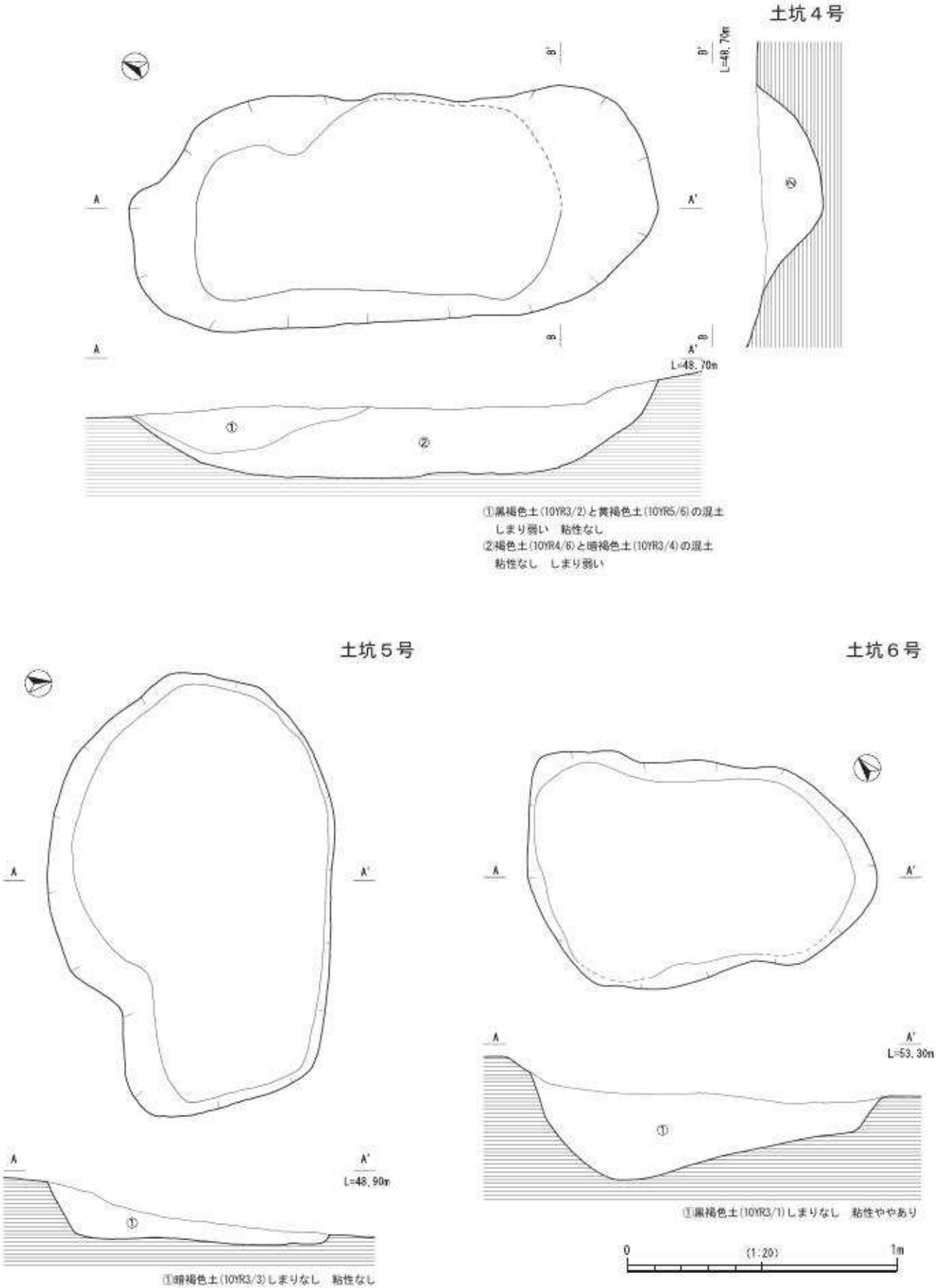
土坑７号（第62図）

検出状況　Ｃ－６区のＶ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約78cm短軸約65cmの楕円形を呈する。最深部で８cmを測る。溝状遺構16号を切っている。西側に土坑５号，南東方向に土坑８号がある。



第 60 図　土坑２・３号


土坑４号
B
B'
D
D'
L=48.70m
A
A'
①
②
①黒褐色土(10YR3/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土
しまり弱い　粘性なし
②褐色土(10YR4/6)と暗褐色土(10YR3/4)の混土
粘性なし　しまり弱い
土坑５号
L=48.90m
①暗褐色土(10YR3/3)しまりなし　粘性なし
土坑６号
L=53.30m
①黒褐色土(10YR3/1)しまりなし　粘性ややあり
0
(1:20)
1m

第61図　土坑４・５・６号

埋土は暗褐色土に１～５㎝程度の褐色土を含んでいる。

土坑８号（第62図）

検出状況　Ｃ－６区のＶ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは土坑４号と切り合っている。正確な形状は不明であるが，検出規模は長軸約103㎝短軸約95㎝で，楕円形を呈するものと思われる。最深部22㎝を測る。埋土は黒褐色土に１～５㎝程度の黄褐色土を含む。

土坑９号（第62図）

検出状況　Ｅ－５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約93㎝短軸約51㎝の長方形を呈する。最深部で約19㎝を測る。溝状遺構13号上にある。埋土は３つに分層でき，③灰黄褐色土にブロック状の②黄灰色土があり，その上位に①黒色土が堆積する。

土坑10号（第63図）

検出状況　Ｅ－４・５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約126㎝短軸約53㎝の楕円形を呈する。最深部で約55㎝を測る。溝状遺構12号，道跡12号上にある。西側半分は深く東側がテラス上に構築されている。埋土は，黒褐色土である。

土坑11号（第63図）

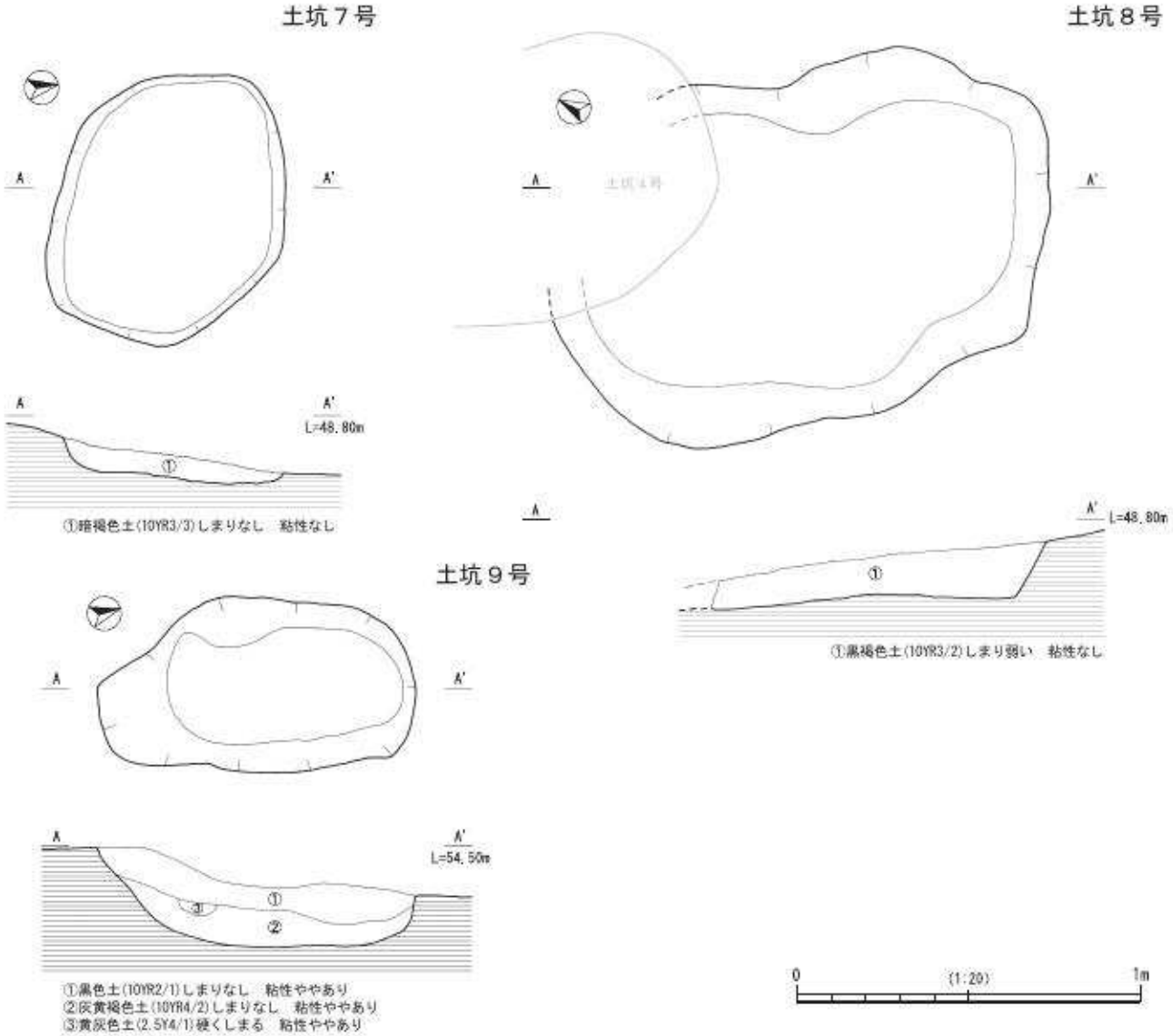
検出状況　Ｅ－５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約108㎝短軸約50㎝の楕円形を呈する。最深部で約66㎝を測る。溝状遺構12号上にあり道跡12号を切る。西側半分が深く，東側に傾斜しながらテラス上に構築されている。埋土は黒色土である。

土坑12号（第63図）

検出状況　Ｅ－４・５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　平面プランは長軸約81㎝短軸約42㎝の長方形に近い楕円形を呈する。最深部で約47㎝を測る。溝状遺構11号，道跡14号の南側，道跡13号の西側に位置する。西側半分が深く，東側がテラス上に構築されている。埋土は２つに分層でき，明黄褐色土のアカホヤブロックを含んだ灰黄褐色土層の上位に黒褐色土が堆積する。



第 62 図　土坑７・８・９号

溝状遺構１号（第64図）

検出状況　Ｈ－９・10区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約71cmを測る。深さは約６cmである。東側にカーブし，南東方向へ伸びる。北東側に道跡５号が並行する。硬化面が見られないために，溝状遺構と判断した。道跡５号との新旧関係は不明である。

溝状遺構２号（第64図）

検出状況　Ｊ－11区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　一部のみの検出に留まったため全体は不明である。A-A'間約125cm，最深部で約37cmを測る。東側に傾斜し，東西へ伸びるものと見られる。近世の溝状遺構７号に切られていることと，埋土から中世と判断した。

溝状遺構３号（第64図）

検出状況　Ｃ－３・４区Ｄ－４～６区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約116cm，深さは約24cm，約B-B'間約64cm，深さは約５cm，C-C'間約112cm，深さは約17cm，D-D'間約97cm，深さは約14cmを測る。A-A'からD-D'間にかけてカーブし，道跡24号の上位にあり東西方向へ伸びる。

溝状遺構４号（第65図）

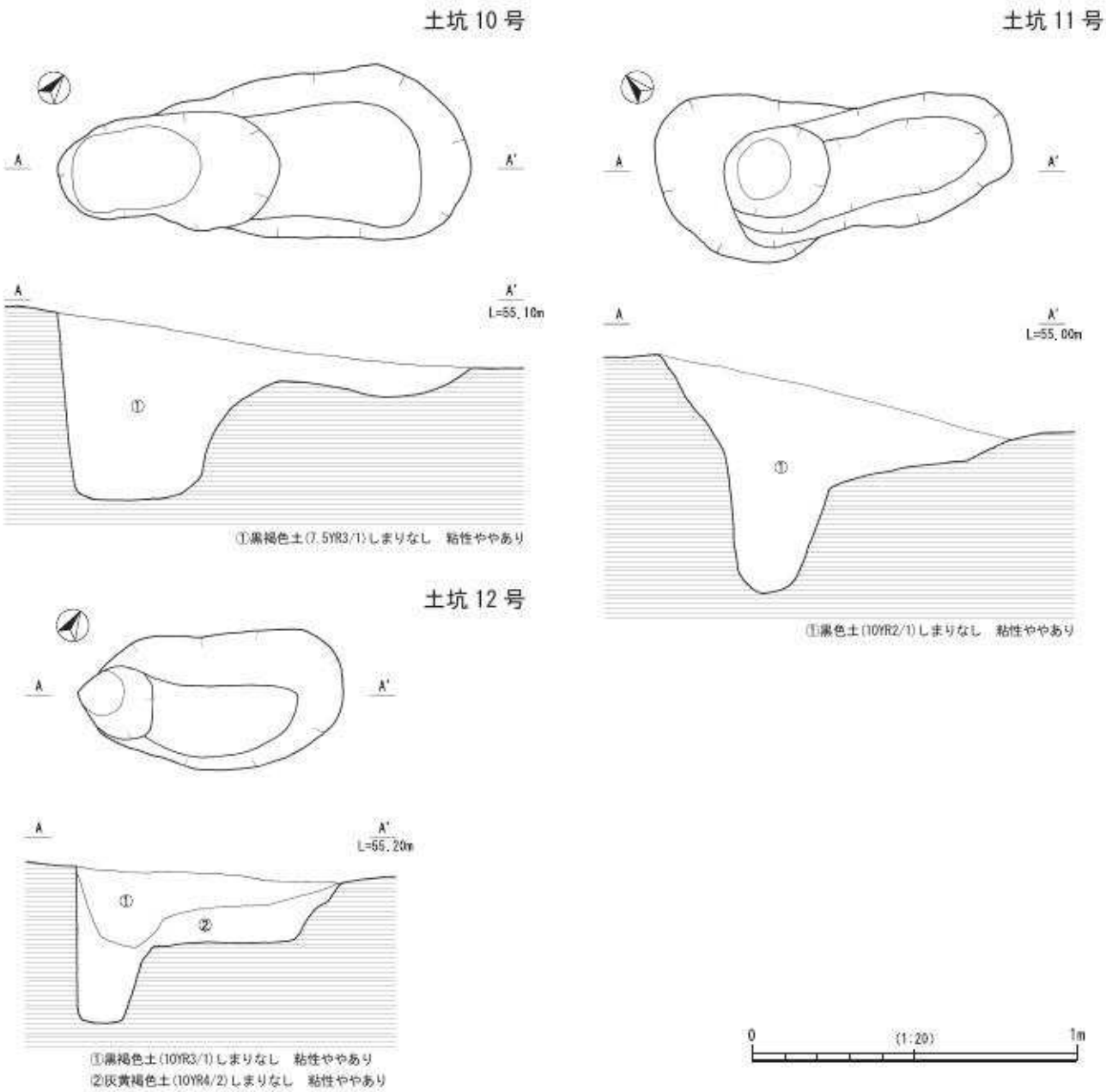
検出状況　Ｃ・Ｄ－４区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約35cm，深さは約６cm，約B-B'間約40cm，深さは約６cmを測る。上位に道跡11号，さらに道跡10号があり南北へ伸びる。溝状遺構５号と交わるが，埋土状況より溝状遺構５号より古いと判断した。

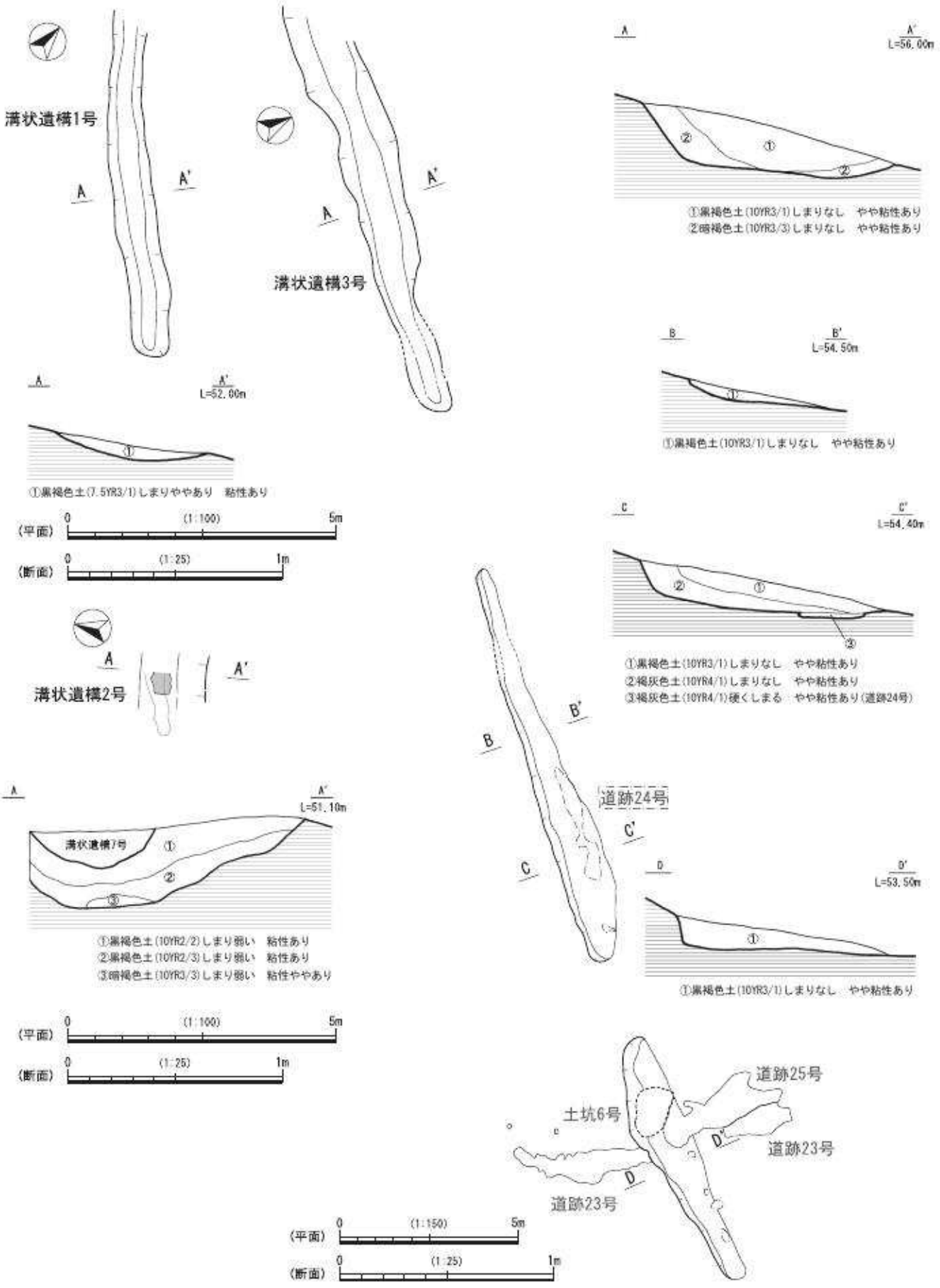
溝状遺構５号（第65図）

検出状況　Ｃ－４区のＶａ層上面で検出した。

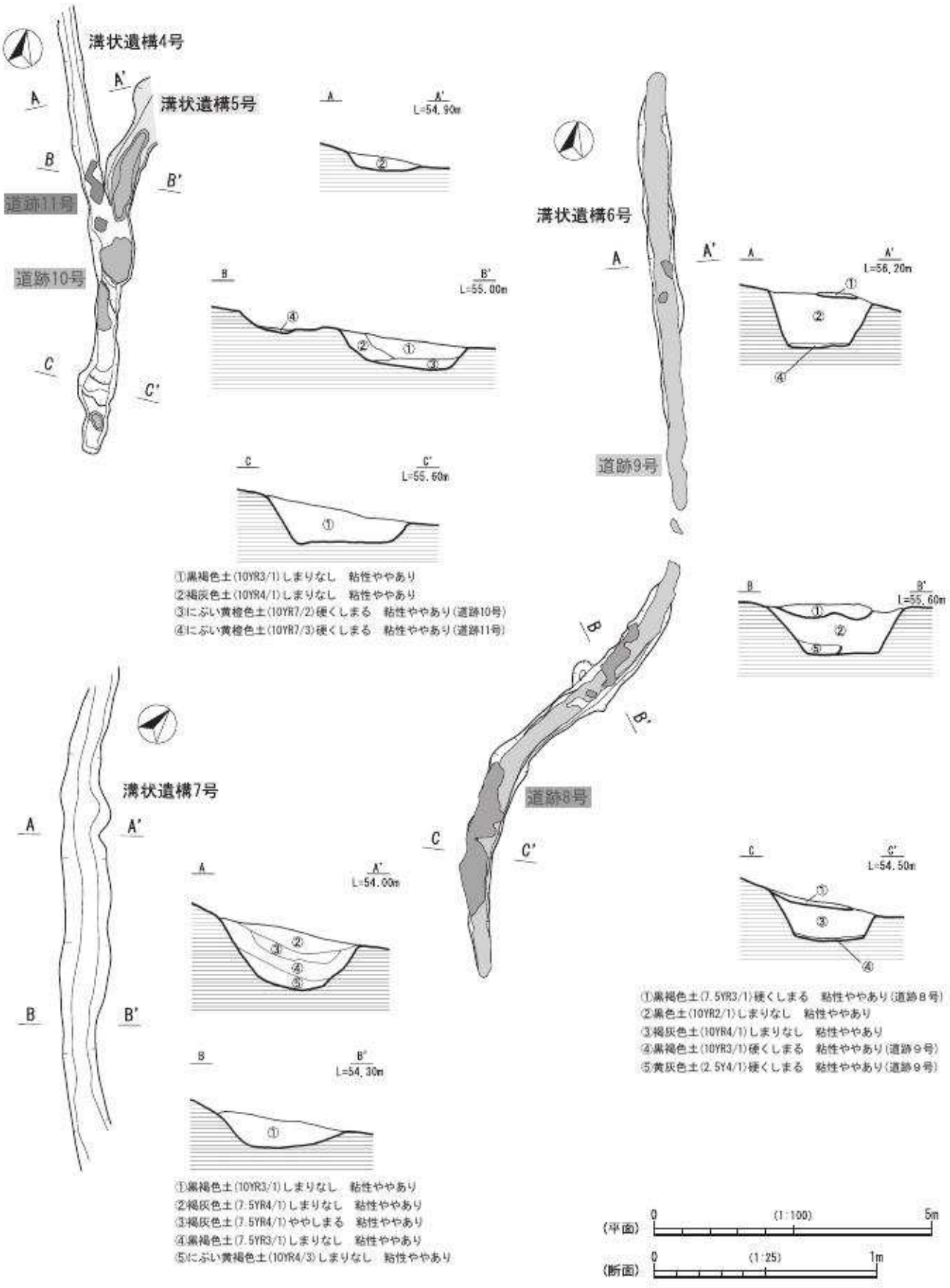
形状と規模　B-B'間約58cm，深さ約12cm，約C-C'間約62



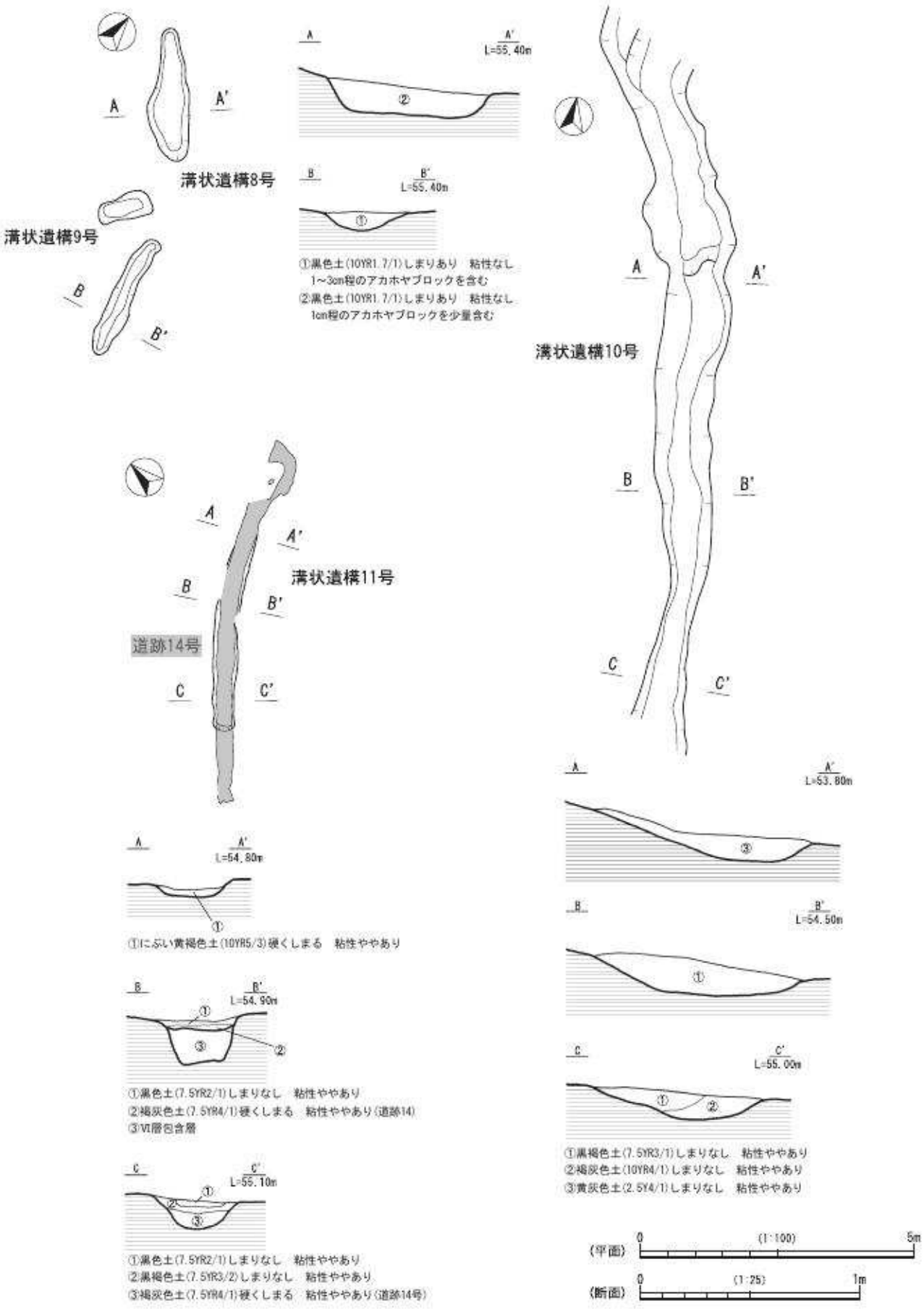
第 63 図　土坑 10・11・12 号



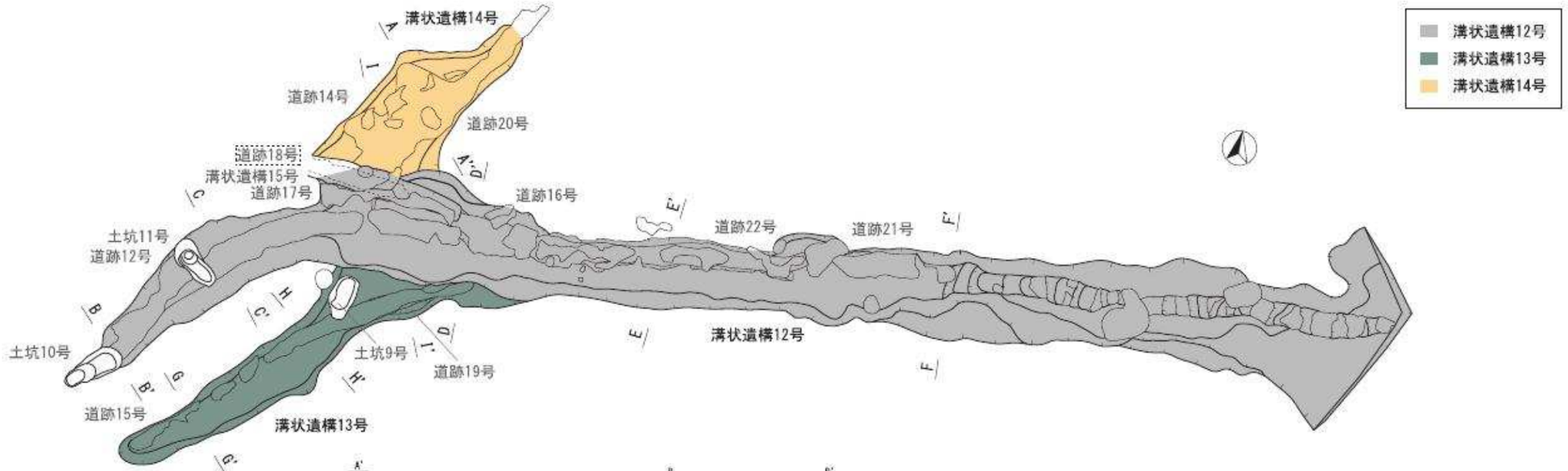
第 64 図　溝状遺構１・２・３号



第65図　溝状遺構4・5・6・7号



第66図　溝状遺構8・9・10・11号



第 67 図　溝状遺構 12・13・14 号

cm，深さ約19cmを測る。上位に道跡10号があり南北へ伸びる。溝状遺構４号と交わり，溝状遺構３号を切る。埋土状況により，溝状遺構４号より新しいと判断した。

溝状遺構６号（第65図）

検出状況　C・D－４区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約47cm，深さ約25cm，B-B'間約55cm，深さ約22cm，C-C'間約33cm，深さ約17cmを測る。A-A'からC-C'間でカーブしながら，南北方向へ伸びる。上位に道跡９号とさらにその上位に道跡８号がある。礫が２点出土した。

溝状遺構７号（第65図）

検出状況　C・D－４区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約63cm，深さ約26cm，B-B'間約58cm，深さ約14cmを測る。溝状遺構３号を切り，A-A'からB-B'間でカーブしている。調査区外から南東方向へ伸び，溝状遺構10号に切られている，交わる。

溝状遺構８号（第66図）

検出状況　D・E－４区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約73cm，深さ約15cm，B-B'間約39cm，深さ約9cmを測る。A-A'からB-B'間でカーブし，南北方向へ伸びる。

溝状遺構９号（第66図）

検出状況　D・E－４区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　南西から北東方向へ伸びており，検出規模は小さいが溝状遺構８号と交差していた可能性がある。

溝状遺構10号（第66図）

検出状況　C・D－４・５区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約101cm，深さ約12cm，B-B'間約94cm，深さ約12cm，C-C'間約78cm，深さ約12cmを測る。南から北方向へ下る。調査区外から南北方向へ伸び，溝状遺構７号と溝状遺構３号を切る。

溝状遺構11号（第66図）

検出状況　D－５区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約40cm，深さ約７cm，B-B'間約38cm，深さ約４cm，C-C'間約32cm，深さ約５cmを測る。道跡13号を切り，上位には道跡14号がある。東側に溝状遺構15号と道跡17号がありお互いに並行しながら東西方向へ伸びる。

溝状遺構12号（第67図）

検出状況　D・E－５区，E～７－６・７区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　B-B'間約69cm，深さ約３cm，C-C'間約148cm，深さ約19cm，I-I'間約55cm，深さ約12cm，D-D'間206cm，深さ約19cm，F-F'間約183cm，深さ約29cmを測る。B-B'からゆるやかに北東方向へカーブしながら，I-I'から東西へ直線的に伸び，土坑10号に切られ，上位に道跡12号がある。I-I'間では溝状遺構13号を切り，溝状遺構15号と交わるが新旧関係は不明である。また，I-I'間では，道跡21号を道跡18号が切り，上位に溝状遺構15号，道跡22号がある。さらに道跡16号，道跡17号がある。E-E'間で土坑１号に切られる。

溝状遺構13号（第67図）

検出状況　E－５区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　G-G'間約76cm，深さ約６cm，H-H'間約105cm，深さ約20cmを測る。南西方向から，北東方向へ伸び，溝状遺構12号に切られる。上面に道跡15号と道跡19号がある。

溝状遺構14号（第67図）

検出状況　D－５区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約188cm，深さ約21cm，I-I'間約124cm，深さ約12cmを測る。A-A'からI-I'間はほぼ水平である。南北方向へ伸び，溝状遺構15号に切られる。上位に道跡20号と道跡14号がある。

溝状遺構15号（第68図）

検出状況　D・E－５区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約71cm，深さ約６cm，B-B'間約42cm，深さ約２cm，A-A'からB-B'間で北東方向に，B-B'からI-I'間で東西へ伸びる。A-A'からB-B'にかけて傾斜し，B-B'からI-I'間はほぼ水平である。上位に道跡18号があり，道跡17号，溝状遺構11号を切り，溝状遺構12号に交わる。上位に道跡16号と道跡17号がある。ほぼ同レベルに溝状遺構14号，道跡20号，道跡22号がある。

溝状遺構16号（第68図）

検出状況　C－６区のV層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約67cm，深さ約7cm，C-C'間約40cm，深さ約10cm，C-C'間約62cm，深さ約10cm，D-D'間約55cm深さ９cmを測る。A-A'からD-D'間はほぼ水平で東西方向へ伸びる。土坑４号と土坑８号を切り，土坑５号と土坑７号に切られている。

道跡１号（第69図）

検出状況　D・E－３・４区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約70cm，B-B'間約48cm，C-C'間約34cmを測る。A-A'からB-B'間は，ほぼ水平であり，B-B'からC-C'間で傾斜し南東方向へ伸びる。古墳時代の道跡２号，溝状遺構１号の上面にある。

道跡２号（第70図）

検出状況　E－３～６区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約210cmを測る。東側に傾斜し，東西方向へ伸びる。硬化面の状況より中世から近代まで使用されていた可能性がある。北東方向へ伸びる道跡15号と交わる。遺物は自然礫が２点出土した。

道跡３号（第71図）

検出状況　F～K－６～12区のVａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約106cm，B-B'間約95cm，C-C'間約300cmを測る。A-A'からC-C'間にかけて傾斜し南東方向へ伸びる。C-C'間は道跡７号と切り合いが見られる。埋

土状況により道跡７号より古いと判断した。

道跡４号（第71図）

検出状況　Ｇ－７区Ⅳ層で検出した。

形状と規模　最大幅約32cmで西側から傾斜し，東西方向へのび，道跡３号へ交わる。

道跡５号（第72図）

検出状況　Ｈ－10区Ｖａ層で検出した。

形状と規模　A-A'間約55cmで北側から傾斜し南西側の18cm程度上面に溝状遺構１号があり並行し，南東方向へ伸びる。

道跡６号（第55・72図）

検出状況　Ｊ－10・11区のＶａ層上面から検出した。

形状と規模　A-A'間約150cmを測り，北東側から南東方向へ伸び，道跡３号と交差する。道跡３号より下位に硬化面が見られることから道跡３号以前に利用されていた可能性がある。

道跡７号（第71図）

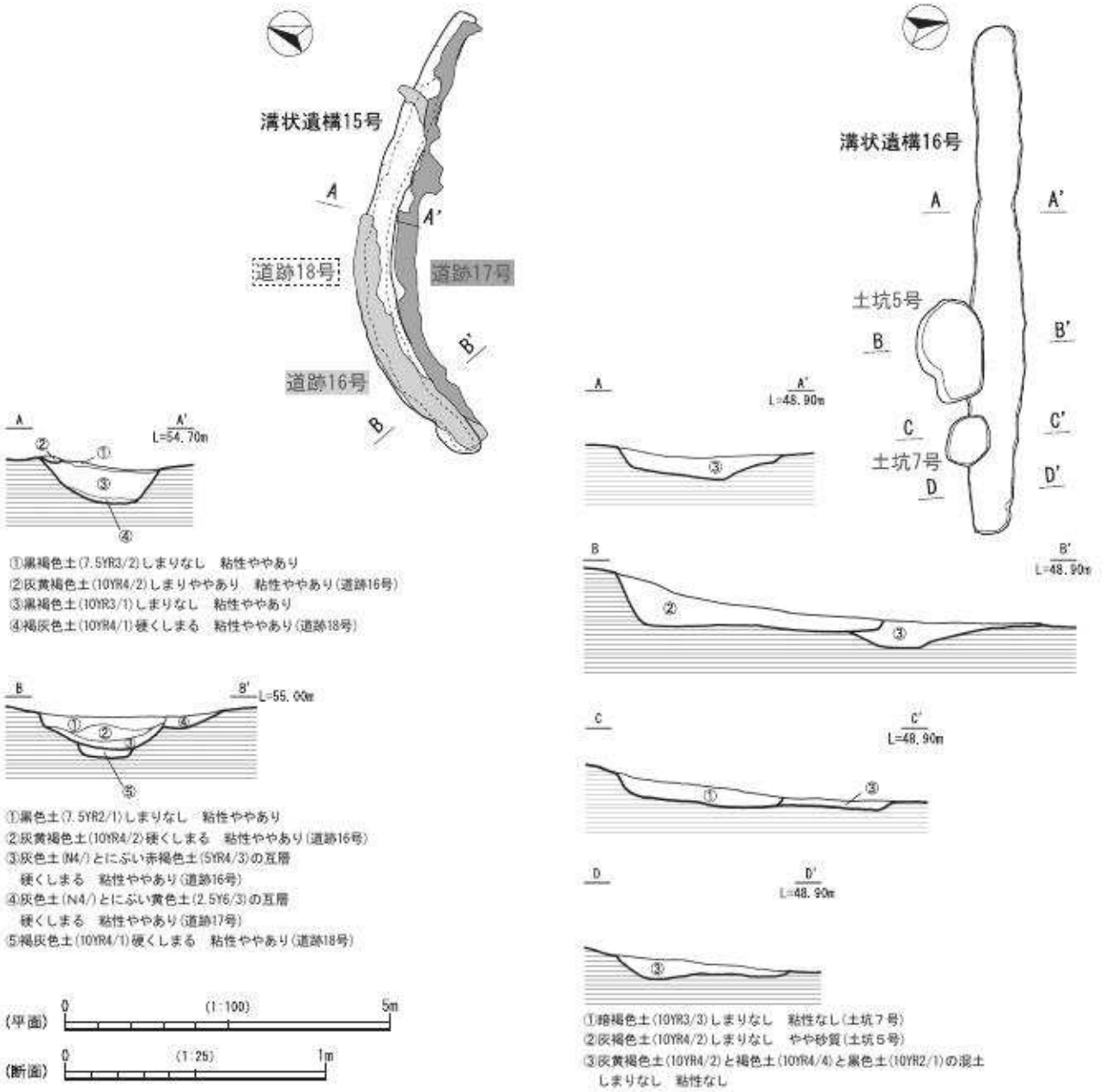
検出状況　K－12区のⅢ層上面で検出した。

形状と規模　一部の検出のみのため全容は不明である。道跡３号と切り合いが見られる。南北方向に伸びているが調査区外のため不明である。

道跡８号（第56図）

検出状況　Ｃ・Ｄ－３・４区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　幅は約34cm～37cmを測る。中央部付近でゆるやかにカーブしながら，南北方向へ伸びる。溝状遺構６号・道跡９号の上位に形成されている。



第 68 図　溝状遺構 15・16 号

道跡９号（第56図）

検出状況　Ｃ・Ｄ－４区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　幅は約25cm～約32cmを測る。傾斜して，南北方向へ伸びる。溝状遺構６号の上位，道跡８号の上位間に形成されている。

道跡10号（第56図）

検出状況　Ｃ・Ｄ－４区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　最大幅は約40cmを測る。北から南北へ伸びる。溝状遺構５号内に形成された硬化面である。レベル差から道跡11号は，道跡10号より新しいと判断した。

道跡11号（第56図）

検出状況　Ｃ・Ｄ－４区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　幅12cmを測る。北から南へ伸びる。溝状遺構４号内に形成された硬化面である。道跡10号と溝状遺構５号との新旧関係は，レベル差から道跡10号よりも新しいと判断した。

道跡12号（第56図）

検出状況　Ｄ・Ｅ－５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　最大幅約58cmを測る。北東方向から，ゆるやかに西方向へ伸びている。溝状遺構12号内の硬化面であり，道跡22号と交わる可能性がある。

道跡13号（第56図）

検出状況　Ｄ－５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　溝状遺構11号に切られている。南東方向へ伸びていたものと考えられる。

道跡14号（第56図）

検出状況　Ｄ・Ｅ－４・５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　道幅は14cm～40cmを測る。南西から，北東方向へ伸びる。溝状遺構11号と重なる硬化面である。道跡20号・溝状遺構14号と交わる。レベル差から道跡14号が新しいと判断した。

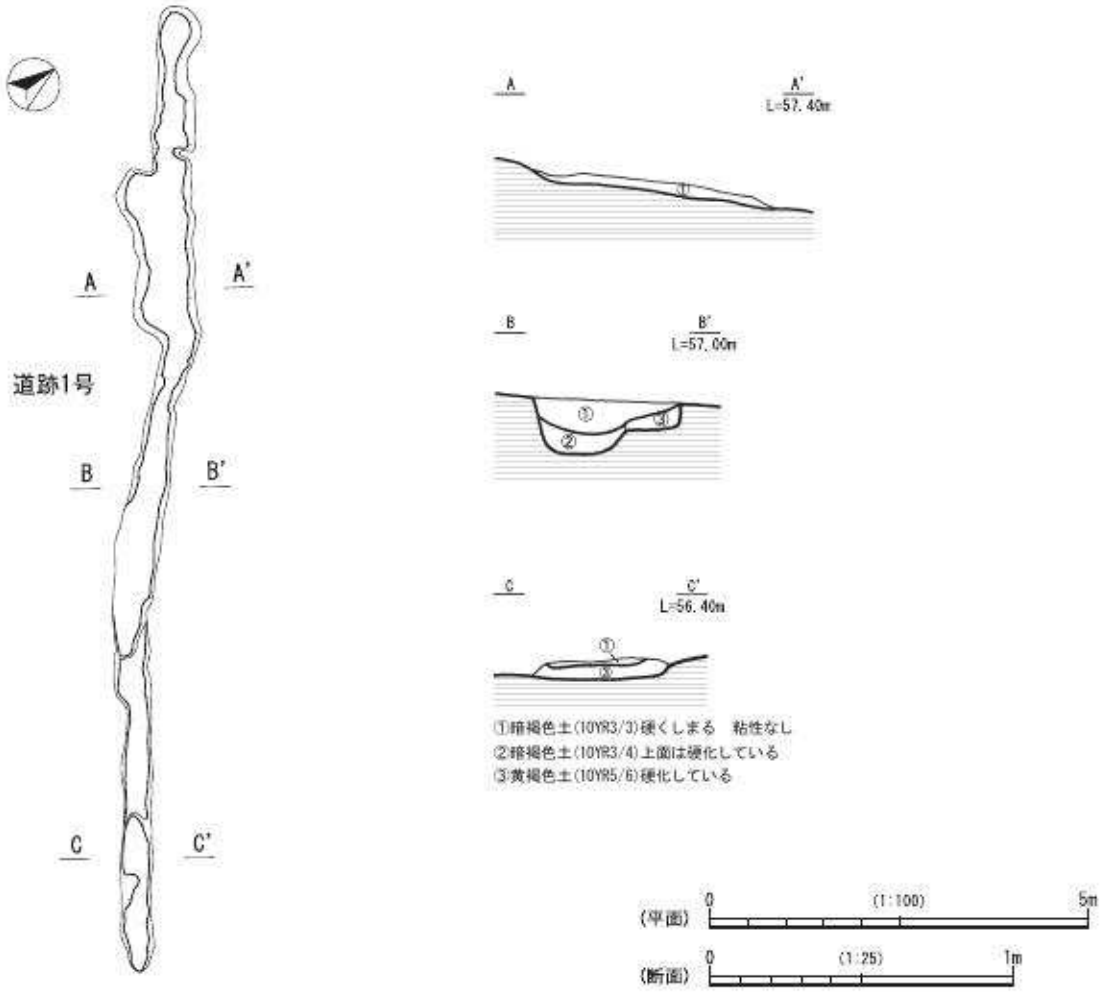
道跡15号（第56図）

検出状況　Ｅ－５区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　最大幅は約47cmを測る。南西から北東方向へ伸びる。道跡12号と並行し溝状遺構12号と交わる。溝状遺構13号の上位に形成された硬化面である。道跡19号と切り合っており，レベル差から道跡19号より新しいと判断した。

道跡16号（第56図）

検出状況　Ｄ・Ｅ－５・６区のＶａ層上面で検出した。



第 69 図　道跡１号

形状と規模　幅は約14cmを測る。南西から北東へ伸び傾斜する。溝状遺構15号の上位に形成された硬化面である。溝状遺構12号に交わり，道跡17号と並行しながら東端で道跡21号へ接する。

道跡17号（第56図）

検出状況　D・E－5区のVa層上面で検出した。

形状と規模　道跡16号に切られ，正確ではないが，道幅は20cm前後を測る。溝状遺構15号の上位に形成された硬化面である。溝状遺構12号と道跡16号に並行する形で東西へ伸びる。切り合い関係から道跡16号より，新しいと判断した。

道跡18号（第56図）

検出状況　D・E－5区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　幅は40cmを測る。北東から南西方向へ伸びていたと考えられる。南端で溝状遺構15号に交わる。道跡16・17号が溝状遺構15号より上位にある。レベル差から道跡16・17号より古いと判断した。

道跡19号（第56図）

検出状況　E－5区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　幅は約18cm～45cmを測る。北東方向へ伸びる。溝状遺構13号の上位に形成された南西からの硬化面である。上位には道跡15号がある。レベル差から道跡15号より古いと判断した。

道跡20号（第56図）

検出状況　D－5区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　最大幅は約155cmを測る。南西から北東方向へ伸びる。溝状遺構14号内に形成された硬化面である。道跡14号より下位にあり，道跡14号より古いと判断した。

道跡21号（第56図）

検出状況　D・E－5区，E－6・7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　幅は32cm～62cmを測り，南西から東北方向でゆるやかに曲がり，東方向へ伸びる。溝状遺構12号内に形成された硬化面である。道跡12・15・18・17・19号，溝状遺構13・14号と道跡23号が交わる。上位に道跡22号がある。

道跡22号（第56図）

検出状況　D・E－5区・E－6区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　幅は32cm～55cmを測る。I-I'間，E-E'間で西から傾斜して，東西方向へ伸びる。途中土坑1・3号に切られる。溝状遺構12号の硬化面である。道跡21号より上面にある。

道跡23号（第56図）

検出状況　D・E－5・6区のVa層上面で検出した。

形状と規模　最大幅は約80cmを測る。南北方向へ伸び溝状遺構3号をはさんで，溝状遺構12号，道跡21号と交わる。

道跡24号（第56図）

検出状況　D－5・6区のⅢ層上面で検出した。

形状と規模　幅は約31cmを測る。溝状遺構3号の硬化面である。

道跡25号（第56図）

検出状況　D－6区のVa層上面で検出した。

形状と規模　南北方向へ伸び，道跡23号と切り合いが見られ，南端で溝状遺構3号と交わる。

道跡26号（第57図）

検出状況　B－6・7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　幅は約31cmを測る。調査区外から南西方向へ伸びる。道跡27号と並行し埋土状況から道跡27号より古いと判断した。

道跡27号（第57図）

検出状況　B－6・7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　幅は約18cmを測る。調査区外から南西方向へ伸びる。道跡26号と並行して埋土より道跡26号より新しいと判断した。

道跡28号（第57図）

検出状況　B・C－7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　最大幅約33cmを測る。調査区外から南東方向へ伸びる。道跡30号と切り合い関係にあり，硬化面が道跡30号より上位にあることから，道跡29号より新しいと判断した。

道跡29号（第73図）

検出状況　C－7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約37cmを測る。調査区外から道跡30号を切り南北方向へ伸びる。硬化面が道跡28号より下位にあることから，道跡28号より古いと判断した。

道跡30号（第73図）

検出状況　B・C－7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約41cm，B-B'間約35cmを測る。道跡28・29号に切られ東西方向へ伸びる。

道跡31号（第73図）

検出状況　C－7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　幅は約46cmを測る。南北方向へ伸びる。硬化面が二面あり，道跡26・27号より上位にあることから新しいと判断した。また，北側の道跡28号との関連も考えられたが，レベル差から別遺構と判断した。

道跡32号（第73図）

検出状況　B・C－7区のⅣ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約58cmを測る。道跡30号を切り，南北方向へ伸びる。

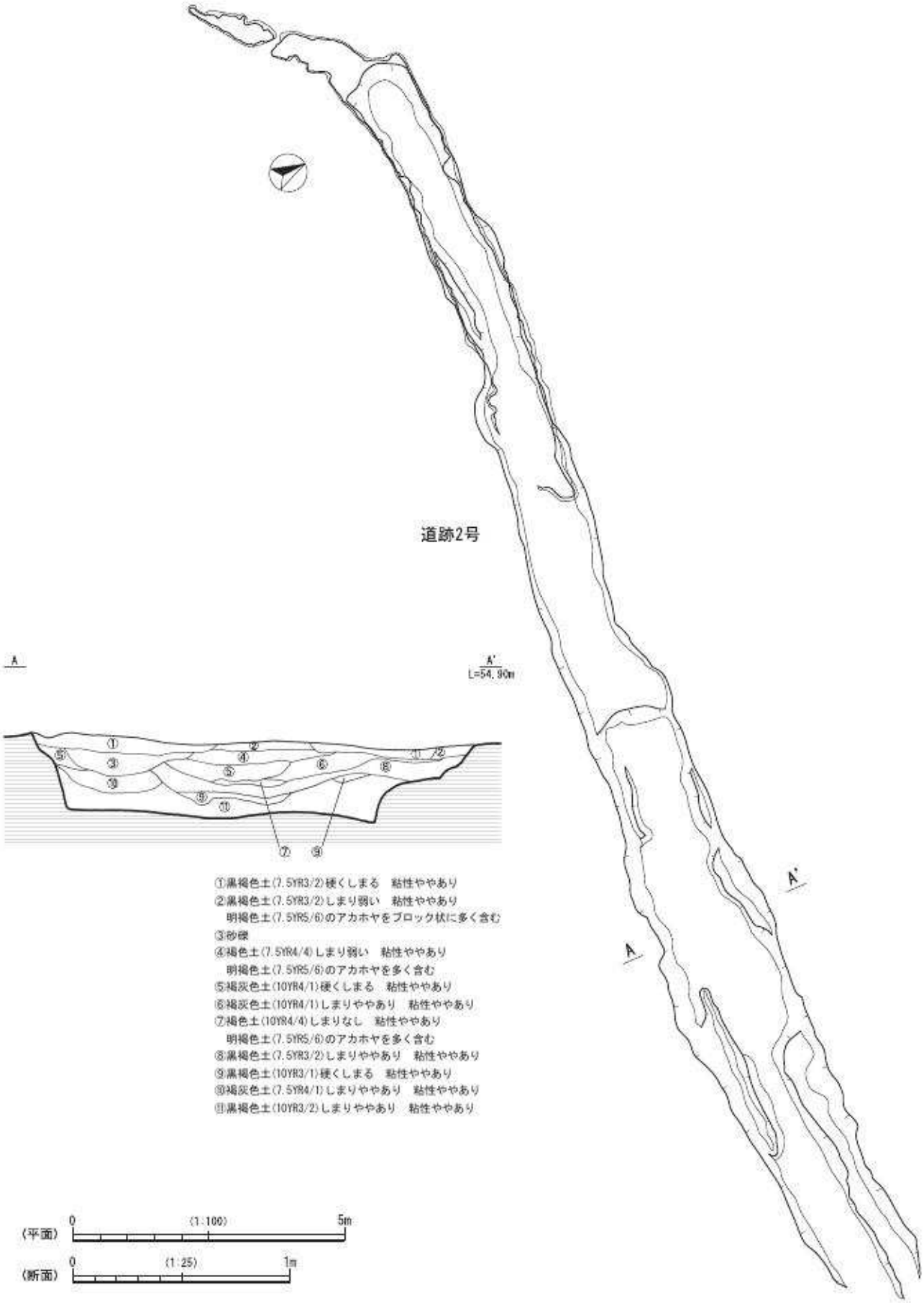
道跡33号（第57図）

検出状況　C－7区のⅢ層上面で検出した。

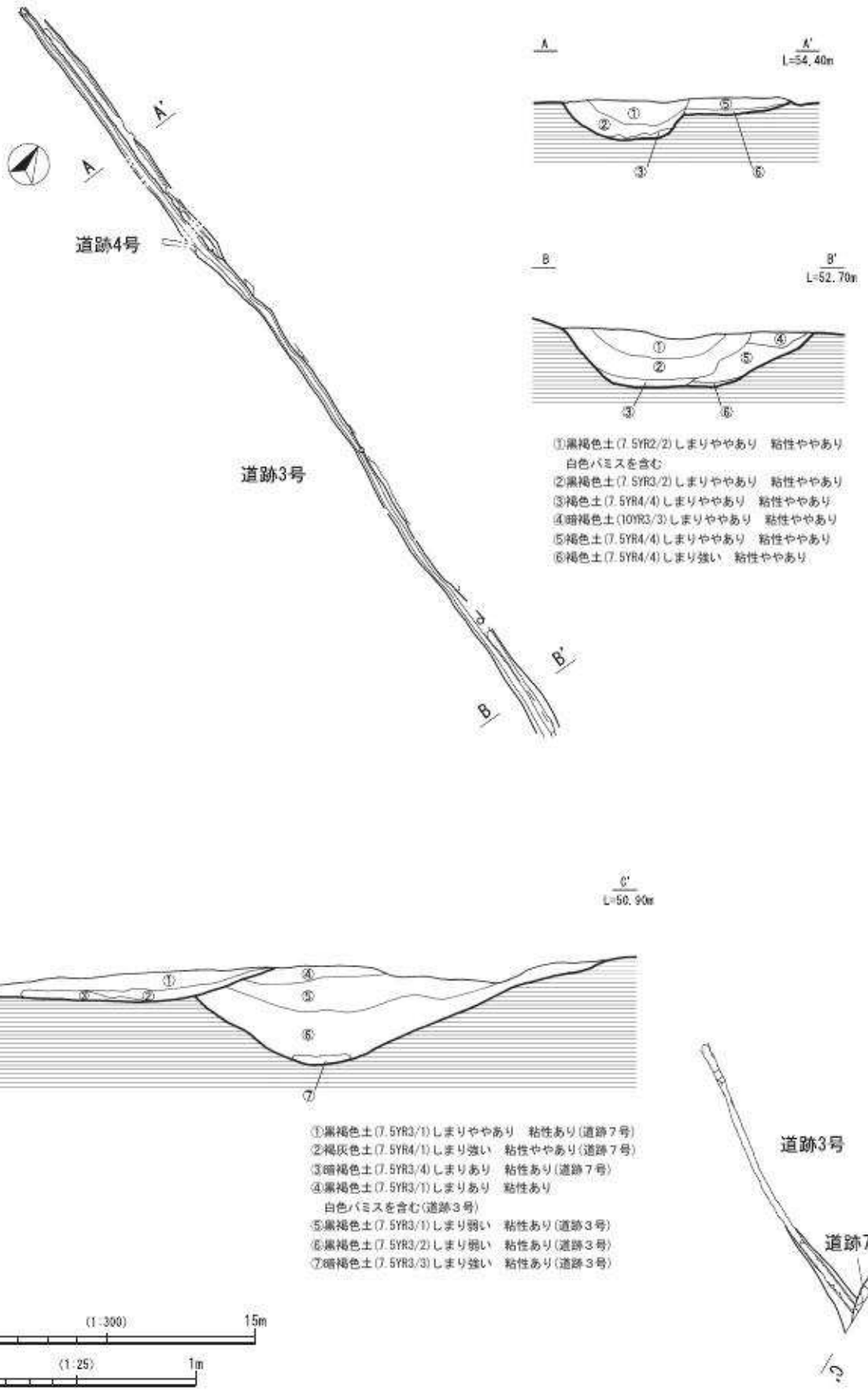
形状と規模　最大幅は約54cmを測る。北東方向へ2条伸びる。埋土状況からこの2条の遺跡は同一遺構と判断した。

道跡34号（第57図）

検出状況　C－7区のVa層上面で検出した。


道跡2号
A
A'
L=54.90m
A'
A
①黒褐色土(7.5YR3/2)硬くしまる　粘性ややあり
②黒褐色土(7.5YR3/2)しまり弱い　粘性ややあり
明褐色土(7.5YR5/6)のアカホヤをブロック状に多く含む
③砂礫
④褐色土(7.5YR4/4)しまり弱い　粘性ややあり
明褐色土(7.5YR5/6)のアカホヤを多く含む
⑤褐灰色土(10YR4/1)硬くしまる　粘性ややあり
⑥褐灰色土(10YR4/1)しまりややあり　粘性ややあり
⑦褐色土(10YR4/4)しまりなし　粘性ややあり
明褐色土(7.5YR5/6)のアカホヤを多く含む
⑧黒褐色土(7.5YR3/2)しまりややあり　粘性ややあり
⑨黒褐色土(10YR3/1)硬くしまる　粘性ややあり
⑩褐灰色土(7.5YR4/1)しまりややあり　粘性ややあり
⑪黒褐色土(10YR3/2)しまりややあり　粘性ややあり
(平面) 0 (1:100) 5m
(断面) 0 (1:25) 1m

第 70 図　道跡２号


A
A'
L=54.40m
B
B'
L=52.70m
道跡4号
道跡3号
①黒褐色土(7.5YR2/2)しまりややあり　粘性ややあり
白色パミスを含む
②黒褐色土(7.5YR3/2)しまりややあり　粘性ややあり
③褐色土(7.5YR4/4)しまりややあり　粘性ややあり
④暗褐色土(10YR3/3)しまりややあり　粘性ややあり
⑤褐色土(7.5YR4/4)しまりややあり　粘性ややあり
⑥褐色土(7.5YR4/4)しまり強い　粘性ややあり
C
C'
L=50.90m
①黒褐色土(7.5YR3/1)しまりややあり　粘性あり(道跡７号)
②褐灰色土(7.5YR4/1)しまり強い　粘性ややあり(道跡７号)
③暗褐色土(7.5YR3/4)しまりあり　粘性あり(道跡７号)
④黒褐色土(7.5YR3/1)しまりあり　粘性あり
白色パミスを含む(道跡３号)
⑤黒褐色土(7.5YR3/1)しまり弱い　粘性あり(道跡３号)
⑥黒褐色土(7.5YR3/2)しまり弱い　粘性あり(道跡３号)
⑦暗褐色土(7.5YR3/3)しまり強い　粘性あり(道跡３号)
道跡3号
道跡7号
(平面)
0
(1:300)
15m
(断面)
0
(1:25)
1m

第71図　道跡３・４・７号

形状と規模　道跡30号の下位にあり，東西方向へ伸びる。

道跡35号（第73図）

検出状況　Ｃ－８区のＶａ層上面で検出した。

形状と規模　A-A'間約21cmを測る。北側に道跡36号があるが新旧関係は不明である。

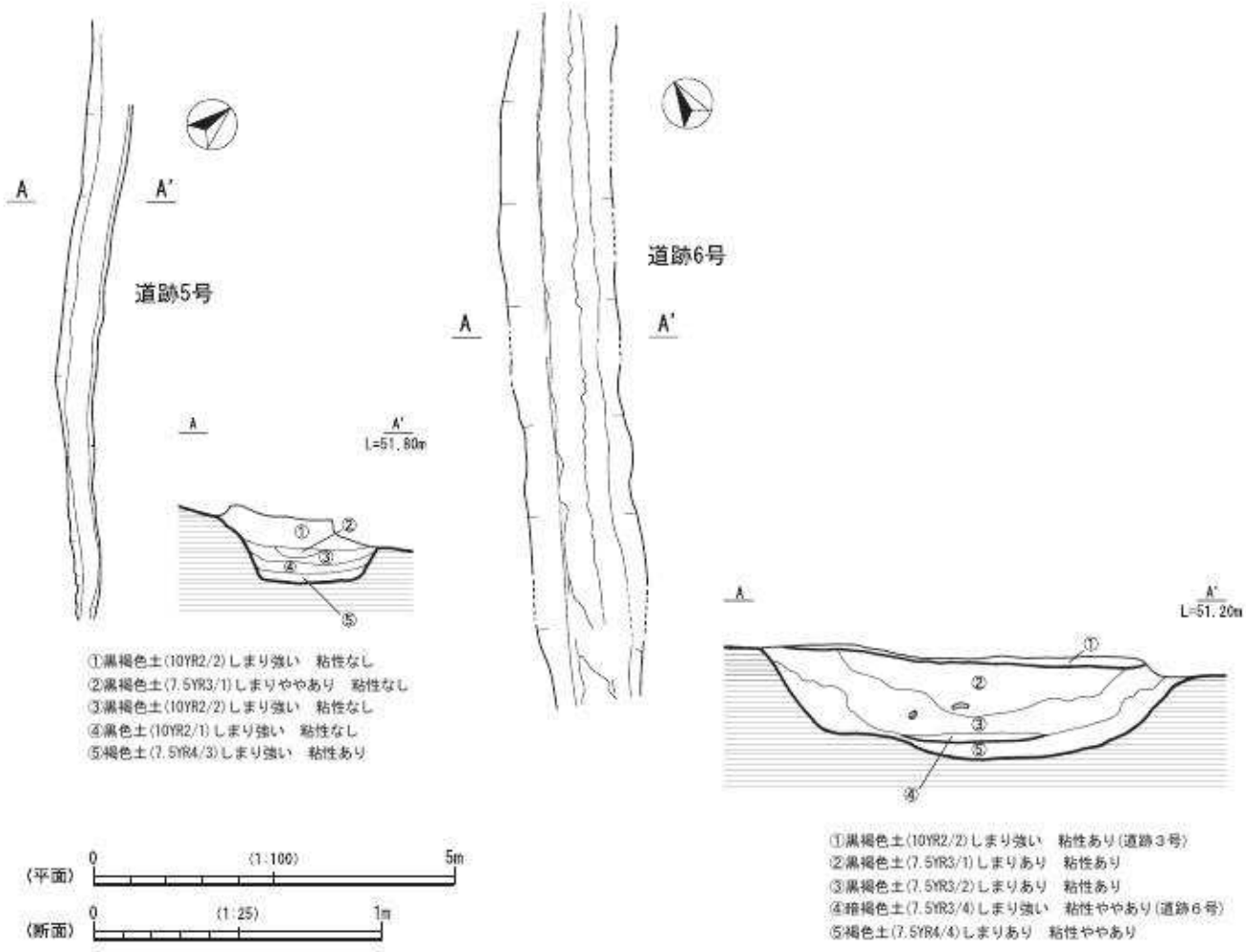
道跡36号（第73図）

検出状況　Ｃ－８区のⅣ層上面で検出した。

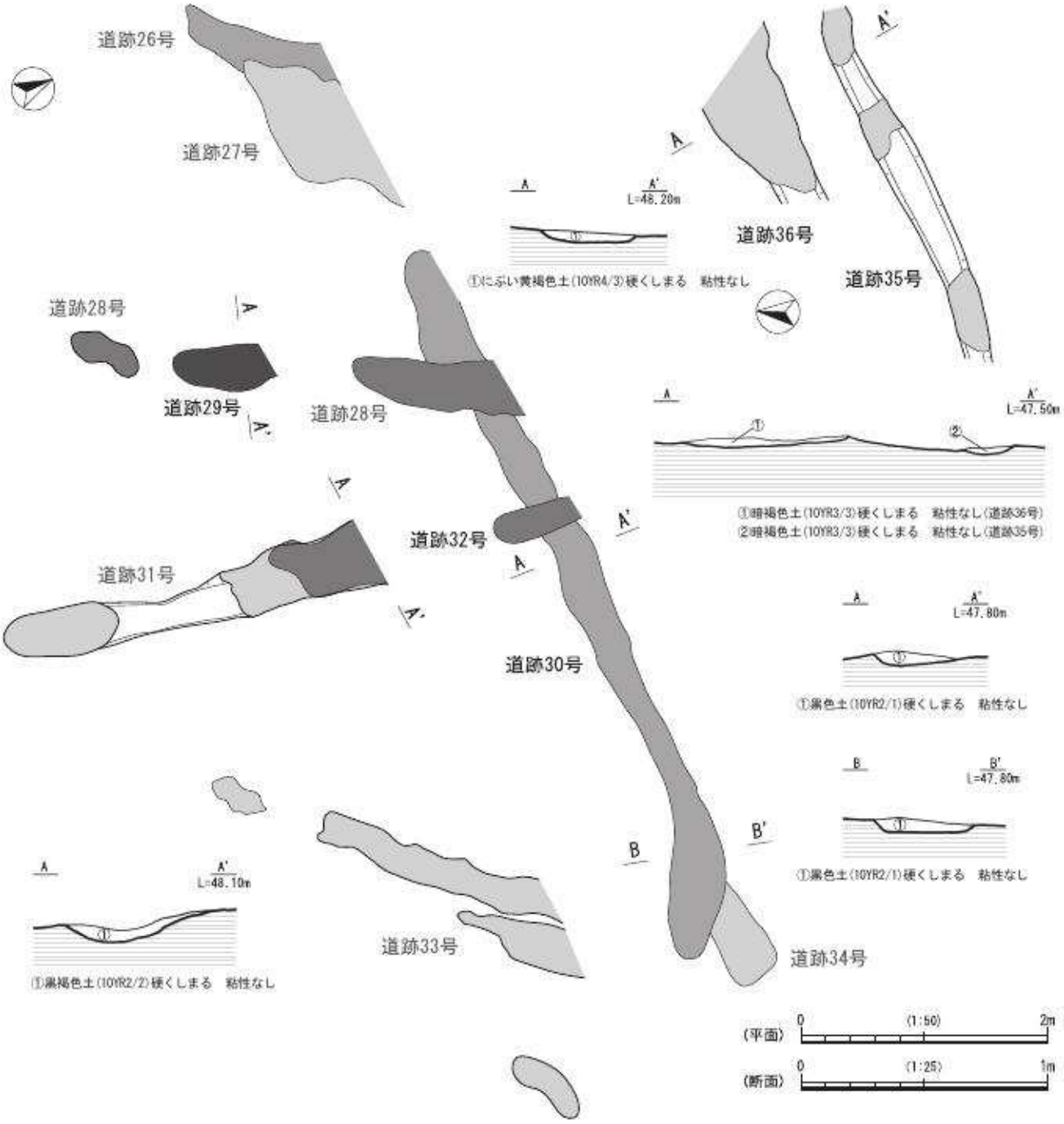
形状と規模　A-A'間約66cmを測る。南側に道跡35号がある。新旧関係は不明である。

３　遺物

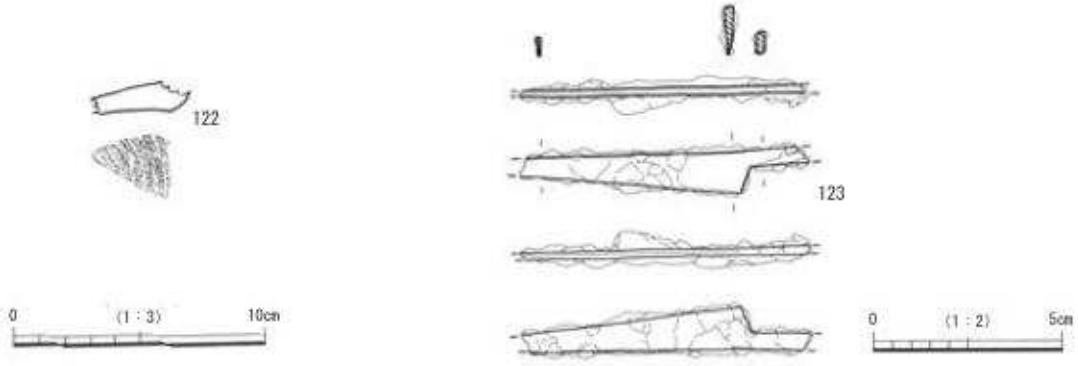
122は土師皿である。Ｅ－２・３区Ⅳ層より出土した。糸切り底であることから中世の遺物であると考えられる。123は、中世の刀子である。Ｃ－８区Ⅳ層より出土した。錆化によりわずかに屈曲する。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅を持つ。関部は方関である。深さは約７㎜を測る。断面は刀部が平造り，茎部は長方形を呈する。



第 72 図　道跡５・６号



第 73 図　道跡 29・30・32・35・36 号



第 74 図　中世出土遺物

第６節　近世の調査成果

１　調査の概要

近世の遺構は土坑１基，溝状遺構７条，道跡２条を検出した。遺物は薩摩焼が出土した。

２　遺構

土坑１号（第75図）

検出状況　Ｃ－７区のＶａ層上面で検出した。

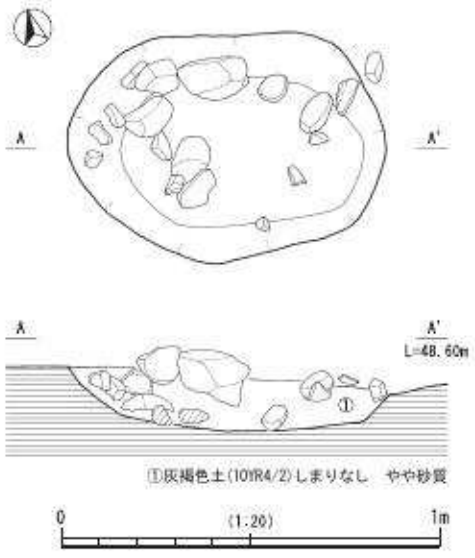
規　　模　長軸約84cm，短軸約60cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深部で約13cmである。

出土遺物　埋土内からは自然礫が多数出土した。それらの礫はススや被熱をした痕跡のものは確認できない。また，礫にはレベル差があり，密な出土状況ではないことから，流れ込みと考えられる。埋土は単一で，色調やしまりから，近世の土坑と判断した。

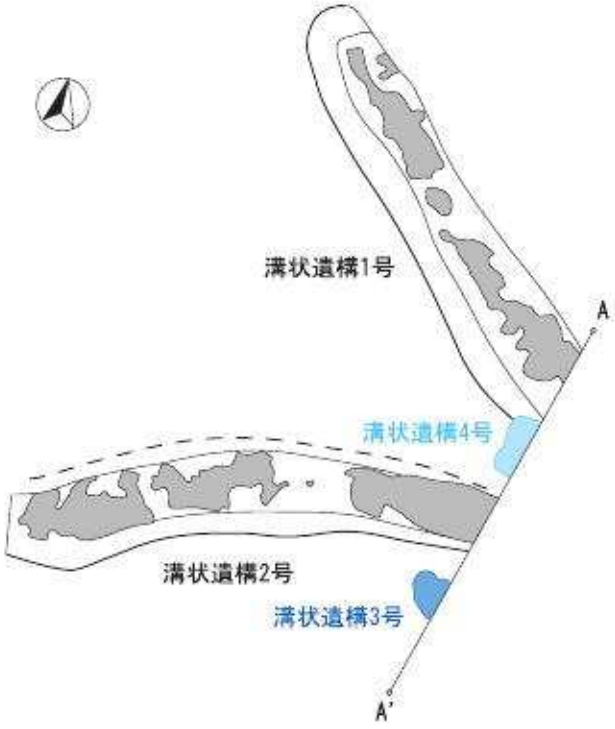
溝状遺構１・２・３・４号（第76図）

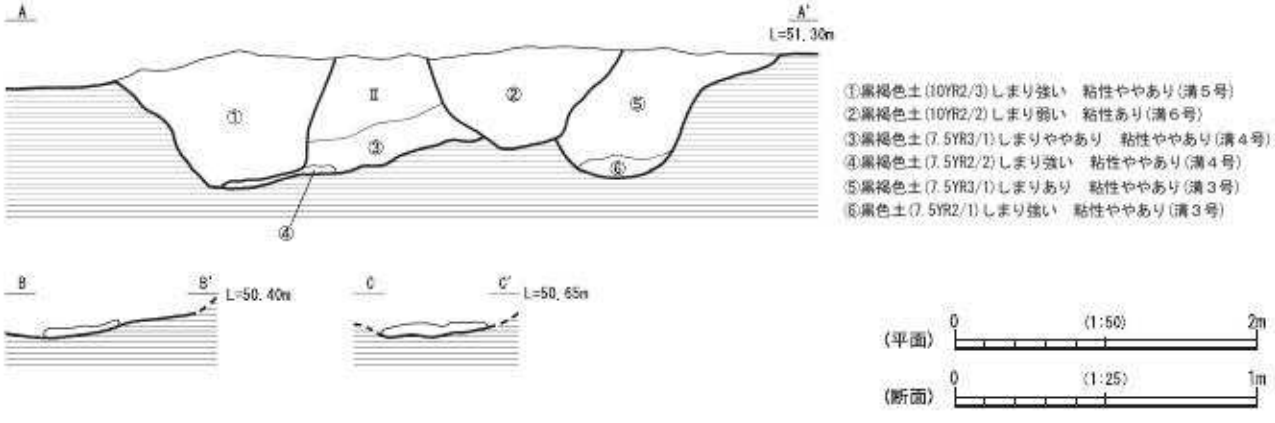
検出状況　Ｈ・Ｉ－10区のＶａ層上面で検出した。溝状遺構１に対応する断面はB-B'で，溝状遺構２号に対応する断面はC-C'である。また，溝状遺構３・４号は，硬化面のみの検出であり，溝状遺構５・６号は断面のみの検出で平面は検出することができなかった。調査当初，溝状遺構６号は，溝状遺構１・２号の断面に対応するとみて完掘を行ったが，レベル値が対応せず，上層にある別遺構と判断した。

規　　模　溝状遺構１・２号は部分的に硬化面が残る。溝状遺構４号の幅は約230cmを測る。溝状遺構５・６号は断面のみ検出した。溝状遺構５号は幅約67cm，検出

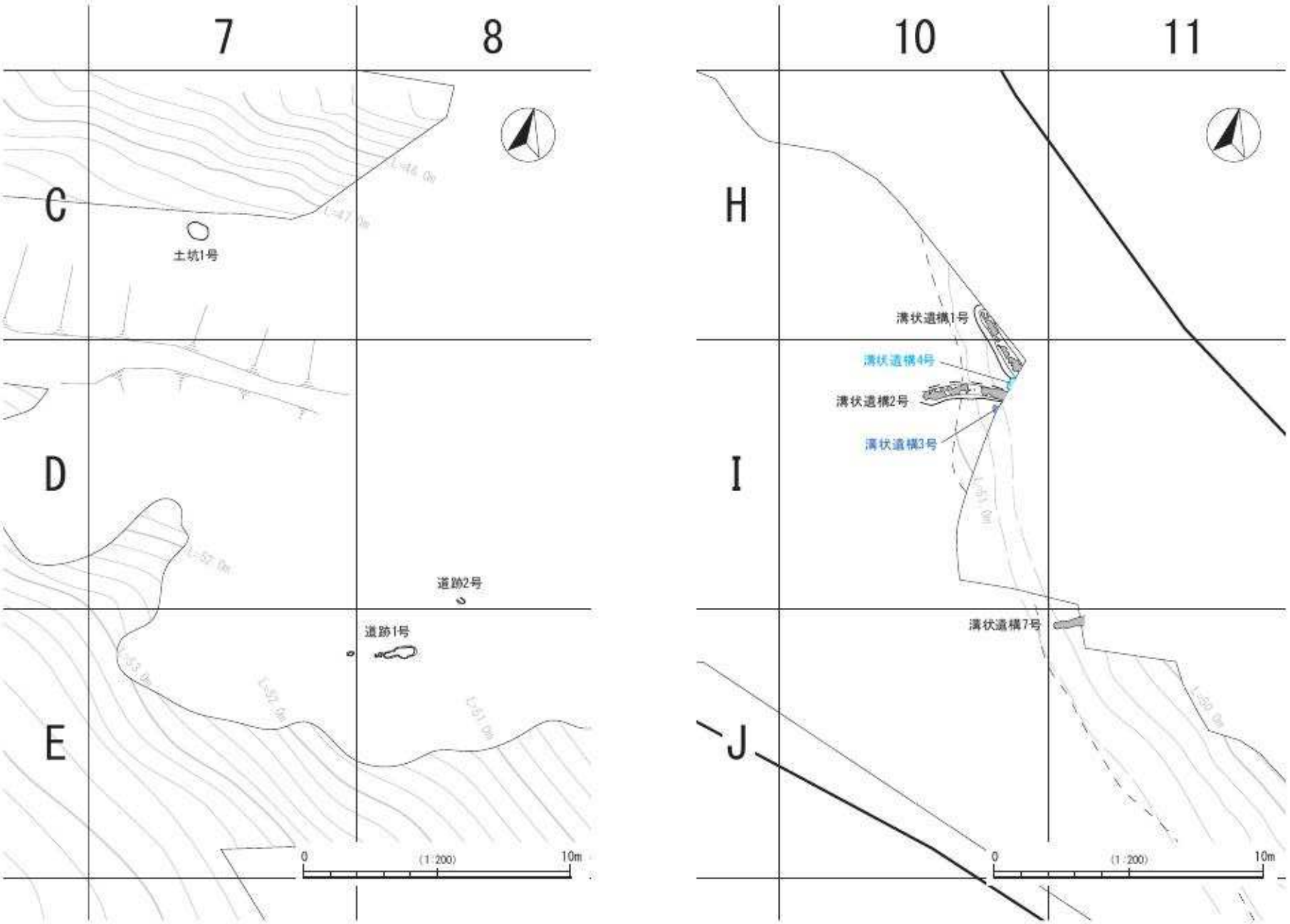


第 75 図　土坑１号





第 76 図　溝状遺構１・２・３・４号



第 77 図　近世遺構配置図（地形図：Ⅴ層上面）

面からの深さは約42cmを測り，溝状遺構６号は幅約61cm，検出面からの深さは約33cmを測る。

形成順序はまず溝状遺構３号，溝状遺構４号その後，溝状遺構５号と６号が形成されているが，新旧関係は不明である。

溝状遺構７号（第78図）

検出状況　Ｊ－11区のⅣ層上面で検出した。

規　　模　硬化面のみの検出である。埋土は２つ分層することができる。出土遺物無し。

道跡１号（第77図）

検出状況　Ｅ－８区，道跡２号の南側のシラス層上面で検出した。

規　　模　調査区の東側で検出した道跡である。硬化面がまばら状に広がる道跡である。古代・中世の時期の道跡21号に沿うように形成されている。出土遺物無し。

道跡２号（第77図）

検出状況　Ｅ－８区で検出した。

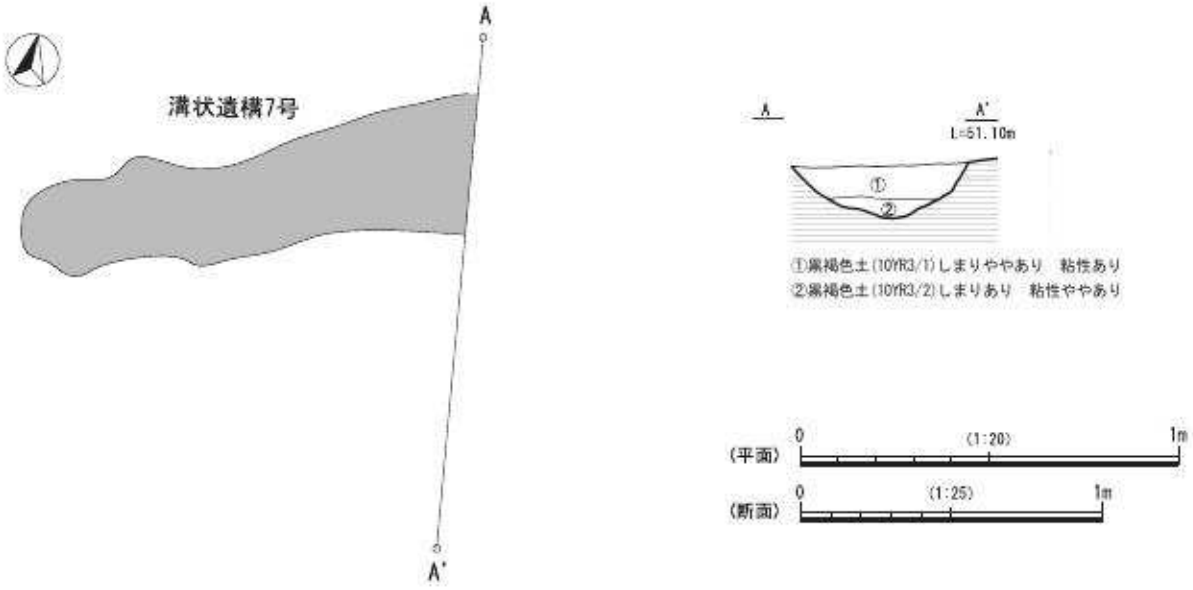
規　　模　検出規模は長さ約24cm，幅約22cm，一番厚い部分は３cmを測る。

３　遺物（第79図　124）

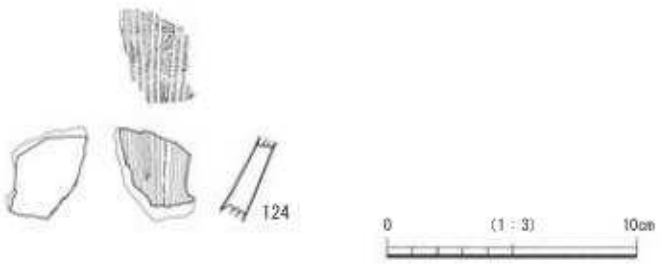
124は薩摩焼きの擂鉢で胴部である。胎土には白色粒をわずかに含んでおり，鉄釉を施釉する。時期は17世紀後半～18世紀後半と考えられる。

第７節　ピット群（第 80 図）

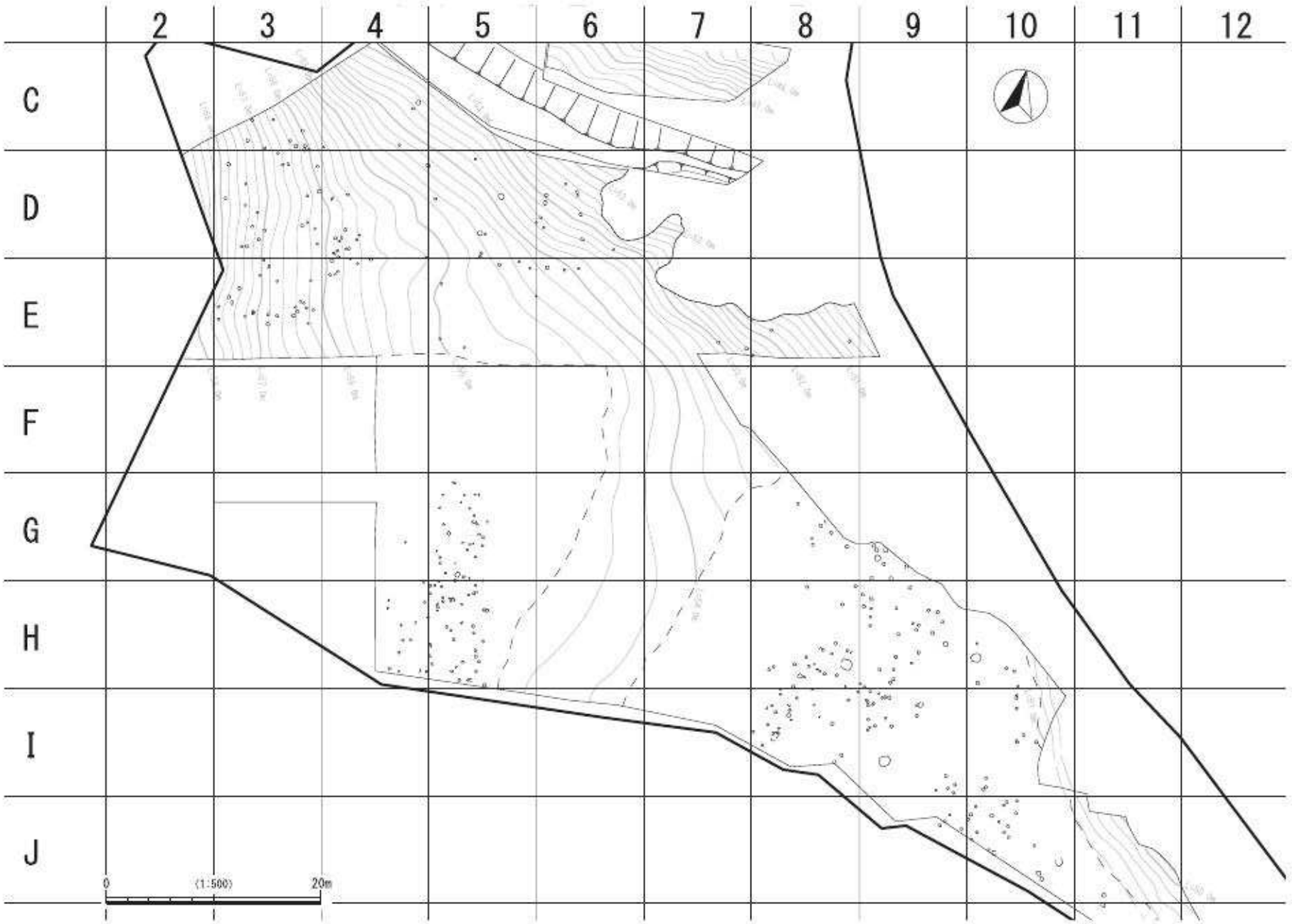
Ｖａ層～Ⅵ層上面にかけて計358基検出された。Ｃ～Ｅ－３～８区，Ｇ・Ｈ－４・５区，Ｇ～Ｊ－８～11区にまとまりがあるが、削平を受けていない部分のみにあたる。いずれもピット内からの出土遺物はない。埋土は黒褐色土の単一か，もしくは黒褐色土と灰褐色土の2つに区分でき，しまりは弱い。断面形状がいびつなことや，時期を判定する遺物が出土しなかったことから，時期を特定することは控え，ピット群として配置図のみ示した。



第 78 図　溝状遺構７号



第 79 図　近世出土遺物



第 80 図　ピット群（地形図：Ⅴ層上面）

第４表　旧石器時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層　位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備　考
9	1	三稜尖頭器	頁岩a	H-9	Ⅸb	(2.30)	1.15	0.70	2.1	94696	
	2	三稜尖頭器	頁岩a	G-8	Ⅸb	(3.12)	1.80	1.22	5.4	94721	
	3	三稜尖頭器	頁岩b	G-8	Ⅸc	(3.19)	1.45	1.12	5.1	94800	
	4	三稜尖頭器	頁岩b	G-8	Ⅸa	(3.43)	1.59	1.06	6.4	94730	
	5	三稜尖頭器	頁岩c	G-8	Ⅸb	6.10	1.79	1.63	7.7	94792, 94777	
	6	三稜尖頭器	頁岩a	H-8	Ⅸa	(3.61)	2.00	1.21	8.1	94727	
	7	石錐	頁岩a	H-8	Ⅸb	(4.31)	1.92	1.40	9.1	94783	
10	8	掻器	頁岩a	G-8	Ⅸc	2.29	2.16	0.94	5.1	94805	
	9	掻器	頁岩b	G-8	Ⅸa	2.94	3.59	1.40	17.5	94720	
	10	削器	頁岩b	H-8	Ⅸa	4.58	2.75	1.55	15.5	94725	
	11	削器	頁岩d	H-9	Ⅸb	2.81	2.83	0.49	2.9	94692	
	12	RF（使用痕剥片）	頁岩a	H-8	Ⅸb	3.68	2.16	1.36	8.8	94759	
	13	RF（使用痕剥片）	頁岩b	H-8	Ⅸb	3.75	2.88	0.86	8.3	94782	
11	14	石核	頁岩b	G-8	Ⅸb	3.12	4.27	2.11	17.5	94731	
	15	石核	頁岩b	G-8	Ⅸc	2.74	1.98	3.00	16.2	94804	
9	接合資料１	チップ	頁岩c	G-8	Ⅸb	3.00	1.40	1.40	3.1	94777	
		剥片	頁岩c	G-8	Ⅸa	3.60	1.43	1.60	6.1	94791	
		三稜尖頭器	頁岩c	G-8	Ⅸb	3.80	2.10	1.40	7.7	94792	
10	接合資料２	チップ	頁岩b	G-8	Ⅸc	1.20	1.80	0.12	0.7	94795	
		チップ	頁岩b	H-8	Ⅸb	1.40	1.10	0.12	0.6	94728	
		剥片	頁岩b	G-8	Ⅸa下	2.56	2.80	0.71	8.0	94803	
		剥片	頁岩b	G-8	Ⅸb	1.90	2.78	0.69	0.05	94799	
		チップ	頁岩b	H-8	Ⅸa下	1.58	1.40	0.51	1.3	94741	

第５表　集石遺構観察表

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	礫個数	タイプ別	堀り込み部		出土遺物	石材別個数				礫の重量（g）									
						有無	深さ(cm)		凝灰岩	砂岩	頁岩泥岩粘板岩	変成岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500
16	集石遺構１号	G-5	Ⅶa	51	Ⅰ	—	—	—	39	3	3	6	7	15	8	2	8	3	2	2	0	1	3
17	集石遺構２号	H-5･6	Ⅶb上	46	Ⅰ	—	—	—	28	3	8	6	33	6	4	3	0	0	0	0	0	0	0
18	集石遺構３号	G-7	Ⅶb上	16	Ⅰ	—	—	—	11	3	0	2	2	9	4	0	1	0	0	0	0	0	0
	集石遺構４号	H-7･8	Ⅶa下	21	Ⅰ	—	—	—	12	3	2	4	7	6	5	1	2	0	0	0	0	0	0
19	集石遺構５号	G-5	Ⅶa	26	Ⅱ	—	—	—	17	4	0	5	8	5	6	0	0	0	2	0	2	1	2
20	集石遺構６号	K-11	Ⅶa	41	Ⅱ	—	—	磨・敲石	22	8	2	9	13	27	1	0	0	0	0	0	0	0	0
22	集石遺構７号	H-6	Ⅶb上	11	Ⅱ	—	—	—	8	1	2	0	4	0	2	1	1	1	1	1	0	0	0
	集石遺構８号	I-7	Ⅶ	15	Ⅲ	有	4cm	—	13	1	0	1	2	4	5	3	0	1	0	0	0	0	0
23	集石遺構９号	I-8	Ⅶa	120	Ⅲ	有	10cm	土器	74	22	12	12	28	54	11	13	10	2	1	0	0	1	0
25	集石遺構10号	K-11	Ⅶa上	170	Ⅲ	有	10cm	—	108	22	15	25	96	40	13	8	1	2	4	2	0	1	3

第６表　縄文時代早期土器観察表１

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部　位	胎　土					色　調		調整・文様		取上番号	備　考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外　面	内　面	外　面	内　面		
24	17	深鉢	H-8	Ⅸa	胴部～底部	○	○	—	—	黒色粒	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	キザミ	指ナデ	94774	底径(12.0cm) 集石遺構9号内
			I-8	Ⅶa											SS337-50	
26	18	角筒	F-5	Ⅶb	口縁部～胴部	○	○	—	○	黒雲母 赤色粒	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	(口唇) キザミ (口縁) 貝殻刺突文 貝殻条痕文 沈線	ナ　デ	94060, 94057	
				Ⅶa											94066	
			F-6	Ⅶb上											94533	
			F-5	Ⅶa下											94064	
				Ⅶb											94058, 94059	
				Ⅶb上											94061	
			G-4	Ⅶa											90843	
			F-5	Ⅶb上	底　部										94055	底径(14.4cm)
			E-4	表土											—	

第７表　縄文時代早期土器観察表２

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
26	19	深鉢	F-7	Ⅶa	胴部	○	○	○	－	－	7.5YR6/3 にぶい褐	5YR6/4 にぶい橙	貝殻条痕文	ナデ	93212	
	20	深鉢	K-11	Ⅶa	口縁部	○	○	－	－	黒雲母	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	貝殻刺突文	ナデ	91721	
	21	深鉢	H-7	Ⅵa	胴部	○	○	－	－	黒雲母	10YR3/3 暗褐色	7.5YR5/4 にぶい褐	貝殻刺突文	ナデ	91938	
	22	深鉢	H-7	Ⅶa	胴部	○	○	○	－	黒雲母	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	貝殻刺突文	ナデ	91940	
	23	深鉢	J-11	Ⅶa	胴部	－	○	－	－	雲母	7.5YR4/3 褐	10YR4/3 にぶい黄褐	貝殻条痕文	ナデ	91820	
	24	深鉢	J-10	Ⅶa	口縁部	○	○	－	○	白色粒	10YR3/3 暗褐	10YR2/2 黒褐	貝殻条痕文	ナデ	91730	
	25	深鉢	H-8	Ⅶa下	底部	○	○	○	－	雲母	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/3 にぶい褐	刻み ナデ	ナデ	91885	底径(12.0cm)
	26	深鉢	H-8	Ⅶa	底部	○	○	○	－	雲母	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	ナデ 刻み	ナデ	91863	底径(12.0cm)
	27	角筒	F-6	Ⅶa	底部	○	○	－	－	白色粒	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	指頭圧痕	94539	

第８表　縄文時代早期石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
21	16	磨･敲石	安山岩	K-11	Ⅶa	(5.49)	7.83	3.79	220.00	SS338-10	集石遺構6号内
27	28	打製石斧	ホルンフェルス	H-6	Ⅶb	(9.20)	4.56	1.70	81.00	92451	
	29	磨石	安山岩	J-11	Ⅶa	(5.69)	8.66	3.62	242.00	91710	
	30	磨･敲石	安山岩	G-5	Ⅶa	10.89	9.70	3.91	529.00	93505	
	31	磨･敲石	安山岩	G-5	Ⅶa	10.13	8.60	4.55	550.00	93503	
	32	敲石	安山岩	G-5	Ⅶa上	8.62	5.47	6.00	255.00	93504	
	33	敲石	安山岩	J-10	Ⅶa	8.25	6.54	5.72	398.00	91762	
	34	石皿	花崗岩	H-7	Ⅵ下	25.25	27.65	8.60	9400.00	91946	

第９表　石器集積遺構石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
29	35	スクレイパー	ホルンフェルス	F-7	Ⅳ	7.45	17.11	2.72	322.00	SC048-001	
	36	スクレイパー	ホルンフェルス	F-7	Ⅳ	5.81	15.15	1.70	180.00	SC048-002	
	37	スクレイパー	ホルンフェルス	F-7	Ⅳ	8.93	12.17	1.15	112.00	SC048-004 SC048-005	
	38	打製石斧	ホルンフェルス	F-7	Ⅳ	13.28	6.31	1.45	149.00	SC048-006	

第 10 表　石器集積遺構土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
29	39	鉢	F-7	Ⅳ	胴部	○	○	－	○	赤色粒	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR3/1 黒褐	ミガキ ナデ 凹線	ナデ	SC048-7	

第 11 表　縄文時代前期・後期・晩期土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
31	40	深鉢	E-8	表土	胴部	○	－	－	○	－	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	凹線文 ナデ	沈線 ナデ	－	
	41	鉢	J-11	Ⅳ	胴部	○	○	－	○	－	10YR3/1 黒褐	10YR4/1 褐灰	刻み 刻目突帯文 工具ナデ	横ナデ	90143	赤色顔料
	42	深鉢	F-7	Ⅳ	胴部	○	○	－	○	黒雲母	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ミガキ	工具ナデ 指ナデ	90169, 90171, 90172, 90319, 90320,	
	43	深鉢	F-7	Ⅳ下	胴部	－	－	－	－	白色粒 黒雲母	5YR4/6 赤褐	10YR6/3 にぶい黄橙	ミガキ	横ミガキ 横ナデ	90170	
	44	深鉢	H-6	Ⅳ	胴部	○	○	－	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR4/3 にぶい赤褐	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ 指ナデ ミガキ	90297	
	45	鉢	J-10	Ⅶa	底部	○	○	○	－	雲母	5YR6/8 橙	7.5YR6/6 橙	網目圧痕	ナデ	90490	(内面)スス付着

第 12 表　縄文時代後期・晩期石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
32	46	磨製石斧	ホルンフェルス	H-9	Ⅳ下	(9.58)	4.20	2.57	122.00	90351	
	47	磨製石斧	ホルンフェルス	－	表土一括	(7.00)	4.41	1.48	67.00	－	
	48	打製石斧	ホルンフェルス	－	表土一括	(9.90)	6.05	1.81	112.00	－	
33	49	打製石斧	ホルンフェルス	F-7	Ⅳ	(10.32)	5.93	2.00	129.00	90187	
	50	打製石斧	ホルンフェルス	E-8	表土一括	(10.97)	6.14	1.54	92.00	－	
	51	打製石斧	ホルンフェルス	F-7	Ⅳ	(11.20)	7.43	1.36	135.00	90165	
	52	打製石斧	ホルンフェルス	H-11	Ⅲ	6.52	5.87	1.40	45.00	90068	
	53	打製石斧	ホルンフェルス	G-7	Ⅳ	8.46	7.30	1.11	65.00	90219	
	54	打製石斧	頁岩	F-7	Ⅳ	6.14	5.80	0.89	42.00	90182	
	55	打製石斧	ホルンフェルス	F-7	Ⅳ	(6.40)	4.35	1.48	54.00	90190	
	56	打製石斧	ホルンフェルス	H-6	Ⅳ	(5.61)	6.90	1.38	74.00	90286	

第 13 表　弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
35	57	壺	F-7	Ⅳ	胴部	○	○	－	－	黒色粒	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	刻み ミガキ	工具ナデ	90189	
	58	壺	E-5	表土	胴部	○	○	－	○	白色粒 赤色粒	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ミガキ ナデ 二条沈線 刻み	指頭圧痕 ミガキ	－	

第14表　古墳時代土器観察表1

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 ガラス粒子	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
39	59	甕	G-7-3 H-9	Va Ⅳ	口縁部～胴部	○	○	－	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/6 明赤褐	指ナデ 指頭圧痕	指ナデ 指頭圧痕	SH096 (23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32) 90362, 90357	口径23.2cm (外面)スス付着
	60	甕	G-7-3	Va	胴　部	○	○	－	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	指頭圧痕 指ナデ	指頭圧痕 指ナデ	SH096 (33, 34, 77, 78, 79, 80, 81)	(外面)スス付着
40	61	甕	G-7	Ⅳ	口縁部	○	○	－	○	－	5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナ　デ 横ナデ	横ナデ 指頭圧痕 ナ　デ	SH096一括, 90495	
	62	甕	G-7-3	Va	底　部	○	○	－	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	ナ　デ 工具ナデ	ナ　デ 指頭圧痕	SH096-78	底径(10cm)
	63	壺	G-7-3 G-7 G-8 G-7-3	Ⅳ Ⅳ Ⅳ Va	口縁部～胴部	○	○	○	○	－	5YR6/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	横ナデ ミガキ 指頭圧痕 指ナデ 工具痕	指ナデ 工具ナデ ミガキ 指頭圧痕	90502 90509, 90508, 90506 90504, 90507 SH096(7, 50, 54, 55, 57, 58, 70, 82, 83, 84, 85)	(外面)もみ痕あり 口径12.4cm
	64	壺	G-7-3	Va	胴　部	○	－	－	○	－	10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/6 橙	指頭圧痕 指ナデ	指頭圧痕 指ナデ 工具ナデ	SH096(22, 61, 68, 92)	(外面)スス付着
	65	壺	G-7-3 G-7	Va Ⅳ	肩～胴部	○	○	－	○	－	5YR6/6 橙	5YR4/6 赤褐	ミガキ 指頭圧痕 工具痕 刻　み ナ　デ	指ナデ 指頭圧痕	SH096 (21, 37, 40, 42, 57, 59, 60, 76) 90514	(外面)スス付着
	66	壺	G-7-3	Va	胴　部	○	○	○	○	－	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/6 浅黄橙	ナ　デ	工具痕	SH096 (19, 65, 88, 91)	
	67	壺	G-7-3	Va	胴部～底部	○	○	－	○	黒色粒	10YR7/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	指頭圧痕 指ナデ	指ナデ 工具ナデ 指頭圧痕	SH096-87	底径1.0cm (外面)スス付着
	68	壺	G-7-3 G-7	Va Ⅳ	胴部～底部	○	○	－	○	－	7.5YR4/6 褐	5YR5/6 明赤褐	指ナデ 工具ナデ 指頭圧痕 ミガキ	指ナデ 指頭圧痕	SH096(36, 38, 39, 41, 44, 45, 46, 47, 48, 69, 74, 75, 90) SH096一括, 90510	底径4.7cm (外面)スス付着
41	69	高坏	G-7-3 G-7	Va Ⅳ	口縁部～底部	○	○	－	○	白色粒	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/6 明黄褐	横ナデ 工具ナデ ミガキ 指頭圧痕	横ナデ 工具ナデ 指ナデ ミガキ	SH096(3, 4, 5, 8, 13, 15, 16, 17, 18, 63, 89, 93) 90497, 90498	口径(22.2cm)
	70	高坏	G-7	Ⅳ	口縁部～胴部	○	○	－	○	黒色粒 赤色粒	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	指頭圧痕 工具ナデ	ナ　デ	SH096一括, 90516	口径(22.4cm)
	71	高坏	G-7-3	Va	口縁部～胴部	○	○	－	○	－	5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	ミガキ 横ナデ	ミガキ 横ナデ	SH096(53, 50)	口径(22.0cm)
	72	高坏	－	－	坏部の下部	○	○	－	○	－	5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	SH096一括	
	73	高坏or 台付鉢	G-7-3	Va	脚　部	○	○	○	○	－	2.5YR5/6 明赤褐	5YR6/6橙	ミガキ	指ナデ	SH096-1	
	74	坩	G-7-3	Va	口縁部	○	○	－	○	－	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	横ナデ 指頭圧痕 指ナデ	横ナデ	SH096-2	
	75	坩	－	－	口縁部	－	－	－	○	－	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	横ナデ	横ナデ	SH096一括	口径(5.0cm)
	76	坩	－	－	肩　部	－	－	－	○	－	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	ナ　デ	ナ　デ	SH096一括	
43	78	甕	－	－	口縁部	○	○	－	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナ　デ	工具痕 指頭圧痕	SH097一括	(外面)スス付着
	79	甕	I-8	Va	口縁部	○	○	○	－	－	7.5YR4/3 褐	7.5YR7/6 橙	横ナデ 斜位方向ナデ	ナ　デ	SH097-8	
	80	甕	－	－	口縁部	○	○	－	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/4 にぶい黄褐	ナ　デ 指頭圧痕	ナ　デ	SH097一括	(外面)スス付着
	81	甕	I-8	Va	胴　部	○	○	－	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	指頭痕 ナ　デ 工具ナデ	指頭痕 ナ　デ 工具ナデ	SH097-12	
	82	甕	I-8	Va	脚台部	○	－	－	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	指頭圧痕 ナ　デ 指ナデ	ナ　デ	SH097-4	底径8.0cm
	83	壺	I-8	Va	口縁部～胴部	○	○	－	○	赤色粒	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR4/2 灰黄褐	ナ　デ 横ナデ ミガキ 工具痕	横ナデ ナ　デ 指頭圧痕 工具痕	SH097 (3, 5, 6, 7, 9)	口径(15.0cm)
	84	高坏	－	－	脚筒部	○	○	－	－	－	10YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	ミガキ	工具ナデ	SH097一括	

第15表　古墳時代土器観察表2

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
45	85	甕	G-7	Va	口縁部～胴部	○	○	－	－	白色粒	10YR6/6 明黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	ハケメ	ハケメ 指頭圧痕 指ナデ	SK401(6,7,9,11)	口径(31.4cm) 内外スス付着
			G-7	Ⅳ											90230	
	86	甕	G-7	Va	底部	○	○	－	○	黒色粒 白色粒	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	工具ナデ	指ナデ	SK401-5	底径(10.6cm)
	87	鉢	G-7	Va	完形	○	○	－	－	黒色粒	5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ 指頭圧痕 指ナデ	SK401-13	口径10.0cm 底径2.0cm 器高6.2cm
48	88	鉢	G-6	Va	口縁部～胴部	○	○	○	○	－	2.5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	横ナデ 指ナデ 工具痕	横ナデ 指ナデ	SK400-1	口径(19.8cm) 補修痕あり
50	89	甕	E-6	Va	底部	○	○	○	○	－	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	指頭圧痕	ナデ	SK219-24315	底径8.8cm
53	90	甕	J-11	Ⅳ	口縁部	○	○	－	○	－	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	指ナデ 横ナデ	工具ナデ 指ナデ 横ナデ	90089	
	91	甕	G-7	Ⅳ	口縁部	○	○	－	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ 横ナデ ハケ目	横ナデ 工具ナデ	90227	内(外面) スス付着
	92	甕	G-7	Ⅳ	口縁部	○	○	－	○	黒色粒	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	指頭圧痕 横ナデ	ナデ ハケ目	90240	
	93	甕	F-7	Ⅳ	口縁部	○	○	－	○	－	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ハケ目 沈線	ナデ 指ナデ ハケ目	90167	
	94	甕	J-11	Ⅳ	口縁部～底部付近	○	○	－	○	白色粒	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	ナデ	ナデ ミガキ	90051,90059,90135,90132,90133,90061	口径(18.8cm) (外面)スス付着
			J-11	Ⅲ											90052,90053	
	95	甕	J-11	Ⅳ	口縁部～胴部	○	○	－	○	－	7.5YR5/6 明褐	7.5YR7/6 橙	横ナデ	ナデ 指頭圧痕 横ナデ	90058,90134	口径(18.8cm) (外面)スス付着
	96	甕	J-11	Ⅳ	口縁部	○	○	○	○	－	10YR8/6 黄橙	7.5YR7/6 橙	工具ナデ 横ナデ	工具ナデ 指ナデ 横ナデ	90067,90129,90130	(外面)スス付着
	97	甕	J-11	Ⅲ	口縁部	○	○	－	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	工具ナデ 横ナデ	横ナデ ナデ	90085	(外面)スス付着
			J-11	Ⅳ											90095	
	98	甕	J-11	Ⅳ	口縁部～胴部	○	○	－	○	－	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	ミガキ 工具ナデ 指ナデ	工具ナデ 指ナデ 指頭圧痕	90026,90027,90031	(外面)スス付着
	99	甕	D-6	Va	口縁部	○	○	－	○	黒色粒	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ横ナデ ナデ	横ナデ ナデ 指頭圧痕	22819	(外面)スス付着
	100	甕	E-6	－	口縁部	○	○	－	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	工具ナデ	ナデ	22302	
	101	甕	E-6	－	胴部	○	○	－	○	－	7.5YR5/2 灰褐	5YR5/6 明赤褐	ナデ	ナデ	23760	(外面)スス付着
	102	甕	D-6	Va	胴部	○	○	－	○	－	10YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	22819	
	103	甕	E-7	－	胴部	○	○	○	○	－	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ 指ナデ	ナデ 指ナデ	23761	(外面)スス付着
	104	甕	G-7	Ⅳ	胴部	○	○	－	○	－	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	ナデ	指頭圧痕 工具ナデ ナデ	90213	(外面)スス付着
54	105	甕	G-7	Ⅳ	脚部	○	○	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	ハケ目 指ナデ	指ナデ	90237,90238,90239	底径(12.5cm)
	106	甕	D-6	表土	脚部	○	○	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	指頭圧痕	ナデ	—	
	107	壺	J-11	Ⅵ	口縁部	○	○	－	○	白色粒 赤色粒	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい褐	ハケ目 指押さえ 指ナデ 横ナデ	ハケ目 横ナデ	91736	(外面)スス付着
	108	壺	F-6	Ⅳ下	口縁部	○	○	－	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	90196	
	109	壺	E-5	－	口縁部	○	○	－	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	指ナデ 工具痕	指頭圧痕 指ナデ	22301	
	110	壺	K-12	Ⅱ	胴部	○	○	－	○	赤色粒	5YR3/1 オリーブ黒	5YR7/6 橙	ナデ	—	90008	(外面)スス付着
	111	高坏	F-7	Ⅳ	坏部	○	○	－	○	－	10YR8/4 浅黄橙	5YR3/1 オリーブ黒	ミガキ 沈線	ミガキ	90324	
	112	高坏	J-11	Ⅳ	口縁部～胴部	○	○	○	○	－	5YR7/8 橙	7.5YR7/6 橙	指頭圧痕 ミガキ 横ナデ	横ナデ ナデ	90046	口径(19.0cm)
	113	高坏	E-7	－	口縁部	○	○	－	－	黒雲母 白色粒	2.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ	—	

第 16 表　古墳時代土器観察表３

挿図番号	掲載番号	器種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
54	114	高坏	K-12	Ⅲ	脚筒部	○	○	○	○	—	5YR6/6 橙	5YR6/2 灰褐	ミガキ	ケズリ	90002	
	115	台付鉢or高坏	H-10	Ⅳ	脚　部	○	○	—	○	黒色粒	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	ミガキ 工具痕	ナ　デ	90119	穿孔2ヶ所 底径(15cm)
	116	鉢	F-7	Ⅳ	口縁部	○	—	—	—	黒色粒 赤色粒	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/4 にぶい橙	横ナデ ハケ目	横ナデ 工具ナデ	90184, 90185	口径(24.0cm) (外面)スス付着
	117	坩	G-7	Ⅳ	完　形	○	○	○	○	—	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR6/6 橙	横ナデ 指頭圧痕 工具ナデ	指ナデ 横ナデ 工具痕	90232	口径8.4cm 底径2.5cm 器高8cm
	118	坩	H-6	Ⅳ	口縁部～胴部	○	○	—	○	—	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	ナデ横ナデ 沈線文	ナ　デ	90299	口径12.8cm
	119	坩	G-7	Ⅳ	口縁部～胴部	○	○	—	○	—	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	ナ　デ 横ナデ	ナ　デ 横ナデ	90211	
	120	坩	C-7	Va	口縁部	○	○	○	—	—	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	横ナデ ナ　デ ミガキ	ナ　デ 横ナデ	SK183-13	
	121	壺	K-12	Ⅲ	胴　部	○	—	—	○	—	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	横ナデ ミガキ	ナ　デ	90014	

第 17 表　古墳時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層　位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備　考
41	77	棒状敲石	砂　岩	G-7・8	Va	12.80	2.91	2.11	144.00	SH096-094	

第 18 表　中世土器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
74	122	土師皿	I-3	Ⅵ	底　部	○	—	○	—	—	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナ　デ	ナ　デ	—	糸切り

第 19 表　中世鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
74	123	刀子	C-8	Ⅳ	ほぼ完形	—	—	—	—	—					21784	残存長(7.5cm) 最大幅1.1cm

第 20 表　近世陶器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	区	層	部位	胎土					色調		調整・文様		取上番号	備考
						石英	長石	角閃石	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面	内面		
79	124	擂鉢	E-2-3	Va	胴部	—	—	—	—	白色粒	N410 灰			摺り目	—	苗代川系 薩摩焼 鉄　釉

第Ⅴ章　総括

1　旧石器時代

⑴遺物

遺物の出土層位は，薩摩火山灰層（Ⅷ層）下位のⅨａ（暗褐色粘質土）・Ⅸｂ（黒褐色粘質土）からⅨｃ層（暗茶褐色粘質土）にわたるが，平面的分布状況及び各層間に接合関係から，本来，単独の遺物集中部を形成していた可能性が高い。

出土石器は三稜尖頭器６点，石錐１点，掻器２点，削器２点，加工痕・使用痕のある剥片３点，剥片 29 点，石核２点，ブランティングチップを含む小剥片及び砕片 38 点の総点数 83 点で，６点の接合資料が得られた。接合資料はいずれも，石器の主体を占める石材は頁岩である。

その他，図示しなかった剥片・砕片類に 12 点の黒曜石製の石器があった。黒曜石ａは灰色～青灰色を呈する透明度が低く少量の不純物を含む黒曜石で，長崎県佐世保市針尾産及び東浜（淀姫）産黒曜石に類似する。黒曜石ｂは青みがかった灰色の色調を呈する黒曜石で，透明感があり不純物を多く含み鹿児島県鹿児島市三船産黒曜石に類似するものである。

石器組成は中型を主体とする三稜尖頭器に掻器・削器及び石錐が伴うものである。石錐には三稜尖頭器と素材及び制作技術の上で関連性がうかがわれるが，掻器・削器は非定型的なものである。三稜尖頭器については，接合資料２及び未製品の存在から，素材剥片の持ち込みによる石器製作が行われる一方，製品として持ち込まれた石器の再調整が行われたことが看取される。

本石器群は宮田（2006）における九州東南部の後期旧石器時代Ⅵ期，馬籠（2010）のⅤ期第２段階に位置づけられるもので，志布志市松山町の蕨野Ｂ遺跡，曽於市財部町の九養岡遺跡などの出土資料に類例を求めることができる。年代及び火山灰層位との関係については，本遺跡で明らかにすることはできないが，九養岡遺跡第２エリア 11 ～ 13 ブロックの層位的出土状況から P15 下位に相当する可能性が高いと考える。

2　縄文時代

⑴遺構

早期の竪穴住居跡１軒，土坑１基，集石遺構 10 基，後期の石器集積遺構１基，晩期の土坑１基を検出した。

竪穴住居跡は遺物の出土は認められなかったものの，形状や埋土状況や包含層からの出土遺物等から縄文早期前半期に該当すると考えられる。

集石遺構は遺構を構成する礫が比較的小ぶりのものが多く，石材は凝灰岩の利用割合が高い。

土坑からの出土遺物等はなく，使用目的についても不明である。

後期の石器集積遺構を１基検出した。４点本のスクレイパー４点，打製石斧１点，被熱礫１点，土器片１点が出土した。土器片は，縄文時代後期に比定される中岳Ⅱ式土器と見られることから時期を判断した。同様の石器集積遺構は，鹿屋市串良町町田堀遺跡からも発見されている。

ホルンフェルス製の薄手の剥片を素材とする不定形のスクレイパーは，遺構内出土の２点が接合したものである。ホルンフェルス製のやや厚みのあるスクレイパー２点は，横長で大型剥片を素材とし，素材及び整形技術の点で打製石斧と共通するが，背部にあたる上辺に歯潰し状の調整が加えられた手で握りやすい形状で，刃部となる下辺がやや内弯し，縁辺に摩耗の痕跡を残す点で相違する。横歯形の刃器として使われた可能性があり，今後，使用痕の分析等が必要である。

⑵遺物

土器としては，出土数は少ないが早期～晩期まで出土している。Ⅰ類～Ⅳ類は，それぞれ志風頭式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式土器が該当すると考えられる。Ⅴ類は，早期の底部である。また，表土からであるが，Ⅵ類とした曽畑式土器も出土した。後期ではⅦ類とした中岳式土器が，晩期ではⅧ類とした組織痕土器が１点出土した。

石器は打製石斧１点，磨・敲石類６点，石皿１点の総計８点が出土している。小型剥片石器を伴わない偏った石器組成である。全体の出土遺物数が少なく，未調査の隣接地に遺物分布の広がりが想定されることから，本来の石器組成が反映されていない可能性もある。なお，石皿の素材である花崗岩は，直線距離で約 20 ㎞の国見山山系一帯に産出するものである。

Ⅳ層を主体として出土した石器で，同層から縄文時代後・晩期～古墳時代の土器が出土していることから，縄文時代後・晩期以降から古墳時代までの時期幅を考慮する必要がある。遺構内出土を除く包含層出土の石器は磨製石斧２点，打製石斧９点の計 11 点のみである。伐採若しくは加工具である磨製石斧と，土掘り具とされる打製石斧のみの組成で，狩猟・漁労活動を示す石鏃などの小型剥片石器は出土していない。

磨製石斧は乳房状石斧と，扁平な小型石斧であるが，いずれも刃部を欠損し，刃部形態は不明である。打製石斧もいずれも部分的に欠損のある資料であるが，残存部からラケット形と撥形の形態を認める。

石材は磨製・打製石斧ともホルンフェルス製で，遺跡の東側を流れる串良川の上流域にあたる高隈山山系一帯に産出する。

3　弥生時代

弥生時代の遺構は検出されず，壺形土器の破片が２点出土した。文様などからいずれも弥生時代前期頃の土器と考えられる。

4　古墳時代

(1)遺構

竪穴住居跡を２軒，土坑３基，溝状遺構１条，道跡２条を検出した。

竪穴住居跡２号からいずれも後期の成川式土器の笹貫式土器が出土した。竪穴住居跡１号から外面にススが付着し，被熱した痕跡のある丸底壺が少なくとも４点出土して　いる。口縁部を打ち欠いていることからも煮沸具として　利用されていたことがわかる資料である。これまでに志布志湾沿岸の肝付町東田遺跡や薩摩半島の鹿児島大学構内遺跡などでも壺形土器を転用した煮沸具が数点確認されている。

竪穴住居跡２号から黒色に研磨された高坏形　土器の筒部や，突帯上にまばらで大きな刻目が施され　る甕形土器が出土していることから，笹貫式土器の中で　も新段階に位置づけることができると考えられる。

出土した遺物等から川久保遺跡Ｃ地点の出土遺物は古墳時代後期の前期頃から後期に該当し，かつ竪穴住居跡は笹貫式古段階と新段階に細分することができる。

(2)遺物

当該期の包含層からハケメ調整された甕形土器や壺形土器，器壁の厚い鉢形土器が出土しており，中村編年の鉢Ａ型式の２期にあたる（中村 2002）。

5　古代～中世

(1)遺構

土坑 12 基，溝状遺構 16 条，道跡 36 条が検出された。

土坑は，埋土により時期を判断した。溝状遺構や道跡は切り合いや削平などの影響もあり，新旧関係や時期の特定は難しい面もあったが，切り合い関係における断面の観察や埋土状況，レベル差等を勘案して総合的に判断した。

Ｄ・Ｅ－５～７区のＶａ層で検出された溝状遺構 12 号は，東から西方向へゆるやかにカーブを描き調査区内を横断し，多くの溝状遺構や道跡と交差し合うことが確認された。Ｆ～Ｋ－６～12 区のＶａ層で検出した道跡３号は，北西から南東方向へ伸びているが，幾筋かの道跡と交わる。このように多数の溝状遺構や道跡がお互いに交差していることは，当地が古くから「生活道」として，あるいは「周辺地域への往来」や「遠方地域との交流を行う交通の要所」として重要な役割を果たしていたことを示すものと考えられる。また，Ｈ－９・10 区のＶａ層で検出した道跡５号に対して，溝状遺構１号が並行して南東方向へ伸びている。同様の類例は，志布志市春日堀遺跡でも検出されており，道跡に並行する溝状遺構の機能が注目されるところである。

(2)遺物

中世のものと考えられる少量の土師皿と刀子が出土し，土師皿と刀子をそれぞれ１点図化した。

6　近　世

(1)遺構

土坑１基，溝状遺構７条，道跡２条を検出した。遺構の時代が新しくなるにつれて削平や造成などの影響受け，検出規模は限られるが，古代から中世に引き続き当地が交通のために利用され続けた傍証を得ることができた。

(2)遺物

薩摩焼が２点出土し，擂鉢１点を図化した。

〈参考文献〉

中村直子　1987　「成川式土器再考」　『鹿大考古』６　鹿児島大学法文学部考古学研究室

中村直子　2002　「薩摩・大隅」　「第５回九州前方後円墳研究会シンポジウム発表要旨」　九州前方後円墳研究会

宮田栄二　2006　「九州東南部の地域編年」　『旧石器時代の地域編年的研究』　安斎正人・佐藤宏之編　同成社

馬籠亮道　2010　「九州東南部における角錐状石器の出現と展開」　『旧石器時代研究』第6号　日本旧石器学会

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1996　『東田遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(16)

有明町教育委員会　2004　『上苑遺跡』　有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2004　『九養岡遺跡　踊場遺跡　高篠遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(71)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007　『山ノ田遺跡Ｂ地点　蔵野Ｂ遺跡　松ヶ尾遺跡　谷ヶ迫遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(109)

鹿児島県教育委員会　1981　『加栗山遺跡・神ノ木山遺跡』　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003　『城ヶ尾遺跡』　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(60)

鹿児島県埋蔵文化財センター　2006　『市ノ原遺跡２・４地点』　鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2017　『山ノ口遺跡』　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(188)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター　2017　『田原迫ノ上遺跡２』　鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書(15)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター　2018　『天神段遺跡３』　鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書(18)

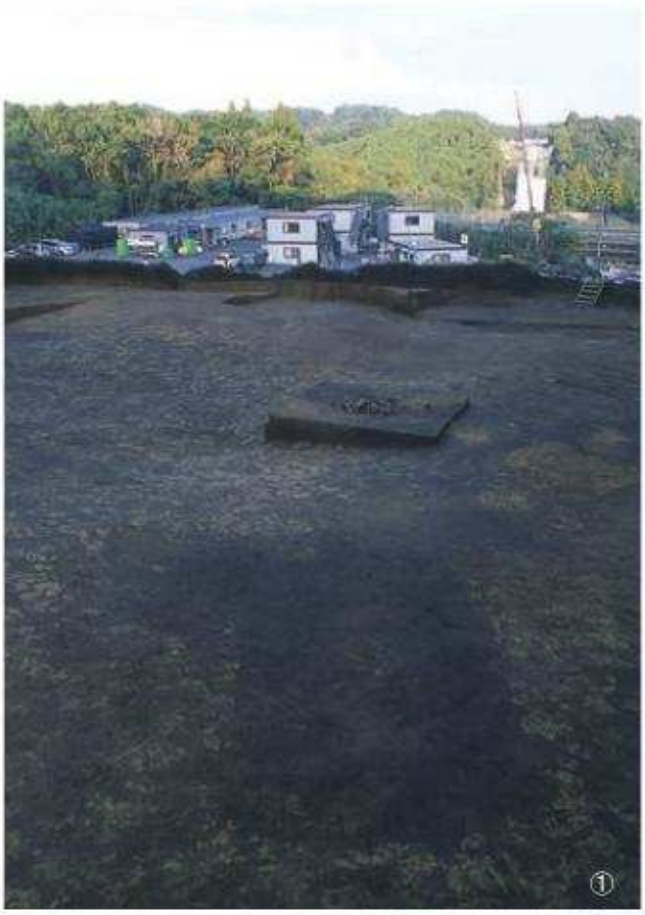
図　版

図版1

C地点全景・土層断面
①C地点全景　②E－5・6区南壁土層断面　③E・D－5区西壁土層断面

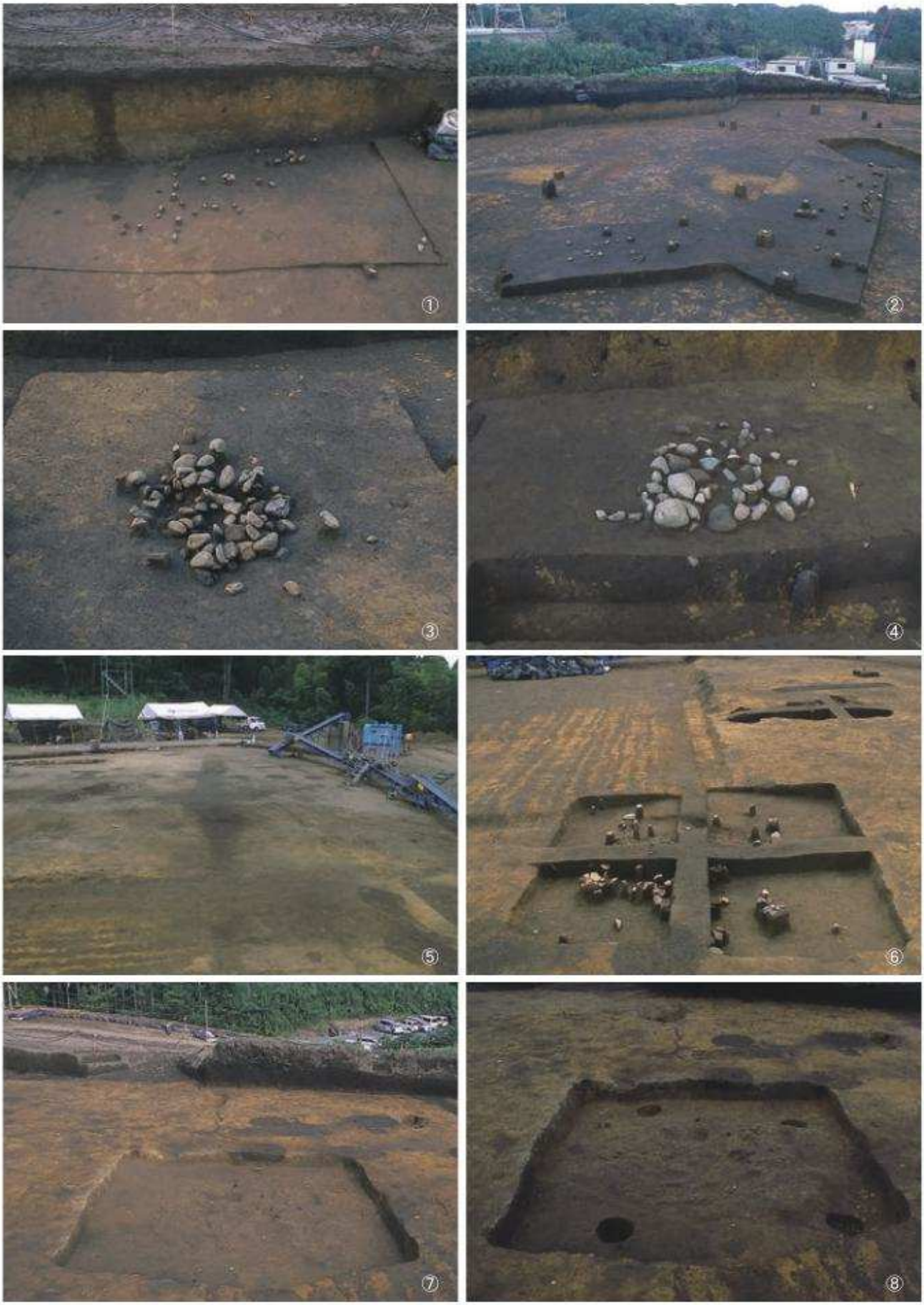
図版2

遺物出土状況・遺物包含層完掘状況・遺構検出状況（縄文時代～旧石器時代）
①Ⅳ層遺物出土状況　②Ⅶａ層遺物出土状況　③Ⅶｂ層遺物出土状況　④Ⅸ－Ⅹ層遺物出土状況
⑤Ⅴ層完掘状況　⑥Ⅴ層上面遺構検出状況　⑦Ⅷ層遺構検出状況



竪穴住居跡１号・土坑１号（縄文時代）
①竪穴住居跡１号検出状況　②竪穴住居跡１号埋土断面　③竪穴住居跡１号完掘状況
④土坑１号検出状況　⑤土坑１号埋土断面　⑥土坑１号完掘状況

図版4



集石遺構検出状況（縄文時代），竪穴住居跡1号（古墳時代）
①集石遺構3号検出状況　②集石遺構3・4号検出状況　③集石遺構9号検出状況　④集石遺構10号検出状況
⑤竪穴住居跡1号検出状況　⑥竪穴住居跡1号断面及び遺物出土状況　⑦竪穴住居跡1号貼床検出状況　⑧竪穴住居跡1号完掘状況

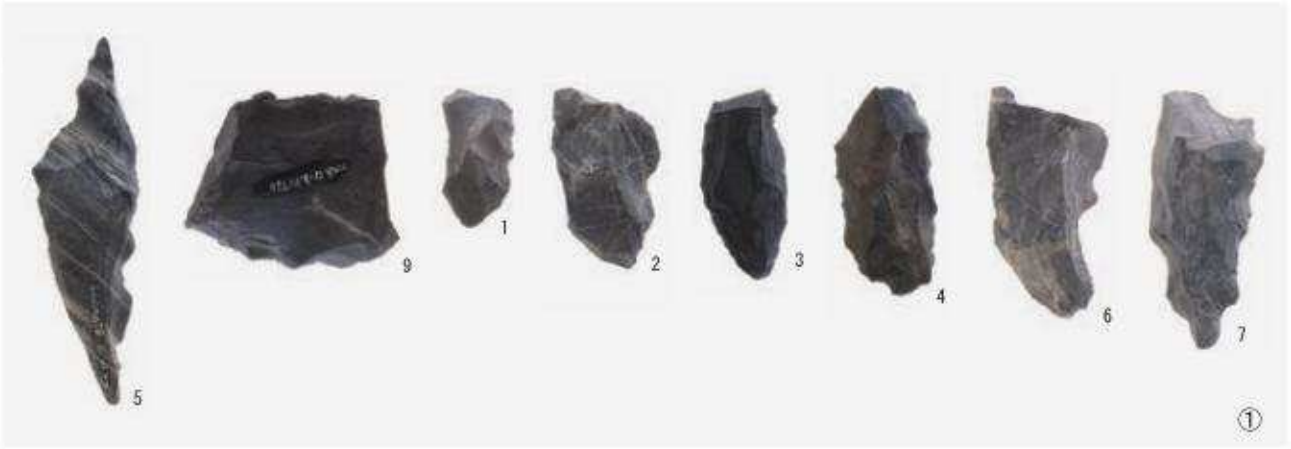
竪穴住居跡２号・土坑２号（古墳時代）
①竪穴住居跡２号検出状況　②竪穴住居跡２号遺物出土状況　③竪穴住居跡２号床面検出状況
④竪穴住居跡２号完掘状況　⑤土坑２号検出状況　⑥土坑２号完掘状況

図版6

土坑１号（古墳時代），道跡２・３号（古代～中世）
①土坑１号遺物出土状況　②土坑１号完掘状況　③道跡２号検出状況　④道跡２号完掘状況　⑤道跡３号断面状況

土坑３号，溝状遺構３～７・10・16号，道跡９号（古代～中世），土坑１号（近世）
①土坑３号検出状況（南から）　②土坑３号検出状況（北から）　③溝状遺構３～７・10号検出状況
④道跡９号検出状況　⑤溝状遺構６号完掘状況　⑥溝状遺構７・10号完掘状況
⑦溝状遺構16号完掘状況　⑧土坑１号完掘状況

図版8



旧石器時代・縄文時代早期の遺物
①旧石器時代の石器　②縄文時代早期の土器

縄文時代早期～晩期の遺物

図版10

縄文時代早期の石器・石器集積遺構出土遺物
①縄文時代早期の石器　②石器集積遺構１号出土石器・土器

古墳時代竪穴住居跡1号出土遺物1

図版12

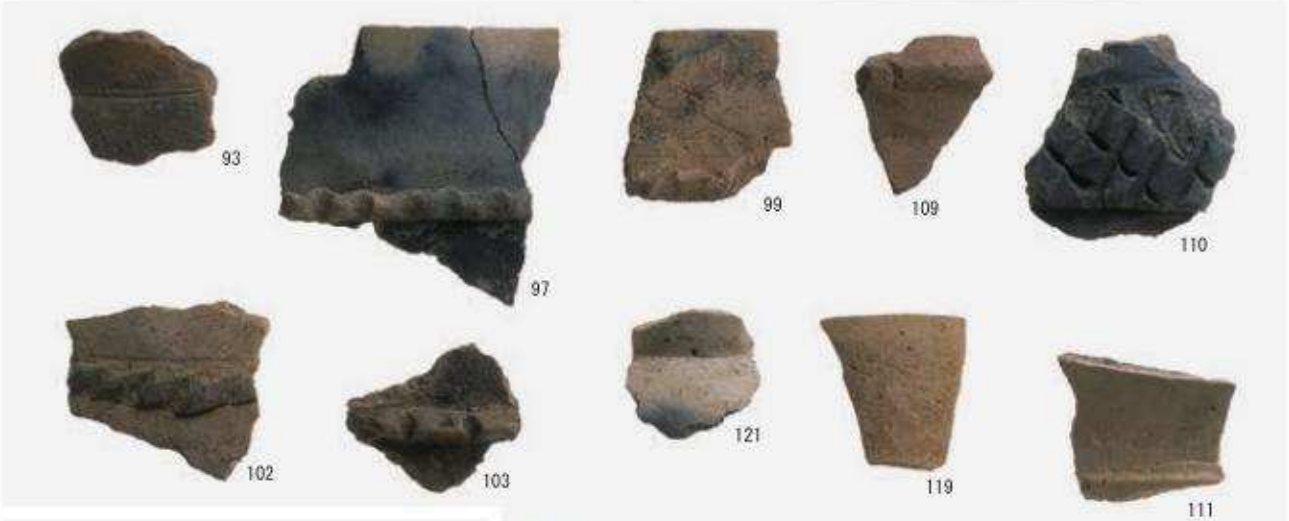
古墳時代竪穴住居跡１号出土遺物２

57

94

117

115


93
97
99
109
110
102
103
121
119
111

118

120
112
114

弥生・古墳時代出土遺物１

図版14

83

82

88

85

79

81

78

80

87

123

古墳時代出土遺物２・中世出土遺物

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（24）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保遺跡Ｃ地点

発 行 年 月　2019年３月

編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-70-0574　FAX 0995-70-0576

印　　刷　株式会社　国分新生社印刷
〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久 620-1
TEL 0995-45-4880　FAX 0995-45-6979